最も良き辭書を擇ぶ者は運命の幸福を得らる可し！

辭書界之最高權威

服部博士
小柳博士 著

增補改修百六拾八版

詳解漢和大字典

四六判堅牢美本二千百餘頁
音訓索引五十餘頁

定價 參圓五拾錢

郵稅 內地貳拾四錢 臺、樺、五拾錢 鮮支六拾五錢

說明平易懇切・最新語は苟も漏さず。全國中學校女學校等五百餘校の指定辭書たり。

小田切教授
ウォールファールト 共編

新譯

註解和獨辭典

第廿版

布裝美本竪五寸六分横三寸三分
紙數千六百九拾餘頁
定價參圓五拾錢 送料拾八錢

東京帝國大學教授 上田萬年博士著

訂正增補第三十三版

ローマ字でひく國語辭典

袖珍美本百千五拾餘頁 定價貳圓（送料拾錢）

學生から離れぬ辭書、說明懇切檢索自在、學生用として好評嘖々たり、即時御利用あれ。

篠原教授
岡本教授 著 第四版

英和熟語大辭林

四六判美裝紙數千三百二十餘頁
郵稅內地拾八錢臺樺四拾錢
定價金參圓五拾錢

上田萬年博士
上田敏博士 著 第廿七版

正譯

英和新辭典

袖珍堅牢美本千三百六拾餘頁
定價 壹圓八拾錢（送料拾錢）

大正十一年五月十二日印刷
大正十一年五月十五日發行

カーネーギー自叙傳
定價四圓

著作權所有

譯述者　小畑久五郎

東京市神田區裏神保町九番地
發行所　合資會社　冨山房

合資會社冨山房社長
代表者　坂本嘉治馬

東京市神田區中猿樂町十七番地
印刷所　中外印刷株式會社

發兌元
東京神田（明治廿九年六月設立）
合資會社　冨山房
電話局三〇一四、三七六〇、電信略號（ヤマフ）
神田　三六六三（編輯局）振替口座五〇一番

『天才は王者を神たらしめ、凡人を王たらしむ』

天才あれば何事か成らざらむ！　ウヰルソン大統領に注目せよ！　彼の血管には蘇克蘭人の血が通つて居る。

（原稿突然終る）

和であつた。之は彼が軍閥に圍繞されさへしなかつたならば維持することの出來たもの、又余の說では、維持することを念とせられた所のものであつた。由來軍閥なるものは生れながらの王者には必ず蝟集して來るもて、多くは此軍閥が結局專制君主の如き不拔の勢力を張る事に成るを常とする。而して獨逸の如きは戰爭の機會ある每に軍閥が大勢を左右する至大な權威になつた實況を呈して居る。軍閥主義を制御しない限り世界の平和は決して實現する道理がない。

今日(一九一四年)之を讀むと嗚呼何たる變化ぞ! 世界は未曾有の戰亂に修羅の巷と化して居る! 人間は野獸の如くに互に殺戮を縱まゝにして居る! 余は敢て萬事休すとは言はぬ。近頃世界の舞臺に又一人の主權者が登場したが、彼は不朽の大功を立てる男かも知れぬ、パナマ運河通行稅問題に於て自國の名譽を擁護した人が今は大統領の職に在るのだ。彼は天才の不屈なる意志と眞の希望とを有つて居るが、之さへあれば人間向上の精神が十分に發揮されると言はれて居る。卽ち

裁によりて決定せしむる爲に協力すべし、との提議に喜んで列國を應せしむるほどの力量ある人物に取つては、單に自國の平和を維持することのみに沒頭するが如きは甚だ不滿足なことてあらう。彼が單に國內の平和を維持した人物として歷史に葬むられるか、但しは平和の使徒として主要なる文明國民間に天授の職分を遂行する高位に昇るかは、一に將來の事實に徵するの外はない。

一昨年(一九一二年)余は伯林の宏壯なる宮廷に於て皇帝の前に立ち、其二十五年間平和の治績に對する米國の頌德表を捧呈したが、此二十五年間皇帝の手は人間の血に汚されなかつたのてある。余が此頌德表を納めた小函を捧呈すべく進み出た時、皇帝は余を識別されて兩手を差伸べながら大聲に仰せられた。

『カーネギー、二十五年間の平和とあるが、我々は更に多年を加へたいと思ふ。』

余は情に堪えずして答へた。

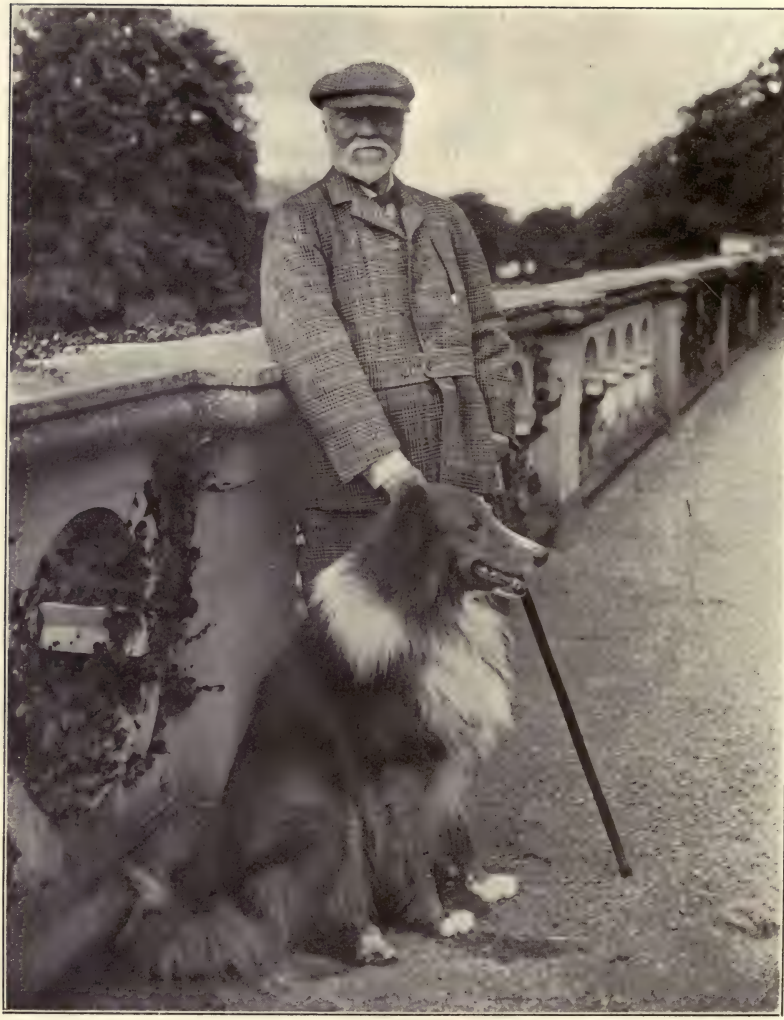
『して此人間最高の使命に於て、陛下は我々の同盟第一人者てあらせられる。』

彼はその時まて沈默不動の態度を取り、甲の官吏から受取つた夫々の上奏文を手に取ては乙の官吏に渡して卓上に置かせて居られたが、主なる論題は世界の平

書物を皇帝に獻じた。之には余の序文があるので其序文が大統領の大いに喜ぶ所となつて、立派な自身の銅像に余の珍重する手紙を添へて贈られた。皇帝は唯の王者てはない。何となく一段高い人物てある。即ち現狀を改善する事を念とし、不撓の熱心を以て禁酒を奬勵し、決闘の惡習を撤廢し、國際的平和を確保する爲に(余の想像てはあるが)渾身の努力を惜まない人てあると思ふ。

(一)一九〇八年紐育刊行「ルーズヴエルト政策富國其他之と密接な關係ある諸問題に關する演說、尺牘、公文等」

余は多年の間獨逸皇帝が天命の人てあるに相違ないとの感想に附き纒はれて居たが、余が初めての接見は此感想を強めた。余は將來彼が眞に偉大にして良好な事業を成す人物てあるとの大いなる望を屬して居る。彼は將來何等かの大事業を遂行して不朽の名を歷史に遺す機會があるかも知れぬ。彼は二十七年間獨逸を平和に治めたが、積極的行動によりて文明列國に平和を確立する手腕のある此人の如きは、獨逸一國の平和以上何等かの大功を立て得るものとして期待してもよからうと信ずる。他の主要なる文明諸國を誘導して一切の國際的爭議を仲



スキボに於けるカーネギー

カイザルと世界の平和

るものではありません。私はあなた方二頭の馬を右に並べて頸と頸とをすりつけさせ、轅てしめて巧みに操縦して見せますよ。」

余は獨逸皇帝ほど談話に感興を起す人に遇つたことはない。彼は好伴侶である。而して余は彼が世界の平和進歩を念とする熱心な人物だと信ずる。兎も角も彼自ら平和を愛好する又從來も常に愛好したと主張することを認めるだけで十分としておかう(一九〇七年。)彼は帝位にあること二十四年、一度も人の血を流したことがないとの事實を快として居る。彼は獨逸の海軍が英國の海軍に拮抗するには小さ過ぎる、又英國と競爭する意圖は決してないと考へて居る。さるにても余は之を擴張することは不必要であるが故に不得策であるとの說である。ビューロー公も之と同樣な感想を懷いて居るから、世界の平和が獨逸によりて攪亂されるなどは杞憂に過ぎないと余は信ずる。獨逸の利益は凡て平和を維持する方針によりて良好に發達する。卽ち產業上の發展が獨逸の主眼であつて、此願はしい方面に於て獨逸は確かに長足の進歩をなしつゝある。

余は駐米獨逸大使スターンベルグ男の手を經て(一)『ルーズヴェルト政策』と題する

汽船の舳に半時間居れば忽ち起死回生の思をするから之は止むを得ないと言ふと、工場長ジョーンス大尉が得たりと答へました。「アヽ御主人、其れが爲に我等一同も起死回生の思をすることを考へて下さい。」されば陛下、陛下の國民にしても同じではありますすまいか。』

陛下は痛快に幾度も幾度も哄笑された。之は陛下の思想に新生面を開く端緒となつた。陛下は頻にルーズヴエルト大統領に會ひたいと繰回されたから、余は更に言葉を進めた。

『それては陛下、御二人が一緒になられる時は私も御同席になるべきだと私は思ふのです。どうも御二人だけては何か惡戯をなさる虞がありますからな。』

陛下は笑つて、

『アヽ、判つた。卿は朕と大統領とを馬車馬にして乘廻す考だな。よし承知した。卿がルーズヴエルトを前馬にすれば朕は後馬になつて行くよ。』と言はれた。

『イヤ、それはいけません陛下、私は馬の事を能く心得て居ます。斯樣に元氣な若馬を二頭前後に並べては危險千萬てす。前馬になる樣な奴は到底うまく買へ

であつたので、余は陛下にルーズヴェルト大統領が近頃余に語られた話をした。大統領は習慣が許すなら一度國を去つて一走り陛下を訪問したいと思ふけれども自由にならぬと嘆息された。大統領は若し皇帝と會見が出來れば必ず重要な會談が出來て何等かの良結果を生み出すだらうと考へて居られた。余もさう信じたと申上げたら、陛下も御同感て、どうか大統領に會ひたいものだが一度獨逸へ來訪して呉れまいかと仰せられた。余は陛下こそ憲法上の束縛がないから米國へ來て大統領に面會されたら如何ですと注意した。

『ア、それはさうだが朕の國が朕の此處に居ることを必要とするからな。國を去ることは六ヶしからうよ。』

余は答へた。

『私が一年の休養を取る爲に國を去る前に工場の役員等に告別のため工場に行つて、皆が骨を折つて働いて熱い日に汗みづくになつて居るのを見ながら、自分ばかり悠々と國を去るのは勿體ない樣な氣がするが、毎年一度休養することが余の健康上必要になつて、如何に疲れて居ても太西洋の波を蹴立てゝ快走する

ことにしてある』と言はれた。

それでは許せよと仰せられて集まつた海軍將官等に謁見を賜はる爲に立去られた。

其夜の宮廷晩餐會に列席した者は約六十人あつたが、實に愉快であつた。陛下に相對して余の席が設けられたが、陛下は畏くも自ら杯を擧げて余と共に之を傾けられ、次に陛下の右に席を占たタウアー米國大使にも同樣の敬意を表された後テーブル越しに余に尋ねられた。(近くに居た人々に聞える聲で)余の次に席を占たビユーロー公に、英雄ブルースが余の故鄕ダムフアリンに葬むられ居ること、又ピツテンクリーフ溪谷にある陛下の祖先の塔が今余の所有に歸して居ることを話したかとあつたから、余は答へた。

『否陛下、陛下であればこそ私は斯樣な詰らないお話を申上げる氣分になりましたが、陛下の國政を宰どる大宰相との會話なら必ず重要な意義ある事柄に關してゞありませう。』

余等は或夕ゲーレット夫人の遊艇で同夫人と晩餐を共にしたが、陛下も御同席

を御存じてありませう。

「血のごと赤き葡萄酒飲みて

王はダムファリンの塔に座したまふ」

私は何時か陛下を陛下の祖先の塔に御案内したいと存じます。陛下は記念の墓參をなさることが出來るてはありませんか。』

（一）ピッテンクリーフ公園及溪谷をダムファリンに寄附する讓渡證書に、財産の一部たるマルコム王塔に關してのみ「除外條項」を云々してあるが其條項の內容を明示してない。カーネギー氏は自身のみ知つて居た何等かの理由で此古跡だけは其所有權を保存したのである。

之を聞くと皇帝は大聲に言はれた。

『それは至極面白からう。蘇克蘭人は獨逸人よりは遙かに敏捷て又怜悧だよ。獨逸人はどうも遲鈍でな。』

『陛下、蘇克蘭のことてはどうも陛下を公平な審判者として承認することを私はお斷りしなければなりません。』

陛下は哄笑して告別の手を振られたが、別れる時『今晚卿は朕と共に食事をする

えるな。』

『如何にも陛下、私は王者を好みません。　しかしながら王位にある人でも眞の人物ならば私はその人を好みます。』

『ハア、卿の好む王者は一人あるよ、朕はそれを知つて居る、蘇克蘭王ロバート・ブルースだらう、彼は朕の若い時に崇拜した英雄だ、朕は彼を理想として成長した。』

『仰せの通り陛下、私も彼を理想として成長したのでありますが、彼は私の故鄉ダムファアリンの寺院に葬むられて居ります。　私は少年時代に屢々加持力敎徒が禮拜する時に示す樣な熱誠を込めて、寺院にある見上げる許りの四角な記念碑の周圍を歩きましたが、大きな石塔に「ロバート・ブルース王」と一面に一語づゝ刻んでありました。　けれども陛下、ブルースは王者以上の人物でありました。　彼は人民の指導者であつたのです。　勿論第一の指導者ではありません。　人民の味方としてはワレースが第一であります。　陛下私は今ダムファアリンの(一)マルコム王の塔を所有して居りますが、陛下の系統は此蘇克蘭の貴い王者から傳はつて居るのであります。　陛下は多分かの美はしい俗謠「カー・パトリック・スペンス」

余は會議の爲に集まつた海軍將官等と話をして居てタウァー大使も、また其後から近づき來られた皇帝も見なかつた。肩に手を觸れられたので、後へ向くとタウァー大使の聲で、

『カーネギーさん、皇帝陛下が。』

ハッと思ふ間もなく皇帝が余の前に立つて居られた。余は兩手を擧げて叫んだ。

『之は丁度私の願つた所であります。儀式を省いて親しく天降れる天命の人に接することは私の素志であります。』

更に言葉を續けて、

『陛下、私は陛下の御招きに應ずるため二晝夜の旅を致しましたが、王冠を戴いた人に接する爲にそれほどの旅行をしたのは之が初めてであります。』

その時皇帝は微笑せられたが、それは人を魅する一種言ふべからざる微笑であつた。

『アヽ、さもあらう、さもあらう、朕は卿の著書を讀んだ。卿は王者を好まないと見

聖アンドルース大學々生に對する余の第一回總長演說が獨逸皇帝陛下の注意を惹いて、陛下はバリン氏を經て片言隻語も殘さず讀んだとの聖旨を紐育にある余に傳へられた。陛下は又其皇太子殿下の立太子式に於ける自身の演說筆記を同氏を經て余に送られた。之に次いて陛下が余に面會したいとの招待が來た。然に他に用務があつて余は一九〇七年六月まで國を去ることが出來なかつた。其月に漸く余等夫妻相携へてキールに行つた。其處に駐獨米大使タウアー氏夫妻が余等を迎へて慇懃に歡待された。余等は其處に三日間滯在中彼等を介して多數の著名な公人に接した。

第一日の朝タウアー大使は皇帝の遊艇に來訪者記名のため余を伴はれた。余は皇帝の臨御を豫期して居なかつたが、偶然陛下が甲板に臨御あらせられてタウアー大使を顧み何用あつてそんなに早くから遊艇に來たのかと尋ねられた。タウアー大使は來訪者記名の爲余を伴ふたこと、及び現にカーネギーが艇中に居ることを答へた。陛下は更に尋ねられた。

『何故今謁見させないのか、朕はカーネギーに面會したいと思ふ。』

ふ方針てある。けれども勇氣一番水に飛込むことが先決問題て何時かは必ず決行さるべきものと思ふ。

米國が比島を領有しなかつたら獨逸がするだらうとの議論があつた。然しながら英國が獨逸に對して海軍根據地をマカオに設置することを承諾することなれば、東洋に於ける英國の海軍根據地から一走りの近距離に獨逸をして海軍根據地を設立せしむることとなるので、例へば英國がリヴァープールから僅か八十哩の愛蘭のキングストンに海軍根據地設置を獨逸に許す樣なものてあつて、到底行はれない議論てある。余はタフト判事の如き人が初め併合に反對して居なから、此一大失策を米國が演じた曉に本問題の評論にこんな馬鹿氣た理屈を述べたのに一驚を喫せざるを得ない。然し我々は外交關係の智識には乏しい者てあるし、從來堅く結束して立つて居る國民てあるから、此形勢が一變したならば他日臍を噬むとも及ばないといふ樣な禍を釀さないとも限るまい。

第二十九章　獨逸皇帝に謁見

比律賓放棄の二主張者

く前代未聞の新政策であつた。之が他日幾多の困難と危險とを釀成することは彼等の全く思ひ及ばない所であつた。此點に於て合衆國は初めて悲むべき國際的一大失策をしたので、之が爲に國を擧げて國際的軍國主義の渦中に投じ一大海軍の建設を餘儀なくする事になつたのだ。政治家の變節も爰に至つては言語同斷と云はねばならぬ。

數週前(一九〇七年)白堊館に於てルーズヴェルト大統領と晩餐を共にした折柄彼は言つた。

『貴君が合衆國に於て比律賓を放棄することを最も熱心に希望して居る二人を見たいとあれば、爰に其二人が居る』と國務卿タフトと自身とを指した。そこで余は答へた。

『それならば何故閣下等は放棄なさらないのか。米國人民は非常に喜ぶだらうと思ひます。』

然に大統領もタフト判事も米國人の義務として先づ比島に自治の準備をさせなければならぬとの說であつた。これは『泳ぎを覺えるまでは水に這入るな』と云

た彼に打電して目下の形勢を説明し、彼が其政友等に打電して國家のため所信を貫徹させる樣に忠告して貰ひたいと賴んだ。然に彼の答は余が旣に述べた通りて、共和黨に此案を可決させて國民の前に面目を失はせる方が得策だと云ふことてあつた。余はブライアンともあらう人物が斯る悲むべき餘殃を含んだ問題を單に黨略の犧牲に供するとは恥づべき事と思つた。之を決行する爲には贊否相半ばして議長自身の一票で辛くも議會を通過したのてある。ブライアン氏の一言さへあれば國家は此惡策を決行せずに濟んだに違ひなかつた。其後幾年となく余はブライアン氏と快く交ることが出來なかつた。彼は此事あつて以來黨利の爲とあれば國家と自己の所信とを甘んじて犧牲に供する人物と、余の眼に見ゆる樣になつたのてある。

本問題の投票があつた後直ちに余はマッキンレー大統領を訪問して、彼が其强敵に援助されることになつた所以を悲むと見舞を述べて其勝利の由來を說明し、ブライアン氏に謝辭を送つたら善からうと注意した。數千哩の外に植民地を領有するなどはマッキンレー大統領は云はずもがな、凡ての米國政治家に取つて全

た、名望家タフト判事を招いて總督に任じた。タフト判事が大統領に對して併合に公然反對論を唱道した人間を總督に迎へるとは奇怪千萬だと言つた時に、大統領はそれこそ彼を此要職に任ずる唯一の理由だと答へた。之は甚だ結構な事には相違ないが、併合を見合せることと一旦買收した領土を放棄することとは相異なる二つの問題である。此事は直ぐに明かになつた。

ブライアン氏は或時米西講和條約の此點を上院に於て修正することの出來る地位にあつた。余は此事の遂行を試みる爲に華盛頓に行き投票のあるまで滯在した。余の聞く所に依ればブライアン氏は華盛頓に居た時其政友等に此條約を可決させる方が黨略上得策だと語つたさうだ。之は共和黨の不信用になる案で、『革命の爲に二千萬弗の國費を濫用』したとあれば共和黨が國民の信用を失ふことは見透て居るとの考であつた。比律賓併合案に反對の投票をしたいと熱望したブライアン黨の志士が七人もあつたのだ。

是より先ブライアン氏は余の比島買收反對論が餘りに露骨であつたため、本問題を余に相談すべく紐育へ來訪した事があつた。此關係上余は當時オマハに居

を懷いて華盛頓に歸り、從來の方針を一變した。余が內閣の一員から聞く所によれば各員は此變更に反對したさうだ。某上院議員は余に語つた講和全權の一人なるデー判事は巴里て抗議書を書いたさうだが、之を公表したら華盛頓の告別演說に次ぐほどの名文として好評を博したてあらうと云ふことてあつた。

此際閣員中の一重鎭たる余の友人コーネリアス・エヌ・ブリッスが來訪して、本問題に關し華盛頓に行つて大統領に面會することを余に求めた。彼は言つた。『貴君は大統領閣下を動かす勢力がある。閣下が西部から歸られて以來我々のうちでは誰も閣下を動かし得る者はない。』

余は華盛頓に行つて大統領に面會した。しかし彼は頑として應じなかつた。退却すれば國內に革命が起ると彼は言つた。結局彼は大勢に順應する外ないと內閣員を說伏せ、又之は只一時の占領に過ぎないと主張し、或時期に達すれば比律賓を放棄する道が開けると論じて內閣を屈服させた。

大統領は併合反對論者てあつたコーネル大學總長シャーマンを迎へて比律賓訪問委員長に任じ、又其後併合は米國の國是に違反する政策なりとて駁論を試み

戰は宣せられた。上院は議員プロクトルが玖馬て實見したとの集中露營に關する陳述に震駭したのてある。マッキンレー大統領とその平和政策とは馬耳東風視されたのか』との叫に共鳴した。全國は「我國の近海に西班牙は一體何をして居るれた。彼は國民と歩調を共にするより外に何等の方法を見なかつたのてある。政府は是に於てか戰爭は領土擴張の爲に企てられたものてはないと聲明し、玖馬は獨立を約束されたが、此約束は忠實に履行されたて。我々は此一事を忘却してはならぬ。何故ならば之は米西戰爭唯一の會心な方面てあつたからてある。

比律賓の領有は米國史の一汚點てある。之は單に領土の獲得てはない。不承不精の西班牙から掠取て之が爲に二千萬弗の代價を拂つた惡辣な取引てある。西班牙との交戰に於て比律賓人は我米國の同盟てあつた。內閣は大統領の指揮を受けて比律賓に一の石炭供給港を要求するだけの條件を約諾したが、最初巴里の講和全權に訓電した條項もそれだけてあつたと傳へられる。然にその後マッキンレー大統領は西部諸州を巡視中、國旗とデューイ將軍の勝利とに關して演說さへすれば國民が喝采して居たので、彼は今更退却が不人氣の政策であるとの感

佛國大使は西班牙が之を承認したと明記してある電報を大統領に示した時に、善人たる彼は一切落着したことと想像して居た。一見さうとしか思はれなかつた。

余が紐育に居た時は下院議長リードは何時も日曜日の午前に來訪したが、余が其年歐洲から歸ると間もなく議長は余を訪ふて議院の取締が出來ないと云ふてとは從來一度もなかつたが、今度こそは困却したと語つた。一時議長席を離れて議員席に下り、其處から演說をしたら議院を靜肅にすることが出來ようかと思つた。大統領が西班牙から玖馬の自治を許す保證を受けたとの說明は全く無益に終つた。嗚呼時期既に遲かつた、間に合はなかつた。

『我米國の近海に於て西班牙は一體何をして居るのか』とは議會の詰問てあつた。開戰案を通過せしめ得るに十分な共和黨議員が民主黨と合同して投票する協定が成立した。旋風の如き憤激の情熱が全議院に橫溢したが、之は疑もなく或人々が西班牙の行爲なりと推測した軍艦メーン號のハヴァナ港に於ける爆破事件の爲に熱烈の度を加へたのであつた。此推測が事實とすれば西班牙人は適れ巧妙機敏の働をしたものと云はねばならぬが、之は彼等に過ぎたる讃辭てあつた。

勿論のこと、英國は實際運河の築造に異議がない、又何とても米國の希望する樣な行動を取ると言明した。今や運河は當然の形式に出來上つた、卽ち全部米國式で何等國際紛擾を釀す餘地がない。其當時は多分築造するだけの價値がなかつたらうが、假想敵國と鬪ふ爲に破壞的怪物を海に浮べる狂態を演ずるよりは三億や四億の金を運河にかけた方が得策であつたと思ふ。之は全然損失になるかも知れぬが損失になつた所で其れまでの話て、軍備の方は戰爭の原因になる虞がある、其わけは

『惡事を行ふ方法を見て居ると

自然惡事を行ふ樣になる』

からてある。

ヘー氏の鬼門は上院であつた。彼が禮節を無視する樣な言説を試みた場合は唯上院問題の評論に限られた。唯一語の訂正卽ち一九〇五年提案の仲裁條約に一ケ所あつた『協約』を條約に訂正すべし、との上院の執拗な主張は彼を法外に激昂させた。余は之が大部分彼の不健康の原因をなしたと信ずる。卽ち其頃旣に彼

白聖館を訪ふたら大統領は上院の條約修正に痛く煩悶して居られたことを發見した。余は上院の要求を英國が遲滯なく納得することを疑はなかつたので其意見を大統領に示した。米國に次いで英國が最大の利益を占めさうな事業に米國が資金を提供しようと云ふのだから、合理的でさへあれば英國は必ず讓歩するだらうとは余の推測であつた。

上院議員ハンナとマッキンレー大統領は何時もヘー氏を『ジョン』と呼んで居たが、此時ハンナ氏は余に『ジョン』に遇つたかと尋ねた。余は否と答へたら氏はそれなら行つて彼を勵してやり給へ、修正問題で萎れ切つて居るからと言はれた。余はヘー氏を訪ふてクレートン・ブルウア條約が上院の修正に遇ふた時も殆どそれを知つて居る者がない、又何人もそれを氣にしなかつたことを指摘した。其通りヘー・ポーンセフォート條約にしても修正された形で實施されるだらうが、それが原形の儘であるや否やを氣にする者などは一人もありはしないと斷言した。彼は余の言ふ所を疑ふて英國が讓歩しまいと考へた。其後間もなく晩餐を共にした時彼は余が眞の豫言者で、余の言つた通り凡てが無事に運んだと言つた。

ジョン・ヘー及パナマ運河

（一）之は一八九八年八月の北米評論に掲げられたカーネギー氏の論文「遠隔領土——國策分岐點」と題するものである。

（二）之はセーヤー著一九一五年ボストン及紐育刊行「ジョン・ヘーの傳記及手簡集」第二卷一七五頁に據る。

彼自ら自己の天職として慶賀した事業が遂に彼に與へられなかつたことは奇なる運命であつた。

北清事件の際初めから支那に同情を寄せた者は全くヘー氏一人の觀があつたが、彼は遂に支那の爲に公平な平和條項を約諾する國際政策に成功した。彼が英語民族の一部として英國に對する彼の感興は極めて深かつたが、此點に於て大統領は全然彼と同感であつて、玖馬戰爭に於て西班牙に同情を寄せた他の歐洲列國に對して英國が反對の態度を取つたことを無上に感謝して居られた。

パナマ運河に關するヘー・ポーンセフォート條約は米人の多くが不滿足と認めたものであつた。上院議員エルキンスは紐育トリビューンに掲げた余の反對論が彼の本問題に關する演說當日に屆いたので有益な材料になつたと余に話された。此論文の出た後間もなく余は華盛頓に來て朝早く上院議員ハンナと一緒に

に於て余等の意見と一致して居たのは余の滿足する所であつた。ヘーとホワイトと余との三人は倫敦のヘー事務所で共に堅い握手を交換して此事について協力することを誓約した。其前に彼は次の如き手紙を余に送つた。

一八九八年八月二十二日於倫敦

拜啓スキボ松鷄及御親切なる御手紙に對し難有奉謝候前週中小生が聞知せし如き多くの親切にして過分なる讃辭を聽くことは小生に取つて一種嚴肅駭神の感有之候之より爲さんとする事業を眼前に控候折柄斯の如き評論は全く別人に關するかと疑はれ候若し小生に對する御好意ならば斯る讃辭の幾分かゝ小生の職を去るまで保留せられんことを希望仕候

(一)北米評論の御高説は最も熱烈なる興味を以て拜讀仕候小生目下の境遇として如何なる程度まで貴說に同意し得るや一寸明言致兼候小生心頭の問題としては目下我々が如何なる程度まで比律賓より退却する事が可能なるやの一事に御座候(二)此重大問題の解決が小生の責任ならざる事は寧ろ感謝する所に御座候　謹言

題を處理する方針に於て眞に保守的で平和維持の爲に强固な意見を把持したことを認めて居る。

第二十八章　ヘーとマッキンレー

ジョン・ヘーは英蘭に於ても蘇克蘭に於ても折々余等の賓客であつたが、一八九八年スキボに余等を訪問せんとして居た矢先にマッキンレー大統領から國務卿任命の招電を受けて歸米した。國務卿として氏ほどの記錄を遺した者は鮮い。彼は至誠を以て人に接し、絕對的信賴の精神を皷吹したが、彼の志は常に高遠であつた。戰爭は彼の憎む所で『最も殘忍でしかも最も無益な愚人の行爲』と喝破した彼の言葉は、眞實に戰爭に關する彼の思想を語つて居る。

余が紐育への歸途倫敦に於てヘーとヘンリー・ホワイト(當時在英公使館書記官後に駐佛大使)とに遇つた時は、恰も比律賓併合が白熱的問題であつた。遠方に隔絕した領土を有しないで國政を大陸内に限ること、特に軍國主義の渦中に投じないと云ふ米國の傳統的政策を無視する比律賓併合案を、重大なる失策と認める點

の米國人が太西洋の彼岸に於て其工業の發達を計るため其資本を犧牲にする覺悟をしなかつたならば、我々米人は今日でも恐らく一噸九十弗を貴國に拂つて居やしないかと思つて居る。』此時サア・チャーレスが横合から口を出して『イヤ、それに違いなからうよ。九十弗は貴君等外國人に約定した特別値段だからな。』と素破抜いた。

ブレーン氏は笑ひながら爰ぞとばかりに『チャムバレン君どうも貴君のカーネギー攻撃は的が外れましたね。』と遣つた。彼は答へた。

『イヤ、こいつは一本參つた。サー・チャーレスがそんなに素破抜いちやどうも仕樣がない。』――一同大笑になつた。

ブレーン氏は稀有の話上手で、彼の話には大なる特色があつた。何人にも、最も氣むつかしい人にすら、話をすれば決して其人に不適當な言葉を用ひたことはない。彼は鋼製捕鼠機の如く敏活て最も愉快な伴侶てある。彼が若し大統領に就職したら優秀てしかも安全な大統領てあつたてあらう。余は彼が凡ての國際問

國は「期待」を外交辭令とする國家に對しては「敢て希望する」式外交を用ふる時代を通り越したのである。我輩は唯貴國の例に倣ふたまでのことて、女皇陛下にして萬一「敢て希望」したまゝふならば大統領は必ず之に倣ふことゝ信ずる。貴國が「期待」主義を棄てない限り合衆國も之に報いるに「期待」を以てするの外なからうと思ふ』

或夜ブレーン氏を主賓とした晩餐會があつて、ジョセフ・チャムバレンと蘇克蘭鋼鐵會社々長サー・チャーレス・テンナントとが同席てあつた。チャムバレンは其夜の話題として自分の友人カーネギーは好漢てあつて英人は皆其成功を喜んて居るが、自ら進んて鋼鐵軌條を製造することに對して合衆國が一ヶ年百萬磅以上の保護を與へることは了解に苦むと評した。ブレーン氏は答へた。

『サア、それは我々の見る所と解釋が異つて居る。我輩は鐵道事業に關係を持つて居るが、從來貴國から一噸九十弗て鋼製軌條を買つて居た。一噸たりともそれより下ては買はなかつた。然に丁度我輩が本國を出帆する前に我國人はカーネギーと一噸三十弗て大きな契約を結んて居た。我輩はカーネギーや其他

ブレーン氏は倫敦滯在中或夜の晩餐會に電光石火の論戰をしたことがある。クレートン・ブルウア條約の論評が始まつた。列席の有力な政治家が英國政界の下馬評てはブレーン氏が何時も母國に敵意を含んで居るといふことてあると言つた。ブレーン氏は此評を打消したが、余の知れる限り彼の所説が正當だと思ふ。クレートン・ブルウア條約に關する氏の公文が例に引かれたが、氏は之を反駁して言はれた。

『我輩が國務卿に就任して本問題折衝の任に當つた時に驚いたことは、貴國の外務卿が我々米人に外交事項を通牒される場合は何時も陛下が何々を「期待」したまふといはれ、我國の國務卿は貴國政府に對して何時も大統領が「敢て希望する」と云ふことてあつた。それて我輩が女皇陛下の期待せらるゝ云々の電報を受けた時は、我大統領の「期待」する所を云々して返電したのてある』

『サア、それては貴君自ら國際通信の性質を改正したことを認めて居るのか』と一本參らせて來た。

電光石火の答は之てあつた『改正したのてはない事情が變つたのてある。合衆

置する案であつた。ソールスベリーが此點に於て立派な意見を持つて居たことの證左として、彼は其際駐米大使サー・ジュリアン・ポーンセフォートに訓電して、此『立派な提案』をしたブレーン氏に祝辭を述べたことがある。此提案が實施されたならば双方に同等の權能を與へて、一方又は双方の國旗の下に同一の事を行ふ歷史上未曾有の施設として正義的同胞的協定が成立する筈であつた。サー・ジュリアンは此電報をブレーン氏に示した。余が此事を爰に述べるのは協力を念とする有力善意の政治家も時としては、其志を行ふことが出來ないものであると云ふことを暗示するためである。

ブレーン氏は廣い智見と明析な判斷力とを備へた大政治家であつて常に平和の主唱者であつた。智利に對する戰爭、陸海軍案及ベーリング海問題等に關しては冷靜で、聰明で、且つ和解的であつた。特に彼は英語民族に接近しようと努めて居た。フランスが革命戰爭の時に取つた行動の爲にフランスに對するブレーン氏の尊敬は殆ど無限であつた。然しさうかと言つてブレーン氏は全く感情に驅られない人とは言へなかつた。

の接見をブレーン氏に取計らつてくれと賴んだ。ブレーン氏は大統領に尋ねた上翌朝サー・ジョンに否やの挨拶をすると答へた。

此事の起つた直ぐ後にブレーン氏は華盛頓滯在中の余に其話をした『勿論我輩は大統領が公式にサー・ジョンや其同僚等と接見することの出來ないことを知つて居たので彼等が來た時に其通り話したのさ』。然るにサー・ジョンは加奈陀は獨立て『聯邦中の紐育州同樣主權がある』と辯解した。ブレーン氏は之に答へてサー・ジョンが若し加奈陀首相の資格て公式に紐育の官憲に接見するとしたら恐らく華盛頓から何とか抗議が出るだらう、又紐育州官憲も其通り抗議を受けるだらうと言つた。

大統領とブレーン氏とはソールスベリーが最善の努力を盡したことを信じて、英國政府が豫て協定した條項を履行することの出來ない事情を酌量してソールスベリーの仲裁案を承認したのである。之はブレーン氏に取つて頗る痛切な失望であつた。氏の原案はベーリング海に英米兩國が各二隻の船を常置して何れも同等に漁船に臨検し、又は之を拘引する權能を有すること、卽ち協同警備隊を設

て、ソールスベリーが氏の提案に關し駐英大使をして稱揚させて居ながら、今になつて之を排斥する態度を取つたことを憤慨したのは人情てある。余は兩氏とも到底和解に應ずる樣な氣分がないことを認めた。就中大統領は一層激昂して居られた。余はそこてブレーン氏の方を說服しようと努めた。余の說明はかうてあつた。ソールスベリーは此場合孤立無援てある。自分が輕卒に協定した條項た加奈陀が抗議したのだから之を强制する等は以ての外だ。のみならずモウ一つ困つた事がある。陸上方面てソールスベリーはニユーフアウンドランドとの爭議を有つて居る。後者は自國の利益になる樣に決定したいと力爭して居る。英國內閣として加奈陀の不平にニユーフアウンドランドの不平が加つて自由に手腕を振ふことの出來る筈がない。ソールスベリーは最善の努力をしたのだ云云。暫くするとブレーン氏が余の說に服して遂に大統領をも首尾よく其說に納得させた。

ベーリング海問題の餘波として聊か滑稽な局面が展開して來た。或日加奈陀首相サー・ジョン・マクドナルドの一行が華盛頓に到着して、本問題に關し大統領と

翌日の白亜館晩餐席上で余は大統領と長い間友誼的談論を試みたが、彼はどうも氣分が勝れない樣子であつた。余は彼が休息の必要あることを忠告して是非とも何とかして田舍へ轉地しなければなるまいと言つた。彼は數日間稅關の船でも借りて何處かへ行く積りだが、大審院判事ブラッドレーが死んだので適當な後任者を物色しなければならないと言はれた。余は適當な人物を一人知つて居るが、魚釣友達で餘り親密な間柄だから推薦したら好む所に偏したと言はれる恐があるけれども聞いて見てもよろしい。即ちピッツバーグのシャイラス君の事だと答へた。大統領は早速問合せて彼を任命された。シャイラス氏は各方面から有力者の後援を受けた。シャイラス氏が大統領の希望に添つた最良の人物てなかつたならば、余の推薦や其他何人の推薦があつても大統領が其爲に動かされて任命する樣なことは斷じてなかつたてあらうと思はれる。

ベーリング海爭議に關して大統領は豫て英米間に協定の成立した條件をソールスベリー卿が破棄したことを憤慨された。大統領は本件を仲裁に附すべしとの對案を拒否する決心であつた。ブレーン氏もこの點に於て大統領と同感であつ

ウエスト・ヴアジニアの(上院議員)エルキンス氏はブレーン氏とは親友の間柄であり又大統領とも親交があつたが、此時丁度來訪して大統領に今しがた面會したと言つた。大統領の話によれば余と大統領とが智利問題を談論し余が大分其問題に熱して居たと云はれたとのことであつたが、エルキンス氏と大統領との問答は次の如くであつたさうだ。

『さうですか大統領殿、カーネギー君は私に話すほど無遠慮に閣下には話さなかつたらうと思ひます。余は其問題に關しては神經過敏になつて居るが閣下に對しては自然幾らか遠慮をしたてせう。』大統領は答へた。

『イヤ、遠慮した樣な風は少しもなかつたよ。』

本件はブレーン氏獨特の平和政策のお蔭で調停が出來た。ブレーン氏が一再ならず合衆國の外交難を排除して平和に局を結んだことは余の直接に知る所である、彼が進擊的特色を備へた米人だとの世評は却てかの偉人をして讓步的政策を立てさせる便宜となつた。斯る政策が他の人物によつて採用されたら國民がさう無雜作に之を承認しなかつたかも知れぬ。

此討論をして居るうちに日はとつぷりと暮れて余等は遂に白堊館の處まで來た。大統領は其晩は他に晩餐の前約があるが、翌晩は家族許りだから一緒に白堊館で食事をしながら、緩くり話をしようぢやないかと言はれた。そこで余は『明晩閣下と食を共にすることは大いに光榮とする所であります』と言ふて別れた。其翌朝當時國務卿であつたブレーン氏を訪問した。彼は席から立つて兩手を差出した。

『ア、、なぜ貴君は昨夜我輩と晩餐を共にしなかつたのか。大統領が妻に貴君が上京中なことを話されたら妻は「マア、さうですか、カーネギーさんが市内にお出なのに今晩此處に空席があるのに御出でくださらないとは情ないことですね」と言つた。』

『さうでしたか、しかし私が貴君に御目にかゝらなかつたことは却て幸と思ひます』と余は答へて、大統領との間に起つた問題を話した。ブレーン氏は言つた。『さうね、それぢや會はない方が幸だつたな。一緒だつたら大統領が貴君と我輩とを同穴の狐と考へたかも知れぬよ。』

です。』
『アヽさうかそれは成程君に限つて本統だらう、我輩は氣がつかなんだ。』
『大統領閣下、私が喧嘩をするのなら自分と同じ位の大きさな奴を相手にします
よ。』
『それはさうと、大きくも小さくも國民として君を侮辱したり名譽を毀損したり
しても君はそれを許しておくのか。』
『大統領閣下、私自身の外何人も私の名譽を毀損することは出來ません。名譽の
毀損は凡て自ら求めるものであります。』
『君知つて居るだらう。我が水夫等が上陸中に攻撃されて二人まで殺されて居
る。それをも君は忍ぶのか。』と彼は詰つた。
『大統領閣下、私は醉拂の水夫等が喧嘩をする度毎に合衆國の名譽が毀損される
とは思ひません。其上、其名を御覽になつても判るでせう。米國の水夫ぢやあ
りません皆外國人です。私は市内に暴動が起つて公安が既に亂れて居た場合
に、水夫等の上陸を許した船長を免職した方が正當と考へて居るのです。』

『さうか、それなら一所に歩きながら話さう。』

大統領は余の腕をつかまへて二人は黄昏時に華盛頓の市街を一時間餘り散歩したが、その間旺んに談論した。余は先づ大統領が曩に余を全米會議の代議員に任命されたこと、又南米の代議員等の去るに臨んで大統領が彼等に敬意を表する爲觀兵式を行はれたが、それは合衆國に陸軍のあることを示す目的ではなくて、陸軍と云ふほどのものがないことを示す目的であつたこと、又合衆國は諸共和國中の長兄であつて一切の爭議(萬一起れば)は、平和的仲裁手段て治め得られることを證明された事などを大統領に注意した。故に余は今大統領が一見之を全く異る方針を取つて、智利の如き小國民を相手に戰爭に訴へる樣な威嚇手段を取られることを驚き且つ悲むと論じた。ところが大統領の駁論はかうてあつた。

『君は紐育人だ、商業と弗との外何も考へて居ない。それが紐育人等の特色だ。彼等は大共和國の威嚴と名譽とを顧みないのだ。』

『大統領閣下、合衆國に於て私は戰爭て最多額の利益を獲る一人てす。最大製鋼業者として戰爭があれば數百萬弗の金が私の懐にころがり込む機會があるの

免れることは殆ど不可能であらうと思つたが、誰も彼を引留め得ない程であつた。智利國政府は我大統領の行動に關して最も不謹愼な聲明をした爲に彼は大いに憤激したのである。余は豫て第一回全米會議の一員として南米諸共和國の代表者等と親しく交はり懇意な間柄となつて居たから、何とかして兩爭議國を和解せしむることは出來まいかと思つて華盛頓に往つた。

運よく余が丁度ショアハム・ホテルに這入りかけた時、全米會議の同僚代議員であつた上院議員ミヅリ州のヘンダーソンに會つた。彼は立止つて余に挨拶したが、往來の向側を見ながら余に言つた。

『彼處に大統領が貴君を手招きして居られるよ。』

余は向側へ歩いて行つた。

『ヤア、カーネギー君は何時來たのか。』

『今來たばかりです、ホテルに這入る所でした。』

『何の用で來たのか。』

『閣下にお話することがあるのです。』

と同様な感じがしたであらうが、余の眼中には余が其うちに交つて富を作つたピッツバーグ市民の福利があるのみであつたから、或性質の人々の無稽な邪推は却て其人々のうちに向上の感化を與へる一大勢力となるべき設備を立てゝ、其福祉を增進させて遣りたいとの希望を熱烈ならしめたのであると辯明した。有難いことにはカーネギー館は此目的を達した。ピッツバーグは立派に其役目を演じた。

第二十七章　華盛頓外交

ハリソン大統領は軍人出身だけあつて大統領としては少しく喧嘩腰の傾があつた。彼の態度に關しては友人間に憂慮する向もあつた。ベーリング海問題解決の協約を加奈陀の指圖でソールズベリー卿が破棄する必要に迫られて過激手段に訴へようとしたので、ハリソン大統領は之を仲裁に附することに反對したけれども溫和な意見が貫徹することになつた。彼は又南部諸州に對する强制案を成立させようと決心して居た。

ハリソンと智利戰爭勃發の危機

智利との爭議が起つた時若し大統領が或行動を取るならば、其結果必ず開戰を

のあることを誇り得る都市は、ピッツバーグの外ボストンとシカゴのみてある。博物倶樂部や美術學校も出來た。圖書館、美術館、博物館、音樂堂の四大館を堂々たる建築て集めたことは余の生涯の最も大なる滿足の一てある。ピッツバーグは余の少壯時代に生活し、事業の經營に着手し、今日尙ほ余は此親愛なる昔ながらの都會の献身的孝子てあると誠心誠意自ら信ずるが故に、此カーネギー館は余の紀念碑と云ふべきてある。

ハーバート・スペンサーはピッツバーグに余等と一所に居られた時、余の最初の圖書館寄附の申出をピッツバーグ市が辭退した話を聞いて居られたので、二度目の寄附申出をした時先生は余がそんな事をした理由を了解するに苦む。自分てあつたら何うしてもそれは出來ない、市は之を受ける資格がないと云ふ趣意の手紙を寄せられた。余は此哲學者に返書を送つて最初の寄附をピッツバーグに申出た時感謝して貰ひたい、恩に感じて貰ひたいと云ふ考へてあつたならば、余は胸に矢を貫かれても當然てあつたらう。又唯自己の榮譽と功績の紀念とを求めたとの非難をされても止むを得なかつたてあらうから、二度目の寄附の話が出た時は先生

なかつたことは一の有益な結果を生み出した。ピッツバーグの市會議員等は余を訪問して、余が曩に同市に圖書館設立資金の寄附を申出た時市が斷つたこと、又アレグニー市がその金を同市へ寄附してはくれまいかと願出た時、余が之に應じたことなどを話して、余の注意を催した。大統領が圖書館及會館の開館式にアレグニー市を訪問されてピッツバーグを閑却されたことは、ピッツバーグに取つて堪へがたく感ぜられた。市の當局者はアレグニー市に於ける開館式の翌朝再び余を訪問して、ピッツバーグへ曩の資金を元通り寄附してくれるかと申出た。さうしてくれるならば市は之を受けて曩に余が請求したよりも多くの割合を維持費として支出することを誓約しようと云ふことであつた。余は勿論それをすることを非常に喜んで二十五萬弗とは言はず百萬弗の寄附を申出た。余の計畫が以前申出た時よりも大きくなつて居たのである。之がカーネギー館創立の由來である。

ピッツバーグの主なる市民等は美術品に金を費すことを惜まない。工業の大中心たる此都會では既に多年の間常設の管絃樂堂が備へてあるが、米國でこの設備

居る。満堂の喝采裡に斯く思掛なく出場した伯剌西爾の代表議員諸氏が熱誠に歡迎された。余は南米の代表者等が幾分か彼等の長兄ともいふべき合衆國の心事を邪推して居ることを發見した。獨立自尊の精神が彼等の情緒に顯れて之を認めることは、我々合衆國人の義務となつた。余は此點に於て本會議は成功であつたと思ふが、今後の政府當局者は南米兄弟諸國の國家的感情を愼重に尊敬する必要があると思ふ。我々の務むべきことは覇權を握ることてはない完全なる同等の關係を保つて友誼的に協力することてある。

余の席は後に亞爾然丁の大統領になつたマヌエル・クインタナの次てあつた。彼は議事に深い興味を起して、或日一小問題に批評的議論を試み、之が爲に彼とブレーン議長との間に激論が闘はされた。余は其爭點が甲の國語を乙の國語に誤譯したことに基いて居たと信ずる。余は立つて拔足して議長席の後に廻り、休憩の動議を持出したら確かに爭論を調停することが出來るだらうと議長に耳打した。彼は點頭した。余は自席に歸つて休憩の動議を提出したが、休憩中に滿足な調停が成立した。余等が會場を去らうとする時、代議員等と別れの挨拶をする場

へ氏は簡單に挨拶した。恰も其時一通の電報が氏に渡された。『ハリソンとモルトンとが推薦された』とある。フエルプスは辭退したのである。斯くの如くブレーン氏が世界政治の最高位、卽ち英語民族の最大多數に選ばれて占める最高の地位に登る機會は永遠に去つたのである。實は一度立派に大統領に當選したことはあるが、紐育州の選擧戰で反對黨の奸策に憑つて端なく落選したのである。之は詐欺投票の方法であつて其後の選擧戰に又もや之を試みんとして遂に其筋の檢擧を受けて夫々處罰された。

ブレーン氏はハリソン內閣の國務卿として立派に成功したが、就中全米會議は氏の最も光輝ある偉勳であつた。余が生涯に唯一度受けた政治的任命は此時であつて、其れは該會議の合衆國代表議員として指名されたのである。これは余に南米共共和國及其各種の問題に關して最も興味ある考察をなさしむる機會を與へた。伯剌西爾を除く外西米各共和國の代表者たる我々は一堂に會して着席した。或朝、新憲法が批准されて伯剌西爾が新姉妹國として全米會議に參加するとの報告があつた。之て十七共和國が參加した譯だが、今ては二十一個國になつて

余はブレーン氏に米國出帆前此上院議員の來訪を受けて有力な候補者の名を暗號で通信する事を相談したとの話をした。余は暗號を其時幾つか書いて彼に渡し其寫しを取つて手帖に挿んで置いたのだ。それで其寫しが今でも有るかと思つて見たら幸に見付つた。暗號はブレーンが『ヴイクトル』、ハリソンが『トランプ』、ニユー・ジャジーのフエルプスが『スター』などであつた。余は『トランプ』と(一)『スター』を打電したが、それは其晩であつた。

(一)『カーネギー氏は在米の友人等と暗號電報の文字を豫め極めておいて、形勢行詰りか長期の候補戰が必要と思はれた時ブレーン氏の滞在して居た蘇克蘭カーネギー氏別莊から共和黨の某領袖に次の暗號電報を送つた。
『六月二五日時期遲るヴイクトル動かすトランプとスターを選べ、ホイツプ。』之を解くと「時期遲るブレーン動かすハリソンとフエルプスを選べカーネギー」となる。(一九〇五年ボストン刊行エドワード•ストンウツド著ジエームス•ジエー•ブレーン傳三〇八頁)

其夜はそれで就床した。翌日になると一行全都市の役員の歡迎を受けたが、彼等役員は皆正裝して市の大通を練り歩き余等を國旗て美くしく飾つた宮城所在地に案内した。歡迎演説があり答辭があつた。市民は歡呼してブレーン氏を迎

ハリソン大統領に推薦さる

晩餐會があつたが、其時の客は主にクルーニーへ訪問した人々であつて、ブレーン氏は眞の休日の何たるを悟つたのはクルーニーであると言つて一座の興を添へた。『之は最も些細な事が人生の最も重要なる出來事になる場合である』とは氏の感想だつた。

ハリソン大統領の一八八八年に於ける大統領推薦はブレーン氏が余等と共に英國馬車旅行中同氏に打電された。當時ブレーン氏夫妻、令孃マーガレット、上院議員ヘール夫妻、ドッヂ令孃、ウォルター・ダムロッシュ等が倫敦からクルーニー城迄余等一行に加つたのである。エディンバラーからリンリスガウに近付くと町長や地方官憲が禮裝儼めしく旅館に余等を迎へた。余が彼等と快談して居た時ブレーン氏が手に一通の電報を持つて其室に這入つて來て、余にそれを見せて何と云ふ意味かと尋ねられた。『暗號を用ひよ』とあつた。之は市俄古大會の上院議院エルキンスから來たのである。ブレーン氏は其前日オハヨーのシャーマン國務卿が同意でない限り大統領推薦を辭退すると打電したので、エルキンス上院議員は疑なくブレーン氏と直接通信をして他人を仲に入れたくなかつたのであらう。

有色人種が斯くも多數競うて自由のために萬事を犠牲に供する決心を示したことは、彼等が共和國の市民たる十分の理想に着々と近付き、遂に之に到達せんとする最も有力な證左である。

ブレーン氏が余等と共にクルーニーに居られた時ほど愉快げに見えたことはない。彼はさながら少年時代に歸つたかの如く余等二人は忽ち巫山戯仲間になつた。彼は蠅の餌で釣をしたことはなかつた。余はロガン湖に彼を連出して釣をしたが、初めのうち彼は誰もする樣に下手な手付をして遣つて居た。すると間もなく潑剌たる一尾を捕へた。余は彼の初釣を何時までも忘れない。

『君、君は我輩に人生の新快樂を一つ敎へてくれた。メーン州には釣をする湖水が百もある。これからは休日に必ず鮎釣を遣ることにしよう。』

クルーニーには六月中夜がない。余等は遲くまで明るい黄昏の光で芝生に踊をして遊んだ。ブレーン夫人、ドッヂ令嬢、ブレーン氏、其他の客人等は蘇克蘭の名物踊を試み、ハイランド人らしい奇聲を放つて余等と一所にはしやいで居た。余等はクルーニー滯在の二週間を陽氣に騷ぎ通した。其後紐育の余等の家で一夜

奴隷『ケンタッキーに食物が不十分てすつて、そんな事はありません。澤山食べて居たんてす。』
判事『十分に着せてくれなかつたのか。』
奴隷『私には善すぎるほど着せてくれました。』
判事『住宅が不愉快であつたのか。』
奴隷『あのケンタッキーの美くしい小さな家の樂しさを思出すと、泣きたくなります。』
判事（暫らく沈默の後）『其方は主人が善くて親切で、過度の働きもせず、食物は十分、衣服は善し、家も立派。それて逃出すとは其の考が判らない。』
奴隷『裁判官殿、私が棄てた地位はまだ開いて居ます。今直ぐにお出になれば閣下のものになりますよ。』
判事は大いに悟る所があつた。
『事足れる奴隷の身にも慕はるゝ樂み滿てる自由境』

る。今日の我々が自由に解釋を許されさへすれば憲法を作つた人の誰であつたかは問ふ所でない。

ブレーン氏の談話には秀逸のものが澤山あるが、其うちから一つ選ぶとすれば余は次の談話を推薦する。

奴隷制度や地下鐵道の盛な時代にガリポリスに近いオハヨー河の沿岸に有名な民主黨員フレンチ判事の居宅があつた。彼は或非奴隷主義者たる友人等に河を越えて地下鐵道で北部の方へ逃走を企てた黒奴があつたら、見當り次第自分の事務所へ引立てゝ來る樣に賴んだ。彼は黒奴が何故逃げるのか了解に苦しんだ。そこで黒奴を引立てゝ來た者があつたから、次の審問があつた。

判事『其方はケンタッキーから逃走したのだな。主人が惡かつたのだらう。』

奴隷『どう致しまして、結構な親切な主人でした。』

判事『主人が其方を過度に働かしたのか。』

奴隷『飛んでもないことを仰る、生れてから働き過ぎた事はありません。』

判事（躊躇しながら）『食物を十分に與へなかつたのか。』



ジェームス・ジー・ブレーン

つた第一の法律案は内地の淡水修築費國庫支辨に關するものであつた。狹義に解する憲法學者議員は之を憲法違反と主張した。其論據は聯邦政府の管理は鹹水の港灣に限るとの解決であつた。兩派の論戰激烈に亘り結果如何と危ぶまれた時に全院の眼を驚かしたのはリッタ－知事が此時初めて徐ろに立つたことである。滿堂肅として水を打てる如くであつた。あの老獨逸人たる前知事が何を言ふだらう、今まで唯の一度も發言した事のない癖にと片唾を吞んで耳を欹てたが、其言ふ所は極めて簡單であつた。

『議長、本員は憲法の事は詳かに知らないが之だけは知つて居る。鹹水同様淡水にも洗濯の出來ない様な憲法には一仙たりとも出したくない。』

滿堂の笑聲暫しは鳴り止まなかつたが、法案は無難に可決された。

こんな風に立法慣例の一新機軸を出して國費運用の最も有益なる方法が設けられ、陸海軍の技術家を多方面に利用する道が開けたのである。政府が支出する金額は僅かでも其及ぼす所の效果は莫大である。米國憲法の屈伸自在な特色は屢々平として增加する人口の新たなる必要に應じて益々其運用範圍が擴張され

『國務卿閣下、一字訂正したいと思ふが如何です。私は其「幾」を好みません。何故「萬」と云はないのですか。』

『成程、之は完全だ。』

それて演説の時は『將來萬世に亘つて』となつて居た。

余等二人がヨークタウンから歸つた晩は夜景極めて美くしく、月光を浴びて船の後部に座を占めて居ると、前部ては軍樂隊が奏樂を始めたので余等は音樂の效力を話題に樂しく語り合つた。ブレーン氏は丁度ガーフィールド大統領の葬式の際同じ樂隊が演奏した時に聞いた、『やがて樂しき』の曲を目下最も愛好して居ると言はれたが、彼は其葬式の折に生涯曾て覺えないほど深く美くしい音樂に感動されたさうてある。其夜の終曲として之を演奏してくれと彼は賴んだ。彼もグラッドストンも單純な音樂を好んだ。兩者はベートーヴエンや一流大家の作曲を味ふことが出來たけれども、ワグネルは深奥て到底彼等には判らなかつた。

國會で彼が聞いた最も上出來の演説は何てあつたかと余の問に答へて、彼はペンシルヴアニヤの前知事獨逸系米人リッターの演説てあると言つた。議題とな

類の同胞主義、列國間の平和、宗教の純潔性(宗教を荒唐無稽な迷信から洗ひ潔めて純粋のものにすること)、ウエストミンスター宗教問答に示されて居る神の代りに正義の神を信ずることなどを高調した人である」(リチャード・ワトソン・ギルダー書翰集三七五頁)

第二十六章　ブレーンとハリソン

人の眞價は其交友の如何によりて知らるゝものであると同時に、其語る所の談話によりても知らるゝことは疑ひない。ブレーン氏は余が從來會つた最も巧妙な話手の一人である。彼は天性極めて快活で如何なる場合にも頓智に富んだ奇抜な話をする人物であつた。

ヨークタウン(余は其所へ隨行したが)に於けるブレーン氏の演說は大いに賞歎された。之は英語人種の二支族間に發達した親愛なる友情に特別なる注意を喚起し、兩國民間目下の平和と好意とが將來幾世紀間も存續せんことを希望すると云ふ趣意であつた。彼は演說の前に其原稿を余に讀んで聞かせたが、『幾』と云ふ字が余の耳障りになつたと記憶する。それで余は言つた。

されねばならぬ。『務民之義敬鬼神而遠之可謂知矣』とは大聖孔子の教てある。來世と來世の務めとは來世になつてから考へても遲くはない。

余は日の照る所に浮いて居る塵の如き者てある。此嚴かな不可思議な不可知な宇宙に於て塵ほどの價値すらない者てあると思ふ。考へて見ると肅然として恐れざるを得ない。余が認める一の眞理はフランクリンの正しい説てある『神に對する最高の奉仕は人に事ふることてある。』さりながら之が爲に不死に對する永遠の希望を妨げらるべき理由は決してない。來世に生るゝことは現世に生るることと比して格別大いなる奇蹟ではなからうと思ふ。現世の生命が創造されたからには何故來世の生命が(一)創造されないであらうか。故に不死を希望すべき理由がある。我々は宜しく此希望を抱くべきてある。

(一)「アンドルー・カーネギーは實に巨人である。演劇的で、片意地で、寛大で、氣まぐれで、折に觸れては殆ど殘酷に自己の所信を人に强制するが、それかといふて又ある時は柔和で、親愛で、情熱的で常に想像力に富み、其意見は非凡で又高遠である。彼はボスウエル其儘とも言へる人物である。然し余は彼に「自己獨得のボスウエル」たるべしと勸めて居る……彼は兎角自家撞着の點が多いけれども高遠な理想に對する熱情を備へて居て人

は神學と超自然とを敝履の如くに棄てることが出來たばかりでなく、余は爰に初めて進化の眞理を發見したのである。『凡てが善に進むが故に凡ては宜し』とは安心立命の眞の源として余の格言になつた。人間は自己の墮落を招くべき本能を備へて創造された者ではない、低きより高きに進んだ者である。且つ其進歩の行程は完全に達するまでは止むべき者とは思はれない。人間は光に顔を向け、太陽の光線のうちに立ち、上を見て居る存在者である。

人間は天性凡ての有害なるもの即ち不良なるものを排斥して、有益なるもの即ち正當なるものを試みた後に吸收する樣に出來て居る有機體である。宇宙の築造を宰つた神は世界と人間とを人の想像する天の使の樣に初めから完全に造つて、害惡と苦痛とに全く束縛されない自由なものにすることも、お好みとあれば出來たであらうと我々は推測しなければならぬが、事實はさうではなかつた。けれども人間は退歩せずに進歩する能力を賦與されたのである。舊新約聖書は他の諸國の他の聖典の如く過去の記錄として、又善良な敎訓を含むものとして價値がある。聖書古代記者の樣に我々の思想は現世と現世の義務と云ふ事に專ら傾注

青年は他の人々と共に敬神家を氣取らうと努力し、外面には信條と其敎義とに悉く心服すると見せかけ、內心では胸奥に潜む疑と外部の僞善とを一致させることが全く出來ないから、爰に忽ち反抗心が起つて容易に治まらなくなる。人間に智德と云ふものがあるならば之を極力善用した結果は、必ず煩悶に陷り數週間の惡戰を經た後カーライルが發見した次の如き眞理に歸着するであらう、『信じ難いものなら、斷然排斥するが宜敷い。』此眞理さへ發見すれば靑年は永遠に疑と懼とを解脫することが出來る。

余が余の好景氣時代の仲間三四人と共に神學上の疑に捕はれて、宗敎の超自然的要素を始め基督の代償的贖罪によりて救はるるとの全敎義、及びこれに基いて築かれた全神學組織を疑雲のうちに包むで煩悶して居た矢先、余は幸にダーウインやペンサーなどの著作卽ち『倫理の論據』、『第一原理』、『社會平權論』、『人間種原論』等に逢着した。此等の書物を繙いて人間が自己に有利な精神食糧を吸收し、健全なるものを保持し有害なるものを棄てる等の整然たる論理を讀むに從つて、余は忽ち光が洪水の如くに余の全精神を照らして一切が明かになつた樣に感じた。余

舊式の神學に對する反動は多く未來の幸福を享くるに缺くべからざる眞理と信仰とが、唯最も嚴格なるカルヴィン派の信條より得らるべき者として全然滿足して居る敎會信徒等に圍繞されて、感化を受けた人々の精神に起るのである。思慮ある青年は自然に斯る思想に感化されて之に同意する傾きがある。發達の或程度までは模範と敎訓との儀表として自分が仰いで居る周圍の最善の人々、最も高い敎育を受けた人々の信じて居る事は必ず眞理であると考へない譯には行かない。疑が起れば彼の靈魂を滅亡に導く爲に惡魔が皷吹したので、信仰に因つて救を求めなければ必ず其魔手に捕へらるゝものとして峻拒する。然に不幸にも青年は忽ちに信仰がさう思ふ樣に自由にならないことを發見する。彼は見たいと願ふことを見られない、信じたいと願ふことを信じられない其無氣力の根柢は、神學說の所謂原罪にあるに相違ないと考へる。彼は爰に至れば既に滅ぶべく定められた者の一人と五十步百步の間にあるのだと諦めるらしい。自分は何うしても撰ばれた者である譯がない、之は牧師とか長老とか嚴格に正統神學の信仰を守る人の外に與へられない特權だからなどと悲觀する。

先生は決して宗教の事柄を嘲笑する人ではない。されとて神學の理論を取扱ふには敢へて形式に拘泥しない。形式は先生から見れば眞の發達を妨げる甚だ誤つた組織である。賞罰の觀念などは先生に取つて實に極めて下劣の性情にのみ訴ふるものと感ぜられた。さればとて舊思想を悉く排斥する譯ではない。其中の或ものを論ずる場合に決してテニソンの如く極端には走らない。ノールス(雜誌『十九世記』の創立者ジェームス・ノールス)はテニソンが自制力を失つた話をした。彼は此詩人の子が父の傳記を書いた場合に嚴刻な神學に對する父の激烈な反抗を、眞實に描寫しないことを大いに失望したと余に語つた。

スペンサーは常に冷靜な哲學者であつた。少年時代から老年に至るまで、即ち人生の競爭を走り終るまで先生は決して何人にも不德の行又は不義をした事がなかつたと余は信ずる。先生は實に有史以來最も誠實なる人物の一人であつた。余は何人よりも深く先生とダーウィンとに負ふ所があると信ずる。故に何うにかして先生の人物を深く知りたいと希ふ點に於て、余ほどに熱心な者は稀であつたと思ふ。

の氣象とに關する豫ての想像が、實見によつて十分體現されたと言はれた。米國に於て斯くまで尊敬され又款待されたことは自然に先生の心を喜ばせた。

（一）「余の生涯に於て恐らく肉體的にも精神的にも最も良好な狀態にあるべき場合であつたのに、二十六年間曾て覺えないほどの不良な狀態にあつた。「苦しい夜であつた。一睡も出來なかつた。終日室に籠つて居た」と當時の日記に書いてある。而して余は「倒れやせんか」と大いに恐れを懷いて居た。デルモニコの晩餐會に愈々出なければならぬ時間が迫つた時余の友人等は、紹介やら祝辭やらで騷ぎ立てられる煩累を避けさせようとて、余を別室に隱くして最後の瞬間まで靜かにさせてくれた。司會者エヴアーツ氏が余を上席に導いてくれた時に、余は成るべく余との談話を切詰めて簡單にし、余の挨拶も內容極めて貧弱のものと思つてくれと賴んだ。中々苦しい場合であつたが、結局恐れた樣な災難も起らず、エヴアーツ氏が場合に適した祝辭を述べ終るを待つて余は豫て用意した演說を無難に述べることが出來たが、大した効力は無かつた樣だ」（スペンサー自叙傳第二卷四七八頁）

余は英國を訪ふ毎に殆ど毎回先生を尋ねたが、ブライトンに移られた後でさへ大抵は訪問を怠らなかつた。ブライトンの海を眺める生活は先生の嗜好に適し又慰めともなつた。一言一行を愼む點に於て先生の如き人に余は接したことはない。即ち極て些細な言行に至るまで全然自已の良心の指導に從ふのである。

された。私を敎へた者は先生である』。

ビーチャーは之を徐ろに嚴かな音調で述べた。余は之ほど深い感謝の籠つた演說を聞いた事がない。之は確かに感謝の念に溢れた人の言葉である。スペンサー先生は此言葉に深く其心を動かされた。之は大分世評の種子となつたが、其後間もなくビーチャーは進化論に關する意見を發表すべく數回に亘る說敎をすることになつた。スペンサーを師と仰ぐ彼の言說は敎會方面に波瀾を起したので、此說敎の結論が何うなるかと世間では氣遣はしげに待つて居た。余の記憶が正しいとすればビーチャーは其說敎の結尾に於て次の樣に論じた。彼は進化論(ダーウイン說)を或點まで信ずるけれども、進化の過程が人類の平面に達した時造物者が人間に(而して凡ての生物中唯人間にのみ)聖靈を賦與したまふた。之によりて人間は神に似た者の圈內に入る事になつた云々。彼が批評家に對する答は右の如くであつた。

スペンサーは機械の發明に熱烈な興味を起した。先生が余と共に余等の工場を視察された時新らしい機械應用に感心して後年之に言及し、米國の發明と進取

必ず獨自ら此一句を繰回して怒を治めた。『何てそんなに熱くなるのか、小さな人よ』

スペンサー先生の經驗された米國觀光の感興はデルモニコ樓の盛筵で其絶頂に達した。余は先生を馬車に乘せて同樓に案内したが、流石の偉人も大いに恐縮の體に見えた。先生は其場合に述べる演說の事の外何も考へることは出來なかつた。先生は公開の演說などを滅多にされなかつたと余は信ずる。先生は自分の著書を第一番に感賞して居た米國人に利益となる樣な話をする事は出來まいと考へて居た。先生は公の宴會などに列なつたことは隨分度々あつたかも知れぬが、名士の多數を集めた點に於て之に及ぶものは無かつた。之は著しい集合であつた。最も有力な人物がスペンサーの功績を稱揚した有樣は無比の盛況であつた。其絶頂はヘンリー・ウワード・ビーチャーが其演說の結論に於て身を轉じてスペンサーに對ひ、次の如く述べた時であつた。

スペンサーとビーチャー

『私の父と私の母とは私の肉體の存在の親であるが、先生は私の智的存在の親である。危機一髮の瞬間に先生は混沌たる沼澤の中に安全な道を私に與へて下

或日余等二人はトラファルガー・スクエアを眺めながらグランド・ホテルの居室に對座して居た。近衞隊が通つたので次の樣な會話が交換された。

『スペンサー先生、大道藝人の樣な服裝したあの人達を見ると、私は何時も此十九世紀の世の中に最も進步したと我々自ら信ずる此文明國人が、一の職務卽ち近代までは紳士たる者の唯一の職務として人を殺す最も有力な方法を研究して居るかと思ふと、悲哀と憤怒とを感ぜずには居られません。』先生は答へた。

『我輩も同感だが、我輩の癇癪を治める方法を君に一つ話して聞かさう。そいつが出かゝると我輩は何時もエマーソンの此話で鎭めるのだ。彼は大膽に時論に逆つて奴隷解放を論じた爲にファニユイル・ホールの演壇から冷笑嘲罵された。彼は激く怒つて同館から家まで步いた當時の胸中を自ら描寫した。家に辿りついて庭の門を開けて門と其質素な家との間に生えて居た亭々たる楡の木の枝の間から空を仰ぐと、彼は枝を透して輝く多くの星を見た。星は彼に言つた「何んでそんなに熱くなるのか、小さな人よ」』と。余は笑つた、先生も笑つた。

而して余は此話を聞かせてくれた先生に感謝した。余はそれ以來何かの折には

けて覗いた。其後彼の母がなぜ覗いたと尋ねたら當時十一歳の少年は答へた。
『お母さん、僕は文法をお稽古しなくても善いと書物に書いた先生が見たかつたのよ』
スペンサーは此話を聞いた時大いに喜んで折々それを言出した。先生は此甥に望を屬して居られた。
或日ドーヷア、カレー間のトンネル計畫に反對の趣意書に先生が記名された事に關して、余が奇怪に思つたと云ふ話が出たが、先生の説明によれば先生自身は個人として此トンネルに賛成論者であることは勿論であつて、反對論などは一つも取るに足らないと思つて居るが、其反對趣意書に記名した理由は英國人が愚かな國民であつて、英國の軍閥が多數民衆を驚かしたり嚇かしたりして、軍國主義を奬勵する材料に利用する處があると云ふのであつた。トンネルが計畫されても軍事當局は必ず陸海軍の擴張を要求するだらう。先生は曾て之に類した威嚇が原因となつて陸上防備に幾百萬磅を費やしたが結果は無用の長物であつたとの實例を語られた。

不毛の田舍てあつた其地方についての感想を尋ねられて斯く答へた。

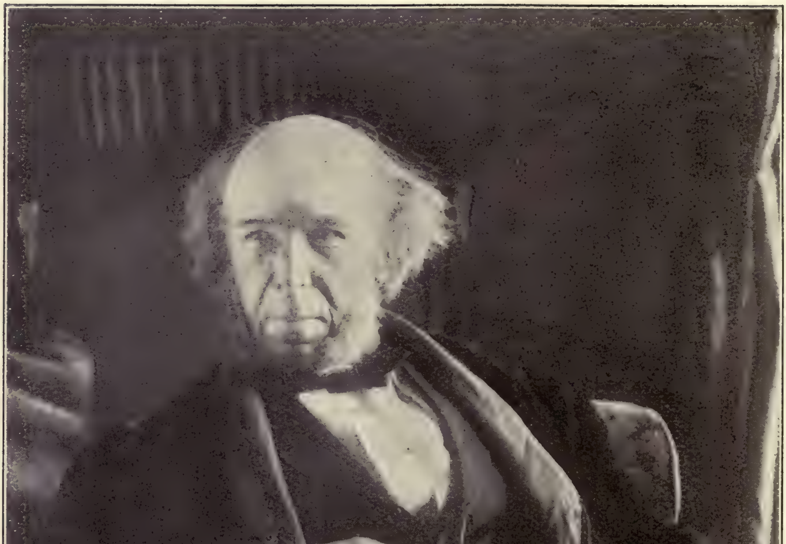
『君、テキサスの事なら外に言ふことは何もありません、これ丈てす。若し僕がテキサスと地獄とを所有して居たら僕は先づテキサスの方を賣りますよ』

未開の當時から見れば今日までの變化は如何。テキサスは今や人口四百萬を突破して一八八二年には全世界が生產したよりも多數の棉花を生產する土地を有して居た。

スペンサー先生をピッツバーグへ案內して余の邸宅までの道を步いて居ると庭の方の徑を步いて來た客人についての米國話をもう一つ思出した。其客人が庭の門を開けると家の方から大きな犬が飛出して其人に躍りかゝらうとした。其人は後戾して門を閉ぢたが危い所で犬に飛付かれはしなかつた。主人が大聲に、『犬は貴君に飛付きませんよ、吠える犬は咬まないと云ふぢやありませんか、貴君知つて居るでせう』客人は頷へながら答へた。

『さうてす。私は知つて居ます、貴君も知つて居ます、然し犬は知つて居ますか』

或日余と先生が同席して居る室に余の甥に當る、弟の總領息子が徐かに戶を開



ハーバート・スペンサー

余は答へた『さうです。先生の場合は誰よりもさうでした。私は先生が偉大な沈着な哲學者で瞑想に耽り佛陀然として萬物の上に超然不動の風采を備へた人物と想像して居たので、チエシヤイアの乾酪であらうがチエダーの乾酪であらうがそんな事に騒立てるお方とは夢にも思はなかつたのです』。丁度其前日に司厨が前者を先生に薦めた時、先生は癇癪を起してそれを押のけながら『チエダー・チエダー・チエシヤイアぢやない、チエダーと言つたぢやないか』と怒鳴られた。此話ぢや一同大笑をしたが、當の聖人が一番心から笑ひ興ぜられた。先生は其自叙傳に航海中の此逸事を述べられた(一九〇四年紐育刊行ハーバート・スペンサー自敍傳第一卷四二四頁)。

スペンサーは話が好きで善く笑ふ先生であつた。米國話が何よりも先生を喜ばせたらしいが、余は其話なら幾つも知つて居たので、話すと必ず先生は破れる様に笑はれた。先生は米國西部諸州の事を頻りに知りたいと焦慮して居られたが、之は其頃歐洲方面の注意を惹きつゝあつたので、テキサスについて余が先生に聞かせた話は特に先生の感興を惹いた。其州から失望して歸つて來た移民が當時

てなければ今後は決して着手しまいと余は決心して居る。

第二十五章　ハーバート・スペンサーと其門人

ハーバート・スペンサーと其友人ロット氏及余とは一八八二年リヴアプールから紐育までセルヴィア號の同船客であつた。余はモーレー氏から此哲學者に紹介狀を貰つて來たが、倫敦で以前面會したことがあるので、實は其門人の一人であつた。旅行にかけては余の方が先輩と云ふ所でロット氏とスペンサー先生との世話役を務めた。航海中は同一食卓で食事をした。

或日偉人に初めて會つた場合の印象如何が話題になつた。偉人と稱する者が我々の豫て想像した通りに眞に偉大であつたか何うかゞ問題であつた。三人は各自に其實驗を述べた。余の經驗は想像して居た人物と現在眼の前に見た者ほど互に異つた者は他にあるまいと云ふのであつた。スペンサー先生すかさず一本質問の矢を放つた。

『ハア、成程、例へば我輩の場合はさうだつたか』

十億弗、一九一四年には合衆國は一躍二百四十億弗を突破した。

それから驚くべき新事實をドシ〳〵並べ立てたら氏は遂に一の質問を出した。『それなら何故誰か此問題を一つ書立てゝ、簡單明瞭な形式の下に事實を世界に提供しないのかな』

實際の處余は其時氏が此質問に暗示された社會奉仕をする目的で、『平和主義の勝利』編纂の材料を蒐めて居たので其事實を氏に話した。

『世界一周記』と『米國式四頭馬車』とは何等努力をする必要がない著作であつたが、『平和主義の勝利』は全く別種の事柄で、一八八二年に着手して以來間斷なく惡戰苦鬪した。蒐めた數字は一々吟味して整理する必要があつたが、骨の折れたにも拘らず着々進行して居るうちに自然その研究に全く魅せられてしまつた。數ヶ月間余の頭腦は統計數字に全部占領された形であつた。時間のたつのには全く氣がつかない。正午だと思つて居るともう夕方になつて居た。生涯に二度目の重患はこの仕事に熱中した結果であつた。それは業務の方にも從事して居たからである。數字の樣な魅力のある者に關係する場合は一應その結果を熟慮した上

世界最大の工業國たる米國

多數と支配して居ると云ふ譯です』と余は答へた。

『ハア、何うしてさうなるのか、米國の人口は』

『六千六百萬ですが、貴國の人口は其半分もありません』

『ハア、成程、驚いたな』

列國の富力問題に關しても一八八〇年の國勢調査によると開國僅かに百年の新共和國が、大英國及愛蘭其他一切の固定資本や投資を其國土と共に買收し、其上英國の國債全部を消却しても猶ほ餘財があると聞いて二度びつくりの體であつた。然しグ氏を驚かした最大の新事實は余が自由貿易問題を論じた場合であつた。余は米國が今や世界最大の工業國であるとの事實を指摘した(其後の事であるが、大法官ハーデーン卿が同樣の誤謬に陷つて英國を世界最大の工業國であると公言されたが、余の訂正を讀んで余に感謝された)。余はマルホール[一]の統計を引用して一八八〇年の英國工業品總額八億一千六百萬磅、米國工業品總額十一億二千六百萬磅と讀上げた。グ氏は眼を丸くして唯一語『信じられないな』と叫んだ。

(一) 一九〇〇年の英國工業品總額は五十億弗と、算せられ之に對して合衆國のは百三

白くなかつた。英國側に於ける余の友人團は兎角同志間の調和が取れないで、余は遂に手を引く決心をしたが幸に損をせずに引くことが出來た。(一)

(一) カーネギー氏は急進主義促進の目的で英國新聞無慮十八個を手に入れたが、政治上の結果は面白くなかつた。然し金を儲ける天才だけに財政上の結果は案外滿足であつた。

英國人米國を知らず

余の第三回文學的冒險業たる『平和主義の勝利』(一八八六年倫敦刊行一八八八年紐育刊行『平和主義の勝利一名共和國五十年の進歩』)著作の由來は最も世界の事情に通じた外國人、然も英國人てすら米國の事を善く知つて居ず、且又貧弱なる其智識が如何にも錯亂して居ることを遺憾としたからてある。名聲赫々たる英人等が其頃北米共和國の智識を缺いて居たことは驚くべきものてあつた。一八八二年に余が初めてグラッドストン氏と此事を話した時のことは決して忘れられない。余が英語民族の大多數が今や共和主義者てあつて、受太刀になつて居る王政黨は少數だと言つた時に彼は『エー、其れは何うしたのか』と詰問した。『サア、其事てすが、グラッドストンさん。英語を話す英國の殖民地人口を二度數へても大英國の本國と殖民地全部との人口よりは北米共和國の方が英語民族の

苦んで居た一八九七年の冬であつて、カンスに於けるランドール卿の邸に於てゞあつた。彼は依然として舊時の愛嬌を失はなかつた。特にその時初めて彼に面會した余の義妹ルーシーに懇な交際振りを示してくれたのでルーシーは深く感激した。二人が辭して去れる道すがら馬車の中でルーシーは感に堪へないかの如く『病氣の驚ね、病氣の驚ね』と囁いた。力の續く限り南船北馬して人生の戰に勝つた人類の一大指導者たる此老大翁が、疲れ果てゝ横臥して居るのを見た其眞相を描くに、之より優つた文字は有り得ないと思つた。彼は啻に偉人であつたのみならず眞實の善人であつて、最も純良なる感激に動かされて、常に高所に着眼する稀代の人物であつた。『世界の一市民』と云ふ名稱は實に彼の偉勳を最も適切に語る好個の文字である。

余は一八八一年英國に於て國會議員サミユエル・ストレー氏と商業關係を結んだが、此人は非常に崇高な性格を具へ、凛乎たる急進主義者又眞正の共和主義者であつた。余等二人は數個の英國新聞を買收して急進主義の政論を皷吹する一大運動を起した。パスモア・エドワーヅ其他數人が余等に加はつたが、結果は餘り面

グラッドストンと英國の將來

ると論じたら彼は問ふた。

『英國の將來に關して貴下の豫言を承りたい』

余は古代國中の希臘を指摘して英國に對照し、チョーサー、シエキスピア、スペンサー、ミルトン、バーンス、スコット、ステヴエンソン、ベーコン、クロムウエル、ワレース、ベルース、ヒユーム、ワット、ハーバート・スペンサー、ダーウヰンその他の人傑が雲の如く起つたのは恐らく偶然ではあるまい。天才は物質の貧富に關係あるものではない。遠い將來に於て英國が必ずしも國運の衰退によらず他の諸國の旺んなる發展に押されて產業國として世界に覇たることが出來なくなつても、新時代の希臘として列國の間に道德的優越權を握るかも知れぬと余は思ふのであると答へた。

彼は此新熟語を耳に挾んで、瞑想的に之を繰返した。

『道德的優越權。道德的優越權。之は氣に入つた。之は氣に入つた』

余は話相手としてグラッドストンほど愉快な人物を曾て見たことはなかつた。

余は再び彼をハワーデンに訪ふたが、彼に對する余の最後の訪問は彼が痛く病に

ると云ふ事實である。
ブレーン氏が余等と共に倫敦に居た時、余はグラッドストン氏に對してブレーン氏がグ氏の老體であの寒い日に帽子を手に持つて、園遊會に有象無象の有爵者等に敬禮して居るのを見て驚異の感に打れたと言つた話をした。教會と政治の一致統合問題も話頭に上つた。又英國諸島の擴大が不可能なる爲に英米民族の再合同を豫言する余の所謂る『前途を見よ』の問題も出た。英國の國教撤廢は止むを得ざる必然の趨勢であるとは余の持論であつて、其理由は色々あるが就中國教の存置は一時の變態であると信ずるからである。同民族中英國以外には國教を有つて居る國はない。他の英語國では凡て一切の宗教を保護するが最負はしない。
グラッドストン氏は一の質問を出した。
『我が國教は凡そ何年間の生命を與へれば善いと云ふのか』
余は期限を定めることとは余の出來る限りでない。國教を廢止する事に余よりもグ氏こそ經驗に富んで居られる筈だと答へたら、氏は點頭して微笑を漏らした。
余は比較的地域の廣い諸國から見ると、英國の人口が必ず減じて行く趨勢にあ

離の不可能なることを確認させるために必要であると余は說明した。其後モーレー氏に此意見を力說したら、氏は之を曾てパーネルに提案したけれども拒絕されたと答へた。グラッドストン氏に其意見を聞いたらこんな事を言つたかも知れない。『結構な考だ。之は我輩と我輩に協力して居る人々にこそ不必要な規定だが、結局英國の國運を定めるには必要な規定である。我輩は目下本問題に手を着ける事は出來ない。責任は貴君等にある』

或朝ハワーデンのグラッドストン邸を訪問すると夫人が言はれた。『主人の話ですが、此頃貴下とのお話は中々氣焰が擧るさうですね』

之は事實であつた。彼は眞正共和主義者の氣焰を吐くのを餘り聞いたことがなかつた爲に、余が何故世襲の位階などに全く無頓着で傍若無人の態度を示すのかを理解しなかつた。貴族に列せんが爲に祖先傳來の家名を平然として捨てる人々の氣分は余の了解に苦む所である。殊に可笑いのは新貴族が多分一萬磅かそこらを黨費に寄附して買入れた爵位を、之れ見よがしにして貴族仲間に這入つた時、世襲の舊貴族等がこれに挨拶をする場合に嘲笑を忍ぶに多大な努力を要す

彼は暫く沈默した後『郵便を差止める』と言つた余の言葉を繰返して、之が社會の大動脈を麻痺させる光景を想像して、二の句が繼げなくなり話頭を轉じてしまつた。

余ならば何うするかとの質問に對して、余は何時も米國には立法議會が多くあるけれども國會は一つしかないことを指摘した。英國も之に倣ふべきて、一の國會に地方議會卽ち愛蘭蘇克蘭威斯等各別に立法機關を設けるのだ。之を聯邦にして紐育州とかヴァジニア州とか云ふ自治團體に組織すべきてある。然し英國には我國の樣に州議會のみならず國會の可決した法律にすら裁判を下す大審院に類した最高裁決機關がない。卽ち米國では法廷の裁判が最終の權威て政治は寧ろ之に從ふべきものとしてあるから、英國も愛蘭政策に關しては國會を唯一の國家的最終權威たらしむべきてある。故に愛蘭地方議會の決議した事項は衆議院に會期中三ヶ月間討議權を與へて採否の自由あるものとし、否認しない限りは效力を生ずる事とする。地方議會の不當議決がない限り此規定は死法てあらうが、不當議決のある場合には此規定が有益な働をする。此條項は怯懦な人民に分

見を叩かれて所々の都會には公開演説を試み、統一的聯邦制度を説明し稱讃し、聯邦制度には最も自由なる各自の地方政府が相集つて、最も鞏固なる統一的政體を産出する妙趣があると論じた。余はチャムバアレン氏の需に應じて參考資料としてアンナ・エル・ダウス孃の『我等は如何なる政治の下にあるや』と題する書物を贈り、且つ本問題についてモーレー、グラッドストン其他多數の英人と議論を上下した。

余はモーレー氏に宛てゝ第一回提出の自治案は到底余の賛成することの出來ない理由があると態々書き送つた。其後グラッドストン氏に會つた時、氏は余の意見を聞いて之を遺憾とすると言はれたので旺んな論戰が開かれた。余は國會に愛蘭人を入れないことは實際上國家の分裂を意味するものとして反對した。南部諸州が其代表者を華盛頓に送ることを自ら停止しようとしても、米國政府が其れを許可すべきては無いと言つた。

『南部が代表者を送ることを拒んだら何うする考であるか』と彼は反問した。

『之を防ぐ爲に文明の凡ゆる利器を用ひた。先づ郵便を差止めた』と答へた。

チャムバーレンとモーレー

此事は余の希望通り運んだ。其時の英王の親書は前に掲げてある。スキボがモーレーに取つて轉地の目的に最も適當な場所と認められたことは、實に余等には仕合せであつた。彼等は夏になると毎年スキボに來て幾度も夫人と共に余等を來訪して余等の家族同様であつたからである。彼は余と同じ様に遊艇が大好きで、之が余等二人の爲に最良藥品であることも亦仕合せであつた。モーレーは『正直ジョン』である。而して此尊稱は永久に彼に附き纒ふに相違ない。彼には遁辭がない、虚飾がない、彼は如何なる問題に對しても如何なる突發事件に對しても、從容として迫らず巖の如く屹立して居るが、それて居て彼は滅多には表示しない。けれども偶々適當な機會に觸れると溢れ出る濃厚な情操を以て、常に前後左右に周到の注意を怠らなかつた。而して其雄大なる心情が折に觸れて一旦其威力を發揮した後には必ず例の沈默に歸るのである。

チャムバアレンとモーレーとは急進主義の急先鋒として莫逆の友であつたが、余は英國滯在中折々二人に會つて意見を交換した。愛蘭自治問題が擡頭した時に我米國聯邦制度に關し英國に於ては多大の興味が喚起された。余は旺んに意

己の幸福を共に分たずに居られない唯一の親友であつた。それでも神學問題に關しては二人の立場が非常に離れて居たが、アクトンとグラッドストンとは接近して居た。

余が蘇克蘭の諸大學に基金を寄附した翌年、モーレーは陛下の供奉大臣としてバルモラルに隨行を仰付けられたが、余の米國へ出帆前に是非余に面會したいと打電して來た。二人は會つた。彼は陛下が余の故國に於ける大學や其他のため寄附をした事を深く嘉賞あらせられて、何か余が希望する事があれば出來る限り何でもしてやりたいから内々確かめて見よとの聖旨があつたと傳へて呉れた。余は尋ねた『貴下は何と陛下に申上げたか』。モーレーは答へた『何も希望はありますまい』。余は言つた。

『貴君の言はるゝ通りだ。然し陛下が貴君などに親書を賜はる樣に、私の行つた事を滿足に思召すと云ふ意味の親書を賜はるならば、私は深く感謝して歷代の子孫が世に誇るべき珍寶として之を彼等に傳へたいと思ふ。其れ以外に希望することはない』

めた地位を余に話して、其文庫を買入れてはとの注意をされたので余は之に應じて其文庫を買入れ、グ氏の存命中之を使用してもよいとの條件で同氏に預けることにした。然に不幸にもグ氏は僅か數年にして世を去られたから、文庫は余の手中にあつた。余は之を最も善く利用し得る者はモーレーであらうと考へた。モーレーは將來必ず適當な團體にそれを引渡す樣にしてくれるに相違ないと思つた。そこて余は此文庫が余の所有であると云ふ話の端緒を聞くと彼は忽ち余を遮ぎつて言つた。

『ア、其話なら我輩は貴君が買入れた時から知つて居るよ。グラッドストンはアクトン卿が生涯愛讀したあの文庫を手に入れて嬉くて耐らなかつたので、其秘密を洩らさずには居られなかつたのさ』

モーレーと余とは互に親密てはあるが、此一事はどちらからも其胸中の秘密を打開けずに居たのだ。然に之を打開けた時モーレーが聊かも驚かなかつたのを見て余は寧ろ之を怪んだ程てある。此經緯はグラッドストンとモーレーとが如何に親密の間柄てあつたかを示す一の證左てある。即ち現世の事柄に關しては自

モーレーのルーズヴェルト評

員エリユー・ルート氏が訪ねて呉れたのでモーレーは彼と長時間會談した。ルート氏が退去した後モーレーは從來面會した米國政治家の中で、最も大なる滿足を與へた人はルート氏であると言つて、其會見が非常に愉快であつたことを余に語つた。蓋し米國の政治的諸問題に對して健全なる批判と廣汎なる知識とを兼ね有する點に於てルート氏の右に出る者はないからである。

モーレーは余等の許を辭して白堊館にルーズヴェルト大統領を訪ひ、此偉人と共に有益な數日を費した。其後モーレーのルーズヴェルト觀を叩いて見たらかうだ。

『サア、我輩は米國で二つの不思議を見た。ルーズヴェルトとナイアガラだ。』

之は奇拔で眞に迫つた描寫である。彼等は何れも咆哮し、急轉し、衝撃し、潑剌として休息の何たるを知らない好一對の世界的驚異であるが、兩者は共に其天職とする所を行ひつゝある。

モーレーはアクトン文庫の所有者たるに最も適當した人物であつたが、余が之を彼に贈呈した顛末はかうであつた。グラッドストン氏がアクトン卿の斯界に占

章や談話などが其儘事實となつた場合もあつたと言つた。卽ち言語の意味が直ちに實行されたものでトム・ペーンの『人の諸權利』などが其一例であると言つて之を指摘した。

此演說があつてからモーレーはスキボに來訪したので、余は彼と此事を談論した。余は彼がバーンスと其詩六行とに對して讚辭を述べたことを云々したら、彼は余に對してあの詩なら今此處に繰返して御聞かせする必要はないでせう。『勿論、其必要は御座いません私は其れを暗記して居ます』と言つた。

其後モントローズの公園に建てたバーンス像除幕式の演說に、余はモーレーが屹度引用したに違ひないと想像した例の詩を引出したら彼はそれに相違ないと言つた。不思議にも彼と余とはそれより數年前共にモントローズの自由市民權を受けたので、余等二人は同市の自由市民として正に同僚である。

余は遂にモーレーを勸誘して余等を米國に訪問する樣に決心させたが、一九〇四年に渡米して我が國の大部分を巡遊した。余等はモーレーをして我が國に於て彼と同格の人士に會合せしめる樣に斡旋した。ある日余の需に應じて上院議

『シーツ、彼の王樣が朕を何處かへ連れて行つてくれとお賴みになるかも知れないからさ。』と魔王に指しながら言つた。

音樂の嗜好者

モーレーは余と同じ樣に頗る音樂が好きて、スキボて朝のうちオルガンが鳴らされるのを非常に樂みにして居た。彼はアーサー・バルフォアの如くに聖樂に心を寄せた。余は記憶して居る。二人はクリスタル・パレースの聖樂演奏會に入場の切符を一所に手に入れた。兩者は共に穩健て哲學的てあつたが哲學者としては互に學派を同じうして、似たり寄つたりといふ風てあつた。然に最近に於けるバルフォアの著作は大分思索的方面に深入りして居る事を示して、モーレーの流儀とは全然趣を異にして居る。モーレーは石橋を叩いて渡るといふ風て、怪い徑路を辿つて『森の中に踏迷ふ』危險は一つもない。

モーレーの近來最も世人を騷がした聲明は倫敦に集まつた主筆記者大會に於ける演說てある。其趣意は現代の改善された政治的及社會的狀態を形成し、又維持するにバーンスの詩の數節が從來書かれた幾百萬の社說よりも大いに與つて力があつたと云ふのてあつたが、之を述べる前に彼は世間には往々僅か數語の文

會、平和に對する欲求等に應用したといふ事は一段と賢明な方法であつた。此等は赫々たる人生の偉業である。少しく誇張の嫌ひありと思はるゝ評言も事實に徵すれば容易に正鵠を得たものと認める事が出來る。卽ち彼れの如きは實に現代の偉人として卓越顯著なる地步を占めた實力の人と云ふべきである』（一九一九年紐育刊行子爵ジョン・モーレー著『思出の記』第二卷一一〇）

余は彼に何を見ても喜ばない悲觀主義者と、何を見ても悲まない樂觀主義者とが同時に天國に入ることを許されて天使等に歡迎された話をした。悲觀主義者は答へた。

『左樣、中々善い所だが、何だか此後光は私の頭にきつかり合はないな。』

樂觀主義者は竹篦返しに或人が煉獄へ落された話をした。惡魔が其人を捕へて河岸の土手上に引据ゑて自分は淸水を飮んで居る、非常の暑さだ。そこで古い友人が出て來て挨拶した。

『オイ甚公如何したんだい。駄目だなあ、お前とても見込がないよ。』

『シーッ、さうとは限らないよ。』と答へた。

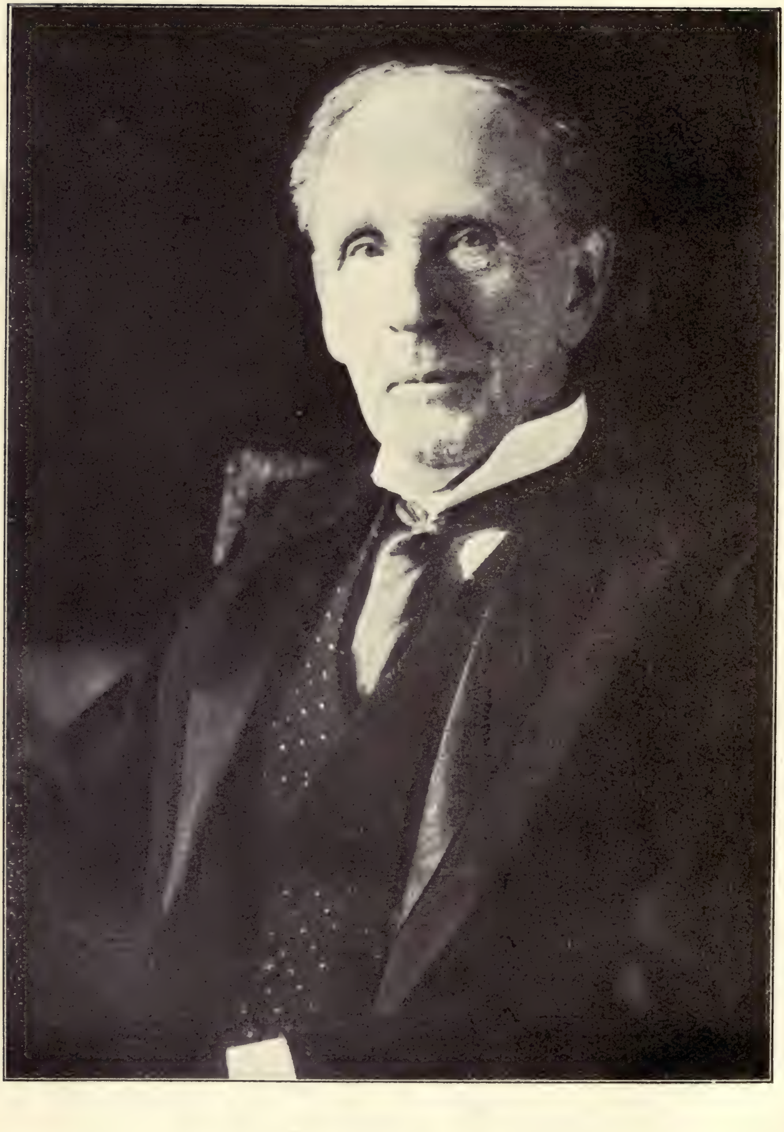
『如何してそんな事を云ふのか、底拔空へ連れて行かれる所ぢやないか。』

せに短い(時々は長い)感想錄を交換する。二人は似て居ない。全く異つて居る。反對が却て互の益になるから二人は親くなる。余は樂觀主義て凡ての鳥を驚にする方だが、彼は悲觀的て前途に橫はる眞實の危險を沈着にまた時には陰鬱に考察したり、又空漠とした事物を想像することもある。彼は『藪には必ず伏兵がある』と見る疑心暗鬼に捕はれる傾がある。余には世界が輝いて見える。地はさながら天と思はれる場合が屢々あつて、非常に愉快な人生觀を持つて運命の神に感謝して居る。モーレーは物に騷ぐ樣なことが滅多になくて、其判斷は常に愼思熟慮的て、其眼は常に太陽の黑點を見て居る。

(一)「カーネギー氏は其獨創の識見、旺盛の精神、剛健の品性を富の獲得に於ける熟練と先見とによりて示したと同じ程度、否其れ以上の程度に於てその分配に於ても明かに立證した。余はマシウ・アーノルドを介して二十年以上彼と交際して居る。彼の非凡な潑剌の精神は苦もなくアーノルドやハーバート・スペンサーや余自身、又後には多くの他の人々をも助けて物に熱中した時に最も聰明な人物にもあり勝ちな粗雜、又は輕卒な判斷に陷らせないで一段高い所に導いてくれた。重箱の隅を揚子でほじくる樣な才能のある人は成るべく之を利用して得意になり勝ちである。カーネギーが其博大な感情な世界の偉業、卽ち智識と其普及、發明、光明、社會的諸關係の改善、才能に對する均等の機

象を與へたことを認めた。談話の中間に時々廣い範圍に亘る問題も出た。グラッドストン氏は恐らく英國人中誰よりも多くの問題に興味を持つて居た人であると思ふ。余が最近蘇克蘭のアーミステッド氏方に寄寓中彼に會つた時なども、彼の精神は以前と同じやうに明快剛健で時事に對する興味は相變らず强烈であつた。其時彼が最も深い興味を起して余を質問攻にした話題は、米國の素敵に高い鋼鐵の建物であつた。余は書物や新聞でそれを讀んだが三階や四階などの工事が出來あがる前に、五階や六階などの工事が出來上るのはどう云ふ理屈だか一向判らないとのことで、余は滿足の出來る樣に說明してやつた。何事でも徹底的に研究する彼の精神は實に不撓不屈であつた。

モーレー氏(貴族ではあるが文士としては依然平民的のジョン・モーレー氏)は『フォートナイトリー・レヴュー』の主筆として早くから余の英國朋友團の一人であつたが、此雜誌は余の寄書を初めて載せた英國の定時刊行物である。(註――『英國に於ける米國式四頭馬車』のこと)。兩者間の友誼(一)が年と共に深くなつて遂には互に非常に親密な友人と自白する程度にまで進んだ。余等は何時も日曜日の午後氣任



ブラックパーンのモーレー子爵

ところが此人こそグラッドストン氏であつたことが直ぐに解つた。そこで余は彼に對して彼が同僚に何か囁いて居る聲を聞いたと言つた。尙ほ附言した。『なる程。』『本統の國王が名義上の國王の爲に備へられたイルミネーションを見に出掛けた譯ですね。』

彼は答へた『まあ善い加減にして早く行つて御休みなさい。若い者が年寄りにからかふもんぢやありませんよ。』

彼はその頭と顔とを包んだ引廻しを取るまいとして居たので余等は二三分間話をして分れた。もう夜半過ぎて彼は八十歳の老人だが、まるで少年の樣になつて先づ夫人を安全に家へ送届けてから、又もや祝典を見る爲に出て來られたのであつた。

晩餐の席上でグラッドストン氏とブレーン氏との間に議會慣例に關する英米の相違點が話頭に上つた。ブレーン氏は米國下院の議長をしたことがあるので、其晩グラッドストン氏は同院の慣例に關して熱心に質問を連發した。余は米國議會の『先決問題』や無用の討論を制限する略則のある話が、グラッドストン氏に深い印

グラッドストン氏は來る時にハイド・パークを通り拔けて裏道を廻り、同氏夫妻は難なくウォルヴァートン卿邸に辿り着いたと言はれた。グ氏の邸は當時同方面のカールトン・テレースにあつたが、グ氏夫妻は同じ道順を選んですぐに歸邸する積りだとのことであつた。ブレーン氏と余とは町々の賑ひを見物して群衆の中を足に任せて歩いて歸らうぢやないかと言ふので、ぶら〳〵出掛けたが、幸に首尾よく潮の樣に動く人中を靜かに辿つてレフォーム倶樂部の向ふまで通り越すと、余は余の右側に當つて倶樂部の建物近く覺えのある人聲を一二言聞いた。余はブレーン氏に『あれはグラッドストン氏の聲だ』と言つたが、彼はそれを打消して『そんな筈はない。今しがた家へ歸ると言つて別れたぢやないか』と言つた。『さうかも知れぬが兎に角我輩は顏よりも聲がよく判る。あれはグラッドストンに違ひない』と余は言張つた。到頭余はブレーン氏を說伏せて二三歩引返らせた。余等は其建物の側面にぴつたりついて跡戻りした。すると顏を包んだ男を見付けて余はそれに耳打した。

『尊貴が眞夜中に外出されてどうなさるか知らん。』

グラッドストンとブレーン

ならぬと云ふことを誰か拒み得るてあらうか。一見殆ど瀆神的思想の如くに見えるが、グラッドストン氏に取つては其れが全く正反對てあつた。即ちグラッドストン氏には屢々人をして神の直接代理者として神の事業を行ふ驚天動地の偉勳を奏せしめたと信ずる所の宗教的信念があつたのてある。

一八八七年六月ヴイクトリヤ女皇即位五十年祝典を擧行されたる夜、余はグラッドストン夫妻に會ふためピカデリーのウォルヴァートン卿邸て晩餐會に列る事になつたが、其時初めてブレーン氏に紹介される機會を得た。余等は十分の時間があるうちにメトロポール・ホテルから馬車て出掛けたが、群衆が餘り雜沓するため余等は止むなく聖ジエームス街て馬車から降りた。歩道に達するとブレーン氏は後からついて來た。余は一人の警官を發見して余の同行者は誰、行先は何處と一々説明して、どうにかして行ける樣にしてはくれまいかと頼んだ。彼は群衆の密集して居る中を職務上の權威を悉く發揮しつゝ堂々と進んで道を開けてくれたから、余等は其後に付いて苦もなく進行したが、ウォルヴァートン卿邸につかないうちに九時になつた。而して散會したのは十一時後てあつた。

たいのである。
毎日曜日の禮拜に聖書の日課を衆人環視の中に讀む『日課朗讀者』として自ら任じた此老政治家は、動もすれば何等か政治上の野心でもあるかの如く疑はれるが、余も實は翁の人となりを十分に知るまでは折々此慧眼な老紳士が少くとも斯く一週間に一度づゝ公衆の前に立つことは、無代價で投票を手に入れる結果になる位のことを感じて居たかも知れぬと思はずには居られなかつた。然し其眞の品性を研究して初めて斯る疑念は雲散霧消した。彼は人として飽まで敬虔であり且つ眞率であつた。然り。彼が其日記中に(モーレー著グラッドストン傳に據る)下院の豫算討論中數時間に亘る雄辯で大喝采を博して居る際に、彼は『天の神の力に支へられたことを自覺した』と告白して居る。無信仰の人々は宇宙の創造者が宇宙の一小部分たる地球のその又一小部分たる英國のために編算した、グラッドストン氏の豫算案に關係するなどと想像する人間の大膽さ加減を無稽の極として一概に却けるかも知れぬが、グラッドストン氏の如く豐富な信仰を持つて居る人物に取つては、不可知力が自己を助けて居るとの信念が眞に一つの支持力であらねば

ルサレムの基督信者にたけるが如き關係がダムフアリンと余との間に存するのである』(同書二百八十頁)

そこて余は尋ねた。

『貴下は一體どうして此本を手に入れましたか。私が之を書いた時は貴下と交際して居ませんでした。又私から貴下に贈つた覺えもありません。』

彼は答へた。

『さうだよ。其頃貴下と交際しては居なかつたのだ。しかし誰だつたか、多分ロードズベリーと思ふが、此書物の話をしたので我輩が取寄せて讀んだのだ。面白かつたよ。そのダムフアリンを讃美した一節には非常に感激して今でも記憶して居る。どうしても忘れることは出來ないのだ。』

此事のあつたのは『米國式四頭馬車』を著はしてから八年後てあるが、グラッドストン氏の驚くべき記憶力を立證する一例を又一つ加へた譯てある。余に取つては聊か自惚れかも知れぬが、グラッドストン氏が拙著を賞揚して呉れたことは同氏の記憶力にも劣らない驚くべき判斷力を示すものであると言つて同氏に感謝し

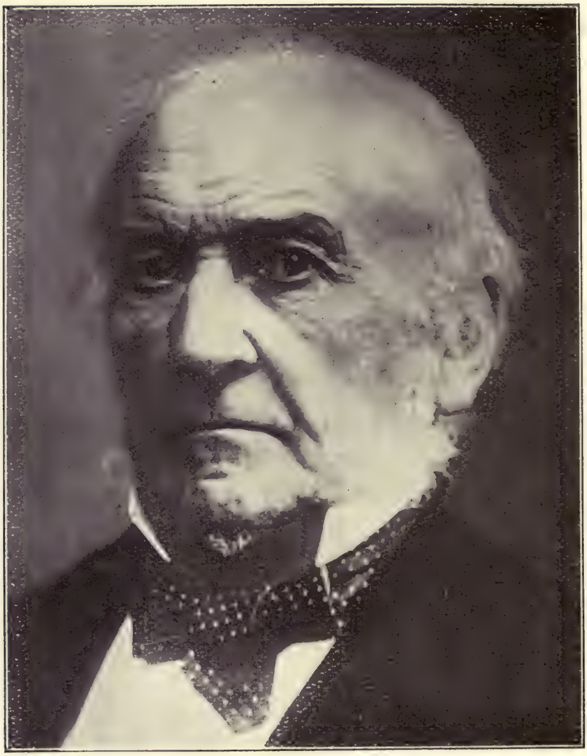
彼は答へた『さうか、左の方へ手を延ばすと三四冊目にダムフアリンの人が書いた本がもう一冊あるよ。』

余は手を延ばすと果して有つた。　それは拙者『英國に於ける米國式四頭馬車』であつたが、それを見付けないうちに梯子の天邊から例の風琴を鳴らす樣な美音で翁の聲が聞えた。

『メッカの回敎徒に於けるが如く、ベナレスの印度人に於けるが如く、エルサレムの基督信者に於けるが如き關係がダムフアリンと余との間に[一]存するのである。』

此聲が余の耳に達すると數分時間のうちに、之は現に余等が南の方からダムフアリンに近付いて其なつかしい光景が初めて余の眼界に這入つた時、自然に余の眞情を披瀝した言葉てあることに氣がついた。

(一) 此一項の全文は次の如くである「渡船「ヒーリス」からほの見ゆるダムフアリンの美しさよ。巍々として聳え立つ古寺院の壯觀は全市を神聖化して、いと卑賤なる住民にも美觀と威嚴とを授くるかの如く見ゆ。快晴の日に公園から眺め得らるゝ此光景の如く多趣味にして快感を與ふるものは廣い蘇國の全土に求めても、余の知れる限り之に比すべき者はない。ベナレスの印度人に於けるが如く、メッカの回敎徒に於けるが如く、エ



ウヰリアム・イー・グラッドストン

なものが出來るてあらう。議員に十分の歳費を給する制度が成立したら、多分此等市會議員のうちからウエストミンスターに名を留めるに足る人物が多く現はれて結局國家の品位を高めることにならう。

第二十四章　グラッドストンとモーレー

グラッドストン氏は余等夫妻が一八九二年にハワーデンの邸に招待された時、拙著『英國に於ける米國式四頭馬車』に非常の讃辭を與へられた。彼は或日其新圖書室に午前の時間を費してはどうかと言はれたが、其室の書物は何人にも手を觸れさせずに一切自身が整理するので、整理しながら余と談話をしたいとの事であつた。彼が圖書室用の梯子の天邊て重たげな書物を始末して居た時、余はあちこち書架のあたりを歩きながら無比の一卷を發見して思はず大聲に彼を呼んだ。

『グラッドストンさん、爰に私の父の友人が書いた「ダムファアリンの名士」と云ふ書物があります。私は子供の時に此名士と云ふ人達のうちの幾人かを知つて居りますよ。』

い。コーク、ウォーターフォード・リメリック等で受けた歡待は實に無類であつた。歡迎の旗にゲール語でスキボの借地人等が用ひたと同一の『十萬の歡迎』と書いてあつたには一驚を喫した。

自由市民權授與式の參列ほど余に英國の地方生活と愛國心とを洞見する好機會を與へたものはない、それでなければ、唯儀式に列るだけでは煩はしくて堪へられなかつたてあらう。市の領袖等に立交つて居ると全く寛いだ氣分になつて、沿道の旗や群衆や窓から首を出して居る人々などの混雜も、歡迎される其日の義務の一部分として何でもなく感ぜられ、地方官の演說などは何時も余が研究の好資料として人生の新方面を提供してくれた。市長令夫人等は其自負心と光榮とて滿艦飾の大歡喜を示して居た。

余が各都市觀察の結論として、大英聯合王國は邊陬の國に比すれば民衆の公選による都市の主要人物の手に立派な政治上の成績を示す點に於て、嶄然一頭地を拔いて居ると言ひ得る。又市政と云ふ重要機關は其心核まで全然純潔てある。國會すら市會から代表者を出して其全部を組織しても、格別能率を損はずに立派

英國の各市會には廉潔にして公共心に富み其郷土に奉仕する忠誠の精神凜乎たる獨立自尊的最良の人物が居る。合衆國では此方面に進歩の形勢があるけれども、英國に較べては遙かに後れて居る。然し米國でも人口の稠密になるに隨つて人々が永住の氣分に成りつゝある。我々米人は各自に其生れた所を極力改善して、死ぬるまでには子孫のために面目一新の實を擧げることを心掛ける樣な地方的愛鄉心を發達さすべきである。蘇克蘭の市長や町長などが上流社會の地方的大地主に限ると思はれた時代が過ぎてからまだ僅かに一代である。英國人が『貴族を愛する』ことは今でも事實であるが此愛は迅速に消滅しつゝある。

イーストボーン、キングストン、ソールズベリ、イルケストン其他多くの古代的都市に於て余は市長が身を平民の間に起して多くは手て働いた人てあることを發見した。市會議員の大多數も此型の人物てある。彼等は無報酬て其時間を惜氣なく公共のために捧げて居る。蘇克蘭や英蘭などて幾多都市の市長や市會の牛耳を握つて居る名士等と交際を結んだことは、余に取つて愉快な思出の源泉となつたが、愛蘭とても余の自由市民權旅行は同樣に愉快てあつたことを余は忘れな

に參與する特權を得んと努力する。最良の市民等には之が賞賛に値する立身の方法てある。それ以上の志を抱く者は實に少數てある。國會議員になると云ふ事は實際資産家でなければ容易に望まれない。如何となれば國會議員の資格は何等の報酬も受けずに倫敦に居住する事が出來るといふ、必須の條件を充し得る者に限られてあるからてある。立法部に參與する人々に相當の報酬を拂ふと云ふ世界一般の慣習に倣うて、英國も遠からず議員に歲費を給することになるてあらうから、此狀態は早晚一變するてあらう。(一九〇八年のことだが其後此事が實現して今では四百磅の歲費を給して居る)。

それから又英國は他の國々の樣に國會の議事を日中に行ふことになると思ふ。右の樣を議員等が終日自分の專門業務に散々頭腦を使ひ盡して、夕飯を濟してから國事を議すると云ふのでは仕樣がない。日中頭が新鮮で仕事をする氣分が旺盛な間にするのが本統なのだ。ホイスト(骨牌遊戲)の名手カヴエンディッシに二回廻つた時、三番目の相手がネーヴを出したら如何して其人を胡麻化して勝てるかと尋ねたら、一寸思案した後『勝てるよ、晚酌をやつた後なら』と答へたさうだ。

良案があつて、他の諸問題は之がために壓倒される傾があつた。各都市は其れ自ら一小世界をなして居る。市會は小さい內閣で市長は內閣總理大臣、內政の諸問題で市民は夢中になつて居る。外交關係もないことはない。近隣の市町村との間に交渉問題がある。重要な意義のある水道とか瓦斯とか電氣とかの合辨計畫があつたり、同盟とか分離とかに或は贊成し或は反對する委員會の討論などがある。

（一）カーネギー氏は英蘭及愛蘭の各都市から自由市民權を與へられた數が五十四を下らなかつたが、之は自由市民權史の最大記錄であつて、グラッドストン氏が其次で十七を算した。

市政ほど新舊兩世界を對照して相異點の著しいものはない。舊世界には家族が其生れた所に累代定住して鄕土なる都會と其周圍とに益々忠節を盡して奉仕する傾がある。父が市長を勤めれば子を奬勵して之に就任させる樣な意氣を皷吹しようとする。かの無限の價値を有する遺產としての市民的自負心は斯くの如くにして創造され、其鄕土に小說的愛着心を持つ樣にならなければ止まない。各市民はその當日當代に於て何等かの奉仕を市の爲にしたいとの熱心から市政

に過ぎないてまだ理事長としての經驗が無い時のことであるが余が、首相に右の話をした後、或日ジョン・モーレーは余にこんな事を言つた。

『我輩は從來高い地位を占むる公人としてエルヂンを頗る疑問付の人物と思つて居たが、今は彼を最適任者中の一人と認める。貴いものは言葉ではない、行てある。口舌ではない判斷力である』

虚飾なき價値と智慧との權化、之が卽ち今日に見るブルース王の後裔で(一)ある。

一旦自由市民權を授かり始めたら果てしが無いかと思はれる程此種の名譽が澤山授つた。一九〇六年倫敦に滯在中六日間に六ヶ所から次の週間には二ヶ所から自由市民權を與へられ、每朝汽車で出張しては夕方倫敦に歸ると云ふ有樣であつた。同じ樣な式が續いては單調で面白くはなからうと思はれるかも知れぬが、市に依つて一々狀態が異るので決して單調ではなかつた。市長町長などには隨分出色の人物もあり、また市政に關係ある有力な市民にも面會して色々な話を聞いて見ると、各公共團體にはそれ〲特色があり特別の懸案があり成敗があることが判つて非常に面白い。大抵各都市には何か一つ人民の大いに熱望する改

である。同家の墳墓はダムフアリン寺院にある。

エルヂン侯はブルース王の後裔である。同家の墳墓はダムフアリン寺院にあつて、侯の偉大なる祖先ブルース王は寺院鐘樓の下に埋葬されて居る。陸軍卿スタントンがグランド將軍を評して、どうしても司令官らしい風采を認められない一行中の一人と言つたことは前に述べたが、エルヂン侯も風采の揚らない人で、この點てはよくグランド將軍に似て居る。蘇克蘭諸大學改革の評議があつた時に侯は其委員長の次席であつた。保守黨政府が南阿戰爭委員會を組織した時は、自由黨員たる侯が委員長に任ぜられた。蘇克蘭の統一自由敎會問題に關して上院に大波瀾が起つた時はエルヂン卿が委員長として事件の落着を托された。議會が卿の報告を骨子として解決案を作成した時に、卿は又もや其實行委員長に指定された。蘇克蘭諸大學基金財團理事選定の必要があつた時に余は首相バルフオア氏に、エルヂン卿がダムフアリンの名族として理事長の任に就くことを勸めたら承諾を得られるだらうと注意した。首相は全英國に之ほどの適材はあるまいと答へられた。果してさうてあつた。エルヂン卿がダムフアリン財團の一理事

『位階は金貨の印影のみ
　人間こそ眞の黄金なれ』
此感情は旣に英領植民地全部に瀰漫して居る。時世後れの母國は老いたる牝雞が鶩の卵を孵へして雛が威勢よく水を蹴立てゝ泳ぐのを見て、如何にも心配げに波打際に悲鳴を揚げつゝ狼狽して居るが、老牝雞とても何れ其うちには泳ぐことを學ぶてあらう。

一九〇五年の秋、余は妻と共にカーネギー・ダムフアリン財團理事長ジョン・ロッス博士に對するダムフアリン市民權贈呈式に臨席した。博士は余等夫妻の親友で町の爲に其の福祉を計る最も熱心なる殊勳者てある。町長マクベス氏は其演説中に此榮譽が極めて稀に與へられること、又目下生存して居る自由市民は唯三人、卽ち町內選出代議士現首相エッチ・キャムベル・バンナーマン、前印度總督現植民大臣ダムフアリンの侯爵エルジンと三番目の余とてある事に言及した。三人を斯く幷べられると官歷の上からいへば假令へ余が鯱立しても到底他の二人には及ばないのてあるが、兎に角其內の一人に數へられたことは余の非常に光榮とする所

統計其他の印刷物は彼に深い興味を起させた。言ふまでもなく余の故郷たるダムファアリン選出代議士(キャムベル・バンナーマン)が首相の高位に昇つたことは余に純眞の喜びを與へたが、特に町會からの感謝に答へて彼が次の言葉を用ひたことは余の喜びを大ならしめた。

『余は余の當選が選擧委員長ベーリー・モリソン氏の畫策宜きを得たる結果として感謝する』

ダムファアリン急進黨の領袖ベーリーは實に余の叔父てある。其頃余等一族は急進主義てあつたが、今ても、カーネギー・モリソン兩家共同主義の遵奉者て、北米大共和國の熱烈なる崇拜者てある。卽ち余等一族の心事はワシントンと其同僚等を『各人の王權を知り且敢て之を天下に宣傳した人々』として頌讚した某名士の如きもので、此宣傳は確かに骨折り甲斐のある運動てある。世の中に最も確實と信ぜらるゝ事は、英語民族が革命によらず進化によりて秩序ある合法的發達のうちに市民の資格に關する次の如き格言の眞理なることを事實によりて立證せんとして居るてふことてある。

グラッドストンの後繼者

飽まで『正直ジョン』の特色を保ち、勳功あつて特授された貴族の地位や勳章などは聊も其眞價を隱蔽しなかつた。ローアバーン侯爵や、大法官の高位に昇つた衆議院議員『ボツブ』レードや、其後任大法官ハルデーン卿や、大宰相アスクイスや、ロイド・ジョージ等は皆モーレー型の人物であつて、近代に於ける我共和國の大統領すら彼等以上に平民主義であり、人民の良友であるとは云へない程である。

世界の第一市民が世を去つた時誰が此人、卽ちグラッドストンの後を繼ぐかゞ問題であつた。誰が後任者になり得るか。內閣員のうちでモーレーより年の若い人等は一致してその決定を彼に一任した。ハーコートかキャムベル・バンナーマンか。前者には唯だ一つの妨げとなる物があつて、それが彼の就任を絕對に不可能ならしめた。卽ち癇癪を抑へる事が出來ないと云ふ缺點である。之が爲に不幸にも彼は憤激度に過ぎて全く統御の資格がなかつたが、一方の冷靜、沈着、明快な判斷力を備へたキャムベル・バンナーマンは之が爲に唯一の適任者と認められた。

余はハーコートに熱烈な親みを感じたが、彼は又モットレーの娘の良人であつた丈に我共和國の熱心なる崇拜者であつた。余が注意して彼に從つて居た米國の

の地位に漕付けることは疑ふ餘地がない。』余の勸說に興味を起された樣にも見えたが、余は驚いた、彼は極めて靜かに答へた。

『しかし衆議院は貴族として我輩を受け得ないだらう』

『それは私の望む所てす。私が貴下の地位に居るならば一旦言出して拒絕されたら其次の補缺選擧に又打つて出て飽くまで鬪ひます。世襲の特權を放棄した者は市民權を獲得する地位に上つた者て、如何なる地位にも選擧さるべき權利があると主張なさい。それはクロムウエルの遣方てす。平民主義は先例を破る人又は先例を作る人を崇拜します』

二人の話は其れきりで此問題を打切つた。後に余は此事をモーレー氏に話したが、其時の彼の評言を余は決して忘れない『君、クロムウエルはバークレー・スクエアの三十八番に住んて居ないよ』と徐ろに嚴かに而も明かに彼は答へた。ローズベリは立派な人物だが、惜い哉貴族に生れた事が彼の活動を束縛した。之に反してモーレーは其父が窮乏のうちに辛うじて其子を大學に入れて置いた程の眇たる外科醫てあつて、所謂身を卒伍の間に起した眞の人傑てあつた。彼は

[illegible]を綴り違へて居るものであります。Karnaghie から Carnagay まで種々の違つたものが來ます』と言つた。

けれども彼は眞面目であつた。こんな小さな事が大いに彼を惱ました。活動を本色とする人は此等の小事を一笑に付して却て面白く感ずる習慣を作るか、さもなければ自分自ら『小人』になるの外はない。愛嬌者ではあるが、羞んで、感傷的で、氣まぐれて、遠慮勝の性質は衆議院の平民的社會に數年揉まれたら多少一變したてあらう。

彼が自由黨として上院を驚かし、人の耳目を聳動し始めた時に、余はそろ〳〵余自身の平民主義を彼に浴びせることを試みた。

『議會のために奮起なさいませ。各市民の均等に有つて居ない樣な特權を受ける事は侮辱であると聲明して、貴下の世襲爵位をお捨てなさい。さうすれば貴下は國民の眞の指導者になれます、貴族で居ては到底なれません。貴下は若くて、而も才氣潑剌、人望を得る技倆を有つて居られる上に天賦の雄辯人を魅する才能を備へて居られるのである。身を躍らして急流に投じさへすれば大宰相

には當代一流の雄辯家と云ふべく、其輕妙な措辭と優美な構想とには拔群の妙技を備へて居た。（此數行を書いた後彼は恐らく英語民族中第一の頌德演說家になつた。彼は切磋琢磨の工夫を積んで此高地位を占めたのである。其名譽は悉く彼に歸せざるを得ない）

或朝豫ての約束で余は卿を訪問した。挨拶が終ると卿は一枚の封筒を手に取られたが、それは余が這入た時に見た卿の机の上に丁寧に置いてあつたもので、聽てそれを余に渡して言はれた、

『貴下の書記を解雇して貰ひたいと思ふ』余は答へた、

『閣下それは一大問題です。彼は私に缺くべからざる者で而も蘇克蘭人です。何うしたと云ふてのすか』

『之は貴下の自筆ではない。書記の手だ。ローズベリのベリーを綴る時に r を二つ入れる人間は一體どんな者と貴下は思ふか』

余はそんな事を氣にしたら人生は到底堪へられまいといひながら、

『私は本國に居る時は毎日澤山手紙を貰ひますが、其うち二三割は確かに私の名

實際主權者の招待が遙かに命令的の重味を持つて居るとの理由で、一方を斷はらうかと頻りに心を動かしたが、結局前約を守つて、會ひたいと切に望んだ人に會ふ機會を逸した。幸に此特權は其後ハワーデンの邸にグラッドストン氏を數度訪問した際享受することとなつた。

ローズベリ卿は余が諸所に寄附した圖書館中、最初のものとして創立したダムファリン圖書館の開館式を司られたが、卿は又最近(一九〇五年)余が最後の寄附圖書館即ちストーノウェーに建てた圖書館の開館式をも司つてくれた。卿が最近紐育訪問の際余はリヴァーサイド・ドライヴに沿うて卿を馬車で案内したが、卿は世界に之ほどの美くしい風景に富んだ都會は一もないと讃嘆された。卿は才氣潑剌の人物であるが、思想が沈鬱に傾いて居たため其所論は兎角病的であつた。努力せずに金ピカの上院にスル〱と這入る身分でなく、奮鬪して下院に這入る境遇に生れたら彼は激浪怒濤の生活に剛健な氣骨を養ふことが出來たであらう。然るに上流に人と成つたため兎角感傷的で領袖政治家に必要なる不撓不屈の粘着力を缺いて居た。彼は愛嬌に富んだ演說家で特に他人の長所を稱揚する

寄附をした者は誰でも其機會を與へてくれた親切な運命の神に對して感謝の念を懷かない者は一人もなかつたと。

第二十三章　英國政界の領袖

倫敦に滯在中、其頃グラッドストン内閣の一員として前途有爲の政治家たるローズベリ卿と云ふ人があつた。余と同鄕の緣故から、卿の好意によつて世界の第一市民たるグラッドストン氏に會見の爲め晩餐に招待せらるゝこととなつた。之は確か一八八五年であつたと思ふ。拙著『平民主義の勝利』(一八八六年倫敦及紐育刊行平民主義の勝利一名共和國五十年間の進步)が出たのは一八八六年で、余は此機會に此著作の材料として集めた驚くべき數字をグラッドストン氏に示したことを記憶して居る。

其後グラッドストン氏からも晩餐の案内を初めて受けたが、此時ほど余が社交上大なる克己の精神を發揮して自ら正當と信じた事を實行した例しはなかつた。其時他に晩餐に行く前約があつて、虛位を擁して居る貴人の招待よりも大英國の

あると認められた人の外は寄附を許されなかつた。局外からの寄附を集めさへすれば二倍三倍の金額は立どころに出來たてあらう。余は其少數の精選團に加はつて太西洋の此方面、卽ち米國に於て本件に多少の注意を用ふることを許されたのを非常に喜んだ。余は勿論此事をホームス博士に話す考はなかつた。それは博士が選ばれた少數中の一人てないからと云ふ譯てはないが、元來文士や專門家などは稀有な例外を除いては自家の經濟て手一杯になつて居るから、他人のために寄附を請求さるべき者てはないからてある。然に或朝博士から手紙を受けた。讀んて見ると書中にさうした運動の樣なものがあると云ふことを密かに聞いた。又それに關して貴下のことを云々する者がある、私が其光榮ある名簿に自分の名を載せるだけの價値あるものと認められゝば大いに感謝する。此運動のあることを聞いた以上私は貴下に手紙を書かずに居られない、どうぞ答が聞きたいと云ふ一節があつた。ホームス博士が參加の價値あることは言はずして明かてあつた。

斯る記念は實に何人も參加したいと思ふ種類の記念てある。余は敢て言ふ。

ツバーグの一條を思出して哀悼の感に打たれた。此人の死は余等に取つて大なる損失であつた。タム・サムソンの墓碑の銘としてバーンスの選んだ次の數行は余の知れる限り何人よりもアーノルドに最も適切であると信ずる。

『タム・サムソンの遺骸はこゝに横はる
汝等僞善者よ彼に近づくを止めよ
眞の義人が天に位を占むる時
汝等もがくとも如何で彼處に登り得ん』

之について思出した愛らしい人物はボストンのオリヴアー・ウエンデル・ホームス博士で、何人にも一樣に智識を惠んだ眞の博士として八十歲の長壽を保ち、病氣をしたことがなかつたが、死ぬる前に少しく病んだと見えたのは年の爲であつた。同博士は終りまで少年の元氣を失はなかつた。マシウ・アーノルドが死んだ時數人の朋友は何か適當の記念になる事をしたいとの熱心止みがたく、各自の間に必要な金額を集めたが、公衆に訴ふることなどは誰も考へて居なかつた。斯る性質の資金中に寄附をすることは一種の特權だと感ぜられて居たので、特に其權利が

『彼は聰明な注意を以て讀むべき部分を選ぶ』

我々は讀むべき部分を精選して其撰んだ部分のみを用ふべきである。此點に於て、又其他多くの點に於て余が其知遇を感謝し又之を友人と呼ぶことの出來る好意を喜んで居るアーノルド氏は、時代に一歩進んだ眞の敎師であつて『將來と其悠久な事物』の世界に於ける最も偉大なる詩聖であることを立證した。

余はアレゲニー山中の別莊からアーノルドを煤烟に黑くなつて居るピッツバーグへ案内した。エドガー・トムソン製鋼工場から鐵道停車場まで鐵道横斷の橋が二つあつて其二番目のは稍急勾配である。二人が其約四分の三登つた時、彼は突然息を入れる爲に立止まつた。手摺に身を寄せて胸に手を措きながら彼は余に言つた。

『アヽ、父も之でやられたんだが我輩も何日かやられるよ。』

余は彼の心臓が弱いことを其時に知らなかつたが、この一言は決して忘れなかつた。其後間もなく英國で彼が障碍物を避けようとして力を出した後不意に死んだとの悲報に接した時、偕此親友が自分の悲むべき運命を豫言したのかと、此ピッ

アーノルド氏の嗜好に投じた舊約聖書記者は確かにイザヤであつた。彼はイザヤを詩人と稱して居たが、少くとも此大詩人の著作から頻々引用して居る所を見ると、斯くの如き嗜好があると云ふのは自然の結論であらう。余は世界を周遊して他の諸宗教の聖典が必然に古代の傳說の周圍に堆積した雜物を除去られて、其精髓のみ保存されてあることを發見した。アーノルド氏は基督教の聖書も同樣に取扱はるべきものだと言はれたと余は記憶する。世界の人心に無上の快感を與へる孔子其他の聖人の言說を精選した金玉の文字が『金言集』としてある。アーノルド氏の如き聰明な門人は、過去に於ける無智時代に不知不識先哲の言論に追加された異說を容赦なく切捨てるのである。

此事を考へれば考へるほど基督教徒たる者は東邦の模範に倣うて、小麥を糲殼から吹分ける必要があるとの說が有力になつて來る。糲殼とは云ふが實は更に一層惡い有害な、有毒な廢物が混入して居る場合もある。バーンスは『コッタース・サターデー・ナイト』に晚禱の際大きな聖書を開いて賢い準備をする君子の光景を歌ふた

『私の最も驚きましたのは殷賑の商業でもなければ、著しい物質的發展でもなければ、宏壯な邸宅でもありません、文化(カルチユーア)と優美との程度を發見したことてあります。』聲に應じて蠻カラの挨拶が直ぐに來た『違ひない、此處の宗派問題(カルト・アウト・ヒーア)ぢや今丁度眼の廻るほど騷いて居るんてす。』(カルチウアとカルト・アウト・ヒーアとを對照して花形婦人の誤れる觀察を揶揄せるもの)

市俄古は凡俗主義の策源地としてアーノルド氏に好ましからぬ印象を與へたが、所謂『文化と優美』とが幾分かあることを認めて聊か驚き又滿足したらしい。彼は市俄古を去る前に市俄古には一體何が最も興味のあるものか知りたいと言ふから、余は笑ひながら多分世界の一大偉觀として第一着に見物しても善い所は屠獸場てあらう。完全な新式機械て豚を片端へ追込むと、其悲鳴がまだ耳に殘つて居るうちに早くもハムになつて他の端から出て來ると說明した。彼は暫く沈默して居たが聽て思案顏に反問した『居獸場などへ何しに行くんてすか。豚の悲鳴を聞いて何うするんてすか。』余は返答に窮した。此場はそれて濟んだ。

アーノルドとショウ

アーノルド氏は後年何時の機會にも必ず『あの獅子面した我等の友人ショウ」君は』と尋ねることを忘れなかつた。

記念すべき晩餐會の後或朝ウィンゾル・ホテルでジョッシに會つて余は彼と一所に大廣間に腰掛けて居ると、彼は手帳を取出しながらこんなことを言つた。『アーノルドは何處に居るの。彼は之を見たら何と言ふかしら。センチュリ誌が一週百弗を我輩に提供して何でも思出した詰らん事を書いて貰ひたいと言つて來て、さうする約束になつて居るから、何か書いて遣らうと思つて居る。爰にアンクル・ゼキエルから取つたものがあるから先づ之を週間豫算たる百弗の原稿に充てよう。「勿論評者は作者より大人物である。他人の誤謬を指摘し得る人は其誤謬を爲した人よりも遙かに見上げた人物であるべき筈である」』

余はアーノルド氏に市俄古物語、と言ふよりは寧ろ市俄古についての話を一つしたことがある。ボストンの某社交界花形婦人が之から結婚しようと云ふ市俄古の同窓の學友を訪問して旺んに歡待された。或晩知名の市民が市俄古では何が一番彼女に快感を與へたかと尋ねたら彼女は優にやさしく答へた。

議の席を去つたと説明し、それから言葉をついて『私は其翌朝會議に出席して彼等に其朝ジョッシ・ビリングスの暦を見ると其日の敎訓として「牛を捕へるなら角でなく尾を捕へよ、その方が力も這入るし放さうと思へば何時でも放せる」とあつた。それを聞くと皆がドット笑つて結局其方が賢いと悟つたんです。私共は貴君の忠告を容れて問題を片付け仲よく分れました。或人の動議で五千弗をお禮としてジョッシに贈ると決議しました。私が東部へ來ると云ふので會計に選ばれて其金をお渡しすると約束したんてす。サア御取りください。』

こんな話で興は盡きなかつたが、次の樣なアーノルド氏の一言で其晩は局を結んだ。

『それてはショウさん、貴君が英國へ講演にお出になるなら私は喜んでお迎へする、又初回の聽衆に貴君を紹介する。貴族だとか云ふ馬鹿者が貴君を紹介する方が貴君の利益かも知れぬ。併し私は是非ともそれをしたいと思ふのです。』

快活と光明との權化たるマシウ・アーノルドが諧謔にかけては世界の第一人者たるジョッシ・ビリングスを倫敦一流の聽衆に紹介する光景は想像に餘りある。

い問題が鯨に判る譯はないが、現代人は更に一歩を進めてヨナは海中で何をして居た。鯨の――鯨の社會で何をと詰問する』(米國人は『腹』と云ふことを人の前て言ふことを嫌ふ。『腹』と云ふ聖書の語を『社會』にもぢつた所がジョッシの新案てある。)

ショウ氏は或日ブロードウエー(紐育の)を歩いて居ると、てつきり西部人と思はれた男が言葉をかけた。

『モシ、モシ貴君はジョッシ・ビリングスと仰る方てせう。』

『サア、さう言はれたこともありますよ。』

『私は爰に現に私の財布の中に貴君に上げる金を五千弗持つて居るんてすが。』

『丁度デルモニコ(料理屋の名)の所へ來たんてすから、一寸一杯やりながらお話を承りませう。』

席につくと客人は話をした。彼は加州の某金山を他の人々と共有して居たが、其所有權に關して紛議が起きて所有者會議は爭論のうちに解散することになつた。客人は牛を角て捕へて(急所を捕へて)飽まで法廷て曲直を爭ふと威嚇して會

てくれない。世の中には何人も備へて居ない二つのものがある、双見てせう」滿堂笑ひ崩れる。』

アーノルド氏も腹をかゝへて笑つた。

『貴君は始終新らしい話を工夫するのですか』との質問に答へて、

『さうです、始終何か珍らしい話を見付けなくては年が年中講演しては居られない。それてさへうまく受けない事がある。我輩は之なら必ず受けると滿堂をヤンヤと言はせると思つた種子があつたが、何うしたものか幾ら遣つて見ても利かない。それは唯一つ必要の言葉が見付からないからであつた。或夜ミシガンて夜深しして居て轟然勃發した山火事を見て座つて居た時に、之なら大丈夫鞭を當てる樣に利くぞと信じた言葉が心に浮んで來た。それは我輩が用ひた言葉のうちて一番長い間續いたが、こんな風に始めるのだ「現代は批評的時代である。人は十分に判るまでは容易に信じない。そこで例のヨナと鯨の話にしても、現代人は詳かに其れを知りたいと主張するが、我輩の考ふる所によれば、ヨナには勿論鯨にも此問題は十分に判つて居なかつたと思ふ。人間に判らな

言譯しても承知しない、余の頼みだから是非とも來なくてはいけないと說付けた。彼は來た。晩餐の席では余が二人の間に居て此兩極端性の對照を面白く觀察して居た。アーノルド氏はショウ氏の話振に深い興味を起し、西部諸州の逸話が氣に入つたと見えて余が從來見た事のないほど心底から笑つて居た。ショウ氏は十五年間米國中一萬以上の人口を有して居る都市を講演して廻つた。その豐富な經驗談をそれからそれと持出して盡くる所を知らない話上手であつた。アーノルド氏は講演者が聽衆の興味を繫ぐには何ういふ手段があるか知りたいと尋ねた。ショウ氏は答へた。

『それはね、餘り長いこと笑はせちやいけない。さうすると聽衆は自分等が笑はれて居ると思ふ。聽衆に一頻り笑はせたら講演者は眞面目になつて鹿爪らしく構へるのさ。一例を擧げると「世の中には何人も準備して居ない二つの事がある。諸君判りますか」と質問するんだ。さうすると仕舞には誰かが「死」と叫ぶ。「サア、もう一つは」と疊かけて質問すると今度は多勢で色々な答を出す。富、幸福、力、結婚、稅金、曰く何、曰く何。終りにジヨッシは嚴かに「諸君は第二の方を誰も答へ

宇宙の秘密に親みて
端倪許さず不羈獨立——嗚呼偉なる哉
浮沈常なき喜怒哀樂を
底の底まで味ひて
自在に歌ふ詩仙なり

ジョッシ・ビリングス

余はショウ氏(ジョッシ・ビリングス)を知つて居た。而して快活と光明との權化たるマシウ・アーノルドにかの粗雜な金剛石、即ち粗雜ではあるが一種の金剛石に相違ないショウ氏を紹介したいと思つた。其頃余等はウィンゾル・ホテルに假住居をして居たが、幸に或朝ジョシッが訪ねて來て余等の客人アーノルドの話を持出して旺んに其人物を推賞した。余は之に答へて

『今晩貴君はアーノルドと食事をするのだ。婦人達は外出するから、アーノルドと我輩許りの晩餐なんだが貴君を加へて丁度三位一體になるのさ。』と言つた。

ジョウ氏は內氣の男だから尻込して居たが余は頑として動かなかつた。何と

巍然として他に比肩し得る者はないが、余は彼れの感想が斯くあらうと豫期して居たと言つた。而して彼の短詩集から次の樣な數節を思出した。

沙翁

君は鷄群の一鶴、如何で捕へむ
人は迷へど君は泰然微笑
超凡の智識最と高くして
思ひは星の世界に通ふなり

詩眼、千尋の海に寶を探り
摩天の嶺を住家とし
雲に隱くるゝ麓をば微かに見せて
探れど探れど知る由もなし

自ら學び自ら練り自ら敬ひ自ら安んじ

さりながら彼は上流富貴の地位にある人々に興味を持つて居た。紐育に滯在中特にヴアンダービルト氏に面會したいと彼が言つたことを余は記憶して居る。余はあんな人物に面會しても格別他の人々と異つた所はあるまいと注意した。所が彼の答が面白い。

『それはさうでせうが、世界第一の富豪に一寸知合になるのは何かの參考になりますよ。自己の獨力て富を造る人は生れながら高位に居る他の人々とは雲泥の差がありますよ』

或日余は彼に何故沙翁の批評を書かないのか、詩人の王たる地位を沙翁に與へないのかと尋ねた。彼は然うしようと思つたこともあつたが。反復して考へて見ると何時も自分が沙翁のことを書く力が足りない、況んや批評するなどは以ての外だと思案し直して自ら滿足したと答へた。彼は試みても到底甘く行くまいと信じて居た。沙翁は全く群を拔いた非凡の偉才て批評の定規を以て測ることは出來ない、其卓然たる天才を論評して見たいとは思ふが、どうも其問題に觸れる勇氣が出て來ないとは彼れの感想てあつた。彼が沙翁に對する讃辭は今日でも

アーノルドは一八八七年蘇克蘭に余等を訪ひ、或日遊戲の話をしたが、狩獵はしない。羽翼があつて青空に翺翔することの出來るものを殺すのは忍びないと言つて居た。然し釣魚だけは止められない。『どうも環境が愉快で耐りませんよ』と説明した。彼は一年に二三回某公爵が釣魚の清遊をさせてくれた樂みを語つた。其親切な公爵は誰であつたか余は覺えて居ないが、何となく無風流の所があつたと云ふことて其點も話頭に上つた。それなら何うしてそんな人物と懇意になつたのかとの質問に答へて、

『アヽ、その事てすか。公爵と云へば我々の社會ては何時も大立物てすからな。頭腦や行爲等に關係なく何時も大立物としてあるんてすよ。我々平民は皆俗物てさ。數百年の歷史がさうしたのてす。皆俗物てすよ。我々は何うする事も出來ません。血統てすからな』

と笑ひながら言つたが、心の裡には何か遠慮して言はない思想を藏して居たと余は想像する。彼は俗物でも何でもないが、『長い世襲的血統の主張などを聞いて一笑に付する』天性を備へて居た。『血統』は大抵何うすることも出來ないからだ。

ーチャー先生、インガーソルのお嬢さんが基督教會にお出になつたのは之が初めてゝすよ』と言つた。彼は兩手を伸べて令嬢の手を握り、正面に其顔を見詰めて徐ろに言つた『偖々貴女の様な美くしい異教徒は私見たことがありませんな』。インガーソル嬢の若い時を覺えて居る人は誰でもビーチャー氏と同感であらうと思ふ。ビーチャー氏は一歩を進めて論壇上の第一人者インガーソルの事を言ひ出した。

『お父さんは如何てす、お達者てせうね。お父さんと私とは幾度も一所に演説をしましたが、私共二人が意見を等うして居たことは私には實に仕合せてしたよ』

ビーチャー氏は眞に雄偉寛厚の君子て、彼には人の長所は見付かり次第に取つて自己の藥籠中に納める卓拔の技倆があつた。スペンサーの哲學、健全なる思慮に調和されたアーノルドの識見、インガーソルの高潔なる政治的理想に對する強固なる主張などは悉くビーチャーの思想に感化を與へて我が共和國の爲に有力な好資料となつた。ビーチャー氏は凡て此等の人々を益友として其眞價を認め且つ歡迎する雅量を備へて居た。

せておいて、禮拜後居殘つてアーノルド氏に面會して貰はうと思つて居た。ビーチャー氏は余が紹介した時にアーノルド氏を熱心に歡迎した。靈に於ては長い間克く知つて居た人に、今眼のあたり肉に於て相見ることは愉快の至だと其手を堅く握りながら言つた。

『アーノルドさん、貴君の物されたもので私が注意して讀まない者は一つもありません。少くとも一度は必ず讀みます。又幾度も返繰して讀むものが澤山あります。そして何時も敎訓を得ます。さうです何時も必ず敎訓を得ます』

之を聞くとアーノルドは答へた。

『アヽ、さうですか。それなら先生のことを書いた所がありやしませんか。あんな所は書かなければよかつたと思ひますよ』

『どう致しまして、それを書いてある所が私に最も有益でした』とビーチャー先生微笑を湛へて答へたが、二人は一所に笑つた。ビーチャー氏は如何なる場合にも狼狽しなかつた。マシウ・アーノルドをビーチャー氏に紹介した後、余はインガーソル大佐の令嬢をビ氏に紹介して愉快に感じた事がある。其紹介の辭として『ビ

警告した。先づ二三の點について專門の雄辯學者を聘して稽古をする必要があると力說したので、彼は余の熱心に動かされてさうすることに同意した。一同夫夫批評をした後彼は余の母に向ひ一言の批評を求めた。

『皆さんが意見を述べられたが、今度は御隱居さん貴女のお考を承りたい。米國に於ける講演者として私の第一夜の成績を何と評してくださるか』

『餘り坊主臭いぢやありませんかアーノルドさん、坊主臭さ過ぎますよ』と母は靜かに和かに答へられた。アーノルド氏は此時ばかりは腦天に釘を打込まれた樣に感じたとて何時になつても折々話頭に上せて居た。彼が西部諸州を旅行して紐育を再訪した時の講演振は實に見上げたもので、ブルクリン音樂院に臨んでの講演などは、其堂々たる音聲が滿堂を壓するほどの大成功であつた。彼は余の注意を容れてボストンで雄辯學の敎授から數回稽古して貰つて來たのであつた。其後は凡て滿足に出來た。

彼は有名な說敎家ビーチャー氏の說敎を聽きたいと云ふので余等二人は或日曜日の朝ブルクリンへ出掛けた。ビーチャー氏には余等の來ることを豫て知ら

ラッドストンとは等しく超然として咎むべき所がない。然に彼は寸鐵の一句を以て超自然說を殺了した。『奇跡問題は終結した。今日奇蹟のないのが何よりの確證てある』

彼と今ホイトリッジ夫人となつて居る彼の娘とが一八八三年に紐育滯在中余の家に客となり、又アレゲニーの山莊にも客となつたから、余は彼の人物を大いに研究したが十分とは行かなかつた。彼が紐育の公衆の初見參の際は余の母と余とが馬車に同乘して彼を演說會場に送つて往つた。其時の聽衆ほど一粒選の立派な者の集まつたことがない。講演は成功でなかつたが、其原因は主として彼が公開演說の技倆を缺いて居たことてある。彼の言論には人が耳を傾けなかつた。彼は歸ると直ぐに待兼ねた樣に『サア、皆さん何か言ふことが御座いますか。言つてくださいよ。私は講演者として役に立つてせうか』と頻りに自己の講演振を氣にして居た。

余は彼が其成功如何に餘り深く意を注いで居たのを看取して、躊躇せずに彼が公開演說に必要な資格を造らない限り決して其儘ては進んて遣つても無益だと

思に沈んて立つたマシウ・アーノルドは余に忘るゝことの出來ない印象を與へた。其後彼は自分の神學說に關する話をしたが、之が爲に彼れの最も貴重な友人等に心配をかけたと言つて居た。

『グラッドストン氏は或時余が僭正になるべき人物であるのにと言ふて、深刻な失望否一種不快の感想を現はしたことがある。疑もなく余の昇進を妨げ、且又友人等の悲痛を惹起したものは余の著作であるが、それは止むを得ないことだ。心に思ふたことは言はずに居られないのだ』

と彼は其心事を語つた。

此終りの數語を發した彼の悲痛の音調は鮮かに余の記憶に殘つて居る。彼は實に一語一句悲しげに靜かに語つたのてある。其言葉は深い淵の底から徐かに語られたかの如く聞えた。彼は語るべき使命を持つて居た。時代は着々と進んて今やこれを受けんとして居る。彼の敎は今日殆ど非難されずに承諾されて居る。眞面目な宗敎家と云ふべき人物があるとすれば、マシウ・アーノルドは其人てある。不敬虔な言葉は決してその口から洩れたことがない。此點に於て彼とグ



マシウ・アーノルド

ジョン・モーレーと余と一致した意見は、二人が從來の交際社會て最も愛嬌ある男と認めたのはマシウ・アーノルドであると云ふことてあつた。彼は實に一種の『愛嬌』てあつた。此一語の外に彼との交際、彼との會話の結果を適切に表はす言葉がない。彼の顏色、彼の嚴肅な沈默にさへも人を魅する愛嬌があつた。

一八八〇年だと記憶する。彼は余等と一緒に南部英蘭を馬車て遊歷したが、ウキリアム・ブラックとエドウキン・エーアッベーも一行に加はつた。美しい村に近付いた時彼は數分間馬車を駐めてはくれまいかと余に求めた。彼の說明に依れば之は彼の宗敎的命名者たるキーブル僧正の墳墓の地てあつて、彼は墓參をしたいとの事てあつた。彼は更に言葉を進めて說明した。

『嗚呼なつかしいキーブルよ。神學問題に於ける余の意見の爲に余は彼に非常の心配をかけたが、それが爲に余も心配した。彼は流石に親友だけあつて、深く心を痛ませては居たが、余を英詩の敎授に選擧する爲に態々牛津大學に往つて呉れた』

余等は連立つて靜かな墓地に步を移した。キーブルの墓畔に默々として深い

互に手を握つたが、握つたまゝ双方一言も發しないうちに彼は一段と力を强めて余の手を堅く握り締めながら『亡びたる家庭、亡びたる家庭』と腹の底から絞り出した。彼と余とは唯無言て手を握つて居た。余が之を書くのは數年の後であるが、今猶此數語が耳に殘つて余の心は之に反響する。

我等の祖先に與へられなかつた一の惠みが今日は我等に與へられることになつた。即ち我等のうちの裁判官たる本心が現生を善く生活したといふ無罪放免の宣告をしさへすれば、我等は他の裁判官を恐るゝ必要がないと云ふ眞理である。

『汝自らに眞實なれ
　さらば夜の日を繼ぐごとく
　必ず正直の人たるを得ん』

地上に於ける數年間の生涯に犯したる罪惡に對して、神が永遠の刑罰を加ふるとは之れ實に瀆神的敎義であつて、魔王さへ之を聞いて不審に思ふてあらう。

第二十二章　マシウ・アーノルド及其他

て ある。』

『余が債權者に對して負ふ所は問題でない。余自身に對して負ふ所如何が問題である。』

如上の趣意で余はマークの別方面を高調したが、大多數の人は生涯に幾度か自己の眞價が鐵滓であるか黃金であるかを立證する機會があるものである。危機に臨んで其人の眞價を現はすものは其時の決斷如何である。マークは男らしい火の燃ゆる爐の中に入り英雄として出て來た。彼は周く世界を講演し廻つて借金を一文殘らず返濟した。『快男子マーク・トウエーン』とは、他の一面のみを知つた公衆の定評として其當を得た者であるが、英雄としての一面は何うしたのか、彼はサー・ウォルターと共に男子としても英雄としても第一流に位する人物である。

マーク・トウエーンの妻

彼の妻は女丈夫であつた。良人の守護神として常に彼を助け、共に世界を周遊し自分の夫をしてサー・ウォルターの如く其困難に打克たせたのは實に彼女であつた。此一事は彼が常に忘れずに其親友に語る所であつた。クレメンス夫人逝去の後始めて余が彼を訪問した時、彼が發した數語ほど痛ましく余を感激させたものは余の生涯に決してなかつた。幸に余は彼の獨り居る所へ這入つて行つて

クレメンスの七十歳の賀筵は無比の光景てあつた。文士連が中堅てあつたが、彼は曾て窮乏の時彼の友てあつた大富豪エッチ・エッチ・ロージャース氏を自分の近くに着席させてくれと賴むことを忘れはしなかつた。マーク(クレメンス)の面目は躍如として居た。文士連の巨頭等は何れも主賓の文藝を謳歌する趣意の演説をしたが、余の番が來ると余は此事に言及して、主賓が人として爲した事柄は其文學的事績と共に永く後世に生き殘るだらうと一同の注意を促した。サー・ウォルター・スコットとマークとは互に切離すことの出來ない連鎖である。マークはスコットと同樣に同志者等の失策によりて資產を蕩盡したので、同志者等は囘復の見込立たずに破產してしまつた。そこて彼の採るべき進路が二つしかなかつた。一部は平坦な安易な簡單な進路で卽ち法律の制裁に服することてあつた。財產を全投出し、破產の手續をして新たに始めるのてあつた。彼が債權者に對して爲すべき義務はそれだけてあつた。他の進路は長い荆棘の生へた滿目荒凉たる畢生の奮鬪て、一切のものを犧牲にする覺悟が必要てあつた。此二つの路が彼の前にあつたが彼の決斷は之てあつた。

悔み居候之は純粋の武力製にて「關稅」も疾くに拂ひ置きしものに候　呵々

クレメンス氏(マーク・トウエーン)と親交ある人々は彼が愛嬌者であつた事を證明するてあらう。ジョージ・ジェファソンは同樣の愛嬌者で其風采言語凡て双子の片割と云つても差支ないほど無類に相似て居る。『アンクル・レムス』(ジョエル・チャンドラー・ハリス)も愛嬌のある男だが、ヂョージ・ダブルユー・ケーブルも同型の人物てある。其外ジョン・ビリングスもさうだ。此種の人々は自分等のことには頓着せずに其友人等の生活に光明を與へる。彼等は行く所として光線の如く輝く。リップ・ヴァン・ウィンクルの言葉を假りて言へば『彼等は皆似たり寄つたりの徒輩てある』何れも劣らず非利己的て溫い心を持つた人々てある。

世間はクレメンス氏の一方面、卽ち面白い部分のみを知つて居る。彼が政治問題や社會問題などに强烈な確信を有つて居ることと又高尙な道德家てあることに至つては殆ど知らない。例へばアギナルドを詐謀にかけて捕虜にした際の如き最も痛快な反對論を唱へた者は彼てある。ジュニアスてすら彼に比すれば筆力が弱かつた。

は彼から次の如き手紙を受けた。

拜啓貴下愈々御隆盛の段慶賀此事に御座候然ば貴下の崇拜者に讃美歌一冊買入の資金一弗半御貸し被下間敷候や左候はゞ神は貴下に祝福を垂れ給ふことと更に疑無之ことと存候小生も亦貴下を祝し可申候乍併他に同樣の希望者有之候はゞ强ひてお願は不仕候匆々不一

尙讃美歌を御送り下さらず其代金を御送り下さる樣願上候該書は小生自身選定致度候

彼が紐育に病臥の際余は數度見舞に行つて互に愉快な思をしたが、彼は病床に居る時ですら平素の快活を失はない男であつた。余は或日蘇克蘭へ出帆する前に告別のために彼を訪問した。余の出帆後間もなく大學教授恩給基金の設置が紐育に於て公表された。それに關してマークの『聖アンドルー』と宛名した手紙が蘇克蘭滯在中余に屆いたが、其うちから次の一項を拔書する。

『貴下は小生の後光をお取になることが出來ると存候過日病牀御來訪の際今回の偉勳を御話相成りしならんには其時即座に之を差上げたりしものをなどと

り生き殘ることになる。如何なる人にも幸福、長命、至當の成功あれかしと望み、如何なる人にも妨害を與へない。また力の及ぶ限り援助を與へてやらないことはないと自ら感ずる人は實に幸福な人である。か斯る人は不名譽の行によりて明かに不始末を仕出來かした者を誣ひて、自己の友人と數へて自己の不快を招く必要はない。斯る不都合な人物に對しては唯憐み、無限の憐みを感ずるの外はない。從來の友人がさうなつたことは損失として自分の方にも憐みの感が起る。なぜならば眞の友情は唯德行によりてのみ維持せられ發達するものであるからである

『愛が病み又衰へ始める時
人は強ひて禮儀の假面を用ふ』

從來の懇親は永久に消滅することもあらうが、互に幸福を祈るの外他意なしとの心掛を持つことは出來る。

余の實業界引退を熱烈に祝してくれた友人としてマーク・トウエーンに及ぶものは一人もない。余の財產がどうのかうのと新聞が頻りに喋々して居た時分、余

結果は余が豫期した通り兩人の間に和解が出來て彼等は互に良友になつて別れた。數訓はこれだ。即ち和解の役を勤めるならば禮儀を守るべき所に敵同志を幷べて着席させることとてある。

バーロズとセトンは二人共余が仕掛けた罠にかゝつたことを寧ろ愉快に感じた。人は互に心を知らないから互に憎むと云ふことは眞理てある。敵を食事に招待するばかりでなく、態々其來臨を促して斷はることの出來ない樣に仕向ければ、確かに和解の方法になることが屢々ある。爭論は多く相手が互に顏を合はせたり通信したりせずに只間接に他の人々から互の意見の相違を聞く爲に激しくなるものてある。双方で相手方の見地を十分に了解せず、又其論點を悉く聽取らないて意見を異にした場合には、和解の手を進める人は賢者てある。之を拒む人は死に至るまて不快の日を送らねばならぬ。友人を失ふと云ふ事は取返しの出來ない損失てある。よしや前よりは多少親密の度を失つても友人は友人に相違ないが、これを失つては何うすることも出來ない。一度は親密にして居た人が友人として存在するうちは樂てあるが、時節が來れば友人は片端から去つて自分獨

置いて居るのである。彼がアーノルドやモーレーの如き高士の親友であることは決して偶然とは云はれない」（一九一六年紐育刊行リチャード・ワトソン・ギルダー書簡集三七四頁——令嬢ロサモンド・ギルダー編輯）

ギルダー幹事が自分の考案と其年の主賓の著作から抜いた句を、各來賓の名刺に書いて割振つたものが一々適切なので一座の歡喜湧くが如く、續いて來客中新顔連の演説が一段の興味を添へる。一八九五年にはジョン・モーレーが主賓であつたが、彼の著作から抜いた句を名刺に書いて一々皿に載せて來賓に備へられた。

バーロズとセトン

或年ギルダーが來賓の席順を定めるために早くから晩餐會場に來て居た。それが濟むと彼は余の所へ來て、席順を一旦極めたが又一應調べ直して善かつたと話した。最初極めた時はジョン・バーロズとアーネスト・トムソン・セトンの席が隣合になつて居たが、二人は鳥獸の習慣に關して激論を闘はして兩々相下らず、眞劍勝負でも仕兼ねない氣勢を示して居たのである。ギルダーは二人を並べて着席させたら大變だと言つて席を別にした。余は此話を聞いて何とも言はずに後で人に見られない様に食堂に忍んで行つて、名刺を元の通りに直しておいた。偖愈愈着席して見ると二人が隣合になつて居るのでギルダーは非常に狼狽したが、其

全な信頼、共同の目的、又深い愛情等が余等一同を同胞團體の型に造り上げたのである。余等は元來が親友で後に同志社員となつたのである。四十五人の同志中四十三人だけは斯くの如く終生渝らない親交を堅く結んだ。

此外にもう一つ多くの精選人物を會合させる毎年の出來事は文學者の家庭晩餐會て、(一)其幹事は余等の親友『センチユリー』紙の主事リチヤード・ワトソン・ギルダー氏てある。

(一)「昨日余等はトロントで多忙な日を送つた。其日の大事件は午後六時の晩餐會であつて、余等一同は卓上演說をしたがアンドルー・カーネギーの演說は見覺ましかつた。余が如何ばかり之を愉快に感じたか到底言語に盡せない。珍しい所を見るばかりか仲間の談話が一段の快味を添へる。之こそ實に人文敎育である。カーネギーは眞に「偉人」である。卽ち巨大な才能と偉大な想像力とを備へた人物である。

ステツドマンを除いては詩歌を自在に引用する範圍のあれほど廣い友人を余は持つて居ないと思ふ(沙翁やバーンスやバイロンなどから引用する其範圍。の廣い事カーネギーに及ぶ者はない)。彼の識見は眞に大きく又豫言者の風格がある。且つ余の意見が誤つて居ないとすれば彼は純粹な道德家である。彼は完全ではないが最も興味ある、又注意すべき人物である。眞の民主主義者である。彼の慈善行爲は主義と品性とに根底を

の生涯中最も會心なるものの一てある。余は昔ながらの『小僧』仲間から腹一杯の愛情を浴びせられる。余は確かに之を浴びて居る。余の心が溢れて自然に彼等の心と一致する所を見ると寸毫も之れを疑ふ餘地がない。余は之を多くの天惠の一に數へて居るが、憂欝に沈んだ時などに此一事が余の心に浮んで余は獨語する『之さへあれば、財産はなくてもよい。之がなければ億萬長者が何だ。然り、斷じて何でもない』。

余等夫妻は男女に拘らず幾多の偉人君子に交際する好機を得たが、余等が此『小僧』仲間に對する愛情に比べては此等友人との交際は論ずるに足らぬ。特に余が限りなく嬉しいと思ふことは、妻の心が余の心と全く同じ樣に此等の『小僧』に對する愛情に溢れて居ることてある。第一回の老功晩餐會に因んて余の紐育邸を命名したのは實に余の妻てあつて、『同志第一』といふのてある。彼等が余の妻を第一名譽會員に余の娘を第二名譽會員に推薦したのは單に形式一片の辭令てはない。兩人は余等會員の心中に斯くの如く安置されて居る。余は年長者てあつたには違ひ無いが、それても余等は『小僧仲間』てあつた。一身の爲てはない、相互の爲の完

實業界引退前に知り合になつた智識階級との交際と友誼とがあつて引退後の生活に一段の興味を添へた。引退後數年の間余にはどうしても舊時の諸工場を訪問する勇氣が出なかつた。訪問したら既に居なくなつた幾多の舊友を思出して到底其悲みに堪へなかつたであらう。初期時代の友人で昔の握手を余に與へてくれる者は恐らく殘つて居ないであらう。居ても一人か二人余を『アンディー』と呼んでくれる位で他は悉く新らしい人々である。

されば‍とて余は壯年時代の事業經營に提携した舊友等を忘却した譯ではない。又彼等が余の一變した境遇に處して行く苦心を慰める大いなる力に成つてくれないと云ふ次第でもない。彼等は實に頼もしい力であつた。就中余を最も多く慰めた方法は、彼等が余の引退後早速カーネギー老功協會を組織したことで、之は最後の會員が死ぬるまでは解散しない會則を設けてあつた。紐育の余の邸宅で會員等が共にする毎年の晩餐會は最大快樂の源泉であつて、其快味は實に甲の年から乙の年まで連綿として絶えないほど大いなるものである。老功會員中偶々旅行して居る者があつても遠くから態々出席する。その際互に快談する喜は余

して、又其位置を繼いだ其子ペーリー・モリソンの甥として、就中聖人を父とし拔群の女傑を母とした余が、奮起一番歷代其土地を持ち傳へた地頭をして其所領を讓らしめ、溪谷と公園とを永久にダムフアリン町民に寄附する役目を演ずることとなつたのは、其血管に流れて居る詩的情調の發動として其當を得たものである。之は如何なる空中の樓閣も匹敵し得ない、又如何なる小說家の想像にも浮び得ない眞のローマンスである。而して之を書いたのは運命の手である樣に見える。又余は次の樣な囁を聞く『汝は全く無益に生きては居なかつた――全く無益ではなかつた』。これは余の全生涯を飾る榮冠として天賦の惠である。余の他の凡ての寄附に比べて余は全く之を別種のものとして珍重する。時世の變遷は實に不可思議の復讎を齎らすものである。祖父モリソン以來の仇は立派に報いられた譯である。余が富の蓄積を罷めて其分配を始めてから今は十三年になる。余が若し引退する丈けの十分なる準備が出來て居ても、其後何うするかとの道がついて居なかつたら蓄積にも分配にも成功しなかつたであらうと思ふ。然に讀んだり書いたり折に觸れて演說したりする習慣があり、また嗜好があつたのみならず、

事を記して居るが、之は其時々々に自分が興味を寄せて居る寄附金にのみ筆を走らせて居るためである。實は自叙傳中に洩れた寄附金が他に幾らもある。教會平和同盟會に二百萬弗以上、聯合工藝協會に百五十萬弗、兩米諸共和國國際部に八十五萬弗、其他研究、病院、教育等の諸協會合計二十以上の團體に一萬弗乃至五十萬弗の寄附をして居る。又二千八百以上の圖書館建設維持資金として公共團體に寄附した金額は合計六千萬弗以上に達して居る。其他最大巨額の寄附は自叙傳中に少しも言及して居ない。卽ち一九一一年紐育のカーネギー財團に寄附された一億二千五百萬弗である。之が氏の遺言狀に基いた遺産財團であつて其遺言狀の執行に依りて是以上どれだけ追加されるかまだ判らないのである。該財團の目的は理事に宛てたカーネギー氏の書簡に左の如く述べてある。

「實業學校、高等學府、圖書館、科學研究、義勇基金、其他有益なる書類の刊行等を援助することにより、又時運の進歩に應じて適切と認めらるべき其他の機關及方法によりて合衆國々民間に智識と諒解の進歩と普及とを計ること」

カーネギー氏の寄附金合計は三億五千萬弗以上に達して居る。一人の力で集め又散じた金額としては實に驚くべき巨大な數字である。

斯の如く、ピッテンクリーフは余が從來の經驗に於ても、將又將來と雖も最も余の心を滿足させ得る一大快擧である。　急進主義の首領たるトマス・モリソンの孫と

等――特に少年等――に他の住居等にて得られざる何等かの娯樂、何等かの幸福、何等かの向上狀態を與へて、余の故鄕に生れた少年等が他日天涯に放浪することがあつても其少年時代のことを回顧して、嗚呼余等に取つてはあの昔があつた爲に今になつて人生が幸福の程度を加へ、良好の狀態にあるのであると感嘆せしめること等てある。之が若し理事諸君の努力の結果ならば之を以て諸君の成功となすべく、然らざれば諸君は失敗せりとの非難を免れざるべし。此一項を書いた爲に余は加奈陀前總督グレー侯の知遇を得る事になつた。侯はロッス博士に一書を寄せて左の如く言はれた。

『今朝のタイムスに彼の一文を寄せた作者に是非共交際致度存候』

そこて二人は倫敦で會ふことになつたが、一見舊知の如く忽ち意氣投合の間柄になつた。侯の如きは實に眞情流露、(一)直ちに肺肝を披瀝して赤心を人の腹中に措く偉大な人格てある。侯は現に大英國基金として余の寄附した一千萬弗財團理事の一人てある。

（一）カーネギー氏はグレー卿のことを叙する序に、カーネギー大英國財團一千萬弗の

廣大な庭園と溪谷との所有者として、余は金力で出來る事なら此等を公共心ある町人の一團に管理させて、一般町民の幸福に資する方法がありさうなものだと考へて居た。ピッテンクリーフ公園に關しては、ロッス博士が余の機密に參與して居たが、余は博士の献策に依つて理事たるべき人物を選定し、其の承諾を求めて創立會議をスキボに開いた。彼等は唯公園を町に寄附する相談とのみ想像して居た。又ロッス博士にすら其れ以上は話しておかなかつた。然に彼等はこれに五分利付英貨五十萬磅の債券を添へてダムファアリンに寄附する計畫だと聞いて何れも大いに驚いた(其後の寄附を加へて合計三百七十五萬弗になつた)。

此溪谷を財團に引渡してから十二年になるが、これ程土地の人々に愛好されて居る公園は決して外にあるまい。子供等の一年一度の大祝祭や、花市や、町民が每日〳〵公園で樂む有樣などは驚くばかりである。溪谷は今や附近の町村からも陸續と遊覽客を惹いて居る。財團理事は左記寄附條件に示した趣意を遂行することに立派な成功をした。

ダムファアリン勞働民衆の單調生活に一層多くの『快樂と光明』を與へること。彼

と云ふ人が遂に見當らないかも知れない。又余とても心變りがするか、或は死んでしまふかも知れぬと云ふことを博士がショウ氏に話したら、氏は他の用件で翌朝ハントの法律顧問に會ふ約束になつて居るから必ず其話をすると言はれたさうである。

ピッテンクリーフの買收

其後間もなく余は紐育へ向けて出帆したが、或日ショウ氏から地頭が四萬五千磅なら手離すと打電して來た。それて愈々手離すのかと思つたから、余は返電した。『ロッスの條件なら契約する』基督降誕日の前夜余はショウの返電に接した。『ピッテンクリーフの地頭萬歳』そこで余は愈々世界で最も幸福な一大不動産の持主になつた譯だ。世間では何かと言へば國王を持ち出すが、國王などといふものは唯だ王といふ丈けてあつて別に何も持つて居ない。マルコム王の高塔や聖マーガレットの聖廟やピッテンクリーフ溪谷などは國王のものではない。何んと憐むべきではないか。ところが余はそれを持つて居た。若し王がダムファアリンに行幸される樣なことがあつたら、余は威張つて此等の珍寶を王に見せてやらうと思ふ。

クリーフを公園としてダムファアリンに寄附することが出來るとあつたら何うであらう。余は余に王冠を提供して此特權と交換しようとする人があつても其れを拒絶するであらう。

ロッス博士が地頭ハント大佐の溪谷賣却説を余に囁いた時余は直ちに耳を傾けた。博士は地頭が突飛な高値を希望して居ると思つたが、其後暫く話がなかつた。一九〇二年の秋倫敦で病臥した折柄余は此問題に心を傾けて頻りに氣忙しくなり、ロッス博士に打電して來訪を求めようかと考へて居た。或朝妻が余の室に來て來客があるが誰だか當てゝ御覽なさいと言ふから、余はロッス博士だらうと得意になつた。果してそれは博士であつた。二人はピッテンクリーフの話をした。余は余等二人の友人であり又同町人たるエディンバラのショウ氏(ダムファアリンのショウ卿)に對して、若し卿がハント大佐の代理人等に會見する場合であつたなら彼等に次の樣な話をして貰ひ度いと賴まうとするが、何んなものであらうと博士に計つた。さうしてハント地頭が余と賣買契約を締結しなかつた事を遺憾に思ふ時が來るかも知れないし、又余と同樣の熱心を以て之を買ひたい

ビッテンクリーフ溪谷であつた。若し門の開いた所や城壁の上や泉の金網下などから內部の光景を瞥見する事が出來れば余等は雀躍して喜んだものである。殆ど毎日曜にローダー叔父は『ドッド』と『ネーギ』とを連れて寺院の周圍から溪谷を俯瞰し得る所まで散歩されたが、見て居ると忙しげな鴉が下の大木に止つて羽ばたきして居た。余等少年には地頭が位階と富貴との權化と見えた。余等は女皇がウインゾル宮に住んで居られたことを知つて居たが、一天萬乘の陛下ですらビッテンクリーフの所有權はなかつた。ビッテンクリーフの地頭ハントは女皇であらうが誰であらうが何人にも之を賣りはしない。余等兩人にしても賣りたくなかつたから之だけは確かだと信じた。余が少年時代は勿論少壯時代の腦裡に描いた空中樓閣(旺んに描いたものだ)中、其宏壯なることとビッテンクリーフに較ぶべきものは一もなかつた。余の叔父ローダーは余が成長したら何になるかに就て種々の事を豫言したが、若し他日大いに富んで又無上の福運が授かつて、ビッテンクリフの地頭になると豫言してくれたら、それこそ余を有頂天にさせたかも知れぬ。それから又余の少年時代に余に取つて天下の樂園であつた此ビッテン

余が物心のつき初めに記憶して居ることは、寺院境内と王城の古跡の一部とをダムファリン町有地にする有志の運動であつた。其運動を開始したのは余の祖父モリソンであつたと聞いて居るが、兎に角彼は其有志者の一人であつた。ローダー及モリソンの兩叔父は引續いて其運動を擔當したが、モリソンは城壁の一部を破壞する目的で徒黨を煽動したと云ふ嫌疑をさへ受ける光榮を擔つた。町民は此事件を最高法廷まで持出して其爭議には勝利を博したが、寺領の地頭は其後『モリソン一族は一切溪谷に入るべからず』との禁制を設けて復讐した。余は徒弟ドッド同樣モリソン一族なので同じ禁制を受けた。ピッテンクリーフ代々の地頭は町民と仲が惡かつた。

余の知れる限り此溪谷は世界無比の仙境である。此仙境は寺院及王城の境内に隣接して其西と北とには町の二大通路が沿うて居る。面積は六七十英町で欝蒼たる樹木が繁り、近傍の高丘には天を摩す樣な巨木があつて眞に一大偉觀である。之はダムファリンの少年には常に樂園であつた。余には確かにさうであつた。余が樂園の話を初めて聞いた時余の想像し得る所では之に最も近い仙境は

國際平和の大義に貢献した功績を表彰するとの理由てあつたから、余に取つては實に大なる光榮で又感謝する所てあつた。斯る名譽は人を誇らせるものてはない。却つて謙遜ならしむるものであるから、幾らでも來るに任せておく。此等は又余が益々勵んて忠勤を盡し、一言一行も之を忽にせず、余をして最高の標準に少しづゝなりとも近付かしめんとする刺戟となるのてある。余に讃辭を呈して呉れた人々は其演説の際に余が恰も此表彰の標準に到達して居るかの如く言はれたけれども、それは全く彼等の誤つた假定てあつた。

（一）カーネギー氏は此他和蘭からオレンジ・ナッソーの大十字章を、丁抹からダネブログの大十字章を、南米二十一共和諸政府から金牌一個を、無數の諸大學から博士號を受けた。又幾多の協會や學會や倶樂部などの會員に推薦されて其類合計百十九と註せられる。

余の寄附としてはダムファリンのピッテンクリーフに對するものに比肩すべき性質のものは恐らく一つもあるまいと信ずる。之には余の少年時代の感激が溢れて居るので、而も其感激たるや最も純粹で又最も甘快なものである。余はどうしても此處に其顛末を語らずには居られない。

ピッテンクリーフ溪谷

りかと自問して其答に苦んで居た。幸に數日を經て牧師ライマン・アボット、牧師リンチ其他の名士等が余に再考を求めんとして來訪されたから、余は彼等の使命を洞察してお話を聞く必要はないと余の胸中を打開けてから語つた。實は曩に推薦を辭退したため良心に咎められて居た處だから、速に承諾して自分の責任を果す考であると。其後(四月)國民大會が開かれたが之は平和協會(一)の歷史上初めての大集會であつた、卽ち米國聯邦中三十五州の代表者と知名の外國人等が多數出席した。

(一)カーネギー氏は此自傳中に省いてゐるが、一九一〇年十二月平和協會の理事會に一千萬弗の寄附を申出た。其寄附條件として之から生ずる利子收入で「文明の最醜汚點たる國際戰爭絕滅」の爲に貢献する事とある。之は國際平和カーネギー財團として成立し、エリウ・ルート氏が其理事長である。

余が勳章を受けた初めての經驗は此時不意に佛國政府からレジオン・オブ・オノアのナイト・コンマンダーにするとのことであつた。引續いて余が主宰した紐育の平和協會大饗宴にダエーストーネル・ド・コンスタント男爵が演壇に立つて一同大喝采のうちに一場の演說をして、余に王冠章を贈ると云ふ不意打を喰はせた。

平和殿の建設

其時の記念として保存してある。平和殿と云ふ樣な最も神聖な目的を以て建設さるゝ世界の最も神聖なる建築物に對して、資金を提供する高尙な任務を一個人が果し得るといふ事は、其人に取つて實に過分の名譽かと思はれる。ルーテルの言つた樣に『我々人間は神に奉仕することも神を援助することも出來ない。神は人間の助けを必要とし給はぬ』程、神は崇高な存在者である。然に其神の榮光の爲に建てられた聖ペテロ寺院でも、亦同一の目的を有する其他の如何なる大建築でも此平和殿には決して及ばないと思ふ。此殿堂は墮落せる神の子等に取つて最も必要な平和を招來することを目的として居る。『神に捧ぐる最も高尙なる禮拜は人間に奉仕することである』とある。烏滸がましいことてはあるが余も亦ルーテルやフランクリンと共に斯く感ずるのである。

平和協會の會長

余の友人等が一九〇七年に紐育平和協會を組織して余を其會長に推さうと努められたが、余は多忙であるとの理由で其推薦に應じなかつた。然し事實多忙てはあつたが、之に就て心中自ら平ならずといふ具合であつた。平和の爲に自己を犧牲にしないとしたら何の爲に犧牲になるか。自分は一體何の爲の役に立つ積

ことと思ふ。

(一)『私は世界平和維持の爲現今必要とする唯一の方策として主なる三四の文明國(參加を望む者があれば多いほど善い)間に、世界平和の攪亂を企てる者に協力して反對する盟約の締結を提案する』(一九一三年八月二十九日海牙の平和殿に於けるウヰリアム・ランダル・クレマーの胸像除幕式に於けるアンドルー・カーネギーの演説)

アンドルー・デイ・ホワイトとホールスとが海牙から歸つた時、海牙に平和殿を建設する資金を提供してくれないかと余に相談があつたが、余は余から進んで提供する事は潛越の嫌があるから出來ないけれども、和蘭政府から右の如き殿堂を建設する希望あることを余に通告して其資金の調達を求めて來たならば、余も喜んで考へて見ようと答へた。兩人は政府としてそんな事は出來まいと二の足を踏んで居た。それでは余の方から何とも仕樣がないと余は斷つた。

然るに和蘭政府は竟に華盛頓駐劄同國公使ゲヷース男の手から其請求をして來たから余は喜んでそれを承諾した。それでも猶念のため和蘭政府の手形を振出してくれゝば余の方から正當に引受けようと、同男爵に一書を送つて直ぐに送金をしなかつた。同國政府は余に手形を振出したが百五十萬弗の手形は今でも

人の協力て必要なる戰爭撤廢の國際法廷設置案を成立させることが出來たかも知れぬと思ふ。上席代表の請求を容れて夜中海牙から獨逸へ向けて出發し、獨逸の外務大臣と獨逸皇帝とに會見を遂げ、彼等を説服して獨逸代表の海牙引上を威嚇した手段を飜して高等法院設置案を承諾させたのは實にホールス其人てあつた。之が爲に其赫々たる偉勳は人類の幸福に貢献した最大の功臣として史上に特筆大書すべきものと認められる。然に悲い哉。未だ老境にも達しないうちに此偉人は溘焉として世を去つたのてある。

此國際法廷の成立する日が來たなら、それこそ世界の歷史上最も記憶すべき日の一に數へられるてあらう。其日には人間罪惡の最も深刻兇暴なる公然の殺人犯たる戰爭終了の鐘が一時に打鳴らされるてあらう。之は世界各國の大祝日として記念せらるべく、余は必ず何時かは、否恐らくは世人の豫想するほど遠い將來てはなく近いうちに其日が來ると信ずるのてある。其時代には從來英雄として稱揚された歷史上の偉人が、戰爭に偉勳を立てたばかりて平和と仁道とを助成することに何等の努力をもしなかつた爲に、世人に忘却される者も鮮からず出來る

今大金が思掛なく轉げ込んで來たのに彼は一顧をも與へずに全部平和の爲に投出してしまつた。斯くの如きは實に最も立派な義勇行爲と云ふべきである。

一八八七年華盛頓に於て此仲裁委員等を余がクリーヴランド大統領に紹介して謁見を得させたことは大いに欣快とする所であつた。大統領は慇懃に彼等を引見し彼等の事業に熱誠な協力を誓約された。其日以來戰爭の絶滅と云ふ事が余の胸中に益々重きをなして遂に一切他の事柄を壓倒する樣になつた。第一回海牙會議の驚くべき活動は余に熱烈な喜を與へた。本來軍備撤廢の目的で召集されたもの(之は畢竟夢であつた)であるが、國際爭議を裁決する常置仲裁法廷を設ける具體的成績を擧げたのは該會議の一大權威であつた。余は之が人類史上平和に對する最大の手段であつたことを認めた。而して恰も天來の靈感によるかの如く餘り多くの豫備的討論を用ひずして咄嗟の間に此手段を決定したのである。崇高の觀念が該會議を支配したのは怪しむに足らぬ。

ホールス氏の死は余の深く悲む所であるが、同氏が若し存命で其上席米國代表アンドルー・ディ・ホワイトと共に第二海牙會議に代表として出席されたならば、兩

もソールズベリー卿が後に認められた樣に、彼は徹頭徹尾之を防止しようとしたのである。然し英國は終に不義の戰に參加したとの汚名を買ふ事となつた。余はブライトの友人として、もとマンチエスターのブライト彫像として國會議事堂に備付けてあつた貧弱なものを取除けて、其れの複製ではあつたが更に立派なものを鑄造して之を國會に寄附し度いとブライト一家に提案した時に、同家族が之を快諾して余に其目的を達せしめて吳れた事は同家が余に與へた一大特權として余の厚く感謝する所である。

余の初期英國訪問中大英國平和協會に興味を起して幾度もその集會に出席したが、後には特に國會の有名な勞働黨代議士クレマー氏の設立に係る國會議員協會に興味を寄せることになつた。現代人として此クレマーに比肩し得る者は稀である。彼が或年平和の爲に貢獻する所最も大いなりとの理由てノーベル賞金八千磅を受けた時、緊急必要な一千磅の外全部仲裁委員會に寄附した。眞の英雄に取つては金錢は塵芥に外ならぬ。クレマー氏は國會議員として倫敦に生活するに足るだけの費用を、彼の同業者から一週間僅かに數弗づゝ補給されて居るが、

『モナークのなすべき第一にして最良の役目はピー(一)ボディの遺骸を本國に輸送することてあらう。』

(一)ヂョージ・ピーボディは米國の實業家、慈善家で、一八六九年倫敦に客死した人である。

之には發信人の記名をしなかつたが、不思議にも此事が實行された。それてモナークは破壞の使者てはなくて平和の使者になつた譯てある。多年の後バーミンガムの一小晩餐會て余がブライト氏に面會した時青年發信人が實は余てあつたと話した。彼は發信人のない電報には喫驚したが彼の心が動いたので直ちに實行したと語られた。余は彼が眞に斯くの如き精神てあつたと信ずる。實は其出來事は全く彼の功績に歸すべきものである。

南北戰爭の頃我が共和國が海外に朋友を求めた時に彼は之に應じて其親友となつて呉れた。彼は現代に生きて居る公人として余の常に最も愛好した英雄てあつたが、余の父も余同様に彼を崇拜して居た。彼は政界に乘出した初期に於て亂暴な急進論者として指彈されたが、着々地歩を占めて遂に全國が彼の政見に耳を傾けることとなつたのである。平和は彼の持論てあつてクリミア戰爭の如き

も有益なものとして余に滿足を與へて居る。

第二十一章　平和殿とピッテンクリーフ

平和、少くとも英語[一]民族間の平和と云ふことは少壯時代に於て早くも余の心に起つた思想であつたに相違ない。

(一)「人は何と言ふても構はぬ。余は合一した英米の上に曾て輝いた天日が必ず一朝東天に再び昇つて、再び合同した英米統一國の上に輝いて之に祝辭を述べる日か來ることを信ずる者である」(一九〇九年紐育刊行アンダーソン著「アンドルー・カーネギーの人物と事業」一〇八頁に掲げられたカーネギー氏演説)

一八六九年に英國が其頃世界最大の戰艦として知られたモナークを進水させた時、或理由——今では人に忘れられて居る或る理由で、英國はあの巨艦の威力を振つて米國の各都市から容易く貢納金を出させるに違ひ無いとの風評が世間に立つた。如何なる權力でも此れに抵抗し得ないなどと頻りに宣傳された。余は當時英國の內閣員であつたジョン・ブライトに打電した(英米間の海底電線は漸く其頃開通したばかりであつた)。

ジョン・ブライト

余は言ふ、『どうぞそれを止めて下ださい。私の爲に祈をする事はもう必要でない。私は受くべき分よりも遥か多く受けて居る。公平な委員會が神の審判を助ける爲め調査するならば、私に與へられた天惠の半分以上を取つて他に與ふべしと決定するだらう』。之は空言ではない、余の眞情を吐露したものである。

鐵道從業者恩給基金もこれに似た性質のものである。余のピッツバーグ勤務時代の舊同僚(或は其寡婦)が多くこれに依つて救助されて居る。これは數年前に設置したものであるが漸次に發達して今日の大を致したのである。これは今余がペンシルヴァニャ鐵道會社の局長時代に余の配下に勤めた有功な從業者又は其寡婦を多く救助して居るが、余が始めて鐵道從業者となつた時は一介の少年であつて、同業者を一々よく覺えて其姓名すら忘れない。彼等は余に對して非常に親切であつた。其恩給を受けて居る人は大抵余の知己である。彼等は余の親友である。

余が四百萬弗を寄附した工場職工(製鋼)恩給基金受領者中には余の面識がない者が幾百人もあるけれども、余の記憶して居るものも可なり多數あるので此基金

此仕事は余の心中に決して閑却されない疑問、卽ち『余が受けた凡ての天惠に相當する行爲として余は此世の中に一體何を爲しつゝあるや』との問に對する最も得意にして、且つ最も善なりと考へる答である。卽ち私人恩給名簿に登錄してある余の友人等が余に始終滿足な答を與へて居る。余は人生の祝福に對して余が正當に受くべき分を遙かに越えて多く受けて居る。故に余は不可知者に對し何をも求めない。我々は宇宙の法則に現在支配されて居る。故に何をも求めず何をも恐れずたゞ我々の正當な義務を遂行し、現世に於ても來世に於ても何等の報賞を求めずして默々首を垂れ、胸中の裁判官たる本心の命令に從ふの外はないのである。

『受くるより與ふるは幸なり』とは眞理てある。此等の親友は余と地位を代へたとしたら、必ず余と余の家族とに對して余が彼等に爲したと同じ事をしたてあらうと信ずる。彼等が之に對する感謝の辭は甚だ貴重なるものが多い。中には每夜の祈に必ず余の爲に神よりの祝福を切に願ふて居るとまて其眞情を披瀝した者さへある。之に對して余は時々自身の眞情を顯さずには居られない事がある。

請敎會に寄附したが其購入費は合計六百萬弗以上に達した。

余の慈善事業中最も高尚な結果を示したものは私人恩給基金の設置である。親切て善良て能く盡した有名の老人等に慰安を與へて遣ることが出來る程、余等に滿足を與へ得るものは他に決して無い。況んや此等の老紳士が生活の資力に乏しくて生活難に困窮して居ることが、自分の過失の然らしめたものては無く全く犧牲的公生涯の爲てあつたことを思へば、彼等に老後の慰藉を與へ得るといふことは實に貴重なことてある。而して極めて少額の金てこの樂をさせることが出來る。余は老境の苦を轉じて樂となすために幾分の補助を要する人々が極て多いことを發見して大いに驚いた。中には余が實業界引退前にかゝる境遇に陷つて居た知人もあつたので、余は其救助に貢献したことを深く喜んだのである。但し余は救助する丈の價値が十分あると認めない限り、一人たりとも救助人名簿(之は一ヶ年二十五萬弗以上に達した)に登錄しなかつた。登錄された人々は凡て立派な資格ある者のみてある。此事は一切公表をしない。何人が救助を受けて居るか之を知る者はない。一言たりとも他言は許さない。

惡無道であると論難して居る。此後余は余の罪惡を分擔する者を立てる事に決心した。それ故オルガンの寄附を願出る各會衆は必ず其新オルガン代金の一半を拂ふことを要求した。之を基礎としてオルガン事務取扱部は今も盛んに事業を續行して居るが、改良オルガンの需要は今でも多いのである。且つ駸々として增加しつゝある人口には敎會の新設が必要であつて、之が爲にオルガンが缺くべからざることは勿論である。

敎會がオルガンの新陳代謝を行ふ每に買入價額の半分を其敎會員に負擔せしむることは、濫費を防止し、金錢を必要にして道理ある目的にのみ使用させる保證になるのである。余自身の經驗上往々天の父と云ふ宗敎の方面を閑却した樣な說法を聞かされた後、會衆が禮拜中に神聖な音樂を聞いて自然に敬虔の念を起さずには居られない樣なオルガンの彈奏裡に退散することは、精神の向上に資する所があると自ら信ずるので、オルガンの爲に費した金は決して無益ではないとの感がある。(一)之が爲に余等はオルガン部を今も存置して居る。

(一) カーネギー「オルガン部」は、一九一九年までに合計七千六百八十九個のオルガンを

あらず、余は之が爲に極て多忙てあつた。各敎會は古物を賣つて上等オルガンを買入れることを得策と認めたらしい。而して新樂器の全代金を余から受取つて拂へば古い方を賣るだけが全部儲かるのである。中には田舍の極めて小さい敎會にオルガンを買入れる註文をして据付けて見ると、余が初めて寄附したスキードンボルグ敎會のオルガンと同様に床板が破れさうになつたこともある。又寄附の依頼をする前に早手廻しをして、買入れた後て其金額を小切手て頂戴すれば結構だなどと蟲の善い事を云ふ連中もあつた。際限がないから結局寄附に關する嚴格な規定を設けることにした。卽ち印刷した質問書に明細の答を記入してよこされた後てなければ寄附をしないこととした。今はオルガン寄附の事務取扱部が完全に組織されて整然とした秩序が立つた。卽ちオルガンは必ず敎會の大小に比例した者を選んで寄附する規定を勵行することとなつたのである。

嚴格な蘇克蘭高地の諸敎會では余がオルガンを敎會に寄附して基督敎の禮拜を頽敗せしむるとの非難があつた。其地方の嚴格な長老派敎徒は今でも神の與へたまふた天賦の人間の音聲を用ひず、器械を鳴らして神を禮拜するが如きは極

最近に世を去つた。此等はみな他人のために一身を獻じて働いた人々である。此等と親しくなることは實に天惠である。クーパー・ユニオン(一)と稱する商工業者組合、其他余が興味を起して關係した團體に於て、余は何れも彼等の時間と思想とを『自己を終局の目的とする賤しむべき計畫』のために費やさずして、自分等より福運の乏しい同胞の爲に救濟と向上とを計る高尙な努力に捧げつゝある多數の男女を知るに至つた。

(一) カーネギー氏が基金又は建築資金として寄附した大學、カーレッヂ其他諸敎育機關の數は五百を算し其寄附金額は合計二千七百萬弗に達した。

諸敎會に對するオルガンの寄進

諸敎會にオルガンを寄附することは余の壯年時代から始めたことであつたが、其發端は父の好んで出席されたアレゲニーのスヰーデンボルグ派敎會の爲にした寄附であつた。會員は百に滿たない少數で、余が新敎會堂を建てゝ寄附しようと申出たけれども餘り少數だからとて斷はられたのでオルガンを一個寄附した。之が端緒になつて諸敎會は爭ふてオルガンの寄附を賴んで來た。即ちピッツバーグの宏壯な加特力大會堂から田舍の小さな農村の敎會に至るまで其數枚擧に遑

主張したのである。

之は黑人種の指導者たる彼の品性を標榜するものである。眞卒にして克已の精神に富んだ英傑として彼に優る人物はない。一切の美德を一身に備へた稀有の人物であつた。斯る純潔高尙な人物と知已になる事は何人に取つても利益である。卽ち人間も其最も高尙な品格を備へた者は此世ながら旣に神性を備へた者といはねばならぬ。若し夫れ現代に於ても將又過去に於ても最低より最高に上つた人物があるかと問ふ者があらば、余は其人物はブーカー・ワシントンであると答へざるを得ない。彼は奴隷より起つて其民族の指導者となつたのであつて、昔のモーゼとヨシユアとを合せて之れを現代化したものと云ふべく、其民族を進歩向上せしめた偉勳はかの兩者に髣髴して居る。

此等の諸學校との關係から余は自然に其役員や理事などと交際することになつたが、例へばハムプトン大學々長ホリス・ビー・フリツセル、ロバート・シー・オグデン、ジョージ・フオスター・ピーボデイ、ヴイ・エヴエリト・メーシー、ジョージ・マクアネエー、ウキリアム・エツチ・ボールドウインなどであるが、惜むべしこのボールドウインは

りませう』と答へた。

『貴下は貴下の寄附行爲に其寄附額の一部分を割いて、私共夫婦の老後扶助料に充てられた事は實に感謝の至りて御座います。然しカーネギー君。かの金額は私共の必要以上て寧ろ我々黑人に取つては大財產て御座います。若し私が之を此儘御受けしますなら、私が從來貧困に甘んじ赤誠を籠めて我が同胞の改善に努めた事も純然たる奉仕の精神に出たものてはなく、爲にする所があつて遣つたものてあるとの誤解を招く恐が御座います。就きましては貴下の寄附行爲中の條項より「指定額」の三字を抹殺し、之に代へるに「相當の手當」を以てする樣に願ひたいのてあります。將來の處置に就いては私は大學の理事諸君に信賴致して居ります。私共夫婦の要する所はホンの僅かて御座います』

余は其請を納れた。而して寄附證書は其通り訂正されたが、ボールドウィン氏が原證書を訂正したものと交換を求めた時にかの立派な人物はそれに反對したさうだ。彼の宛名になつて居る貴重な文書はその儘保存して後世に傳へなければならぬが、之を別に保管して訂正したものを大學の書類綴込に入れる事を彼は

『カーネギーは國家建設者中の一人であつて我が米國をして今日世界の大國たらしめたるは斯る人々の功勞によるものである……彼は溫厚篤實の德を備へた人物で世に稀なる君子であつた。尨大の富は決して彼を冷酷な者となさなかつたのみならず、彼をして彼が青年時代に懷いて居た理想を忘れしめなかつた。彼は事物を裁決するに當つて寛恕、好意、博愛等の德を示し、無限の同情に富み、且つ崇高の情操に滿ちて居た。世間には彼を評して彼は餘り過ぎて始末に困る程の富を擁するに至つたから、之を惜氣もなく撒き散らしたのであるといふが、余は此等の人々に對しカーネギー翁が人知れず實行された幾百の慈善行爲を知られんことを望むのである。』

余等米國人が曾て奴隷として使役した黑人を文明に導かうとの目的をもつて建設された、ハムプトン・エンド・タスケギー大學に余が關係を結んだことは余に多大の愉快と滿足とを與へる源となつた。ブーカー・ワシントンと知已になつたのも此關係からであつたが、此知已は余の珍重する所であつた。余等はワシントンの如き人物卽ち身を奴隷の境遇より起したばかりでなく、其同胞幾百萬の黑人を文明の域に進めた所の人類の此恩人に對する時は宜しく脫帽して敬意を表すべきてある。余がタスケギー大學に對して六十萬弗の寄附をした後間もなく彼は余を訪問して、一片の進言を許して貰ひたいと言はれたから余は『どうぞ、喜んで承

と答へられた。

第二回の寄附によつてこの缺陷が終に塡補さるゝこととなつたが、余は今回の寄附行爲に對する處置を直接ルート氏に一任しない樣に取計つた。斯くしてハミルトン・カーレッジのルート基金（本基金は二十五萬弗に達して居る）は名利に淡白なるルート氏の手によつて到底破壞することの出來ない程堅固のものとなつた。

噫ルート氏は偉人である。而して最大偉人に於て初めて見ることを得る淡白性がルート氏に於て實に著しく顯はれて居た。ルーズヴェルト大統領は若し自分が四つん這になつて、白堊館から國會議事堂まで行くことがルートを大統領たらしむる保證となるならば、自分は喜んで此藝當を演ずると言はれた。ルート氏は諸會社の顧問を務めて居て大言壯語を事とする政治屋ではなかつた。從つて懸河の辯を振つて公衆を動かすには餘り沈着過ぎた政治家であつた。共和黨が此人物を大統領候補者にしなかつた事は愚の至である。

（一）一九二〇年四月二十五日紐育工業俱樂部に開催されたカーネギー記念會の席上でルート氏は一場の演説を試みたが其演説中に左の言があつた。

讀者諸君よ、余は訣別に臨んで卿等が平和を祈求せんことを望む。而して余の欲する平和は必ずしも英雄豪傑の間に行はるゝ平和に非ず。老若男女の各人間に行はるゝ平和なり。『現代に平和を與へよ』と祈るのみならず、各人此祈禱を成就する爲に努力すべし。斯くせば假令世上に爭鬪行はるゝとも祈願者たる卿等の心中に平和あるべし。

コンウエー氏の言は余等に取つて實に頂門の一針ともいふべきものであつて、爭鬪は斷然速に文明國より排除さるべきものである。

オハヨーのケンヨン・カーレッジに於けるスタントン經濟學講座はエリウ・ルート基金と稱する考であつたが、歷代國務卿中の大手腕家と稱へられ又ルーズヴエルト大統領よりは『稀に見る大賢人』との讚辭を受けた同氏は、余の意志を大學の當局に傳へないで其寄附金を始末された樣であつた。其處で余が此謙讓的怠慢を詰つた時にルート氏は笑ひながら、

『御尤も千萬ですが、然し貴下が次回に寄附さるゝ時は斯る怠慢を繰返さぬことを盟ひます』

が、之は果して好成績を擧げた。其後ロックフェラー氏は一般敎育財團と稱する有益の敎育基金制度を設けられたが、余と氏とは最初何等相談をせずして別々に此有望な敎育事業に活動して居たので、時には其結果が相互の爲に不利の事もあつた。ロックフェラー氏は余に其財團に加はることを希望されたので、余は之に加はつて爾來協同一致の方針を取つた爲に、相互の間に大なる便益を得ることになつた。

諸大學に寄附金を投じた爲に賞讃を受くる光榮を得た人々は決して少數では無い。例へば予の同學者たるチャーリー・テーラー氏の如きは其一人である。デイッキンソン大學のコンウエー館はモンキユア・デイ・コンウエー氏に因んで命名されたものである。同氏の自敍傳が最近出版されたが、之に關する世評は『優秀の文學』といふ事であつて、其批評の一節に次の文句がある『此等の兩卷が之を圍繞して居る他の諸自敍傳に較べると宛然瓦礫中の寶玉として机上に輝いて居る』。余は恐る乃公の自敍傳も一瓦礫を追加するには非ざるかを。

コンウエー氏自敍傳の末章が次の一節を以て結ばれて居る。

第二期の總長に再選したことを深く感謝した。余はまた學生が教授會の會員を一人も招待しないで、總長のみを相手に會合する總長の夜と稱するものを催して居たことに感興を覺えた。この會合は極て愉快なものであつた。第一回目の夜會後に同會の書記がドナルドソン學長に告げた話として、同學長が余に傳へたものは次の通りであつた『何某總長は我等に對して、又何某總長は我等に關して何れも講壇の上から話されたが、カーネギー氏は我等の列に加つて我等と共に話された』。

第一流の地位を占めて居る諸大學に援助の手を伸すべきではあるまいかとの疑問が屢々余の腦裡を往來したが余は或る大學、例へば五千人乃至一萬人の學生を有するハーヴァード大學及コロムビヤ大學（一九二〇年に於てコロムビヤ大學は各科を通じて二萬五千の學生を有して居た）などは既に十分發展して居て、之より大きく擴張する事は願はしくない。寧ろ第二流の大學、特にカーレッジの進展を計る爲に資金を投ずる方が餘財の利用法として優つた考案であるとの信念を懐いて居た。從つて余は第二流の大學のみを援助することに決心したのである

聽衆は、大なる感動を受けたが左もあるべき筈である。曾て曾祖父に最初の博士號を與へた聖アンドルース大學は百四十七年の後その曾孫に同樣の學位を遙遙太西洋の向から送つて授與したのである(この學位は單に名譽稱號ではない、ラドクリッフ大學々長に對する實力稱號であつた)。之を授與した人は誰かといへば斯く申すカーネギーで、當時の聖アンドルース大學總長であつた。而して余は實に英帝國の臣民でなくて聖アンドルース大學總長に擧げられた最初の總長であつた。而して余は亦フランクリンと生地を共にし且つフランクリンと等しく米國に歸化したのである。此盛大な祝賀式の式場はフィラデルフィヤ市であつてフランクリンは該市に遺骸を留め、來會者は悉くフランクリンの德を讃美せんとして參列した。祝賀會は實に美はしいものであつて、余は斯る盛會に臨んで思出の多い儀式に與かることを得たのを光榮とする。聖アンドルース大學々長ドナルドソン氏が此企圖を案出せられたことは確かに天來の聲を聞いた爲であると言はねばならない。

余は聖アンドルース大學の學生が余の競爭者を指名せず、滿場一致を以て余を

た。第一回目の會合が終つて告別の際にラング學長は余の手を握りつゝ次の如く言はれた。『蘇克蘭大學々長が如何にせば互に相會して會議を催ふすことが出來るかとは五百年の長年月を要した問題てあります。共に一週間を過した事が其解決になりました。』

學長アグネス・アーヴインに學位授與

一九〇六年スキボの會合に於て起つた出來事の中に特筆すべきことは、ベンジヤミン・フランクリンの曾孫に當る人て、ラドクリッフ大學々長たるアグネス・アーヴイン孃が參列して余等とともに『大學長週』を過し、余等一同に快感を與へられたことてあつた。凡そ百五十年前フランクリンが最初の博士號を得たのは此聖アンドルース大學からてあつた。フランクリン誕生第二百年記念會がフィラデルフィヤ市に於て盛大な式を擧げた時、聖アンドルース大學は世界の諸大學と共に祝辭を送つた。聖アンドルース大學は又其曾孫に對して博士號を贈與した。余は時の聖アンドルース大學總長てあつた爲に同大學を代表して自ら式場に臨んて其學位を與へ、且つ學位章を彼女の肩に懸けた。此儀式は記念會の第一夜立錐の地なき聽衆の面前に於て行はれたが、其時二百通以上の祝辭も披露された。

『地獄の懼は卑劣漢を治むる
絞刑吏の笞なるぞ
己が名譽の拘束を嚴しと感ずるこそ
汝が常に守るべき本分なれ』

聖アンドルース大學生に對するジョン・スチュアート・ミル總長の演説は有名なものであるが、同總長は確かに自己の最善を盡して彼等を指導せんとした。而して同總長が高尙な生活や純潔優雅な歡樂の一助として音樂を奬勵したといふことも記憶すべき敎育法であつて、余の輕驗も之を裏書するのである。

蘇克蘭に於ける四大學の學長幷に夫人令孃等に對してスキボに一週間を過すべく招待狀を發したことは、余等夫妻に取つて頗る愉快な結果を見ることゝなつた。第一回の會合に出席した人々の中には蘇克蘭大學基金管理委員長たるエルジン卿、蘇克蘭事務大臣たるバーレーのバルフォア鄕及令夫人も居られた。爾來『大學長週』は年中行事の一になつたが、この會合によりて互に結び得た親睦は蘇克蘭大學進展に多大の貢献をなした。此會合によつて共同一致の精神が刺戟され

生涯に於て特筆大書すべき出來事であつた。之によつて余は從來無關係であつた最高學府に出入する事となつた。聖アンドルース大學は創立されてから殆ど五百年の歲月を經過した。而してその間連續して名譽總長の地位を充して來た幾多の大人格の後繼者として、余が新任後の第一回目の敎授會を司つた時に受けた印象は、余の生涯中稀に見る所のものであつた。余は數日の中に就任演說をしなければならないので之を準備する爲に歷代の總長の演說集を閱讀したが、其演說に最も驚くべき一節を發見した。卽ち學生に對するスタンレー學長の奬勵演說中に『神學に志す者は須らくバーンスの詩を讀むべし』といふ言葉であつた。蘇克蘭敎會の泰斗であつてヴィクトリア女皇の優遇を享けて居る學者が、ジョン・ノックスの大學に學ぶ學生等に對して斯る大膽な言を發せられたといふ事は、神學と雖も時世の變遷には順應ずべきものであるとの敎訓を示すものであるといふ暗示を與ふるものである。バーンスの詩には眞に敬服すべき處世訓が多いのであつて、其中の第一ともいふべきものは『汝自身の非難をのみ恐れよ』と言ふのである。余は早くも少年時代に於て之を生涯の標語に選んだ。第二は之である。

て確定した。斯る規定が將來必ず有益なるべきを余は信じて疑はない。斯くして本寄附行爲も余が爲せし他の主なる寄附行爲とともに登記されたが、此方法も將來其貴重なることが證明されるてあらうと思ふ。ダムファリンのエルジン卿は喜んで本基金の管理委員長たることを承諾されたが、余が豫め此議をバルフォア首相に計つた時に首相は何の躊躇も無く、『貴下は大英國中にこれ以上の適任者を得ることは出來ますまい』と答へられた。

之て問題に段落が附いたが、次に考へねばならぬことは、エルジン卿に匹敵すべき管理者を何處に求め得らるゝかと云ふ點てあつた。

ダムファリン市の自由市民權を授與された人々の中て今日生存して居る者は、サー・ヘンリー・キャムベル・バンナーマン、エルジン卿、ジョン・ロッス博士及余の四人丈てあるが、其四人共悉く蘇克蘭諸大學の管理者てあるといふことは一種の奇遇てある。ダムファリン市が市の歴史上破格の例を開いて婦人に自由市民權を授與したのは卽ち余の妻てある。而して妻は余と等しく誠實な市民てある。

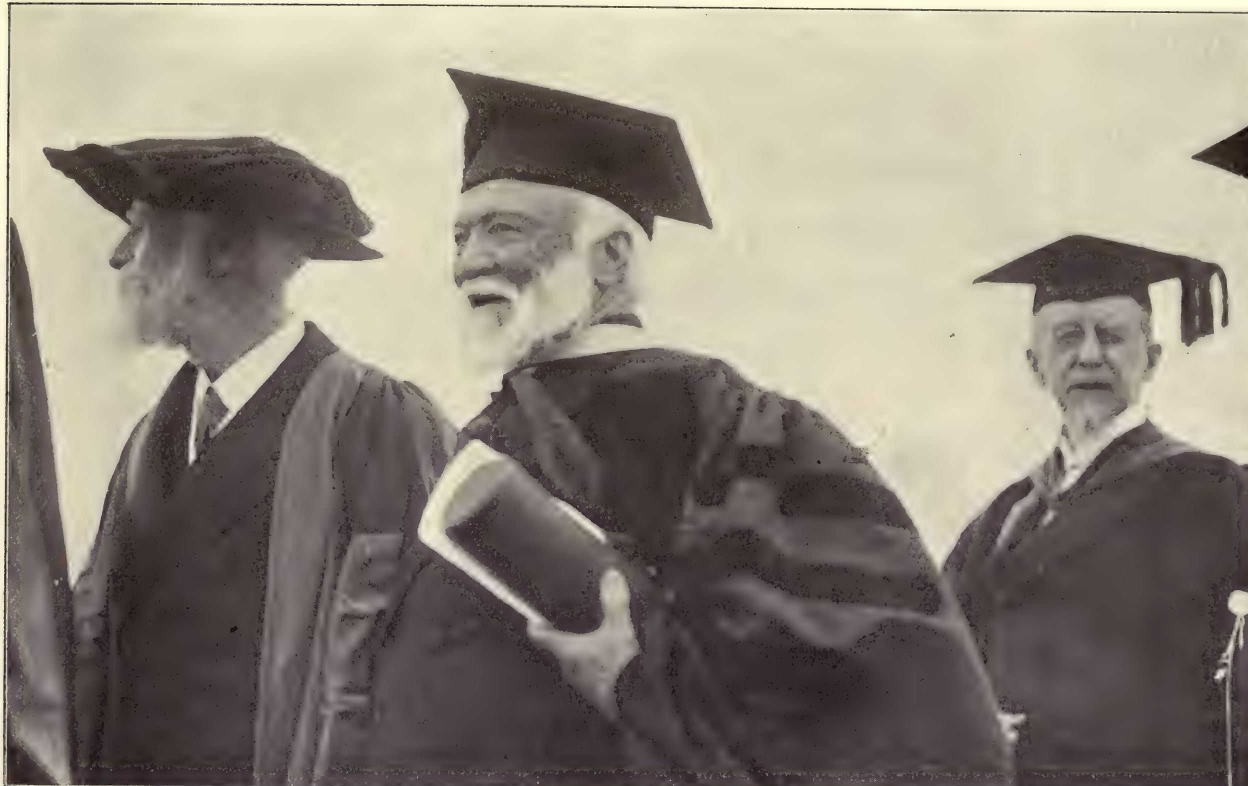
一九〇二年余は聖アンドルース大學の名譽總長に擧げられたが、此事實は余の

事は管理者會の多數決に一任すべしと言つたが、バーレーのバルフォア氏、エルジン卿及バルフォア首相も余の意見に贊成された。然し同時に首相は『余は遺言者が豫め斯る權利を遺言執行者に與へた例を見た事がない。之は破格の行爲であつて慣例を重んずる者の取るべき方針てあるかどうか疑はしい』と言はれた。

これに對して余は答へた『バルフォア君の御說も御尤てすが、此處に御列席の諸卿の如く時世を達觀して一代も先の爲に律法を制定し得る團體は他に見ることが出來ません。實を申せば自分等が現に屬して居る時代の要求に應ずる樣な律法を制定することてさへも、場合によつては眞に成功する者が少ないほど容易ならない難事業てすからな。』

一座笑聲を以て滿たされたが、首相の如きは特に感興を深からうせられた。而して『如何にも御尤の御說てあつて、かゝる卓見を有せらるゝ寄附者は貴君を以て嚆矢と致します』と言はれた。

余は一切の決議は過半數たるべしと提案したが、バルフォア卿が三分の二以上とする意見を出されたので、エルジン卿の贊成があつて、遂に滿場一致の承認を經



カーネギー氏とブライス子爵

相、ヘンリー・キャムベル・バンナーマン（後に首相になつた人）・ジョン・モーレー（現在子爵）、ジエームス・ブライス（現在子爵）、エルジン伯爵、ローズベリ卿、リー卿、ショウ氏（現在ショウ卿）、ダムフアリンのジョン・ロッス博士等であつて、ロッス博士の如きは其同僚及同博士に私淑する人々に甚深の感化を與へた活動の權化ともいふべき人物てあつた。余は開會に臨んて、最近發表された敎育委員會議の報告を讀んて見て蘇克蘭の諸大學の敎授會に基本金を寄附することが出來なかつたので、止むを得ず諸君に管理を願つた譯てあると言つた。さうするとバルフオア議長は笑聲一番『御尤てす、一錢たりとも御寄附は出來ますまい』といはれたが、敎育委員の一人たるエルジン卿も全く之に同意された。

寄附行爲の要領ともいふべきものが朗讀されたが、エルジン卿は之に關して右要領が尙ほ一層的確て具體的てない以上は、本寄附金を受納することが困難てあらうと言はれた。而して同卿は管理者の一人として如何なる任務を果すべきかを確知して置きたいと言はれた。余は寄附行爲の目的及本基金の使用法に關しては、時世の變遷に應じて蘇克蘭敎育界の要求に順應し得る樣取計らはれたく、萬

智識の增進に貢献した勳功は賞讃に餘りある。以上の均霑者や其寡婦等から余に送られた書面は溫情溢るゝともいふべきものであつて、余は何物を捨てゝも此等を保存せずには居られない。余にして萬一憂鬱症に襲はるゝ樣なことがあれば之を治療する唯一の療法は、實に此等の書面を再讀することてあらう。

ダムファリンに於ける余の友人トマス・ショウ氏(今は貴族に列なつて居るショウ卿)は英國の一雜誌に投書して、蘇克蘭には自分等の子供に大學敎育を施したくも學資を與へる餘裕がない爲に困つて居る者が少なくない。尤も中には多大の犧牲を拂つて其目的を達しつゝある者がない譯でもないと言はれた。余はショウ卿の論文を熟讀した後五分利公債額面一千萬弗を寄附する決心を起した。而して之より生ずる年利十萬四千磅の半額をば有爲な苦學生の學資に充當し、殘の半額をば大學改善費に充當することにした。

此基金(蘇克蘭大學カーネギー基金)管理者の第一回會合は一九〇二年エディンバラーに於ける蘇克蘭事務大臣官邸に於て開催されて、バーレーのバルフオア卿が議長てあつた。當日の會合は知名の士を網羅して居た。例へばバルフオア首

大學教授恩給基金

諸學校の教授中本基金に均霑する時期に達した人々もあり、且つ此等の諸教授が過去に於て斯界に貢献する所甚大であつたことを熟知して居る余に取つては本基金は貴重なものである。凡そ教育の技能の如きは人間の技能中最も貴重なものの中に數へらるべきものであるが、事實は之に反して、教育の技能ほど最も不公平な否寧ろ侮蔑的待遇を受けたものはあるまい。青年子弟の教育に全生を捧げて居る教育家の報酬は如何にも少ないものである。余はコーネル大學の一理事に擧げられて初めて教育家の報酬が低廉で、大概は實業界に於ける事務員の其れに較ぶべきものであるといふ事を知つた。教育家が老後の爲に貯蓄するなどとは思ひも寄らぬ事である。從つて恩給制度の設備がない諸大學に於ては、老朽教授淘汰の必要に迫られても之を斷行することが出來ないで、かゝる教授を現職に留めて置かねばならないといふ羽目に陷るのである。

本基金の効力に就ては疑の餘地がない。（一九一九年に於ける本基金の總額は二千九百二十五萬弗であつた。）最初に公表された均霑者の目錄がこれを證明して居る。此等諸教授は學者として世界的名聲を有する人々であつて、彼等が人類

てテーラーとは如何なる人物かと訝る人々は彼がリーハイの孝子で、同胞人類の福祉の爲に宣傳する福音の使徒であつたのみならず一身を捧げて之が爲に働き、人類史上最も善良なる人物の一人であつたことを信ずべきである。恩給局總裁は實に斯の如き人物であつた。

第二十章　教育基金及恩給基金

一九〇五年六月大學の老教授等に對する恩給として寄附したる（カーネギー奬學基金）一千五百萬弗は第四の重要なる寄附金であつて、之を管理する爲に合衆國に於ける諸學校の校長中より二十五人を擧げて理事とする必要が起つた。而して以上二十五人中病氣のため缺席したシカゴ大學總長ハーパー教授を除いて、二十四人が理事會組織の目的を以て余の家に集まつた時に、余は其中の數名と特に相親む機會を得た。フランク・エー・ヴァンダーリップ氏は曾て華盛頓に公務を取られた經驗を有つて居られたので最初から有力な援助を與へられた。理事長ヘンリー・エス・プリッチエット博士は本會に缺くべからざる人物であつた。

「テーラー館」

主唱者てあつた。余は何も言はずに大學總長に手紙を出して其建物の命名を余に一任する條件なら建築資金を寄附しようと申出た。總長は之を承諾し余は之を『テーラー館』と命名した。チャーリーは之を發見して早速抗議を持出して來た。之は彼を物笑の種子にするとか、彼は單に平凡な卒業生たるに過ぎないとか、彼にはその名を斯く名譽ある地位に公表する資格がないとか、頻りに陳辯した。余は彼の窮狀を非常に面白く感じて其娓々たる辯解の終るを待つて、次のやうな趣旨て答をした。余が是非共『テーラー館』と命名する主張をしたら多分幾らか物笑の種子になるかも知らんが、リーハイの爲と思へば奮て自己の感情を犧牲にすべきてあらう。彼が高慢心の爲に理性を失つて居ないならば母校の爲にその名を貸すことを惜まない筈だ。何れにしてもテーラーは大名を揚げるほどの人物てない。こんな事て騷ぎ立てるのは畢竟抑へることの出來ない高慢心の爲なのだ。彼はこれに克たねばならぬ。決斷は一に彼れの心にある。テーラーの名を犧牲にするかリーハイを犧牲にするか彼の心一つて定まるのだ。けれども『テーラーと命名させなければ寄附を出さない』。到々彼は承諾した。他日此建物を參觀し

與へることとである。之は既に其發端に於て立派な働を示したが、その目的と奉仕とが世間の了解を得るに從つて年一年と好評を博するてあらう。今日の處米國に義勇基金の恩給を受けて居る勇士又は其家族の數が一千四百三十ある。

義勇基金財團總裁としてカーネギー團の老練家チャーリー・テーラーを余は適任と認めたが彼は少年時代からカーネギー團で身を起した人物であつた。彼は月給として一仙たりとも取ることを望まない。彼は此事業を大いに愛好して之と共に生きて行くことを許されさへすれば、自腹を切つて大金を出したいほどの熱心家てあつた。所謂適材を適所に置いた譯て、彼は亦ウキルモット氏の有力なる補佐を受けてカーネギー勞働恩給(カーネギー救濟基金)及余が舊管理局長時代に設けたる管内鐵道從業員恩給の管理をも引受けたが、之は三大救濟基金てあつて共に他人の便益を計る有益な施設てある。

常に他人の爲に計る事を余に力說して居たチャーリーに一日余が復讎した事がある。彼はリーハイ大學の卒業生て校友中の最も忠實なる母校擁護論者の一人てあつた。リーハイ大學は建物一棟の增築を希望して居たが、チャーリーは其

又は殺したが、現代の英雄はこれを助け又は救ふ。而して其處に肉體的勇氣と道德的勇氣、野蠻と文明との區別がある。前者の階級に屬する英雄は遠からず滅亡すべきものである。なぜならば我々は結局互に殺し合ふ人々を互に食ひ合ふ食人人種同樣と認むることになるからである。けれども後者の階級に屬する英雄は神々しい勇氣を發揚する者であるから、人類の地球上に存在する限り死滅しないのである。

義勇基金は結局主に恩給基金と成るであらう。これは既に多くの勇士又は勇士の妻子などに恩給を與へつゝある。之について最初異樣な誤解が起つた。多くの人は其目的が義勇行爲を刺戟するにあると認め、勇士等が報賞を獲る爲に義勇の働をなさんとするの誘導を受けるであらうなどと考へて居たが、これは全く余の心に浮ばない事で沒常識の愚見である。眞の勇士は報酬などを思はない。彼等は唯感激して同胞人類の危急を救ふのみで自身のことなどは決して考へて居ない。基金の目的は最も適切な方法で勇士が若し廢疾不具となれば之に恩給を與へ、他人を救ふために自ら生命を失ふた者ならば其遺族を助ける爲に恩給を

朕は卿が其故山たる我國に寄附したる偉大なる公共的諸設備に對して卿の義俠を感謝せんと欲したること久しかりき寄附は其物の賞讃すべきは勿論なれど之が亂用を豫防すべく卿が用ひたる周到の注意と思慮とに至りては誠に賞讃すべきものあるなり朕は卿の最も寬仁なる恩澤と之が我國に及ぼさんとする偉大なる感化とに關し朕が之を嘉賞する衷情の熱切なるを卿に告げんと欲す右嘉賞の證左として朕の像を卿に贈與す卿願はくは之を受けられよ

一九〇八年十一月二十一日於ウヰンゾル宮城

エドワード

カーネギー殿

米國新聞紙は初め義勇基金の功績を疑つたものもあつて、初年度の事業報告に對しては兎角の批評を加へたが、今は總て過去の事になつて本基金の働きが熱心に稱讃されて居る。之て既に戰に克つた。而して或時節が來て亡ぶるとしても其れは何時のことか判らない。過去に於ける野蠻時代の英雄は同胞人類を傷け

年を小舟に渡したる後はや心臓痲痺にて事切れたる由彼は愛らしき若き妻と小さき男の子を遺して空しくなりたる者に御座候寡婦は既に義勇基金の補助を受け小さき商賣を營みそれにて露命を繋ぎ居り小童も敎育の資金を得たる由なるが右少年は至つて怜悧なる者に御座候之は唯一例に有之候

ワレンティニ(内閣文官首席)は最初斯る基金の必要を疑ひ居り候も今は非常に熱誠なる賛成者と相成り其管理委員は總て注意周到に選拔せられたる人々のみにて皆熱心に基金の運用を最も善良に叉賢明に處理すべく献身奉仕致居り且評議の爲に多くの時間を犧牲に供し居候由ワレンティニの談話に有之候

各委員は英佛兩國の基金委員とも文書を往復し隨時報告を交換することと相成り事業上相互に提携經營する計畫を定め候由委員は米國基金の報告に深き感興を起し多く學ぶ所ありたる由に御座候云々

英國王エドワード陛下も深く基金の設備に感興を起させられ、余が故國に寄附したる此基金其他について特に感賞の御趣意を以て親書を賜はつた。之は余が深く珍重する所のものであるから特に揭げておく。

英國皇帝陛下

獨逸皇帝陛下

れた譯でもないから余は此基金に對して父の子に對する樣な樂しい感じがする。余の知れる限り古來斯くの如き基金を設ける考をした者はなかつたので、『我子』として自分が生み出した考案であると云ふても過言でない。後に余は之を故國即ち大英國に及ぼして、ダムフアリンを中心に、カーネギー・ダムフアリン・トラストの理事が其管理に任じて非常に立派な成績を擧げた。時機の至るを待つて之を佛蘭西、獨逸、伊太利、白耳義、諾威、瑞典、瑞西、丁抹等にも及ぼした。

獨逸に於ける基金の運用について余は伯林駐剳米國大使デヴイツド・ジエーン・ヒル氏から一通の書簡を受けたが、左の數節を掲げて其一斑を示さう。

本書の眼目は陛下が獨逸義勇基金の運用に關して如何ばかり歡喜あらせられ候かを貴下に御通知申上ぐることに御座候陛下は熱烈に嘉賞せられ之を設けたる貴下の聰明と博愛とを最も深く稱揚せられ候陛下は曩に是程の重要なる働あるものとは信じられざりしが眞實に感激すべき實例を數々お話あらせられ基金少かりせば全く救助の道なからむと仰せられ候其一はある青年が小童の溺死せんとする所を救ひ人々が彼を水中より引上げんとしたる時彼は其少

温良靜謐の學者すら眞理のために
猛虎のごと宗教會議を挑みたり
平和の裡に律法を司る法官も
忽ち世界の喝采を博せる例あり
ちよろづの人の生命を救はゞやと
若き身をペストに捧げし醫者もあり

此趣意て成立つたのが五百萬弗の義勇基金で、之は義勇の行爲をした當人に報賞を與へ、又は其同僚に奉仕し或は之を救はんとして生命を失つた勇士の家族を扶養し、又事故の爲めに窮乏に陷つた者を扶養する資金として雇主其他の人々が支辨する救助費を補ふ目的てあつた。一九〇四年四月十五日に設定した此基金は何れの方面から考へても立派な成功たることが明かになつた。誰から注意さ

其時は、嗚呼其時は早や世の中に
勇士のわざ、爭ひ、は無からむ』と
いふ言の葉の絶えぬ間に細き手は
健氣に勝ちぬ巨人、『害惡』と鬪ひて
古來の犧牲、幾百萬の仇を報いぬ

男子の辱かしめに巖(いはほ)の如くいかめしく
凄くもかよわき女子は逆へぬ
幼兒(をさなご)は苦みつゝも聲を荒らげなば
母の心を傷めやせんと耐へ忍びぬ



ピッツバーグに於けるカーネギー館

るならば判然と見えるだらうと余は確聞して居る。

第三の快擧は義勇基金の設定であるが、余はこれには余の全心を傾注した。仄聞する所によれば是より先ピッツバーグの石炭坑に重大事變が起つて、前任炭礦監督テーラー氏は當時他の業務に從事して居たにも拘はらず、危急の場合何かの助力を與へることがあらうとの望を懷いて直ちに現場に駆付けた。急を聞いて我も我もと集つて來た有志者を指揮して彼は地下に埋つて居た坑夫等を救ふべく坑内に降りたが、遺憾千萬にも、義勇の隊長たるテーラー其人は生命を失つたのである。

余は何うしても此事を心から忘れることが出來なかつた。豫て余の最も親密な友人リチャード・ワトソン・ギルダー氏が左の如き穿ち得た美麗な詩を余に送つたことがあるので、余は其事故の起つた翌朝それを再讀して愈々義勇基金設定の決心をしたのである。

平和の時代に

『戰鼓の音、鬪の叫、地上に止みし

第三回目の快擧

周遊船『カーネギー』號が遣つて居る無類の奉仕と比肩しても善いと思ふものは、加洲に於ける海拔五八八六呎の高山ウキルソン山頭に建設された觀測所てある。主任はヘール教授てある。或年彼は羅馬に開かれた世界有數の天文學者會議に出席して驚くべき發見の報告をした結果、列席の學者等は次の天文學者會議の會場をウキルソン山嶺と決定し而して此決議は實行された。

ウキルソン山と云ふのは世界に一つしかない。地下七十二呎の深さて新星の寫眞を取つたが、其最初の原版には新世界が澤山――余は十六と覺えて居る――發見されて居た。二番目の原版には人類の視界に紹介された新世界が六十寫つて居たと思ふ。三番目の原版には百個以上を算し、其うちの幾個かは太陽の二十倍大と云はれて居る。又或者は其距離が地球から非常に遠いので其光線が人類に達するに八年を要すると聞いては我々が自然に頭を垂れて『我等の知る所は知られない所ののに比べれば無きが如くてある』と囁くの外はない。今世界に存在する何れのものに比べても三倍大と稱する彼の巨大な望遠鏡が使用される場合となれば何んな新發見が出來るてあらう。月の世界に萬一人間が住んて居

周遊艇「カーネギー」號

周遊艇『カーネギー』號は木材と青銅とて建造されたものであるが、常に世界を週遊して從來の測量を訂正する世界的奉仕を遂行しつゝある。公海測量は從來羅針盤の不同の爲め誤謬の結果を生ずるものが多い。青銅は磁力に感じないが、鐵と鋼とは強く之に感ずるから、從來の觀測は誤謬に陷り易かつたのである。其著しき一例はキユーナード會社の一汽船がアゾアース群島附近で坐礁した事である。『カーネギー』號の船長ピータースは本件を試驗することを得策と考へて之を實施したが不幸なるキユーナード汽船の船長が英國海軍省の海圖に示してある航路に船を進めて居たので船長の過失でないことが明かになつた。つまり本來の測量が誤つて居たのであつて羅針盤の不同に歸因した誤謬は直ちに訂正されたのである。此訂正は沈沒した船を有つて居た國々に報告した幾多の訂正中の一つに過ぎないが、此等の國々が厚き謝辭を送つて呉れたことは我等に對する多大の報酬である。余は自分の寄附行爲中に我が年少共和國が聊かなりとも先進國の恩に報ゆる樣にあつて欲しいとの希望を漏らして置いたが、此希望がボツ〳〵實現されつゝあるのを見て余は實に欣快の至である。

『これ以上の人物は得られまいよ』と評された。彼は此計畫を大いに賛成されたが、一九〇四年四月二十八日國會の決議を經て財團法人の組織と成つた。其決議案は左の如くである。

諸般の調査、研究、發見及人類生活の改良に對する智識の應用を最も廣汎にして最も自由なる方法に於て遂行することを奬勵する爲、特に科學、文學もしくは美術の各部門に亘りて調査を行ひ、資金を補給し、援助を與へ、且つ此目的を以て諸國の政府、大學、專門學校、學會、個人等と協議を遂ぐること。

ギルマン博士

初期の館長としてダニエル・シー・ギルマン博士を選定するに就ては余はビリングス博士の指導に負ふ所がある。ギルマン博士は數年の後逝去されたので、ビリングス博士は其後任として現任のロバート・エス・ウッドワード博士を推薦されたが、非常に好成績を擧げて居る適材である。博士の如き人物が長く館長の任に留まられんことは余の衷心から願ふ所である。本館の事業成績は隨時に公刊されて世間周知の事實であるから、本書に記述する必要はあるまいと思ふ。けれども其うち二つだけは何となく無類の偉勳と思はれるから爰に特記しても宜しからう。

日に余自ら開館式を司つた。ピッツバーグは余が資産を作つた所で、此諸建築のために余の寄附した金額は既に二千四百萬弗に達して居るが、市は余に與へたものの中から唯一小部分を取戻した譯て、實は之を獲るだけの權利を十分に有つて居るのである。(一)

ピッツバーグのカーネギー館に寄附した金額は合計約二千八百萬弗である。

第二回目の巨寄附

第二の巨額な寄附は華盛頓のカーネギー館建設の爲てあつた。一九〇二年一月二十八日余は五分利證券て一千萬弗を寄附したが、其後事業の成績に照らして漸次に追加寄附をしたから、合計二千五百萬弗の寄附額に達した。余はお膝下の事業だから自然ルーズヴエルト大統領に相談したいと思つた。又出來るならば國務卿ジヨン・ヘイ氏を勸誘して理事會の議長になつて貰ひたいと願つたが、氏は直ちに快諾された。氏の輔佐役として理事に就任した人々は余の舊友アブラム・エス・ヒユイツト・ビリングス博士、ウヰリアム・イー・ドッヂ、エリユー・ルート、ヒッジンソン大佐、ディー・オー・ミルス、エス・ウイア・ミッチエル博士及其他であつた。

余が就任を承諾した右諸名士の名簿をルーズヴエルト大統領に示した時、彼は

『これ以上の人物は得られまいよ』と評された。彼は此計畫を大いに贊成されたが、一九〇四年四月二十八日國會の決議を經て財團法人の組織と成つた。其決議案は左の如くである。

諸般の調査、研究、發見及人類生活の改良に對する智識の應用を最も廣汎にして最も自由なる方法に於て遂行することを奬勵する爲、特に科學、文學もしくは美術の各部門に亘りて調査を行ひ、資金を補給し、援助を與へ、且つ此目的を以て諸國の政府、大學、專門學校、學會、個人等と協議を遂ぐること。

初期の館長としてダニエル・シー・ギルマン博士を選定するに就ては余はビリングス博士の指導に負ふ所がある。ギルマン博士は數年の後逝去されたので、ビリングス博士は其後任として現任のロバート・エス・ウッドワード博士を推薦されたが、非常に好成績を擧げて居る適材である。博士の如き人物が長く館長の任に留まられんことは余の衷心から願ふ所である。本館の事業成績は隨時に公刊されて世間周知の事實であるから、本書に記述する必要はあるまいと思ふ。けれども其うち二つだけは何となく無類の偉勳と思はれるから爰に特記しても宜しからう。

日に余自ら開館式を司つた。ピッツバーグは余が資産を作つた所で、此諸建築のために余の寄附した金額は既に二千四百萬弗に達して居るが、市は余に與へたものの中から唯一小部分を取戻した譯て、實は之を獲るだけの權利を十分に有つて居るのである。(一)

(一)ピッツバーグのカーネギー館に寄附した金額は合計約二千八百萬弗である。

第二回目の巨寄附

第二の巨額な寄附は華盛頓のカーネギー館建設の爲てあつた。一九〇二年一月二十八日余は五分利證券て一千萬弗を寄附したが、其後事業の成績に照らして漸次に追加寄附をしたから、合計二千五百萬弗の寄附額に達した。余はお膝下の事業だから自然ルーズヴェルト大統領に相談したいと思つた。又出來るならば國務卿ジョン・ヘイ氏を勸誘して理事會の議長になつて貰ひたいと願つたが、氏は直ちに快諾された。氏の輔佐役として理事に就任した人々は余の舊友アブラム・エス・ヒユイット・ビリングス博士、ウヰリアム・イー・ドッヂ、エリユー・ルート、ヒッジンソン大佐、ディー・オー・ミルス、エス・ウィア・ミッチエル博士及其他であつた。

余が就任を承諾した右諸名士の名簿をルーズヴェルト大統領に示した時、彼は

式に於て絲を備へ給ふた。紐育公立圖書館のジエー・エス・ビリングス博士は、余の代理人として一擧に五百二十五萬弗を紐育市中に寄附して、六十八個の支部圖書館設立の計畫を成立させた。其の次にブルークリンに二十個設立の計畫が出來た。

余の父は前にも述べたがダムフアムリン最初の圖書館設立五人組の一人てあつた。彼等は各自少しばかりの藏書を持寄つて彼等よりも讀書の資力不十分な隣人の利益を計つたのてある。余は父の模範に倣つて故郷の町に一個の圖書館を寄附したが、其基礎石を据えたのは余の母てあつた。されば此公共圖書館は實に余の寄附の嚆矢てあつた。其次の寄附はアレゲニー市に對する公共圖書館一個と會館とてあつた。アレゲニー市は米國に於ける余等の第一の郷土てある。ハリソン大統領は親切にも華盛頓から余と同行して此等建築の開館式を主宰された。其後直ちにピッツバーグからも圖書館寄附の請求があつたので之に應じた。此圖書館は漸次に擴張されて構內に博物館、美術館、實業學校、女子青年收容のマーガレット・モリソン學校が建つ樣になつた。以上の諸建築は一八九五年十一月五

は居られなかつた。此離別は實に悲しいものであつた。左様ならのうちには悲痛なる告別の意が籠つて居た。

數ヶ月の後紐育に歸つたが頗る殺風景な感に打たれた。上陸の際波止場に舊友『野郎共』(職工)數人が歡迎に來て居たのを見て大いに愉快を感じたが變化は爭はれない。提携社員としての交際は斷絕したが友人としての親交は繼續して居るといふ事はせめてもの慰藉である。否得難い慰藉である。それにしても何か物足りない所があつた。然し今や余は餘財を賢く分配する自分免許の大事業に全身を捧げねばならない秋に際會して居るから、これが余に間斷なく深い興味を與へることとであらう。

スコテイッシユ・アメリカンには、豫て度々金玉の文字を發見して最も貴重な雜誌と思つて居たが、或日偶然余の眼が一行の格言に留まつた。

『神々は織り懸けし機には絲を供へたまふ』

この句は殆ど余の爲に直接授けられたかの如く見えた。之は余の胸に深く宿つた。而して余は直ちに第一の機を織るべく決心した。果して神々は適當な形

アンドルー・カーネギー君の類例なき巨額の寄附金に對して誠實なる感謝と敬意とを表すること。

同君が天壽を全うせられて其事業の美果を樂まれんことを熱心に希ひ且祈ること。

代表委員長　ジェームス・スコット
代表委員書記　ルイス・エー・ハッチンソン
代表委員　ジェームス・デーリー
同　上　アール・シー・テーラー
同　上　ジョン・ヴイ・ワード
同　上　フレデリック・ヴユーカー
同　上　ジョン・エム・ヴエー

其後間もなく余は歐羅巴へ向ふことになつたが、何時もの樣に同志社員の或者は汽船まで見送りに來て告別をして呉れた。だが何と云ふ變化であらう。噫實に言ふに言はれぬ嚴肅な變化が起つたことは爭はれない。余はそれを認めずに

一九〇三年二月二十三日
於ペンシルヴァニヤ・マンホール

代表委員　輪轉工　ハーリー・エフ・ローズ
同上　鍛冶工　ジョン・ベル(小)
同上　時間掛　ジエー・エー・ホルトン
同上　電氣工　ウオルター・エー・グレーグ
同上　構內掛　ハーリー・キユーサック

紐育市
アンドルー・カーネギー殿

ルーシー鎔鑛爐職工等は左の謝辭を彫刻した美麗な銀牌を余に贈つて呉れた。

アンドルー・カーネギー救濟基金に關するルーシー鎔鑛爐決議文

アンドルー・カーネギー君は其偉大なる博愛の精神を以てカーネギー會社使用人等の便益に供する爲め『アンドルー・カーネギー救濟基金』を寄附せられたり依てルーシー鎔鑛爐使用人等は特別會議を開きて左の如く決議したり。

抵當五分利付證券四百萬弗寄贈仕候右寄附の目的は事故の爲の罹災者を救濟することと並に老齢扶助の必要ある者に少額の年金を贈ることとに御座候之に添へて同様の證券一百萬弗は其利息を以て我社勞働者の爲め豫て寄附致候圖書館及會館等の維持費に充當する目的にて寄附致候　敬白

之に對してホームステッド職工等は左の答辭を呈した。

拜啓ホームステッド製鋼工場使用人一同は代表委員連署をもつて『アンドルー・カーネギー救濟基金』設定によりて貴下の一同に示されたる仁惠に對し甚深の感謝を表し度右基金運用に關する第一年目の報告書は去月一同に提示せられ候貴下が部下職工一同に對して常に示されたる同情が如何に強く彼等を感激せしめしかは到底言語に盡し難き所に御座候貴下が幾多の方法を以て我等の福利を計畫なされ候うち此『アンドルー・カーネギー救濟基金』こそは第一の價値あるものと存候余等は前途の希望喑憺として落膽の淵に沈みたる家庭に其憂愁を輕減し其希望と氣力とを新たならしめたる實例を現に目睹したる次第に御座候　敬白



チャールス・エム・シュワッブ

して不當の要求てはなかつたと云ふことが財界の實况に照らして明白になつた。けれども前に立證した樣に余は分配の工夫に益々多忙てあつたからそんな事を省みる遑はなかつた。

（一）カーネギー製鋼會社はカーネギー氏の申出た價格でモルガン氏が買ふた。交渉價格より高く賣付けようとしてカーネギー氏が二の足を踏んだ等と世評があつたが、一九一二年一月の下院委員會に臨席してカ氏は此事を明かにした「私は公正の價格で賣らうと考へた。卽ちモルガンの自由採擇に一任したのである。シュワップが行つて交渉した。私は本件に關してモルガンにも誰にも會見しなかつた。兩者の間に一言の相談もなかつた。唯私が覺書を出してモルガンが其れを至極公正と認めたのである。社内の者から一億萬弗多く要求すべきだと幾度も注意されたが、要求さへすれば容易く取れたと思ふ。カーネギーが高賣を强制する等の世評は之で一切打切にして貰ひたいと思ふ。」

社員よりの書面

余の分配手始めは我社工場の勞働者に與へたものてあつたが、左の書簡と書類とは其寄附の内容を語つて居る。

一九〇一年三月十二日紐育より

拜啓小生實業界引退に際し先づ第一着に小生の收益中より平素一方ならず小生の成功に貢献せられたる勞働者諸君に對する甚深の謝意を表するため一番

『餘る寶は散らせかし
人毎足らば幸あらむ』

恰も此時卽ち一九〇一年三月シュワップ氏はモルガン氏の意を傳へて、余が眞實實業界引退を希望して居るかどうか知りたい、又さうならば相當の運びが出來ると余に話した。彼は又我社員一同の意見も聞いた所が、モルガン氏の提出條件に心を動かして賣つても善いとの意嚮であると言つた。余はシュワップ氏に社員が其意見なら余も同說であると返答したが、結局賣却することになつた。

其頃投機者流の詐僞が旺んに行はれて、古くなつた鐵鋼工場を安價に買占めては法外な價格で世間知らずの買手に賣付けたりして、百弗の株式が二束三文に賣飛ばされる場合もあつたので、余は普通の株券なら幾何になつても賣らないと主張した。普通の株劵を取つて賣つたらモルガン氏が後に余に話した樣に余は約一億萬弗の五分利付證劵を餘計に取ることが出來たと思ふ。(一)余等の製鋼事業はそれほど盛況で、又それほどの通貨價格があつたのである。其後普通株劵が引續いて五分の利廻りになつて居る所を見ると、其一億萬弗と加算して要求しても決

し更に增收の見込が驚くべきほどであつた。我社の後繼者たる合衆國製鋼會社は買收の後間もなく一ヶ年の純益六千萬弗を擧げて居たが、余等の計算では若し賣らずに繼續して居て擴張方針を遂行すれば年額七千萬弗の收益があらうと考へられた。

(一)「富の福音」(一九〇〇年紐育センチユリー・コムパニー出版)は一八八六年より一八九九年までの間に雜誌の論文として掲載されたものを集めたので、即ちユース・コムパニオン、センチユリ・マガヂーン、ノース・アメリカン・レヴユー、フオラム、コンテムポラリー・レヴユー、フオートナイトリー・レヴユー、ナインテーンス・センチユリー、スコツテイツシユ・リーダー等に出たものである。グラッドストンはノース・アメリカン・レヴユーに出たものを英國で再版したいと希望したが、ペルメル・ガゼツトに載せられて「富の福音」と表題された。グラッドストン、カーデイナル・マンニング、ヒユー・プライス師、ハーマン・アドラー博士などが之を評論し、カーネギーが之に答へたものである。

鋼は既に王位に登つて總ての劣等材料を驅逐しつゝあつた。鋼業の前途は洋洋たるものであつたが、余自身の關係から言へば余の眼前に控へて居た分配事件は老人として精一杯の重荷であることを余は知つて居た。例の沙翁は其獨得の怪力を此思想に觸れて左の對句を詠じた。

は蘇克蘭から打電してシュワップ氏をホームステッドに戻すこととの急務を社員に警告した。彼は其少し前に昇進してエドガー・トムソン工場に轉じたのである。彼はホームステッドに戻つた。彼は余等の仲間に『チャーリー』と呼ばれて可愛がられて居たが、該工場に着任するや否や迅速に秩序と平和と協調とを回復した。彼が若し該工場に初めから留任して居たら大した面倒は多分起らずに濟んだであらう。『チャーリー』は勞働者を愛好し彼等も彼を愛好して居た。けれどもホームステッド工場にはまだ不滿足な分子が殘つて居た。それは元、我社の諸工場から相當の理由で解雇され、我社の新工場買收前に口を見付けて其處に這入り込み其儘我社の使用人に成つた連中である。

第十九章　富の福音

拙著『富の福音』(一)が出版された後、余は富を造る努力を斷然止めて書中の敎訓を實行する必要が明かになつた。そこで余は蓄積を止めて之に比すれば無限に重大で又困難な分配事業を始めることとした。余等の利益は旣に年額四千萬弗に達

分配事業の開始

した。

『諸君の考が惡るかつた。社員の提案は非常に寛大な條件であつたから之を承諾すべきであつた。私が居合せてもあれほどの條件を出したかどうか判らないよ。』

すると輪轉工の一人が答へた。

『イヤ、カーネギーさん弗の問題ぢやないんですよ。僕等は貴君なら蹴られても構はないが、他の人ぢや髮の毛にだも觸れさせないんですからな。』

人生の實務を處理するには勞働階級との交渉ですら感情が之ほど與かつて力あるものだ。勞働者の心理を解せない人は大抵此事を信じないが、勞資不調の一半は確かに賃銀問題の爭點に無干係であると余は固く信ずる。雇主が使用人の立場を了解しないこと又親切な取扱をする用意を缺くことが寧ろその原因である。

罷業側には起訴された者も多くあつたが、此等は余の歸國を待つて直ちに取下の手續をした。從來の舊職工で暴行に加はらなかつた者は凡て復業させた。余

としては殆ど言ふに足らないほどしかない。妻子の保健に必要なものすら殆どない位で、病兒があつても適當な手當をすることは出來ない。そこで我々の警護を要する者は資本ではない、孤立無援な勞働階級である。明日にもせよ余が實業界に復歸するならば勞働紛擾などは余の精神を煩はすまい、寧ろ貧窮に對する温情又往々心は正しくも他人に誤られた勞働者に對する溫情などが余の心を滿たして之を和らげるであらう。余の心を和げることは軈て彼等の心を和げる結果になるであらう。

閑話休題、ホームステッド罷業事件の後一八九二年に余がピッツバーグに歸つて、工場を視察した。その騷動に加はらなかつた舊來の職工などに多く面會した。そこで彼等は余が米國に居たならば罷業は起らなかつたらうとの觀測を洩らした。そこで余は彼等に余の意見を聞かせた。會社は十分の條件を出してあつたらう、また彼等の電報が蘇克蘭に屆いたときは既に州知事が兵力を擁して現場に出張して、法律の威嚴を保つ希望を示して居たので問題は社員の手から離れて如何とも出來ない場合であつたことを語り、それから更に一歩を進めて左の如く彼等に論

息と娛樂に充てるのである。

余の實業生活中勞働紛擾が必ずしも單に賃銀問題に歸因しないことを立證する幾多の實例があつた。余は信ずる爭端の起らない樣にする最も有效な豫防法は勞働者に適當の尊敬を拂ひ、且つ彼等と喜憂を共にし、以て彼等に對する眞實の配慮と彼等の成功に對する喜びとを示し、互に打ち解けることである。余は僞らざる余の胸中を告白する。余は常に自分の配下の勞働者と會談する事を喜んだが、それは必ずしも賃銀問題に關する事柄ばかりではなかつた。又彼等を深く知れば知るほど余は彼等を愛好する樣になつた。彼等は大抵雇主の德行一に對して二の德行を持つて居る、而して確かに彼等は仲間同志の間に寛容の德を實行して居る。

資本家の常習手段

勞働は資本に對して無力である。資本家は最後の手段として大抵工場の閉鎖を斷行して一時收益を取らない決心をする。彼の習慣や食事や服裝や娛樂などに何の變化もない、彼には窮乏の煩悶は少しもない。之に反して彼に雇れた勞働者の窮狀は如何。物資日に〳〵減少して彼は苦悶せざるを得ない。人生の慰安

賃銀率は現時(一九一四年)まで繼續して居るが、余は其後勞働紛議の樣なものが決して起らなかつたと思ふ。前にも述べた樣に職工等は三年の契約をした以上、勞働組合に會費を拂ふ必要がなくなつたから舊來の組合を解散してしまつた。勞働組合は解散したが、之に優つた別種の組合、卽ち雇主使用人間の親愛的組合が出來た。之は實に双方に取つて無比の最良なる組合である。

凡そ雇主として其使用人が滿足な收入を得て間斷なく事業に從事して居るのを見ることは眞に結構なことである。平準賃銀率は會社をして市場の形勢に順應する餘地を得せしめ、又時としては註文を取つて工場を遊ばせておかない方針を取ることも出來るが、之こそ勞働者に取つて肝要のことである。高率の賃銀は結構に相違ないが、遊ばずに働くことには較べられない。余の意見ではエドガ・トムソン工場は勞資協調の點に於て理想的工場である。聞く所に依れば今日(一九一四年)でも勞働界一般に作業時間三分說よりも二分說に傾いて居るさうだが、將來は必ず三分說が勝利を獲ると思ふ。時勢の進步に伴ふて勞働時間は必ず短縮される。八時間制が原則になる。卽ち八時間は働き、八時間は眠り、八時間は休

親切の力

息を付ける條件を持出した。彼等の貯金は事業資金と別勘定にして信託資金とし、住宅建築等の希望者に貸付けた、余は之が貯金をする勞働者の爲に爲すべき最良方法の一であると思ふ。

事實上斯る特典は會社として經濟的立場から考へても損得勘定以上に出ることは有益である。フィップス氏が言つた樣に余の同志社員中の二人は『無理でも常に勞働者の要求に應ずるのが余の極端な傾向であつたことを知つて居た』。然し此點に於て余の弱味を示した事跡を回想すると、余は寧ろ其傾向の一層多く否な遙かに多かつたことを願はざるを得ない。勞働者の歡心を買ふほど有益な投資はない。

此方針は忽ち優秀な成績を現はして我社に集まつた職工は全然天下無敵の良好な一團となつたと余は衷心から信じて居る。即ち職工としても人間としても最良の一團體であつた。紛爭や罷業などは過去の歴史となつた。ホームステッドの職工が外部からの拾集めでなく子飼の職工であつたら一八九二年の騷動などは起り得なかつた筈と思はれた。一八八九年に始めて實施した鋼製軌條工場

之を實行するには手數が多くなり且つ書記の數も增さなければならなかつたが、それは些細の事てあつた、高賣云々の注意は余をして職工自身消費組合販賣店を設けることが出來ないことはなからうと考へさせた。此考案は終に實現して會社から其建物の賃借料を補給することとしたが、物品を調査し商店を經營することは必ず職工の責任たるべしと注意した。ブラッドック消費組合の濫觴は實に之てあつた。之を有益な組織と認むる多くの理由があつたが、就中事業には必ず何等かの困難が伴ふ者てあることを職工等に敎へた點は肝要な點てあつた。

石炭の苦情は會社から實費て職工全部に賣渡す仕組にして難なく解決したが(石炭商から買へば此實費の約倍額を拂はなければならぬと余は聞いた)、各職工の住宅渡として買手は唯荷車賃を拂へば善いことにした。

それにモウ一つ苦情があつた。聰明て而も貯蓄心ある職工等は銀行に餘り信用をおいて居ないし、不幸にも米國政府は郵便貯金制度を設けた英國政府の模範に倣はなかつたから、職工等が其貯蓄金に關して懸念して居ることが知れた。そこて會社は勤險貯蓄奬勵の爲め各職工の現在貯金二千弗まで預かつて六分の利

勞働者の取扱は單に弗の問題てはない。又弗が主要問題てないことも往々ある。感賞、懇懃、公正の取扱などが米國勞働者に對して屢々優力な感化を與へるのである。

雇主は殆ど金を使はないて職工等の爲に幾多の願はしい施設をしてやることが出來る。或會合の時に余が何をしたら一番彼等の爲にならうかと尋ねたら、此ビリー・エドワーヅが起立して職工の大多數は月拂ひに賃銀を取るから店屋に借が出來て居ると言つたことを覺えて居る。而して其時彼の言つた言葉が斯うてある。

『私は心懸けの善い女を家內に持つて居る。私達は毎月第四土曜の午後二人てピッツバーグへ出掛けて翌月分の品物を全部買込んて收得の三分の一を貯金する。私達の職工仲間てはそれが出來ない者が多い。此邊の店屋は高賣をする。それに石炭が馬鹿に高い。會社が月拂にしないて二週間拂にしてくれゝば心掛けのよい職工には賃銀一割以上の增額をしてやると同じ結果になる』

『エドワーヅ君、これからは屹度君の言ふ通りにするよ』と余は答へた。

の意見では提案の金額は公正であるが率が平衡を得て居ない爲に、或部門では苦情がないが他の部門の待遇が公正でないと云ふのであつた。職工側の大多數は自然に此説を取つて居たが、さて賃銀の低過ぎる程度を示すことになると案の如く異論があつた。各部門の職工中誰一人同意見を抱いて居る者が無い。ビリーはそこで口を切つて、

『カーネギーさん、私共は一噸當りの全額が公正だと云ふことに異論はありません、が、其分配が正當でないと考へるのです。例へば一例としてカーネギーさん、先づ私の職を取つて御覽なさい………』と言ふ積りであつたらしいが余は大聲疾呼して、

『ビリー君、御默りなさい、君が「カーネギーさん私の職を取る云々」と言はれたが。カーネギーは人の職を取る男ぢやない。人の職を取ることは高級勞働者社會に於て赦すべからざる罪惡です』と遣つた。

すると一同大笑となつて、喝采之に次ぎ、又一頻り笑となつた。余も皆と共に哄笑した。先づ之でビリー君が旨く凹まされた譯で、勿論此爭議は直ちに解決した。

協定成立

彼つて居て同席の仲間に無禮をした意味になるから彼が紳士てない事を自白する譯になるし、其儘着席して居て帽子を取れば余の詰責に兜を脱いだ理屈になる。此二者のうち一を取るの外はないが何れを取つても自己の立場を失ふのてあつた。彼は悄然として我軍門に降つた。徐ろに帽子を脱いで床の上においた。會議の進行中其後は一言も言はなかつた。後で聞けば彼は到々其土地を去つたさうだ。同席の人々は此一幕の狂言を愉快とした。而して協定は調和的に運んだ。三年賃銀率が職工側に提案された時、彼等は十六人の委員を撰定して會社側と交渉させることとなつた。話が最初遲々として進捗しなかつたので余は前約があるから翌日は是非紐育に歸らなければならぬと聲明した。そこて職工側では委員に他の者を加へたいから三十二人の委員會を組織して折衝させる事は如何かと交渉して來たが、之は彼等の仲間に分裂の歷然たる證左てあつた。勿論會社側ては承諾した。委員はピッツバーグの事務所に於て余と會談の爲め工場から來た。議事は最良人物の一人として評判の高い職工側のビリー・エドワーヅ(余は彼を克く記憶して居るが、後に高い地位に進んだ男てある)の口開きて始まつた。彼

を掲げてみよう。或時余は會社側で不正の要求を提出したと認めた職工委員會に臨席の爲め出掛けて行つたが、工場に勤める傍ら秘密に銘酒屋を出して居た男に職工等が籠絡されて居たとの報告に接した。彼は辣腕の暴漢であつた爲に下戸で温順な職工は彼を恐れて居たし、上戸黨は彼から酒代を借りて居た。紛議を煽動した者は實に此男であつた。

余等は何時もの通り友愛的氣分で會見した。余は長い間彼等を知つて居て、一一其名前すら覺えて居たので彼等と會見することを喜んだ。卓を圍んで着席すると首領の席が一端にあり余のが他の一端にあつたから二人は丁度顏を向け合せて居た。余が問題を提出した後に首領が床の上にあつた自分の帽子をツーットト摘まんで頭の上に載せたのを余は見た。之は退場を暗示したのである。余の取るべき好機會は此處にあつた。

『君、之れは紳士の會合ですよ。其帽子を取るか退場するかどちらかに願ひたい』

余はジーッと彼を見詰めた。一座水を打つた樣に靜かになつた。暴漢は躊躇したが、余は彼が何をしようと一本參つたことを知つて居た。退場すれば帽子を

から段々脱退することになつた。其後組合の消息は絶えてしまつた。(之は一八八九年のことで今から二十七年前である。其時の賃銀率は今以て變更しない。職工側が變更が出來ても之を望まない。余の言つた通り此賃銀率は彼等の利益になる樣に出來て居る)。

余が勞働界の爲に盡した總ての功績のうち平準賃銀率の創設は最なる者であつた。之は勞資兩方面を眞實に共同經營者たらしめて事業盛衰の運命を共にせしむるものであるから勞資問題の解決案である。往年ピッツバーグ地方に一ヶ年据置賃銀率が行はれたが、之は勞働者と雇主との間に抗爭の種子を蒔くものであつて必ず災禍を招く恐があるから良案ではない。それよりは双方で別に期限を定めない賃銀率を協定する方が遙かに優る。半年若くは一年前の豫告を一方が出し得る規定を設けて改正の餘地を存して置くべきもので、さうすれば數年間同一率を繼續する運びになる場合もある。

勞働對資本の紛爭が些細の事情に左右されるものであることを諒解する爲め、一見詰らぬと思はれる偶發の出來事に依りて和氣靄々裏に落着した二つの事件

の心に滿足を覺える爲め役員が記名した後職工も各々自分で記名して貰ひたい。ベンネット君此賃率は三年間續く譯ですから、誰か一人又は數人團結して組合長がそんな長期間職工全部を檢束する權利を持たないなどと苦情を言ふかも知れないが、職工一人〳〵記名してあれば何等の誤解も起らない譯です』

暫く無言であつたが、ベンネットの側に居た男が囁いた(彼の耳の處で言つたのだが余にははつきり聞えた)。

『大變。騷動が始まつた』

確かに始まつたが、直接攻擊ではなかつた、唯側面運動であつた。余が組合の役員に記名を許さないと言つたら苦情の種子になつて喧嘩の口實が出來たてあらうが、それを許されて見ると自由獨立の米國市民が各自に記名すると云ふ至極單純な要求を拒む譯には行かない。余の記憶によれば實際組合の役員は記名すれば出來たのに記名をしなかつた。職工が銘々に記名する要求の出た場合だから役員の記名する理由はなくなつた譯だ。のみならず職工等は其賃銀率が實施されたた時に組合が何の力にもなつてくれないと知つて組合費も不納勝になり組合

正當の申分は聞くべきもの

工場の話は一もせずに彼等はピッツバーグに歸つたけれども其後直ちに職工の投票があつた(作業開始に反對した者は極めて少數であつた)。余は再びピッツバーグに行つて職工委員會に賃銀率を示した。それは生産の時價に依る平準率であつた。斯る賃銀率は眞實に勞資兩方面を共同經營者と認めて會社に關する盛衰の運命を共にする考案であつた。勿論職工側に對して生活の保障を與へ得るだけの賃銀率以下に下らぬ程度を以て最低限としたのであつた。彼等は此賃銀表を前に見たことがあるから再調の必要はなかつた。委員長は言つた。

『カーネギーさん、私共はどんな條件にも應ずる覺悟ですが、今(モヂ〳〵しながら)一つお願があるんです。聞いて下さるでせうね』

『それは諸君正當なお話なら必ず聞きます』

『さうですか、それはかうなんです。此契約書には職工の代りに組合の役員が記名することを許して頂きたい』

『アヽそれは何でもない事です。喜んで許します。それで私の方にも一つ小さいお願がある。私が諸君の願を聞いた樣に私の方の願も聞いて貰ひたい。唯私

ピッツバーグよりの使者

初めて紐育へ來たと言ふので暫くそんな話をしたのだ。すると牧師が漸く口を切つた。

『カーネギーさん、實は工場の紛議について參つたのです』

『アヽさうですか。職工側で例の投票を行ひましたか』

『否』と彼は答へた。そこで余は一本參らせた。

『それならば私は其問題をお話したくない。作業開始の決議を三分の二の多數でするまでは相談しないと私は斷言したのです。皆さんまだ紐育を見物したことはないのでせう。これからお供して五番街や公園でもブラッキませう。一時半には此處へ戻つて午餐を食べませう』

その通りにして色々の話をしたが彼等の願つて居た一事だけは話さなかつた。然し彼等は樂しい思ひをして午餐を快く食べたと思ふ。米國の勞働者と外國の勞働者との間には一の大きな相異がある。米國の勞働者は人格者である。彼が人と午餐を共にする時は生れながらの紳士(大抵紳士であるが)の如き素振をして少しも迫らない。實に立派な者だ。

を知つて居る。余は喋喧はしないが、膝詰談判になればどんな委員會にも負けない自信がある。今余は其談判に掛つて居る。此工場は職工側三分の二の多數で作業開始を票決するまでは斷じて開始しない。それから開始の場合には今朝諸君に傳へた通り會社提出の平準賃銀率で開始する。余は其れ以上何も言ふことはない』

彼等は退去した。それから二週間ほど過ぎて紐育の圖書室に余の居た所へ家僕の一人が名刺を一枚持つて來た。それには我社職工二人の名と牧師の名とがあつた。彼等はピッツバーグから余に面會したいとて來たのである。そこで余は家僕に命じて、

『お客樣のうちには鎔鑛爐職工て契約に背いて作業を休んだ方があるか尋ねて見てくれ』と言つた。

僕は歸つて來てそんな人は居ないと答へたから余は『それなら下へ行つてどうぞお通りくださいと言へよ』と命じた。

勿論余は純粹な溫情と慇懃とを以て彼等に接し、共に腰かけて紐育の話をした。

居る。今度は會社が提出する至當の順番であるから會社から賃銀率を提出する。』余の社員に告げた結論は之てある。『私は今日の午後紐育へ歸るから、もうこれ以上のことは出來ない』。

此返事が職工側に屆くと間もなく彼等は余の出發前に來て面會が出來るかと尋ねて來た。余は『勿論』のこと面會すると答へた。彼等が來たから余は彼等に言つた。

『諸君、諸君の委員長卽ち此處に居られるベンネット君は、諸君に私が何時もした樣に必ず出て來て何とか諸君と協定すると保證されたさうだ。それは本統です。同君は余が喧嘩をしない男であるといふことを諸君に言はれたさうだが、それも本統です。同君は本統の豫言者です。けれども其外何か言はれたことがあるさうだが其れは少し違つて居る。余が喧嘩が出來ないと言はれた。諸君（ベンネットの眼のあたりをジーと見詰めて拳を固め、それを振上げながら）同君は余が蘇國男子であることを忘れて居た。だが余は諸君に言ふことがある。余は決して諸君と喧嘩はしない。余は勞働者と喧嘩をするよりも優つた手段

求に應ずることが出來なかつた。それて止むなく工場は休業した。之が爲に工場各部に影響を及ぼして、鎔鑛爐なども契約期限の一兩日前に休業してしまつて余等は非常に困却した。

余はピッツバーグに行き、鎔鑛爐作業が契約條項に違反して休止して居たことを發見して喫驚した。余はピッツバーグに到着して翌朝職工側と會見する手筈であつたが、工場から音信があつて、職工は既に『鎔鑛爐を引いてしまつて明日てなければお目にかゝれない』とあつた。妙なことをやり居つた。余の答は之てあつた。『何明日私に會ふといふのてすか。其れは駄目てす、私は明日、當地に居ないと職工側に傳へてくれ給へ。誰ても作業を休むことは出來るが、困難はそれを再び始めることてある。他日彼等は必ず作業の開始を願ふ場合があらう。而して誰か其れを開始させて吳れる者があれば善いと捜し廻るだらう、其時は私が今言ふと同じ樣にかう言つて遣るよ、工場は生產の價格に應じて增減する平準賃銀率を定める條件てなければ決して作業を開始しない。其賃銀率は三年間繼續すべきものて職工側から提出を許さない。從來彼等が屢、賃銀率を提出して

するに何の面倒もないのみならず最も善い伴侶である。かのケリーなども其後は余の忠實な友人となつて余を尊敬して居たが、其前までは社内の最亂暴な職工の一人であつた。余の實驗上勞働者の多數は何か問題を起して其指導者等に團結の約束をした場合は例外として、彼等は常に正しい事をする決心のある者である。假令へ道を誤つた場合ですら彼等が指導者に忠義を盡す心事には何となく立派な所がある。胸中一片の忠義の精神を宿す人々ならば如何なる大事も成遂げられないことは無いので、要は彼等を唯公正に取扱ふにある。

我社の鋼製軌條工場で罷業の計畫が破れた面白い實例が一つある。此時も一部門の職工百三十四人は仲間同志で年末迄まだ數ヶ月もあるのに其年の暮になつたら必ず賃銀の増額を要求しようと秘密の誓約を取替はしたことは余の遺憾とした所であつた。然るに新年になつて見ると非常の不景氣で全國にある他の鐵鋼工業者等は何れも賃銀の引下を斷行した。にも拘はらず秘密の誓約をした人々は増給を獲なければ働かないと一旦決心した以上是非共其要求を貫徹しなければならぬと考へた。我社は競爭同業者が賃銀引下をして居る場合到底其要

委員は徐々に引取つて其處を散じたが、社員等は沈默して居た。其時用談があつて這入つて來た局外者が途中で委員に遇うた時、コンナことを聞いたと左の如き報告をした。

『私の這入つて來た時眼鏡を掛けた男がケリーと云ふ愛蘭人の横合からツカツカと進んで來て言つた「オイ貴公等後になれば判るが今でも承知しておくがいゝぜ、此工場ぢや詰らない眞似をしても駄目だよ」』と

如何にもさうあるべき筈である。後に余等は書記の一人から鎔鑛爐の樣子を聞いた所に因れば、ケリーと其委員仲間は職工の集まつて居た所へ進んで行くと勿論職工は委員を待つて居たので忽ち大勢集つて來たが。鎔鑛爐まで皆で進んで行つた時ケリーは大聲を揚げて怒鳴つて、

『働け、横着者め、何をして居やがるんだ。ヘン、小さな親方が今腕を突出したんだ。彼奴喧嘩はしないが、坐り込んだら最後、骨になつても立ちやせんからな。仕事をしろ横着者め』と言つたさうてある。

愛蘭人と蘇愛混血兒とは一風變つて居るが、克く心が知れさへすれば事を共に

断乎たる回答

ない書類に記名することが度々ある、法律顧問や社員などから求めて來る書類にそんなものが澤山ある。ケリー君は丁度それに似た事情の下に此契約書に記名したと言はれる。其一言は受けねばならぬ。けれどもケリー君、我輩は主義として不注意に記名した契約書でも其條項を履行して其次の契約には一層注意を加へることが最上の策と思ふ。此契約でもう四ヶ月働いた上、次の契約をする時はよく判つてから記名するとしたら諸君のためぢやあるまいか』

之に對して何の答もなかつた。余は起立して言つた。

『鎔鑛爐の委員諸君、諸君は契約破棄を主張し、今日午後四時までに會社が諸君の要求を容れる樣な返事を與へなければ諸君が鎔鑛爐を引上げると會社を威嚇された(諸君が引上げれば事業は失敗する譯になる)。また三時にならないが、諸君の要求する會社の返事はすぐ出來ます。引上げるなら引上げても宜しい。鎔鑛爐の周圍に草が生えても會社は斷じて諸君の威嚇には屈服しない。勞働者自ら契約を破つて自己の面目を失ふ日には勞働史上最惡の記錄を作るものである。諸君の欲する會社の返事は是てす』

長け卑く瘠せ形のジョンソンは、斷乎たる調子て答へた。

『カーネギーさん、契約に記名を求められた時は私は必ず注意してそれを讀みます。氣に入らなければ記名しません。氣に入れば記名します。記名した上は其れを守ります』

『自尊心ある米國勞働者の言ふべきことを今又聞いた』と余は言つた。

鎔鑛爐部委員、愛蘭人ケリーに向つて余は同一の問をかけた。

『ケリー君、君の方にも今年一杯の契約がありやしないか』

ケリーは判然と記憶して居ないと答へた。何か書類が廻つて來て記名はしたが、充分讀まなかつたから何が書いてあるか知らないと辯解した。此時工場經營に優秀な偉才てはあるが性急の質てある工場監督ジョーンス大尉は忽ち横合から絶叫した。

『待ち給へケリー君、僕がアノ書類を二度も君に讀んて聞かせた上、君と十分に協議をしたぢやないか』

『マアー〳〵、大尉殿、ケリー君は說明をする權利を有つて居ます。我輩てすら讀ま

ある即ち『神が萬物を善く造りたまうたに相違無いが、女にはエライ妙なコンガラカリを解かずにおきたまうた』と。其通り勞働者等には彼等の特有の僻見がある。『腹の蟲』が居る、吾等はそれを尊重しなければならぬ。 困難の根本は無智であつて、敵愾心ではない。 委員等は半圓形に余の前に着席して皆脱帽して居た。 勿論余も脱帽して居た。 眞に模範的會議の體裁を備へて居た。

輪轉部委員長に對して余は先づ質問の第一矢を放つた。

『マッケー君(老紳士で眼鏡をかけて居た人)君の方の契約は年末までの期間ぢやないか』

眼鏡を徐ろに外して手に持ちながら彼は答へた。

『左樣カーネギーさん、契約はさうなんです、それに會社の方の收益はまだ私共の契約を破棄させるほど取れて居りません』

『それこそ本統の米國勞働者が言ふべきことだ、君の如き人物のあることは我輩の名譽である』と余は言つた。

『ジョンソン君(軌條改作委員長)の方にも同樣の契約があると思ふが』



十五歳のマーガレット・カーネギー孃

勞資兩方面の敎訓材料になるかも知れぬと考へるから、余の取扱つた勞働爭議の一例を本章に掲げることとした。

增給問題

我社の鋼製軌條工場鎔鑛爐職工が或時連判狀を廻はして會社が月曜日の午後四時までに賃銀增率を決行しないならば一同引上げると云ふ團結を企てた。職工と契約した賃銀率は年末までの期限で其時からはまだ數ヶ月先きのことであつた。一旦結んだ契約を破ることとなれば二度目の契約をしても無用であらうと感じたが、兎に角余は紐育から夜行列車で出發して翌朝早くピッツバーグに着いた。

余は工場監督に命じて工場取締の三委員會々員全部即ち罷業に加つた鎔鑛爐部の委員のみならず、輪轉部及改作部の委員をも召集させた。彼等は召集に應じて遣つて來たが、勿論余は慇懃に彼等と應對した。それは溫情が良策であるのみならず余が常に配下の職工に面會することを喜んだからである。余は勞働者を深く知れば知るほど彼等の德を尊重する樣になると云ふ事實を告白しなければならぬ。けれども女に關してバーリーが言つた言葉は、勞働者にも宛嵌まるので

されることを好んだ譯で叉極端なロバート・バーンス崇拜家だから位階のある社會からよりも勞働社會から賞讃されることを好んだのである。自己配下の一人から「立派」な行爲を認められたと云ふことが限りなく彼の心を喜ばせた。彼は此讃辭を受けたと云ふことだけで滿足し、その物語が何故に叉如何して世間に傳はつたのかを尋ねもせず叉知りもしなかつた。それで今此處で其顚末を公けにすることが恐らく適當であらうと信ずる。一九〇一年紐育の某晩餐會席上で予はカーネギー氏か寄附をする場合には一々必ず自分の名義を出すことを必要として居ると云ふ話を聞いた。そんな馬鹿氣た話をする害のない知名の人が其話をしたのだから、予は聊か憤慨した。そこで予は其說を反駁して自分が現にカーネギー氏の爲に無名の寄附金を取扱つたことがある。それを知つて居る者は氏と予のみである。叉數千弗の金を他人の手でそんな風に寄附して居ると辯明してやつた。其實例としてマクラキーの話を持出した。其席に居合はせたピッツバーグ人が其話をピッツバーグに傳へて遂に新聞種子になつた譯である。勿論其議論の主眼であつた無名の寄附をするカーネギー氏の主義から全く看過されて其詩歌の下の句「アンデーの畜生立派な奴」だけが殘つたのである。カーネギー氏は議論のあつたことを少しも知らない。氏は其の下の句を好んだ。數年の後（一九〇六年）スキボで此自傳を書いて居られた時代は予に此物語を書いてくれと賴まれた。それで予は今此說明を書くことを欣快とする（ジョン・シー・ヴァンダイク）

第十八章　勞働問題

でも有り金殘らず施せば、それこそ一個の好男子
其時我等は謚なしよう『畜生！立派なアンデー』と

『畜』と書き『生』を省くは無用のことよ
アンデは加減して意味を濁すが大嫌ひ
文句をひねくり機嫌を取る樣な男ぢやない
武骨率直『畜生！立派なアンデー』よ

彼が死んだら依頼の文字を其儘に
棺にも刷り込み墓の石にも彫り付けやう
『富豪が癩だ』とアンデが言ふ、我れもさる者サンデーよ
富豪の眞似事するものか『畜生！立派なアンデー』さ(一)

(一)カーネギー氏は此物語を非常に好んで居たが、それは矢張り人間だから人に賞讃

此一條が印刷に付せられた後、左の如き諷刺が新聞に出た。之は余が職工の一人に溫情を示したことを諷したもので、余が自分の墓の銘として他の何れの文字よりもマクラキーの數語を望むと聲明したことに因んだものである。

「一寸一言」

サンデーがアンデーについて

ヤアお前ら聞いたかアンデが賴んだ墓文字を
黃金殘らず施して死ぬべき運が來た時に
黑人筋の調法がる聖書の文句て讀めるなよ
唯凡俗外道の此文字を『畜生！立派なアンデー』と
蘇克蘭の好漢はお世辭の文句を嘲笑ふ
亂暴極はまる文字てはあるが、お笑草てはありやしない

に迎へて家庭の樂みをさへ加へて大滿足の體であつた。今は彼の一身上悲慘の暗雲が悉く霽れたから、私は曩きに金を贈らうと申出た眞相を彼に明かして彼が止むを得ずして一時爭鬪した相手方を不當に惡く思はない樣にしてやりたいと思つた。故に別れる前に私は彼に告げて『マクラキー君、僕は今何時ぞや上げやうと言つた金が僕のでないと云ふことを承知して貰ひたい。あれはアンドルー・カーネギーの金で、僕の手から君に上げたいと云ふのであつた』と言つた。マクラキーは息の詰まるほど驚いた。何とも口がきけないで唯かう言ふの外はなかつた『ヘエ、畜生！立派なアンデーだなあ』

余は人間の發明した總べての神學說よりも寧ろマクラキーの此判決を旅行免狀にして樂園の探險を試みたいと思つて居る、余はマクラキーが善人なることを克く知つて居た。ホームステッドのマクラキー所有財產は三萬弗の價格があつたと云ふことだが、彼は町長兼ホームステッド男子委員會議長の職にありながら警官に發砲した廉て令狀を執行されたので、何もかも打棄てゝ逃去するの外はなかつた。

ー氏に手紙を出す機會を得たが、書中にマクラキーに遇つたことを述べた。又其人に對して私が甚だ氣の毒に感じたことゝ彼が寧ろ惡い取扱を受けたと思つたことゝを書添へた。カーネギー氏は直ぐに返事を遣こして其手紙の端に鉛筆で『マクラキーに入用だけの金を與へてくれ、然し私の名を言はずに』と走り書いてあつた。私は直ちにマクラキーに手紙を出して、入用の金は幾何でも差上げると書いたが、金高は言はずに唯再起の資本になるだけ十分の額であると承知させる樣な風に言廻はしておいた。彼はそれを斷つた。彼は飽くまで獨力で奮鬪する、それが卽ち眞の米國魂であると云ふ趣意の返事であつた。私は彼れの精神を賞讃せずに居られなかつた。

私は今思出したが、其後彼のことを一友人卽ちソノラ鐵道の總支配人ジエ・エ・ノーグル氏に話した。兎に角マクラキーは其鐵道會社から井戸掘の仕事を引受けて非常に成功した。一年後、イヤ同年の秋であつたと思ふ、私はゴエマスでマクラキーに再會したが、彼は同地で鐵道工場の機械修繕工事を監督して居た。彼は以前に比べて非常に元氣で、愉快に見えたのみならず、墨西哥婦人を後妻

ぎに最も低級の不熟練職工を最低賃銀で雇入れゝば十分と考へて居たから、マクラキーの様な優秀な職工は全く善すぎたのである。彼は仕事は見付からず金はなくなる實際嚢中無一物の悲境に沈んでしまつた。私は此悲慘の物語を聞いて自然に甚だ氣の毒に感じた。特に彼が最も聰明な人物で自分の艱難について入らざる苦情を持出さなかつた爲に此感を深くした。

私はホームステッド罷業の後間もない頃カーネギー氏と知合になり、蘇國のクルーニー氏と共に居つたけれども其時は此話を氏にしなかつたと思ふ。又話の他の半面をカーネギー氏から聞いた譯でもない。けれどもマクラキーは『アンデー』が現場に居たら困難は起らなかつたらうにと幾度も繰返して、成るべくカーネギー氏を非難しない様に注意して居る機子であつた。彼は『アンデー』とならば『野郎共』が仲よく遣つて行けたのだが、社員中の或人々とは仲よく出來なかつたと考へたらしい。

私は牧場に一週間滯在して夜分などにはマクラキーの人物如何を十分に研究した。私は彼地を去ると直ちにアリゾナのマクソンに行き、其處からカーネギ

て、工場保護、秩序維持の目的を以て汽船に乘りピンカートン刑事探偵等捕縄の命令を發した。彼は之を斷行するに十分の理由があると自ら信じて居た。彼が私に說明する所によれば、探偵等は武裝して彼の行政區域に侵入した者て彼は之を捕縄して武器を取上げる權能があるとの事てあつた。此命令は遂に流血の慘事を演出し爭議は眞劍勝負の幕に這入つた。

勿論此罷業の顚末は世間周知の事實てある。罷業側は結局敗北した。マクラキーは殺人騷擾反逆其他市の知らない幾多の犯罪ありとして起訴された。彼は三十六計逃ぐるに如かずて州内から逃げ出す外はない羽目に陷つた、負傷に惱み、饑餓に迫り、警吏に追跡されつゝ餘熱のさめるまて隱れて居るより外はなかつた。餘熱はさめても米國製鋼業者間には彼は黑表附の注意人物と認められて就職が出來なくなつた。所持金は無くなる、最後の災難として妻には死なれ家庭は破滅してしまつた。有爲轉變の悲運を重ねた揚句の果に彼は墨西哥に行かうと決心したのてあるが、私が彼に遇つた時はラヽノリャ・ヴアーデから十五哩離れた鑛山に就職口を求めて居た。然るに墨西哥の鑛業家等は鑛山稼

ホームステッド騒動から湧き出てた一の逸事に就て余は友人ラトガース大學教授ジョン・シー・ヴアンダイク氏から左の如く話された。

『一九〇〇年の春、私はソノラ山中に一週間の遊獵を試みやうと思つてカリフオルニヤ灣頭のゴエマスからラランノリヤ・ヴアーデの一友人が所有して居る牧場へ行つた。牧場は實際人里離れた僻地であるから、少數の墨西哥人と多數のヤクイ赤色土人以外、文明人などに邂逅する筈はなからうと想像して居たら、案外にも英語を操つる人を發見した。而して話して見ると彼は全くの米國人であつた。何の爲に其處へ來たのか押問答するまでもなく彼は寂寥を感じて居たので自分から進んで頻りに話込んだ。彼の名はマクラキーと云ふので一八九二年まではホームステッドのカーネギー製鋼工場に雇はれた熟練職工であつた。『親方』と云はれた高級職工で巨額の賃銀を受け、其頃妻帶して一家を構へて可なり大きな財産を所有して居た。加之町内からも尊敬されてホームステッド町長に成つて居た。

一八九二年の罷業勃發するやマクラキーは自然罷業側に加擔して、町長の資格

れて居たとの感を一掃することが出來た。

此雪辱は全くオスカー・ストラウス氏のお蔭であつたが、彼は豫て勞働問題に關する余の論文や演説などを讀み、又それを時折勞働者に引用して聞かせて居たのてあつた。ピッツバーグから來て此晩餐會に出席したアマルガメーテッド・ユニオン組合の兩雄たるホワイト及シエフアーも亦勞働問題に關する余の閱歷を組合の勞働會員等に說明してくれた有力の人々てあつた。

其後ピッツバーグの圖書館附屬會館て余を歡迎する爲め職工及其妻女等の大會が開かれたから余は情意を盡して腹一杯の演說をした。其うちの一節は余が今尙ほ記憶して何時までも忘れまじと思ふが、其趣意は資本と勞力と雇主と此の三は三脚の器の如き者て何れを前後と別つことは出來ない、皆一樣に缺くべからざるものてあると云ふのてあつた。演說が終ると諸方から熱誠に握手を求めて萬事平穩に局を結んだ。斯く使用人と其妻女等とに心からの和解を遂げて余は眞實に重荷を卸した感を抱いたが、それまでは假令現場に數千哩遠ざかつて居たとはいへ恐ろしい懸念に襲はれて居たのてあつた。

値があると自ら感じて居た。又余自身勞働者に温かい同情を持つて居たことを自覺して居た。尙又我社の勞働者から相當の尊敬を受けて居たことも知つて居た。けれどもホームステッド騷動の爲に余は自然國民一般から其正反對な評判を受けて居たのである。世間の評價ではカーネギーの戰鬪機關に過ぎないと認められて居たのである。カーネギー工場は勞働者の正當なる收得に反對するカーネギーの戰鬪機關に過ぎないと認められて居たのである。

余は起立してストラウス邸晩餐會に臨席の同會役員諸氏に此大いなる光榮を受諾するに困難なる理由を說明した。卽ち余は避暑の爲め盛夏に海外旅行をする必要があるので勞働紛議の起つた場合咄嗟の間に合はない虞があると言つた。余は非常に困惑したが、然し余は此推奬は一同が余に對して表示された最高の敬意であるといふことを一同に感ぜしめたことを欣幸とする。此意味に於て此機會は余の爲には傷める心に對する靈藥であつた。余は終結の言葉として余が今逝去された余の親友の後任として實行委員に選擧されるなら、其任に當ることを光榮とすると言つたが、全會一致で余は此補缺に選ばれた。今は如上の順序でホームステッド騷動と勞働者の殺傷とに對して勞働者一般から當の責任者と認めら

恐ろしき誤解

にあつたカーネギー工場で勞働者が殺されたことだけであつたが、それだけても多年の間余の名を非難の標的とするに十分てあつた。然るに漸くの事て稍緩和の曙光が現はれた。元老院議員ハンナ氏はナショナル・シヴィク、フエデレーションの總裁てあつたが、此會は資本家と勞働者から成つた一團體て雇主及使用人の上に良好なる感化を及ぼしたものてある。當時其副總裁てあつたオスカー・ストラウス閣下は余を其自邸に招いて晩餐會を催し、其會の役員諸氏に面語の機會を與へられた。然るに其期日前余の終生の友てあり又クリーヴランドに於ける我社の舊代理人てある同會總裁マーク・ハンナ氏か突然逝去された。余は晩餐會に列なつた。閉會に臨んてストラウス氏は起立してハンナ氏の後任問題を提出した。彼は豫て本問題を愼重に研究し勞働團體の意見を徴したが、各方面からの報告は余を以て適任者と認めると言はれた。其席には勞働側の首領も數人列なつて居たが、交る〳〵起立してストラウス氏の意見に賛成を表した。

余は之ほど意外の感を起したことはない、又露骨に言へば之ほど有がたく感じたこともないと記憶する。余は勞働側の感情からならば其地位に就くだけの價

寛仁なる意見に對する其人の信念又は貴君が既に成遂げられたる善良にして且偉大なる事業に對する其人の欽仰を毫末も減損する理由は無之ことを小生は確信致居候此信念を申上ぐることが小生の貴君に對する微衷に御座候當今富は人間の道德的生命を呑み盡さんとする怪物の如く世道澆季の折柄貴君は敎訓により又實例によりて怪物をして其呑みたる者を吐出さしむべく努めらるゝに對し小生は率先して貴君に謝辭を呈する者に御座候敬具

ダブルユー・イー・グラッドストン

カーネギー殿

余が此書簡を爰に挿入した趣意は若し必要とあらばグラッドストン氏の偉大にして同情の深い天性を證明する爲てある。此天性は苟も同情を値する者に對して敏活に發動したものであつて、或時はナポリ人、希臘人、ブルガリア人の爲又或時は余の如き非運に哀む一友人の爲に發動したものであつた。

一般公衆は當時余が蘇國に滯在したことを更に知らなかつた、又ホームステッド事件の發端についても何等知る所がなかつた。世間に知れた事實は余の實權内

之は最も人の心を動かすに足る文句であつたが、悲しいことには時機を失つた。失策が既に行はれて工場は州知事の權内にあつた。　時既におくれた。

余は海外旅行中に此等の事情を熟知して余の不愉快を想像してくれた友人等から多數の懇篤な通信を受けたが、グラッドストン氏から受けた左の書簡は余の大いに珍重するものである。

拜啓貴君の最も懇篤なる賀狀に對して小生等夫妻は深く御禮申上候乍併小生は貴君が種々の心配に苦しみ居らるゝ事又富豪者流が常に取る所の方針に比して一段聰明なる新方針に向はしめんとの貴君の義勇的行爲に關して讒誣中傷の難に遭遇せられ候事を忘れ不申候小生は新聞業者等が常套手段として輕卒にして己惚強く誹謗をこととし執念深く意地惡き誣妄を逞くする奸策より貴君を救ひ得べくば幸甚と存居候へども力の足らざるを遺憾に存候小生は微力の及ぶ限り極めて些少には御座候へども貴君の爲に盡したく存候即ち苟も貴君を知る人ならば太西洋の彼岸に於るかの不幸なる出來事(それに關して我等は明かに其眞相を知ることは出來不申)によりて貴君の

き所がない。新規の職工を決して入れない、從來の職工が復業するを待つと云ふ會社の規則は其時まで一點も犯された譯てはなかつた。罷業側職工が町役人側の指揮官に發砲した後、工場の再開に關しても今から回顧すれば『從來の職工側て復業の決議をするまて工場を閉鎖しておいたら遙かに得策てあつたらうに』と云ふことは容易に看取される。然るにペンシルヴアニヤ州知事は八千の兵を出して本件處理の任に當つて居たのてある。

此困難勃發の當時、余は蘇國の高地を旅行して居て事件勃發後二日過ぎて始めて其事を耳にしたのてある。余の生涯中これほど深く余の心を痛めた事件は後にも先にも唯の一もなかつた。余の實業界に於ける經歷中、心の痛みが何時までも殘つた點に於てホームテッドの恨事の如きものが一もない。罷業者等は新式機械を運轉して新賃金率を受けることゝなれば、舊式機械の時の三割増て一日四弗乃至九弗づゝ取れる筈てあつた。余は蘇國滯在中組合側職工の役員から左の電報を受けた。

『親切な主人よ、如何したら善いのか貴君の希望を知らしてください。』

普通劣等の者のみが失業の憂き目を見る羽目に陷いるのてある。余等の希望して居る樣な職工は不景氣の時てすら容易に解雇することの出來ない人々てある。近世式製鉀工場の複雜な機械が新參者の職工などに首尾よく取扱へる筈はない。元來勞働者は新參者を自分等の繩張内に入れることを嫌ふ者てあるから、會社が罷業の補缺として新參者を外部から入れる方針を採用することを愼まねばならぬ。三千人側の舊職工が從來の樣に會社に對して熱心な態度を示さなくなつたのは新參者を入れた爲てはなからうか。して見れば責任は果して職工側にのみあると云はれようか。

けれども余が若し米國に居たならば工場監督の希望した樣に從來の職工が約束通り就業するかどうか試驗する爲に、工場の作業開始手段に賛成したかも知れない。けれども又事實上社員等が最初工場を開放して新規の職工を入れる方針を取つた譯てはない。事實は其反對て、從來の職工三千人の希望に應じて工場を開放したことは余の渡米した際確かに聞いた所てある。之が肝要な點てある。社員等は工場監督の献策を容れて試驗的に其手段を取つた點に於て何等咎むべ

解決の出來るまでは始めない。　それまでは君等の復業が出來る樣に地位を開けておく』と云ふか、又は工場監督が其三千人側に次の如く言つても善かつたのだ『宜しい、君等が會社の保護を受けずに獨力で作業をするなら遣るがよい』と。　さうすれば三千人側が二百十八人側に對して自己を保護する責任を自ら負はなければならない譯であつた。　然るに此方針を取らずに當局に申請して二百十八人に對する三千人といふ多數者を保護する爲に出兵することを得策と考へた(之は州政府の役人から念入に注意してくれた爲と余は聞いて居る)。　二百十八人側の首領等が何れも亂暴な喧嘩好きな人物て、鐵砲や拳銃などを携帶し、三千人側を威嚇する實力を備へて居た事は事件の進行に連れて忽ち明かになつた。

會社の規則

　余は我社の規則として余が特に記錄しておいたものを掲げて參考に供する『余の考は會社の方針として何れの工場に於ても職工の作業休止を妨げないこと、會社は彼等と隔意なく懇談し、忍んで彼等が復業の決斷をするのを待ち、決して――決して新規雇入の手段を取らない決心なることを知らしむること』と云ふのである。人も最良の人、職工でも最良の職工などは滅多に浮浪して職を求めては居ない。

誤解より生ずる點

工が一方に於ては其作業を繼續し得ると提言し、又他の一方に於ては組合を作り團結して從來他部門の職工の加入を拒んで居た二百十八人を排斥したいと申出たのに動かされたのである。而して此組合には鋼の加熱工と輪轉工のみが加入權を認められて居たのである。

社員等は誤解をして居た監督に誤まられた。彼は新たに昇任したばかりの男で斯る事件に深い經驗がなかつたから、少數の組合側職工の不正な要求と、それを不正とする三千人の非組合側職工の意見とが彼には何等の困難をも來さなかららう、又職工等が約束通りするだらうと考へたのは無理もないことであつた。其三千人のうちには二百十八人の代りになれる又代りをしたいと云ふ者が澤山あつた。尠くとも余には然う報告された。

今から顧れば工場を開放して職工の新陳代謝を斷行する死活的手段を取ることとは決して得策てないと云ふことは明かてある。會社が職工側に言ふべきこととは之の外はない、卽ち「此勞働爭議は君等の仲間て解決しなければならぬ。會社は君等に最も寬大な條件を出して居る。工場は爭議が解決する時に作業を始める、

多く勞働する譯ではなかつた。之は公正寛大であるのみならず恩惠的であつたから、普通の場合なら職工の方から感謝して承諾すべきであつた。然るに當時會社は合衆國政府の爲に武器の製造を引受けて居たが、引受ける前に二度までも辭退したにも拘はらず、國家の急務として遂に止むを得ず引受けたのである。其上に又市俄古博覽會の材料供給までした事を職工の首領株が探知して、此場合會社が必ず應諾するだらうと考へて六割全部を賃銀增加に充當する要求を出したのである。會社は之に應ずることが出來なかつた。又咽喉首を押へて『サア出さないか』と云ふ樣な脅喝手段に應ずべきものではなかつた。會社は當然斷乎として之を却けた。余が米國に居たとしても强奪的不正手段に屈する樣な氣分には決してなれなかつたらうと思ふ。

勞資撞突の場合に處する道

此時までは萬事が十分順當に運んで居た。職工側と意見を異にした場合に余の取つた方針は忍耐して時機を待ち、彼等と懇談を遂げ、彼等の要求が不正であることを示しては遣るが、決して彼等を解雇して新らしい人を入れやうと企てないことであつた。然るに、ホームステッド工場監督は其爭議に關係しない三千人の職

な出したが、同志社員等は此際同氏が米國に居ない方が却て會社の利益であるとの說であつたから、歸國を見合せる樣に頼んだ。彼等は氏が無理であつても勞働側の要求に應ずる極端の常癖のあることを知つて居たからである。

余は其頃カーネギー氏の不在に關して會社の事業關係者中何等苦情を持出した者のあることを知らないが、同志社員等は皆自分等の好むまゝに事件を處理することを許されるのを喜んでゐた」(一九〇四年一月三十日紐育ヘラルド所載)

製鋼工業はベセメル開放式鎔爐と基礎的發明とによりて全然革新された。從來使用の諸機械は廢物になつて我社は之が爲に卓見を以て數百萬弗を投じてホームステッドの諸工場を改築擴張した。新式機械は舊式のに比して約六割の製鋼能率を增加した。二百十八人の噸拂職工(卽ち鋼一噸に付若干の賃銀を受ける職工のこと)は三ヶ年契約て勞働し、其最終年の一部は新式機械を使用する方てあつた。されば契約期間の終る前には職工の收入が殆ど六割も增加して居た。

會社は契約の更新による新賃金率は此六割を會社と職工とに折半するといふ條件を出した。卽ち職工の收入が舊率に三割增し、他の三割は會社の設備費を消却する條件てあつた。機械の改良て能率が增加したから別に職工が從來よりも

工間との關係を自身で熱心に監視して居たが、此關係が如何にも愉快に滿足てあつたことは余の一生涯の誇であつた。余が社員側の味方をすべく急遽歸國せずしてホームステッド罷業中悠々海外に滯在して居たとの批評に對して、余の主なる同社員フィップス氏が一九〇四年一月三十日、紐育ヘラルド紙に寄書して、余のために辯解の勞を取つて呉れた丈けの價値が余に十分あればよいと氣遣つた。其趣旨は『余は常に假令無理てあつても職工側の要求に應ずる傾きがあつた』と云ふのである。故に社員のうちに余の歸米を望まない者が一二人あつたとのことてある。(一)

職工操縦の方法

雇主と雇人とは朋友であるとの感情から來る報酬を勘定に入れないで、單に經濟的結果からばかり判斷しても、雇主を尊敬して愉快に滿足して居る職工に高給を拂ふことは好個の投資であり、又實に大きな配當を生み出す者であると信ずる。

(一)フィップス氏寄書全文は左の如し
問『ホームステッド罷業進行中カーネギー氏が歸米せずに蘇克蘭に滯在して居たのは卑怯だとあるが如何。
答『カーネギー氏はホームステッドの紛擾を聞いて直ちに第一の便船で歸米すると電報

ものはない。此點に於て米國は世界第一である。

「過剩の法則」

米國が世界の市場に於て將來の競爭上一大利便とする所は同國の工業家が最良の內國市場を控へて居ると云ふことてあらう。彼等は之に由つて資本の返還を期待することが出來る。又剩餘生產を有利に輸出することも出來る、卽ち其對價受取高が實費に漸く達する位の場合でも輸出諸掛が取れさへすれば損にはならない譯だ。最良の內國市場を控へて居る國民は、特に我國の生產品の樣に其生產品が標準的に整理される場合は、忽ちにして外國生產者に賣勝つことが出來る。此點に於て余が英國で引用した成句は『過剩の法則』であつたが、之は其後貿易論壇の常套語として一般に使用されることゝなつた。

第十七章　ホームステッド罷業

余等の工業經營問題を談ずるに際して余が一つ記錄に殘しても善いと思ふ事は、一八九二年七月一日余が蘇國の高地に漫遊して不在中、我社の工業史上唯一の眞實に重大勞働爭議が勃發したことてある。それまて二十六年間余は社員と職

製鋼界の奇蹟

間は産出増加が同様に迅速てあらうと想像される。米國の如き駸々として發達する國に於ける工業會社は、擴張が止めば同時に衰退が始まる者と信じても差支なからう。

一噸の鋼を作るには鐵鑛石一噸半を採掘し、鐵路一百哩を經て大湖まで運搬し、更に數百哩船積して又汽車に積換へ、それから百五十哩鐵道てピッツバーグまで運ばなければならぬ。又燃料としての骸炭一噸を作るには石炭一噸半を採掘して五十哩鐵道て運搬しなければならぬ。又石灰石一噸を採掘して百五十哩の間ピッツバーグまて運ばなければならぬ。これ丈の生産費をかけて鋼材三封度を二仙て販賣しても損失にならないのは寧ろ不思議てある。余は自白する、之は全く一種の奇蹟てある。

米國は日ならずして最高價の鋼産國から最低價の國に變らんとして居る。ベルファストの造船所は既に我社の顧客てある。之は發展の第一歩に過ぎない。目下米國に鋼材の生産が出來る。凡そ勞働は自由て、滿足して、熱心に、功績に伴ふ相當の報酬を受けてさへ居れば機械工業に於て最高率な勞銀ほど事實上廉價な

ウォーカー會社はカーネギー・フイップス會社に合併してウォーカー氏が社長に選ばれた。弟はカーネギー兄弟會社の社長で全事業の總理に任じた。更に事業を擴張してホームステッド工場の生産を各種の製品に仕上げる目的でハートマン製鋼工場を設立することになつた。そこで我社では殆ど一切の物を鋼材で作ることになつて、普通の釘類から二十吋の鋼桁まで作る譯なので之より以上の新發展は到底出來まいとさへ考へられた。

一八八八年から一八九七年までの十年間に於ける我社の事業發展の大勢を考察するも一興と思ふ、一八八八年に於ける我社の投資額は二千萬弗であつたが、一八九七年には倍以上卽ち四千五百萬弗餘になつた。一八八八年の銑鐵製造年額六十萬噸は三倍になつて約二百萬噸を製造した。一八八八年の鐵材及鋼材の每日製造高二千噸は六千噸を超過することゝなつた。骸炭工場は一八八八年に於て約五千個の爐を備へて居たが其數は三倍し、產額一日六千噸は一萬八千噸に增加した。一八九七年に於て我がフリック骸炭會社は炭山四萬二千英町を所有して居たが、之は眞正のコンネルスヴィル鑛脈三分の二以上に該當する。今後の十年

工場買收の好成績

鑛爐もなく、燃料供給の骸炭鑛區も所有して居なかつた。彼等は到底余等と競爭する譯には行かなかつた、
此工場を買收することは余等の利益であつた。余は工場の所有者等に交渉する成案が唯一あるのみと考へた、卽ちカーネギー兄弟會社と合資組織を提案することであつた。余等は双方同等の格で彼等が投資した一弗は余等の資本金一弗に該當する條件を出した。此條件を基礎として交渉は迅速に運んだ。さりながら余等は當事者一同に現金で引取る選擇權を與へたが、ジョージ、シンガー氏を除くの外皆之に應じて現金を取つた。彼一人は余等と合資經營することゝなつたが之は余等の大いに滿足する所であつた。シンガー氏から後に聞けば彼の仲間は初め余の出す條件に何うしたら應じ得られるか或は籠絡されはしないかなどと非常に懸念して居た所へ弗を弗に充てゝ双方同等の條件を出されたから一言も出せなかつたとの事である。
此買收で余等の諸會社を全然改造することになつた。ホームステッド工場經營の目的で一八八六年にカーネギー・フイップス會社が新たに成立した。ウキルソン・

ても善いが名義は決して貸してはならぬ、卽ち裏書人としても會社員としても個人的責任のある名義を貸すべからずと云ふにある。數千弗の投資は一些事に相違ないが、一些事にしても之は人の死活を制する爆發力を備へた一些事である。

鋼材が鐵材に代はる時勢の變遷が眼前に迫つて居ることを余等は明かに看取した。余等のキーストーン橋梁工場ですら鋼材を鐵材に代用することが次第に多くなつた。鐵王は新鋼王の爲に將さに位を讓らんとしつゝあつた。而して余等は益々之によりて事を成さうとして居た。一八八六年に各種形狀の鋼材製造を目的としてエドガー、トムソン工場に添へて新工場建設の案を立てゝ居る處へホームステッドに製鋼工場建設の爲に合同したピッツバーグの主要なる製造業者五六人が其工場を「余等」に賣渡したいと申出た。

元來此工場は製造業者等の合資で各自の營業に必要な好景氣事業の一たる鋼製軌條事業に氣を移して彼等は其設計を變更し鋼製軌條工場を建てることに決定したのであつた。然るに相場の高い間は軌條を製造することが出來たが、工場が本來此目的の爲に設計されて居なかつたので、銑鐵の供給に缺くべからざる鎔

商業に關する健全な主義

余はハーリーに言つた。

『之が余等の株主になつて居る會社なら今日午後事務所へ歸る前に株を賣る樣にしてくれないか』

然るに彼は別に急ぐ必要を認めない、手後れにさへならなければ善いと思つて居た。それて余は又言つた。

『さうぢやないよハーリー、どうか直ぐに賴むよ』

彼は余の言ふことを聞いて名義書換の手續を濟ませたが、之は實に幸ひてあつた。信託會社は其後忽ち巨額の缺損を暴露して破綻した。余の從弟モリスは失敗した株主の一人てあつた。同樣の不運に遇うた人は多數あつた。財界の恐慌の惡徵を呈して、萬一余等がナショナル・トラスト會社の債務に對して個人的に責任を負ふことになつたら余等の信用は必ず非常の危殆に陷つたてあらう。危機一髮とは此事てある。友人等が株主名簿に余等の名を出したいからとて唯二十株(價格二千弗の株式)だけ引取つて遣つたのが惡緣てあつた。其敎訓は決して無駄にはならなかつた。商業の健全なる主義は剩餘があつたら惜まず出して遣つ

線を引き又之を橫斷して百呎每に線を引き、其各交叉點に鑛石貫通の堅坑を掘下げた。　確か如上の堅坑が合計八十あつて其鑛石を各數呎の深度で分析したと思ふが、先方の要求代金十萬餘弗を支拂ふ前に余等は其鑛石の內容如何を詳細に知ることが出來たので、豫期以上の好結果であつた。　余の從弟同志社員ローダー氏の才幹によつて採掘と洗滌との實費は低減され、スコシャ鑛石は他の鑛石で余等が招いた損失を悉く償ひ、原價を償却し、其上利益を殘すことになつた。　此場合に於て少くとも余等は失敗の虎口から勝利を攫み取つた。　余等は化學者を嚮導として安全地域を濶歩して居た。　之によりて余等が原料獲得の斷乎たる決心を抱いて居たことと、又之が追求に機敏であつたことが判るであらう。

事業上の一喜一憂

　余等は損もしたし得もしたが、事業上一再ならず危機一髮の運命に遭遇した。或日フィップス氏と馬車に同乘して工場からピッツバーグ・ペンストリートのナショナル・トラスト會社の處へ差掛ると余は會社の窓に大きな金文字で『株主は個人的に債務辨償の責に任ず』とあるのに注目した。　其朝現に余は我社財產目錄貸方の部に『ナショナル・トラスト會社』株劵二十株とあるを見ておいたのである。　そこで

無含燐素鑛石發見

た道具で石の中に何を含有して居るか調べ當てる處を見て魔法でも使ふのかと疑ふ者もあつた。余等は遂に止むことを得ずピッツバーグの事務所から助手をブラウザー氏の許に送ることにしたと思ふ。

或日彼は燐素を含有しない珍らしい鑛石を見出したと云ふ分析報告をした。之は實にベセメル製鋼に適した鑛石であつた。斯る發見は直ちに余等の注意を惹いた。其山の持主はモーゼス・トムソンと云ふ有福な農家でペンシルヴアニヤ州センター郡の最良耕地七千英町の地主であつた。そこで其鑛石の發見された地點で其人に會見する段取になつた。五六十年前に此山は木炭用鎔鑛爐の原料採掘に試みられたが當時の評判は餘り善くなかつた、其理由は疑もなく其産出鑛石が他の鑛石に比して餘り純良過ぎた爲め、同量の鎔劑を使用すれば鎔解が困難になると云ふにあつたらしい。其頃の人智では餘り善すぎる原料が却つて無用の長物視された譯てある。

結局余等は六ヶ月以內に鑛山讓受の權利を獲て實驗に着手したが、此實驗は誰でも山を買ふ前に必ず最善の注意を以て行ふべきものてある。山側五十呎毎に

二年に余等は同社の株式の一半を買入れ、其後又他の株主からも買入れて其株式の大部分を買占めた。

そこで最後に必要な供給は鐵鑛石のみてあつた。之さへ手に入れたら我社は歐洲二三の最大製鐵會社と比肩することが出來たのてある。一時は此最後の原料をペンシルヴァニヤに發見したと思つたが、眞の成功てはなかつた。タイロン地方に投資したのは全く見込違て其地方の鑛石を採堀使用せんと企てた結果として可なり多額の損失をした。炭山の外面は幾世紀間の天候作用で雜物を洗ひ去り鑛石を豐富にしてあつたから一見有望の樣に思はれたが、短距離を内部に掘進んで見たら全く『瘠』せた鑛脈で採掘效のないことが判つた。

そこで我社の化學者プラウザー氏を我社の賃借した山中のペンシルヴァニヤ鎔鑛爐に派遣して其地方から蒐め得られるだけの原料を悉く分析し、又其地方人に成るべく見本鑛物の提供を奬勵すべく彼に指圖した。其頃化學者と云へば何か恐ろしい者の樣に思はれて居た、其著しい一例は實驗室に助手として成人なり少年なりを雇入れることが非常に困難なりし事實てある。此化學者が妙な格好し

名會社が株式會社に優る利益は此點にある。後者の社長は重役會議に掛けて幾週否恐らく幾月か其決定を待たなければならぬ。愚圖々々して居るうちに山は他人の手に這入るかも判らぬ。

我社は着々鎔鑛爐部を發展させて新鎔鑛爐を加へる毎に從前のものに比すれば改善の實を擧げて遂には標準的鎔鑛爐を造り得たと信ずる。其後も些少の改良を加へる必要は勿論あつたが、余等の觀察する限り完全な工場になつたので生產能率は一ヶ月銑鐵五萬噸に達した。

徹底的研究の功果

鎔鑛爐部が完備すると直ちに我社事業の獨立と成功とに缺くべからざる手段を講ずる必要を認めた。當時優良骸炭の供給は一定量に限られて居た、卽ちコンネルスヴィル炭鑛のものに限られて居た。余等は銑鐵の鎔解に必要なる燃料を供給されない限り事業の進行が不可能であることを認めた、而して本問題を徹底的に研究した結果フリック骸炭會社が最良の石炭及骸炭を所有するのみならずフリック氏其人が其經營に最も適當した天才であることを發見した。彼には眇たる鐵道書記から身を起して其才能の非凡なることを立證した閱歷がある。一八八

ヴアージニヤ産鑛石試驗に伴ふ發見

八十弗の高價を拂つて此必要原料の供給を外國に仰いて居たのてある。我社の鎔鑛爐支配人ジュリアン・ケネディ氏は我社の小形鎔鑛爐て附近から買入れた鐵鑛石を原料として含鐵滿俺を製造し得ることを提案した元勳てある。此發議は實驗するだけの價値あるものと認めて試みた所が果して大成功てあつた。我社は全米國の需要を供給することが出來て本品の市價は遂に一噸八十弗から五十弗に暴落する結果となつた。

ヴアージニヤ產鑛石試驗の際端なく余等は歐洲人が含鐵滿俺製造の目的て之を密々買入れて居たことを發見したが、鑛山の所有者等は他の目的に使用されたものとのみ信じて居たのてある。我社のフィップス氏は直ちに此山の買入れ運動を開始した。彼は資本もなく採堀の技巧も不十分な所有者等から買入の優先權を取つたが、其利權に對して結局巨額の代價を彼等に支拂つて、余等は其所有者となつた。之は十分に調査を遂げて收支相償ふだけの滿俺鑛石が存在して居ることを突留めた後のことてあつたが、突留めた以上は凡て疾風迅雷の勢を以て運んだ、一旦發見したからには一日たりとも空しく過ごすことは不得策てあつた。合

第十六章　工場と工人

鐵鋼業に關して余が英國て學んだ最も肝要な教訓は原料を自給して其目的とする製品を完成する必要てあつた。余等はエドガー・トムソン工場に於て鋼製軌條問題を解決した後直ちに其次の手段を講ずることにした。銑鐵の供給を規則正しく受けることの困難と不安とは余等をして止むなく鎔鑛爐の建設に着手させた。三個建てたうち一個はクローマン氏の關係したエスカナバ製鐵會社から買入れて改造した鎔鑛爐てある。斯る場合の常として此既設の買收鎔鑛爐には新規のものを造るより却て費用が多く掛かつたが、それて別に善くはなかつた。劣等工場から買入れたものほど不滿足なものはない。

一寸考へれば此購買は失策てはあつたが、結果から見れば鏡鐵の製造又後年合鐵滿俺の製造に適する小形鎔鑛爐として大利益を産み出す財源となつた。米國に於て鏡鐵を自作する會社として我社は第二位に居り合鐵滿俺を自作する會社としては第一位に居り、幾年かの間は唯一の會社てあつた。それ以前我社は一噸

かす智慧者である。

余は此二十年間來の內助がなかつたら遣り切れなかつたと思ふ。又妻に先立たれたら生きて居られやうとは思はない。順に行けば余が先きに死ぬ譯だが、さうすれば又男の注意と決斷とを要する場合に彼女が獨り生殘る悲境を考へると苦痛に堪へられない。それを思ふと余が寧ろ生殘つて遣りたくもある、だが賴りになつてくれる娘が居るから妻も忍べるだらう、又娘マーガレットの方から見れば父よりも母が賴もしいてあらう。

何故、嗚呼何故、余等は此世に折角作つた天國を見捨てゝ果てしもない黄泉に赴くのであるか。それはジエシカと共に左の如く歌ひ得るからてある。

『バサッニオさまは、品行をお愼みなさるが當然だ。何故つて、あんな結構な奥樣をお持ちになつたから、此世にゐらつしやるうちから極樂へお上りになつたんだもの』

(『ヴニスの商人』第三幕第五場ジエシカがバサッニオと其夫人ポオシヤとの好緣を語る處)



アンドルー・カーネギー夫人

てあつた。余が事業の爲に東奔西走して席暖かなるに暇なき時、又晩年には幾分公共的生活の急場に應じて繁激を極めた時、彼女は各方面の人々特に余の一族や自分の里方の親族等有らゆる社會の關係に於て外交家たり和解者たる役目を立派に勤めた。彼女は外交家であり、和解者であつた。彼女の優良な感化の及ぶ所には必ず平和と好意とが行はれた。彼女は義勇的行動を必要とする稀有の場合があれば第一に之に臨んだものである。

天性穩和で爭ふことを好まない彼女は同窓の人々とすら生涯爭うたことはない、又交際社會で彼女に閑却されたとの不平を漏した者は一人もない。相手方の人物に警戒する細心の注意は何人にも劣らない方だから最良の者を歡迎して願はしからぬ者をソーと遠ざける樣なことは勿論しないことはなかつたが、されば、とて位や富や社會的地位等は毫末も彼女の心を動かさない、野卑の言行は天性として出來ない、良趣味が彼女の全言行を貫いて居た。それでも標準を低くする樣なことは決してない。親友は何れも最良の人物である。周圍の人々の利益を常に心掛けて、必要に應じて夫々計畫し、適切な贈物や方法などを案出して仲間を驚

と極まつて居ていけません。自分の家でなくちやならないと思ひます』『如何にも』と余は同意した。『唯一つ條件があります』『それは何か』と余は尋ねた。『蘇克蘭の高地でなければなりません』それに對する余の答は『甘い條件を出したね。それは願つたり叶つたりだ。お前の知つて居る通り私は光線を避けなければならないのだ、あの高い灌木林のなかほどそれに適した所は外にあるまいよ。私が一つ調査委員になつて報告するよ』であつた。調査の結果白羽の矢はスキボ城に立つた。

母と唯一人の弟とが長逝して余が此世の中に唯一人寂しく殘された後數ヶ月經つて余は妻を迎へたのである。而して此偕老同穴の契りは余の生活を一變させたが、顧みれば其れは今より二十年前の昔であつた。余の生活は妻の爲に全く幸福なるものとなつて余は彼女の保護がなかつたならば果して生きて居られたらうかと疑ふほどである。余は彼女が余のファーディナンド的試驗に合格した時彼女の性格を知り得たと思つたが實は余の見た所は只彼女の性質の表面のみであつた。其純潔、神聖、聰明等は余が到底奧底まで測り知ることの出來ないもの

著ジョン・ヘイの傳記及書翰第二卷七十四頁）

余等は紐育に歸る時笛手や女中頭や其他雇人若干を連れて來た。ニコル未亡人は今猶余等と共に居るが、二十年の忠勤で家族同樣の觀がある。賄方ジョーン・アーヴインは一年後に來て今も居る。雇人の一人マッギー・アンダーソンも同樣で、彼等は何れも氣品高く忠良至誠の人物である。(一)

（一）『婢僕等の愛情と忠信とを喚起し得ない者は眞の紳士でない』一九〇八年紐育刊行アンドルー・カーネギー著『今日の問題』第五十九頁

クルーニー城を借りることが出來るといふので余等は翌年其處に避暑をした。笛手は其邊の事に通曉して居て色々の話をした。彼は其處に成長したので余等が之を選擇する樣になつたのもこんな關係からであつたと思ふが其後幾年も續いて其處で夏を過ごした。

女子の誕生

一八九七年三月三十日余等の間に女子が生れた。余が初めて其赤坊を見ると、妻は言つた『あなたのお母さんのお名前を戴いてマーガレットとしませうよ。それて私一つお願があるのてす』『お願つて何？』『小さいのが出來ましたから私達は是非別莊が一つほしいと思ふのてす。借りるんぢや這入る日と出る日がちやん

ブレーン夫妻、米國上院議員ユーゼン・ヘール夫妻等であつた、妻はダムフアリンから余の親戚特に老人株の叔父や伯母などを呼寄せたいと希望した。彼女の交際振りには何人も全く魅せられた。彼等はどうして彼女が余の妻になつたのかと驚嘆したが、余も同樣に自ら驚いたと彼等に告げた。余等の結婚は明かに神が豫定したまうた緣であつた。

（一）ジョン・ヘイは一八八七年八月二十五日附倫敦から其友人ヘンリー・アダムスへの手紙にキングラストンに於ける一行に關して左の如く書いて居る「其後我々一行はパースシャーヤに滯在中のアンデー・カネギーの所へ往つたが、彼は美人と結婚した許りで蜜月旅行をして居るので、訪客の送迎に暇あらず、我々が立去つた時は十六人もあつた、我々は三日しか逗留しなかつたけれど、他の人々は二週間も居た。其中には貴君の友人ブレーンやメーンのヘールなども見えた。カーネギーは同地が大いに氣に入つたと見えて毎年夏は其處へ來る積りで郡中の大邸宅を悉く踏査して借りるか買ふかと考へて居る。我々は或日彼と一所にダブリン城を見物したが城内の樹木は予の放浪生活中實見した最も美しいものであつた。某老侯爵は零落してセルツアー鑛水の一瓶も買ひ得ない憐れな境遇で數百萬の價格ある資產も悉く債權者の手に握られて居るから近い中に何時か必ずヤンキーか英國の新進富豪に賣られる運命にある。貴君かカーネギーが其れを買つたらと余は思つて居る。さうなれば時々尋れて行くよ」（セーヤー氏

請名士來訪

それから北行してエディンバラを訪問すると同市は余に自由市民權を與へて呉れたが、其時ローズベリー卿が演説された。來會者は大勢であつた。余は市の最大會館で勞働者等に演説をして彼等から記念品を贈られ、妻も胸飾を贈られて非常に珍重した。彼女は笛手等の旺んに吹奏するのを聞いたり見たりしたが、非常に興味を覺えて一人でも宜敷いからあの樣な笛手を宅において朝早く余等の眼を醒まさせたり食事の時に吹奏させる樣にしたいものであると言つた。彼女は生粹の米國人で、しかもコンネテカットの聖敎徒であつたが、萬一寂しい孤島に配所の月を見る樣な運命にても陷つて唯一の樂器を許さるゝことゝもなつたら此種の笛にしようと言つた。そこで早速笛手を見付けることにしたが、一人クルニー・マクフアーソンの推薦狀を携へて余等を訪れた者があつたので余等は彼を雇うた、余等がキルグラストンの家に入るとき彼は笛を吹きながら余等の先驅に立つた。

妻はキルグラストンよりも一層荒凉の高原生活を望んだが、キルグラストンも樂しいものであつた。(一)來訪した友人は多數で、其うちの名士はマシウ・アーノルド、

紐育に於て結婚式を擧げ、蜜月をワイト島に過ごすべく紐育を出帆した。

彼女はワイト島に於て珍らしき野花を發見して非常に歡喜した。ウォンダーリング・ウキリー(蔓草の一種)や三色菫菜や瑠璃草や櫻草や麝香草や、其他雜多の花卉は書物の上て讀んだことがあつたが、實際見たのは今回が初めてゞあつた。總てのものは彼女を魅した。ローダー叔父と從弟の一人とが蘇克蘭から來訪して余等の賓客となつて居たが、其後避暑地としてキルグラストンを余等の爲に選定してくれたので、余等は直ぐに其處へ同行した。蘇克蘭は頗る彼女の氣に入つた彼女は少年時代に蘇國に關する讀書を樂んだ、スコットの小說や『蘇國の英雄(スコテイツシユ、チーフス)』などは彼女の愛讀したものである。彼女は忽ち余以上の蘇國黨になつた。斯くして彼女の一擧手一投足は豫て余の最も愛好した夢想を實現することゝなつた。

夫婦生活の好出發點

余等二人はダムファリンに數日を費したが、誠に樂しい數日であつた。余の幼童時代の遊場や逸事のあつた所を廻り歩いて一々話をしたり纒めて話したりした。彼女は到る處に人々が良人を褒めそやすのを聞いた。此處に余等夫婦生活の發端が極めて良好に開かれた。

デンニス夫婦の好意

と自ら感じて居た。彼女の理想は彼女の母が彼女の父に事へしが如く眞に内助者として事へ得る苦鬪の伴侶を得て之と偕老の契りを結ばんことであつた。彼女の父は孃が二十一歳の時に此世を去つた。而して其後は家政の世話が大部分彼女の責任となつた。彼女は今は二十八歳になつて人生觀が出來て居た。將來の望が時には光輝を放つて居たので余とは互に手紙を遣り取りして居た。然るに或時彼女は余の手紙を悉く返して來て余の提言を承諾する考を全然放棄しなければならぬとの感想を告白した。デンニス敎授と夫人とは余の體を動かしても差支なくなるや否や直ちに紐育に於ける彼等の家庭に余を引取つてくれた。其處に余は敎授の親しい監督の下に暫く靜養して居た。余は筆が執れる樣になると直ぐにクレソッンからホイットフィールド孃に手紙を出しておいたから孃は早速尋ねて來てくれた。而して孃は此時初めて余が彼女の內助を必要として居ることを看取した。余は此世に唯一人殘された。どの方面から考へても今は彼女が余の『適當な助手』になることの出來る場合であつた。彼女は情に於ても智に於ても今や全く同意てあつたので余等二人は一八八七年四月二十二日の吉日をトし、

間違はないと思ふ。

『私は從來隨分多勢の婦人を心に籠めて觀察もした、其美しい言葉の音樂に容易く耳を囚へられて、恍惚となつたことも屢々あつた。又種々の婦人に種々の取所のあるのを見て、好ましいとも思ひましたが、それらには又何等かの缺點があつた、持前の美所を差引いてしまふのが定例であつた、貴孃は、あゝ貴孃は、まつたく圓滿無類であらゆる人間の美しさばかりを取集めてゐなさるのぢや』(ゼ、テムペストの一節でフアーディナンドがミランダを讃美した言葉)

余はこれ等の言葉を其儘命の神魂に移して反響させることが出來た。二十年間同棲した今日、之よりも强い言葉があつたならば余は眞實にそれを用ひて彼女を歌ふことが出來ると思ふ。

余の提言は無頓着に受けられた。彼女には余以外に余よりも年少の崇拜者がないではなかつた。余の富と前途の計畫とは却て余に妨げをなした。余は富んで何不自由なかつたので彼女はそんな人に嫁しても何の用にも益にもなるまい

一道の光明

余は徐々と回復した、而して將來のことを考へる樣になつたが、心中一道の光明と慰安とを發見して余の思想は何時も其の方向に向つて居た。其譯けを言ふと實は數年間余はルイス・ホイットフィールド孃と知合つて居たのである、孃の母は孃と余とが折々馬車に同乘してセントラル・パークを運動することを許して居たから、余等二人は此廣い公園内を乘廻はすことを會心の娯樂として居た。余の交際した若い婦人達は他にも多くあつたが、余は立派な馬を持つて居たので折々此一團の誰彼を伴うて公園や紐育附近を乘廻つた。さうして居る間に他の婦人達は敢て余の注意を引くこともなく全く余の視線から遠ざかつて仕舞ひ、獨りホイットフィールド孃のみが余の從來見たる何れの婦人よりも一頭地を拔ける完全な者として余の眼に映じた。遂に余は當時の淑女連に向つて余が試みた最高標準に照らして合格し得る者は同孃を措いて他に一人もないと云ふ氣分になつた。結局余がそれまでに知り得た總ての婦人のうちで此人のみが合格したのである。

配偶を選ぶ心得

余は若い人達が配偶者を選擇するに當つて先づ此種の試驗をすることを勸告したいのである。彼等は余の信ずる樣に左の一節を正直に信ずることが出來れば

一家の悲劇を十分感じ得なかつたのは寧ろ僥倖てあつたかも知れぬ。
余の發病したのは余が東部の旅行から歸つて母と一緒にアレゲニー山頭に在るクレッソン・スプリングスの別莊に愉快な避暑をして居た時てあつた。余は紐育を出發する前から一兩日不加減てあつたので醫師を呼んて診察して貰つたら病症は窒扶斯てあると言はれた。紐育からデンニス教授を招聘した所が、教授の診斷も同様て愈々それと確定した。附添醫師と看護婦とを直ぐに雇うたが、其後間もなく母が病氣になり、弟もピッツバーグて病氣に罹つたとの知せが來た。
余は回復の望がないと思はれるほど重症てあつたが、氣が非常に鈍くなつて、それからは余の氣質が全然一變する樣に見えた。余は呑氣になつた、愉快な冥想に耽つた、苦痛は微塵もなかつた。母と弟との重態に陷つて居ることは余に知らせてなかつた、而して二人とも世を去つたことを聞いたときは余が彼等の跡を追うて行くのが自然としか思へなかつた。今まて唯の一度も別れたことのなかつた余等三人が今更別れる理由はないと思つた。然るに天命は人間の考へと違つて居た。

込んであるが、それに又時々跡から來たのを追加して居る。不治の患者等が其書物を讀んで自分等の生命に光を受けたと云ふ手紙を寄越したのは余の心を最も喜ばせた。英國では大いに歡迎されて『スペクテートル』誌は好評を掲げた。然も本書に幾分の價値があるとすれば、それは全く人を感動させる努力を著者がして居ない所にあると余は信ずる。余は友人等の爲に書いたのだ、而して容易く出來ることは必ず善く出來る者である。余は旅行を樂んだと同じ樣に書くことを樂しく思つたのである。

(一)ブライトンからインヴアーネスまで『我等の馬車旅行』と題し、一八八二年に非賣品として刊行され、一八八三年に『英國に於ける米國式四頭馬車』と題してスクリブナー會社が公刊した。

一八八六年は余の爲に暗澹たる憂愁のうちに暮れた。愉快な無頓着な若い男として慈母の膝下に何不自由なくして居た余の生活は終りを告げた。余は此世に一人ボッチ殘された。母と弟とは僅々數日を隔てて相次いで世を去つた。而して余は其間激しい窒扶斯に罹つて動けなかつたが、自分が死に面して居たので

馬車旅行記の起稿

書したものである。余は之を『世界一周記』と同樣雜誌にても寄書するか又は同行者に旅行談をする材料にしても善いと思つて居たが、或冬の日に三哩の距離を態々紐育の事務所まで行くにも及ぶまいから其閑時間を利用して何か遣るが善いと氣が附いて不圖馬車旅行のことを思出した、而してどの位書けるか試みる考で二三行書いて見たが、筆が自由に動いて到頭日沒頃までに三四千語も出來た。余は暴風雨で事務所へ行かない時には此愉快な仕事をすることに極めて丁度二十回目に一冊書き了つた。余は原稿をスクリブナー會社に渡して非賣品數百部の印刷を命じた。本書は『世界一周記』同樣に友人等の歡迎を受けた。或日チャムブリン氏が余に向つてスクリブナー氏が其書物を讀んで是非之を自分の費用で公刊したいから、印税を拂ふ條件で遣らして貰ひ度いと言つたことを話された。己惚著者は自己の著作が賞讃されると直ぐに乘氣になるもので、余はそれを承諾した(毎年印税として少額づゝ余は此書物から收入を得て居るが、思へば一九一二年で三十年になる)。(一)公刊の際に余の受けた手紙は非常に多數で中には感激した文體のものもあつたから、余の配下の人々がそれを保存して今では切拔帖の體裁に綴

は余が初めて寄附した無料圖書館の基礎石を余の母が手づから据ゑた時であつた。父は郷黨に自己の藏書を公開して同町内最初の圖書館を創立した五人の機織業者の一人である。ダムフアリン市民は余が今回寄附した圖書館を『カーネギー圖書館』と命名した。建築技師は余の紋章を付けたいとのことであつた。余は別に紋章を持たないけれども、入口の上に旭日を彫刻して光線と格言『光あれ』とを加へたら善からうと注意した。技師は余の意見を採用した。

余等は馬車旅行の一團に加はつてダムフアリンに來たのであつた。一八六七年ジョージ、ローダーやハーリー・フイップスと共に英國の各地を歴訪した際に余は余の最も親い友人等と共にブライトンからインヴアーネスまで馬車旅行を試みる考を起したが、長い間豫期して居た此旅行をする時節が到來して一八八一年の春に余等一行十一人は余の生涯中最も愉快な團體旅行を試みん爲に紐育を出帆した。此旅行は余等を若やかしめ且つ愉快ならしめた休暇利用の一てあつて、不老不死の藥も斯る効能を與ふることは出來まいと思つた。

此馬車旅行の記錄は總て出立前に買求めた安價の雜記帖に毎日數行づゝ走り

心をした。余は叔父ペーリー・モリソンを訪れて余の胸中を明かし、之を如何に陳述すべきかを相談した。彼は演說家であつたが、其時賢い注意を與へて呉れた。即ち

『アンドラ、自分が眞實に感じた通り話をするに越したことはない。それで十分です。』といふことであつた。

此注意は余が服膺した演說の敎訓であつた。そこで余が若い演說家に注意して置き度いと思ふ規則が一つある。何でも聽衆の前に立つた時は唯眼の前に男と女とが居るのだと覺悟して、銘々が毎日接觸して居る男や女などに話をすると同じ氣分になつて公衆に話をすることである。餘り四角張りさへしなければ事務所で同僚に話をすると全く同じ譯だから狼狽する筈がない——斷じてない。我等は宜しく天眞爛熳の自己を赤裸々に吐露すべきである。余が曾て聽いた最も有力な演說家インガーソール大佐に其雄辯の秘訣を尋ねたら、彼の答は『能辯家を蛇蝎の如く避けよ、而して自己の本領を發揮せよ』といふのであつた。

余は一八八一年七月二十七日ダムフアリンに於て二度目の演說をしたが、それ

人生の狀態又は自然界の法則のうちには我々人間の眼に缺點と見えたり、不正無慈悲とさへ見えるものもあるが、其多くは美しさと優しさとを以て我等を驚嘆させる。其性質や地方の如何に拘はらず家鄕を愛する人情美は確に其一てある。上帝が其天啓を一人種又は一國民に局限せずして各人種が其現在發達の程度に適應した最善の天命を賜はつて居ると云ふ事實を發見することは何たる快意の事であらう。不可知の力たる天の神は何人をも閑却したまはぬのである。

第十五章　馬車旅行と結婚

余が故鄕ダムフアリンの自由市民權を與へられたのは一八七七年七月十二日のことで、余に取つては初めての特權であり、又最大の名譽であつた。余は非常に感激した。余の記名と曾て同じく市民權を與へられたサー・ウォルター・スコットの記名との間には自由市民名簿に記名した者が二人しかなかつた。余の兩親は或日ダムフアリン僧院の話をして居るスコットを見たことがあるとて折々其風采を余に話して聞かされた。余は自由市民權授與に對する答辭演說には少からず苦

處へ移住なさいませんかなどゝ言つた。彼等は實に愉快な民であつた。
又ノース・ケープへの途中でラプランド人の馴鹿部落を訪問した。船から水夫が一人余等の一行に加はつて余等と同道したが、余は歸途同水夫と共に歩いて對岸を見上げる峽に近付くと、其處に點綴する少數の小屋と建築中の二階家が一軒見えた。あの新築家屋は何の爲かと尋ねたら水夫は
『あれはトロムソに生れて大金を造つた人の家屋で彼は今歸つて、これから安樂に暮さうと云ふんてす、彼は大した金持てさ……貴公は世界中を旅行したと聞きましたが、倫敦や、紐育や、カルカッタや、メルボーンや其他色々の所を見たてせうな。貴公はあの人の樣な大金持になつたら老後の住居として何處が善いと思ひなさるか。』
と答へた。
而して彼が『マア、トロムソほどの所はありませんね。』と言つた時彼の眼が輝いた。此トロムソは北極地帶て六ケ月は夜になる所だ、それても彼はトロムソに生れたのだ。嗚呼故鄉なる哉故鄉なる哉、實に樂しきは故鄉なる哉てある。

目的に向つて進みつゝある光景を認めるのである。

東洋諸國の各宗敎に屬する聖典を注意して研究する世界漫遊者は之に因つて學ぶ所が多い。而して先づ第一に學ぶことは各國の住民が自己の宗敎を世界無比と考へて居ると云ふことであらう。彼等は各その生れた運命を喜び、且つ自分等の神聖な國土以外の地に生れ合せた不運の外國人を憐むが如き傾向がある。世界諸國の民衆は大抵自分等銘々を一番幸福な者と信じて居る、各民族は『東にもせよ西にもせよ故鄕こそ最善なれ』と信じて居る。

之が例證として『世界一周記』のうちから二つの記事を摘錄するも一興と思ふ。

余等は新嘉坡附近の森林にタピオカ從業者を見に往つた時彼等が忙がしく働いて居るのを發見したが、子供等は眞つ裸で駈歩き、親達は粗末な襤褸を着て居た。余等の一行は大いに彼等の注目を惹いた。余等は案內者に賴んで彼等に話させた。余等の國では今此處にある樣な池の水が丁度此季節に堅くなつて人々が其上を步ける樣になり又時としては廣い川に氷が張つて馬でも車でも通れるほど堅くなると言つたら、彼等は驚いて、そんなら彼方がたはナゼ私共の

何れの宗敎か疲れ果てたる人に叫ばざらん
汝再び生れざるべからず』と

「東亞の光」の原稿寶物となる

エドウイン・アーノルドの『東亞の光』は恰も此時代に公にせられて余が從來讀み來つた同種類の詩集よりも余に大なる歡喜を與へた。余は丁度印度を旅行し終つた時に此詩集を讀んだので再び印度にある心地がした。余の此書に對する尊敬の大なることが遂に著者の耳に達して、その後余は倫敦で同詩人に接觸することを得た。著者は其際余に其原稿を贈與されたが、之は余の最も珍重する寶物の一になつて居る。余は信ずる世界一周旅行を試みる餘裕ある人は多少の犧牲を要するとしても必ず之を爲すべきであると。局部的の旅行は之に比すれば凡て不十分で、唯部分々々について漠然たる印象を我等に與へるのみである。我等は全部を一周して歸つて見ると爰に始めて豫期したものを全部(勿論唯概見ではあるが)見盡した樣な感じがするのである。部分が悉く集積して一の整然たる全體を作り、國の東西を問はず何處の人民も各自が與へられた運命を果す爲に一定の

印象とは今や全く余に何等の感化をも及ぼさなくなり、又余の思想界に留まらなくなつた。余は如何なる國民も其神聖と認むる天啓のうちに全部の眞理を完備したものはないこと、如何なる民族も多少の眞理を有たないほどに蒙昧なものはないこと、又如何なる人民も自分達の大敎師即ち佛陀とか孔子とかゾロアスターとか基督とかを有して居ない者はないことを發見した。余は此等聖者の敎は倫理的に相類似したものなることを發見した。故に余は余の友人と呼ぶことを誇りとするマシウ・アーノルドと共に左の如く言ひ得るのである。

『人の子等よ、御神は常に世の民草を
治しめし給ふ
世の人々の崇めまつる宗敎をば
何とて卑しめ能ふべき
何れの宗敎か弱き意志に力を添へざらん
何れの宗敎か乾ける情を潤ほさゞらん

として公衆の面前に現れたものが即ち此書であつて余は到頭『著作家』になつた譯である。

此航海によつて一新水平線が余の前に開けた。それは余の智識と視界とを一變した。スペンサーとダーウィンとは當時全盛の地位にあり、余は彼等の著作に甚深の興味を起した。余は進化輪者の立場から人生の各方面を觀察し始めた。支那に於ては孔子の著書を、印度に於ては佛書及印度の古典を、孟買に於てはパルシー人と共にゾロアスターを研究した。此旅行の結果は余に確乎たる安心立命の境地を與へた。混沌とのみ見えた所に今や秩序が生じた。余の精神は休息の所を得た。余は漸くにして一の哲學を有することになつた。『天國は汝等のうちにあり』との基督の言葉が余の爲に一の新意義を生じて來た。過去に非ず未來に非ず今此處に天國が我等のうちにあるのだ。我等の義務は總て此現實世界にある、短氣を起して妄りに現世以外の事物を窺ひ知らんと試みることは無益でもあり且つ淺慮でもある。

余が幼少から薫陶を受けた神學思想の殘部とスヰーデンボルグが余に與へた

社社長ハンティングトン氏と逢つた時の話を能く記憶して居る、即ち同氏は余に大讃辭を呈したいと言つたから何ですかと聞いたら『私は貴君の書物を初めから終まで讀みました』と答へた。『ヘエ、さうですか、それならば大讃辭でも何でもない。私の友人は大抵始から終まで讀んで居る』と言つた。『さうでせうとも、然し貴君の友人には私のやうな者は一人もあるまいと思ふ。といふ譯は私は此數年間私の元帳のほか書物と云ふものを一切讀んだことがない、私は貴君の書物を讀む積りてはなかつたが、讀み始めたら下へ置けなくなつた。この五ヶ年間私が通讀した書物は私の元帳ばかりである』と彼は說明した。

余は友人等の言ふ所を悉く信ずる氣分にはなれなかつたが、彼等から其書物を借りて讀んだ他の人々までが之を愉快に感じたといふので余は數ヶ月間醉つた樣な氣持になつて居た。然し余は危險有毒な諂諛を信頼するものではない。余の書物は讀者の需要に應ずべく幾版かを重ねて印刷されたが、其批評や拔萃が時々新聞に出たりして遂にチャーレス・スクリブナー會社が之を公刊して賣出すことを求めて來た。一八八四年紐育及倫敦出版アンドルー・カーネギー著『世界一周記(ラウンド・ゼ・ウオールド)』

誰ても自分の言説が初めて印刷されて書物の形になつた時の感想は別段なものである。余は活版屋から届いた包みを解いて此處女作が友人に送るほどの價値があるか何うかを決斷する爲に之を再讀した。余は兎に角それを友人に送つて彼等の批判を待つことが最善の方法であると考へた。

誰ても友人に示す目的を以て書くものは其著述が不親切に受取られる事を期待するには及ばないが、常に微溫的な讃辭で葬られてしまふといふ幾分の危險を免れない。然るに余の場合に於ては反響が豫期に超えて批評を書いて遣した人達が眞實に其書物を喜んで讀んで呉れたといふ徴證は歷然であり、少くとも其評言の一部分は彼等の眞意に出てたといふことが余に滿足を與へた。世の著作家たるものは人の讃辭を信じ易い傾きがある。余が初めて受けた讃辭はフィラデルフィヤの大銀行家アンソニー・ドレキセルから來た手紙のうちにあつた、而して其讃辭といふのは余が數時間の安眠を妨害したといふことであつた。彼は讀み初めたら止めることが出來なくなつて到々翌朝の二時まで讀み續けて之を讀了したと書いてある。之に似た手紙が數通到達した。余は或朝中央太平洋鐵道會

ジョーンズ大尉

ジョーンズ大尉の選擇した機械の完全なこと、事業設計の巧妙なこと、人物配置の熟練なこと、又彼自らが偉大な經營者であつたこと等の爲に余等の成功は實に目覺しいものであつた。最初の一ヶ月の事業成績、正に一萬一千弗の純益を見た破天荒の事實は特筆大書するに足ると信ずる。余等の計算組織が完全であつた爲め利益の正確な金額を知り得たことは是又著しい事實である。余等の製鐵業の實驗上正確な計算が何を意味するかを十分に學んだのである。凡そ工業の過程に於て原料を甲部門から乙部門に移動する際一々書記をして其記錄を作らしめることほど有利な方法はない。

製鋼業の門出が斯くも有望に見えたので余は先づ一安心し、爰に始めて休暇を取る考を起したが、此時心に浮んだのは豫て樂んで希望して居た世界漫遊の企圖であつた。そこでジエー・ダブルユー・ヴアンデヴオルト（『ヴアンデー』）と余とが一八七八年の秋に漫遊の途に上つた。余は剝取紙帳數冊を携帶して鉛筆で毎日數行づゝ思付いた事を書き始めたが、別に書物として刊行する考があつた譯ではない、唯場合によつては僅かばかり印刷して知人に頒つても善いと思つたのである。

『宜しい、大尉殿、合衆國大統領の俸給を上げませう』
『それはお話てす』と倭小なウエルス男は言つた。（一）
（一）カーネギー氏が若い者を社員に選抜する方針について一の逸話がある。アレキサンダー・アール、ピーコックと云ふ若い蘇國人を呼寄せて一日無雑作に尋ねた。
『ピーコック君は百萬長者になりたいと思ふなら何うするか』
『現金拂ひに對してドッサリ割引をします』と答へた。ピーコックはカーネギー製鋼會社が合衆國製鋼會社に併合された時二パーセントの持分を所有した社員てあつた。

余等と競爭した製鋼業務者は最初動もすれば余等を見縊る傾があつた。彼等は自分等の製鋼工場建設が困難てあることを實驗して、余等が一年とは軌條の引渡しを續け得まいと信じて殆ど恐るゝに足らないとケナして居た。余等が製造に着手した頃製鋼軌條一噸の相場が約七十弗てあつた。余等は代理商人を全國に派遣して出來る限りの上値段て註文を取らせた。而して競爭者の心付かない中に早くも巨額の註文を受けて事業着手の見込が立つて來た。

ン工場から日給二弗の職工として余等の會社に雇れたが、間もなく余等は彼が人格者たることを認めた。而して此の事は彼の一擧手一投足に顯れた。彼は南北戰爭には志願兵として出征し、拔群の功を現はし遂に驍名天下を壓した一大隊の隊長(大尉)に昇進した。エドガー・トムソン工場成功の大部分は此の人に歸すべきてある。

拔術家富を知らず

後年彼は會社の持分を辭退したが、それを持つて居たら一大富豪に成つたと思ふ。或日余は彼に會社の持分を與へられた若い人々のうちに彼が今得て居るよりも遙に多く利益を得て居る者があること、それから余等が彼を社員に擧げる票決をしたことを話した。社員になることは何等財務的責任を伴ふ譯てはない、それは其持分は後來の利益から拂込むことを常に規定して居たからてある。彼は言つた。

『否、私は商業の方に思想を向けることを好みません。工場の世話を燒くだけて十分てす。貴君が若し私にそれ丈の價値があると思召すなら、素敵に大きな俸給を私に拂つてください』

氏に管理させ、他の一部をジョーンス氏に管理させる案を立てて居たが、此ステヴエンソンは蘇國人て後に工業家として立派な記錄を作つた名士である。此提案に對して余が其時與へた裁決ほど製鋼會社の運命に重大な影響を與へたものは他に斷じてないと信ずる。如何なる理由があつても二人に同等の權威を與へて工場の經營が出來る筈はない。二個の相異る部門にもせよ同一地境に二人の指揮者を置いて一工業を經營することは兩司令官が一軍を指揮し兩船長が一船を操縱すると等しい程の否それよりも悲慘な運命を招くに至るてあらう。そこで『之はいけない。余はステヴエンソンと云ふ人もジョーンスと云ふ人も善くは知らないが、どつちか一人工場長に任じて其一人のみが貴君に事業の報告をすることにせにやならぬ』と言つた。

白羽の矢はジョーンス氏に立つた。此の所謂る『大尉』を手に入れた順序はこんな風てあつたが、彼は後年ベセメル鋼業の知らるゝ限り至る處に盛名を歌はれた名士てある。大尉は其の頃まだ極めて若く、痩せた敏活な男て其の身長に於てすらウエルス人種の特徴を帶びて非常の短軀てあつた。彼は近所のジョンスタウ

畑違の人物を用ふべからず

も決して最初組織した時の様に始終甘く行ける者ではない。必ず變更を要する場合が起るといふことである。新興のエドガー・トムソン製鋼會社も此例に洩れる譯には行かなかつた。コールマン氏は余等が軌條の製造に着手する前ですら經綸と實力とに於て廣く評判を取つた新社員が余等の會社の役員となつて經營の任に當ることを不滿足に思つて居た。それ故止むなく余はコールマン氏の持分を買取ることにした。所が久しからずして余等は彼の判斷が正しいことを立證する事實を發見して、新社員は鐵道の監査役として出納事務には老練家であつたが、彼にもせよ又其他如何なる事務所育ちの人物にもせよ工業に轉じて來たばかりて最初から成功する者と思ふのが抑も誤りてある。彼は新事業について何等の智識も訓練もなかつた。然し之は何も彼が優秀な監査役でないと云ふ意味ではない。彼に對して不可能なことを豫期したことは余等の失策であつた。

工場が愈々開業(鋼製軌條工場の準備が出來て軌條の製作を開始したのは一八七四年であつた)の運びになり監査役の提案に掛る組織が余に示されてそれに承認を求められる場合となつた。彼は全事業を二部に別ち其一をステヴエンソン

エドガー・トムソン製鋼會社

云ふ若い男に讓ることとなつた。アボット氏の經歷は幾分かボーントレーゲルに似て居る。最初薄給の一書記として余等の會社に雇はれたが、久しからずして製鐵工場事業の要地を占めた。彼の成功はウキリアムに劣らないほど目覺しかつた。彼はウキリアムと同等の出資社員に成つて遂には會社の社長に昇進した。

此頃旣にカーリー氏はルーシー鎔鑛爐の經營に顯著な成績を擧げて、他社員と同等の地位を占めることとなつた。凡そ事業の成功を計る方法として拔群の奉仕をした人々を昇進させるより有効な政策は一つもない。余等は結局カーネギー・マッカンドレス會社の組織を變更してエドガー・トムソン製鋼會社となし、之に余の弟とフィップス氏とを入社せしめることとしたが、此兩人は初め餘りに進取的な先輩の驥尾に附して製鋼業に從事することを躊躇した風が見えたから、余は初年度の收益を彼等に示して、若し彼等が製鋼業に從事しないならば結局方針を誤つて何處へ落付くか分らなくなるだらうと警告した。其處で彼等は再考して余の提言に同意を表したのである。此事は彼等にも余等にも共に幸であつた。

余の經驗によれば各方面から雜然と集つた新顏の人々が合名會社を組織して

粋をきかす

場を離れて再び獨逸へ行くことは出來ないと思ふんです。それて一寸貴方のお考へを聞きたいと思ひました』

『行けないことはないよ、行く方が善い、行くべき筈だ。婦人の親戚などがさう思ふのは結構だと思ふ。直ぐに出掛けて行つて其婦人を連れてお出て。私が善い樣に取計ふから』。それから別れる時に又余は、

『ウヰリアム、君の戀人と云ふのは美しい、長けの高い桃の樣なクリームの樣な若い獨逸婦人だらう』ねと言つた。

『さうさね、カーネギーさん。女は少し頑丈造りですよ。僕が輪轉機にかけたら少しは婀になるでせう』

ウヰリアムの説明振は總べて工場習慣から來て居る。(一九一二年六月卽ち今朝此話を再讀して余は思はず噴飯した。然し『各人自らドン底に立つ』の一條を讀んだ時も同じ樣に噴飯した)。

フイップス氏は製鐵工場營業部長であつたが、事業の擴張に伴うて彼は製鋼の方にも關係する必要に迫られた。そこて營業部長の職はウヰリアム・エル・アボットと

ウヰリアムは古軌條が全部使用されたことを善く知つて居た。パーク氏は狽狽した、事件はそれて梟がついた。ウヰリアムは凱歌を揚げた。

余が或時ピッツバーグを訪問するとウヰリアムは誰にも話されない『祕密』を余にだけ話したいと言つた。之は彼が獨逸へ旅行して歸米した後のことであつた。獨逸に滯在中彼は以前の同窓て今敎授に出世して居る人を數日間訪問する樣にと招待されたのてある。

『それてね、カーネギーさん、其先生の家政を悉皆して居る妹が僕に大變親切にしてくれるんてす、そして僕が漢堡に往つた時少しばかり其妹さんに贈物したいと思つたんてす。女が僕に手紙を書く、それから僕が女に手紙を書く。女が又手紙を僕に書く、僕が又女に手紙を書く、そこて僕が女に結婚しないかと申込んだんてす。女は大した學問があるんてすが、承知したと書いてよこしたんてす。それから僕がそんなら紐育へ來てくれ、紐育て一所になるからと言つたんてすが、カーネギーさん彼の地の人達は商賣も工場も一向知りませんてね、女の兄が僕に手紙をよこして獨逸へ歸つて結婚をしてくれと言ふのてすが、僕は今更工

ウキリアムが屹度適當に行を改めると余等は大尉に話しておいたが、大尉は其後笑ひながら、ウキリアムの詫と云ふのは之だと言つた『サア大尉殿今日は御機嫌が善いてせう。僕は貴君を惡くは思つて居ませんよ大尉殿と手を出した。大尉は遂に其手を取つて二人は首尾よく仲直りをした。

ウキリアムは或時余等が使用することの出來ない古軌條を澤山ピッツバーグの先進製鋼家で余等の隣人であるジエームス・パークに賣付けた。パーク氏は其品質が甚しく粗惡なことを發見して損害を請求した。そこでウキリアムはフイップス氏に同道してパーク氏と立會ひ談判をせよと命ぜられた。フイップス氏はパーク氏の事務所に這入つた、其間にウキリアムは工場を見廻して拒絶された軌條を捜したが何處にも見當らなかつた。ウキリアムは何處を見れば善いと云ふことをチヤント知つて居たのだ。彼は遂に事務所に這入つてパーク氏が一言も口を出す間もないうちに談判を始めた。

『パークさん、僕が貴君に賣つた古軌條が製鋼用に適しないと聞いて僕は喜んで居るのてす。僕はあれを全部買戻しますよ貴君は一噸五弗儲かる譯てさ』

ウヰリアムボーントレーゲル

績に對する當然の報酬として得ないものはなかつた。彼は逸話に富んだ男である。例へば同志社員が一年の營業成績を祝する爲に晩餐會を催した時交互に短い演說をしたが、ウヰリアムの演說はこんな風に結ばれた『諸君、我々の爲すべき事は價格を上げ生産費を下げ各人自ら其ドン底に立つことである』之を聞いた聽衆は腹を抱へてキャッ〳〵と笑ひ、暫くは靜まる樣子も見えなかつた。

エヴアンス大尉(『喧嘩屋のボッブ』)は一時余等の工場の政府觀察員であつた。彼は嚴しい方であつた。ウヰリアムは時々非常に困却して遂に大尉の機嫌を損うたが、大尉は余等に對し彼の擧動について不平を訴へた。余等は官吏の機嫌を取ることの肝要な所以を彼に會得させようと試みた。ウヰリアムの答は『でもあの役人は這入つて來て僕の葉卷を吸ふからさ、大膽な大尉よ。ウヰリアムは一本一仙のホキーリング卷を樂んで居たのに)それから出ると僕の鐵を惡く言ふんだ。諸君はあんな男を何と思ふか。だけど明日は詫を言つて善く取扱つてやるよ』であつた。

も出來ない事もないと云ふ勢になつた。

ウヰリアムは又人格者であつた。彼の言葉には獨逸ナマリがどうしても拔けなかつたが、その顚倒した英語が却つて彼の言論に力を添へた。彼の監督を受けたユニオン鐵工場は余等の事業中最も利益の多い部門になつた。彼は數年間心血を注いで働いた爲め過勞に陷つたから余等は彼に休暇を與へて歐洲旅行をさせることにした。彼は華盛頓を經て紐育に來り余を訪問した時に、獨逸へ歸省するよりはピッツバーグに歸りたいと云つて其眞情を洩らした。其感想を起した理由を聞いて見ると、彼は華盛頓記念塔に昇つた時に上り段に又其他の公共建設物中に使用してあるカーネギー角材を見て來たからであるといふのであつた。彼は其感想を語つて『あれを見ちや僕は嬉しくて耐らない、直ぐに歸つて工場が萬事都合よく運轉して居るかどうか見屆けたくなつた』と言つた。ウヰリアムは朝は早く夜は暗くなるまで工場に居た。彼の生命は其處にあつた。

休暇よりは仕事

青年を余等の同志社員に加へたのは彼が一番であつた。余の記憶によれば彼が死ぬる時の年收は約五萬弗であつたが、一介の貧しい獨逸青年から仕上げた彼は一仙たりとも其功

くないと感じて此提供を拒絕した。カーネギー氏は會社から四萬弗を新事業の資金としてクローマン氏に贈與した、之で彼は競爭會社を起したが忽ち失敗した。カーネギー氏の事業の初期に於て兩者の間に何等の不和がなかつたと余は思ふ。クローマン氏の存命中兩者の關係は終始愉快であつた。調和は兩者の交際の特色であつた。彼等は互に最も懇懃な感情を以て交つて居た。

第十四章　同志社員と著作と旅行

クローマン氏が余等と關係を斷つてから、余等は一も二もなく其後任としてウヰリアム・ボーントレーゲルを採用することに決定した。而してウヰリアムの經歷を語ることは余の常に愉快とする所である。彼は獨逸から米國に直行して來た青年て英語は出來なかつたが、クローマン氏の遠い親戚に當るところから余等の工場に雇はれる事となつたのである。彼は其後忽ち英語に習熟し一週間六弗の出荷掛に出世した。彼は機械に關する知識を爪の垢ほども持つて居なかつたが、不撓不屈の熱心と勉强とを以て雇主の利益を謀らんとするの精神は彼をして忽ち工場の各部に顯著な働をなさしめて、遂に工場內の仕事に就ては知らない事

會社定欵に記名が濟んだ後、クローマン氏は余に言つた、カーネギー兄弟は出資金額が最も多いから改良計畫などに依り大膽な意見を主張して容易ならぬ困難を惹起するかも知らん。此困難を豫防する方法として會社の定欵に改良計畫を決定するには三社員の同意を要すと云ふ一ケ條を加へるがよからうとの意見であつた。余はカーネギー兄弟の持分が大きい以上實權は當然彼等に歸して居るから此條件を强ひて加へる譯には行くまいと思ふけれども話しだけはしてみやうとクローマン氏に告げた。そこで此問題を試驗的に言出して見たら、カーネギー氏は直ちに答へて如何なる改良計畫でもクローマン氏又は余と余の弟と共に一致させて遂行出來ないものなら見合せた方が善いと言つた。其他何事でも共同經營中は同樣の謙讓で處理された。

問　只今貴君の言はれた所を聞くと、自然クローマン氏が何故に退社したかとの疑問が心に浮ぶ。

答　一八七三年の恐慌に次いで財界の不況其極に達した時、クローマン氏は不幸にしてエスカナバ鎔鑛爐會社に關係した爲め其資産を傾けて遂に余等の會社に投じた資本を人に讓らなければならなくなつた。其頃工業資産は原價の三分の一若くは半額位に暴落して居たにも拘らず余等はクローマン氏の分を記帳價格で引受けた。

エスカナバ會社の債權者に債務を決濟した後、クローマン氏はカーネギー氏から余等の會社資本金十萬弗を持分として提供され、其拂込は他日の利益からしても宜しいとの條件であつた。クローマン氏は以前の持分がそれよりも遙に大きいから之を受けた

務家としては貧弱なことの短所を速かに暴露した。

(二)此事の起つた久しい後にイシドル・ストラウス氏がヘンリー・フィップス氏を訪問して、カーネギー氏と製鋼會社社員とに關して其頃公表された二の事項が眞實なるや否やと尋ねた。フィップス氏は否と答へた。そこでストラウス氏は「それならば貴君か其眞相を公表することは貴君御自身に對し又カーネギー氏に對して爲すべき義務であろ」と言つた。

フィップス氏は一九〇四年一月三十日の紐育ヘラルド紙上に左の如く明快に又カーネギー氏に知らせずに此事を公表した。

問 最近公表された所によればカーネギー氏が其會社經營の初期に於て又其末期に於てミラー氏やクローマン氏や貴君などを適當に待遇しなかつたとあるか、之について貴君は何か言ふべき事があるか。

答 ミラー氏は本件について既に聲明する所があつたが、余はカーネギー氏と共同經營中余自身に關する限り同氏から受けた待遇は常に公正寛大であつたと言ひ得る。余とクローマンとの事業提携の歴史は四十三年間續いた。余の知る限りカーネギー氏とクローマン氏とは同社員としての間柄が愉快のものであつた。

それから最近になつてカーネギー・クローマン會社が成立した時、出資社員はアンドルー・カーネギー、トマス・エム・カーネギー、アレドルー・クローマン及余の四人であつた。會社の實權はカーネギー兄弟の手にあつた。

人各其職分あり

意機械の方面に其時間の全部を捧げ、工場經營の事務的方面には無關係たることとてあつた。彼が之を承諾したならば千萬長者になれたてあらうに、彼は彼の自負心、特に彼の家族の自負心に驅られて之を承諾しなかつた。彼は自分で事業を始めると頑張つて、余自身は勿論社員一同の最も熱切なる勸告にも拘はらず、新に競爭會社を起して自分と息子等が其經營の任に當る決心だと斷言した。其結果は彼の失敗と夭折とてあつた。

我々人間が各其性情に適した職業を選ぶならば必ず容易く又愉快に成功すると云ふ事實を認めないとは何たる愚昧であらう。余は有爲の人物にして工場向には偉大な才幹があつても事務所には有害無益てありながら、愚にも其不適任な地位に愛着して身神困憊し、煩悶憂愁の極、終生悲慘の境遇に轉々して結局失敗に終つた者を一人ならず知つて居る。余はクローマン氏と別れた時ほど痛恨に思つた別れは經驗したことがない。彼の心情は善、其技術的頭腦は偉大てあつたが、自分一人の考に任せたら余等と何處までも同行したてあらうと思ふ。然るに他から資本を提供されて、而もそれが必要の時に用をなさないて偉(一)大な技術家は事

との抱負を持つて居たけれども、實は事務所には有害無益の人物で、工場に在つて機械の設計をしたり新式のものを操縱するならばそれこそ天下無敵の偉才であつた。適才適所の意味で彼を繫ぐには幾分の困難があつた。彼は工場に居ても動もすれば他に走る虞があつた。彼は社交場裡に於て或は人々の追從を受けたかも知らん。そんな場合には彼の機械的天才に加へて驚くべき實業的技倆があると賞揚すれば彼を虜にすることが出來ると知つて居た人々に誘惑されたのであるが、こんな技倆は前にも言つた樣に同志社員の容易に認め得ない所のものであつた。

クローマン氏が破產の裁判を首尾よく切拔けて自由になつた後、余等は彼に余等の資本金の一割を彼の持分として提供するから之より生ずる利益の內より其一割額に對する法定利息を支拂ふべき責任を果す外何等の義務を負はないで余等の會社に關係すべきことを勸告した。而して會社の收入を以て其資金を償却し了るまで此約束を履行する筈であつた。此提供に伴ふ條件は彼が他の事業に一切關係しないことゝ他人の爲に保證の地位に立たないことゝてあつて、專心一

クローマン氏の失脚

が、それが實現する前に同志の人々は約七十萬弗に登る巨額の債務を負擔してしまつた。クローマン氏を救濟する手段としては破產の外はなかつた。

クローマン氏は余等の社員であつたが、同志社員に謀らないで個人的債務を引受けて他の製鐵會社又は其他の會社に投資する權利がなかつたのであるから、之は余等に取つて之まで遭遇した一切の危難よりも更に寒心すべき一大事件であつた。實業家の守るべき金科玉條は同志社員に秘密を保たないと云ふことである。クローマン氏は此規則を無視した爲に同氏一身のみならず余等の會社までも危殆に陷らしめた。而もそれが余の親密にして居たテキサス・パシフイク社の友人等に關して起つた困難の後始末が就くか就かないかの最中であつたから實に耐らない。そこで當面の問題は何か眞實に依賴すべきものがあるか。余等の立場となる樣な堅固な岩が何處に發見されやうかといふことであつた。

クローマン氏が實業家であつたら此事の發覺後再び余等の社中に加はるべき筈のものではなかつたらう。然るに彼は實業家ではなくて、唯幾分の實業手腕を備へた最も優秀な實際的技術家であつた。クローマン氏は事務所に坐り込みたい

不敵の白者しれものと見えたらしい。彼等は老人であるが余は若いといふ一事が根本の相異を來たさしめた。

余自身と余等の企業とに對するピッツバーグ財閥の驚異は一時のことゝて忽ち何とはなしに理屈も言はずに唯信頼する態度を取る樣になつた。余等の信用は難攻不落の勢を呈して其後は財界緊縮の場合となれば余等に金融を提供する者が減ずる所か却て多くなつて、恰もピッツバーグの老舗銀行預金が他銀行預金の低減する時に却て增加すると同樣であつた。法律の保護に乘じて債務を綠背紙幣グリーンバックで決濟することを卑怯として金貨で引換へて居たのは全米國中唯此銀行一つであつた。此銀行には紙幣が殆どなかつたが、余は此斷乎たる方針が大いに廣告となつて、斯る信用を贏ち得せしめたことゝ信ずる。

友人スコット、トムソンの兩氏及其他の人々が窮境に陷つた後又々一大危難が余等に臨んだ。それは余等の同志社員アンドルー・クローマン氏が投機者流に誘惑されてエスカバナ製鐵會社に引掛かつた事實を發見した時のことゝて、之は前者よりも一層嚴しい苦痛であつた。彼は會社が株式組織になるとの確報を受けた

正鵠を失した評價

財務的責任を帶びて居ない。余の責任は余等の事業に關係したもののみてあつた。此事業の爲には余の所有して居た最後の一弗たりとも擔保に提供する覺悟てあつた。又會社の未濟債務とあれば何なりとも裏書することを辭せぬと聲明した。

余は其時まて實業界に於て大膽不敵て、幾分向不見の若輩だとの評を受けて居た。余等の業務は手廣くなり、發達は迅速てあつて、若いながら余は旣に幾百萬の取引をして居た。ピッツバーグの先輩から見れば余の行動は堅實と云ふよりは寧ろ才氣潑剌の方てあつた。或老練家が余を評して『アンドルー・カーネギーの頭腦が有終の美を濟さないとしても、好運て成功するだらう』と言つたことを余は記憶して居る。然し之ほど正鵠を失した評價はないと思ふ。相當な判斷力ある人ならば如何に余が自身の爲め又同志社員の爲め冒險を愼んだかを發見して驚くだらう。余が大きな仕事をしたときは必ずペンシルヴァニャ鐵道の如き大會社が余の後援となつて責任を帶びて呉れたのてあつた。蘇國風の戒心は常に少からず余の精神に供給されて居たが、ピッツバーグの老工業家等の眼には折々余が

其渦中に投ずることゝなつた。之は余に取つて最も嚴しい打撃てあつた。テキサス圏に斯くまで親密な關係のあつた余は其財務上の責任を到底免れ得ないだらうと世間では想像して居た。

余等が巨額の取引をして居たピッツバーグ爲替銀行の頭取シェンベルゲル氏はスコット氏とトムソン氏とが苦境に陷つたとの報知に接した時恰も紐育に滯在して居た、彼はピッツバーグに急行して、翌朝の重役會議に臨み余がテキサスに無關係な筈は斷じてないと言つて、彼は銀行が余等の受取手形をこの上割引しない方が得策だと注意した。彼は余等の裏書を經て割引した此等手形の總額が大きいのに驚愕した。余としては事態の惡化を豫防する爲に機敏の行動を取る必要があつた。ピッツバーグ行一番汽車で余は同地に赴き關係當事者等に對して余はテキサス鐵道の株主には相違ないが、其拂込は既に濟してあることを聲明した。又余の名義はテキサス側の證書類に一弗たりとも保證に用ひられて居ないし其他何等未濟債務にも用ひられて居ないと聲明した。余は自分が所有して居なかつたり全部支拂濟になつて居なかつた何等の財産にも一切關係がない。又何等の

今之を書いて居る時、老偉人の面影が躍如として眼の前に浮ぶ。彼の愛國心は無限であつた。彼は七月四日の獨立祭に例の如く休業して居た余等の工場へ來訪して一隊の人夫が汽罐を修繕して居るのを發見した。彼は支配人を呼んで之は何うした譯かと詰問した。彼は一切の作業休止を嚴命した。『七月四日に働くとは何事だ、修繕をするなら日曜日が澤山あるぢやないか。』と彼は烈火の樣になつて怒號した。

一八七三年の大旋風が襲來した時、余等は直ちに各方面の事業縮小に着手した。新製鋼所』の建設工事を一時休止することに決定した時は實に氣が進まなかつたが止むを得なかつた。之に投資した財界の巨頭て拂込の出來なくなつた者が數人あつたので余は止むなく其持分を引受けて金額を彼等に拂渡した。こんな風に會社の實權が漸次余の手に歸したのてある。

此暴風の初めて威力を振つた時、第一に影響を受けたのは株式取引所に關係した財界てあつて次は商業界工業界てあつた。けれども形勢着々惡化して遂に大破裂を來し、前にも述べたテキサス・パシフイク鐵道事業に關係した余の友人等も

取引先諸銀行の重役室に飛び込んで余等の立場を全部明示しても差支がないとの覺悟が出來た。余は之を遣つても決して余等の信用を失ふことはないと感じた。余等の事業に關係して居た者は一人も贅澤な生活をして居なかつた。余等の生活狀態は贅澤とは正反對であつた。宏壯な邸宅を建てる爲に事業に投ずべき資金を濫費した者はない、就中株式相場に手を出したり、自分等の本業に連絡のない他の事業に投資したりする者などは一人もなかつた。他の人々と裏書の交換をすることも決してなかつた。加之余等は毎年確實な利益の上に有利な事業に關係して居る事實を示すことが出來た。

斯くして余は同志社員の危惧を笑殺することが出來たが、余等の財政狀態に關して援助を仰ぐ爲に何人にも口を開く必要の生じなかつたことは社員一同と共に慶賀に堪へない次第であつた。余の良友であり且眞の友であつたコールマンは資力豐富にして立派な信用ある紳士であつたが、此際自ら進んで余等の爲に裏書をすると言つてくれた。斯る特權を提供されたものは余等の外に誰もなかつた。金城鐵壁の如きウヰリアム・コールマンの名義は余等の獨占に歸した。余が

に拂はない樣に指圖しませう』彼は又『ハア左樣ですか、貴君が左樣なさるなら、貴君の方の貨物運送を差止めませう』と竹篦返へしを喰はされた。

余は其危險を冒す覺悟であると言つた。鐵道會社はそれほどの極端な仕打をなし得なかつた。實際暫らくは運賃を拂はずに貨物を托送して居た。余等ピッツバーグの製造家は得意先から支拂停止を遣られた爲め次第に嵩んである自分等の債務を辨償することが全然不可能になつた。各銀行は滿期證劵の更新を餘儀なくされた。彼等は余等に對して平素して居た樣に立派な取扱をしてくれたから余等は安全に難關を通過することが出來た。けれども此の如き危機に際して余の専心一意考慮したことはモット資金を集めてそれを自分等の事業に保留し、將來如何なる事變が起つても決して再びこんな風に日夜拷問責めの不安に苦まない樣にしたいと云ふことであつた。

此大危機に當つて余自身は何うかと云ふに、初め余は同志社員中最も興奮し最も憂慮した方であつた。余は殆ど自制力を失つた。けれども結局余が余等の財界に於ける地位の堅固なことを認めた時に余は哲理的に冷靜になり、必要ならば

哲學的に冷靜

辛うじて辻褄を合はす

等の取引銀行ですら殘金を引出さない樣に懇願して居た。爰に一例を擧げて當時の金融狀態を示すならばこんなことがあつた。余等の支拂日が近付いた爲に小額紙幣十萬弗を調達すべき必要に迫られた。余等は此金額を手に入れる爲め紐育で二千四百弗の割增を拂ひ然る後之をピッツバーグへ急送した。最も確實有利な擔保を提供しても金を借りることは不可能であつたが、幸に余が豫備に有つて居た有價證券を賣却して多額の金を會社に融通し後に返させることにして辻褄を合せた程であつた。

ピッツバーグに集中した鐵道諸線のうち余等の供給した材料に對して巨額の債務を負うて居た者があつたが、其中でもフォートウェーン線は最大の債務者であつた。余は記憶して居る、或時余が同線の副社長ソー氏を訪問して金が入用であるから是非支拂をして貰ひ度いと言つたら、彼は『必ずお拂はする筈ですが今の處當會社では抗議の起りさうな債務の外一切拂はないことにしてあります』と答へた。そこで余は一本突込んだ『宜しい、そんなら貴會社の運賃請求書は其性質のものですから、私共は貴會社の立派な例に倣つて之から一弗たりとも運賃を貴會社

一八七三年九月の財界恐慌が余等を襲うた時には事業が既に十分發展して居た。然し余の實業生活が最も不安な時代に這入つたのは此時であつた。アレゲニー山内クレッソンの夏期別莊に靜養して天下泰平を謳歌して居た或朝、ジエー・クック會社破綻の急電が來た。其後殆ど毎時間破綻の新事件が報告された。會社商店は將棊倒しの狀態で、毎朝の疑問は此次はドレが遣られるかてあつた。破綻のある毎に其餘波を受けて財源の枯渇に遇ふものも亦多數あつた。缺損頻々として各所に起つた爲め遂に實業界は全部痲痺の狀態に陷つた。微細の弱點まてが悉く暴露された。倒れさうにも思はれない鞏固な會社商店も主として米國に適當の銀行組織がなかつた爲に瓦解するに至つた。

余等は自分等の債務に關して餘り憂慮する程のことがなかつた。自分等の債務を果すと云ふことが余等の大なる困難の原因でなくて、寧ろ余等に對して債務を負うて居る者の爲に拂はせられる惧があつたので困却した。當時心配の種となつたものは余等の支拂手形ではなくて受取手形であつた。何故なれば余等は此兩種の手形を同時に處理せねばならぬ場合に臨みつゝあつたからである。余

驗時代をも免れないのであつたが、余は米國に於て今や鋼製軌條を總ての點に於て外國品同様良好に作ることの出來る程度に達して居ること、又余等の製作した軌條は必ずキーストーン橋梁やクローマン車軸同様の好評を博する見込であると確説した時に彼は漸く承諾した。

彼は自分の會社を第一に考へて居たから工場の敷地はペンシルヴアニヤ鐵道線路に沿うた地帶に買入れる樣にと焦慮して居た。けれども之はペンシルヴアニヤ鐵道會社に余等の運送業を獨占せしむることにならう。數ヶ月の後彼がピッツバーグを訪問して、ピッツバーグの管理局長として余の後任者たるロバート・ピトケーンがブラッドックの新工場敷地を彼に指示した時、彼は之が唯ペンシルヴアニヤ線のみならず競爭線たるボルティモーア・オハヨー線及右二線よりも一層有力な競爭者たるオハヨー河沿線にも連絡して居るのを見て、一寸眼を丸くした。ロバートから聞けば其時彼はこんなことを言つたさうである。『アンデーは工場を二三哩東の方に建てればよいのに』。然しトムソンは此無類な好地位を選定するに就いては十分な理由のあつたことを知つて居た。

討死した戰場が他の同地生れの兄弟によつて產業中心地に化せられたことは一の奇蹟と言はねばならぬ。

之に似た珍奇な事實が又一つ最近に發見された。一九〇四年ピッツバーグのカーネギー館創立記念日にジョン・モーレー氏の演說中フォーブス將軍デュケスン要塞攻略の一條があつた。將軍が英國首相ピットへの手紙に其名に因んで之を『ピッツバーグ』と命名したと書いたとモーレー氏は言つた。此フォーブス將軍はピッテンクリーフの地頭で、余が一九〇二年に買入れて公園としてダムフアリンに寄附した溪谷に生れた人である。して見ると二人のダムフアリン人がピッテンクリーフの地頭で、何れもピッツバーグに大業を成した、卽ち一はピッツバーグを命名し他は之が發展に盡力したのである。

トムソンと製鋼工場

製鋼工場の命名に關しては友人エドガー・トムソンに敬意を表するのが余等の素志であつたが、余が其名を使用する承認を求めた時に彼の答は意味深長であつた。米國の鋼製軌條に關しては、それはまだ中々信用すべき程度に達して居ないから自分の名を之に冠することは好ましからぬと彼は言つた。不確實は勿論試

町五六百弗で買へると思つて居たものを二千弗に賣付けられた。然し其後買足した部分は一英町五千弗に騰貴して居た。

余等はブラッドック敗戰の地に鋼製軌條工場を建設することゝなつた。基礎工事の掘下げをして居る間に戰爭の遺物が澤山發見された、卽ち銃槍、刀劍、その他類似のものである。當時ダムフアリンの町長サー・アーサー・ハルケット父子が戰死したのも此處であつた。そこで此等の人には何うして此處で彼樣な運命を遂げたのであるかとの質問が起るであらうが、之に就いて忘れてならぬことは其頃英國の市長、町長などは貴族であつて、實際の職務を執らずに其名譽を享受する爲に名義を貸したものであると云ふ點である。商賣人は市町長になる貫目がないと見限られて居た。此貴族的觀念は今日に至るまで全英國に殘つて居る。生命保險會社、鐵道會社、否場合によつては工業會社すら其事業に就いて全然無識な有爵者か何かを名譽の爲に社長に戴いて居るのがザラにある。サー・アーサー・ハルケットもそんな風に一紳士としてダムフアリンの町長たる地位を占めたが、本職は軍人であつた爲に出征して此處に戰死を遂げたのである。ダムフアリン出身の二人が

ペンシルヴァニヤ鐵道の正副社長エドガー・トムソン、トマス・エースコット兩氏も鋼業發達を奬勵する趣意で株主になつた。此鋼製軌條會社は一八七三年一月一日に創立された。

工場の位置に關する問題が第一余等の痛切な注意を惹いた。他人の提案した位置は一も余の腑に落ちないので余は遂に同志社員等と熟議する爲めピッツバーグに行つた。此問題は寸時も余の心を離れなかつたが、日曜日の朝寢臺の上で不圖其敷地が眼の前に浮んだ。余は起きて弟に聲を掛けた。

米國第一の好位置

『トム、お前とクローマンさんは工場の位置に就いて善い考へを有つて居るよ、確にペンシルヴァニヤ線とボルティモーア・オハヨ線と川との間にあるブラッドック氏の所有地が米國第一の好位置だ、工場は余等の親友エドガー・トムソンに因んで命名しようぢやないか。これから二人でコールマンさんの所へ行つて、それからブラッドック氏の所へ馬車で出掛けやう』

余等は其日其の通りに實行したが、翌朝コールマン氏は其敷地の買入に奔走して居た。地主のマッキンニーは其地所の値段を大分高く踏んで居た。余等が一英

鋼製軌條の設建

而して此等は米國で使用した最初の硬頭式軌條であつた。余等は之を各所の最も鋭い曲線に試用したが、其成績甚だ優良で、トムソン氏の前渡金を償ひ得て餘りあつた。ベセメル式が順潮に發展しなかつたと假定しても、余は結局此ドッヅ式を改良すれば一般に採用される結果を收めることが出來ると確信して居た。けれどもベセメル式の堅實な鋼製品に比すべきものは到底なかつたのである。

ピッツバーグに近いジョンスタウンのカムブリヤ製鐵會社は米國有數の軌條製造會社であつたが、同會社の社員諸氏もベセメル工場を建設することゝなつた。是より先、余は英國に於て少くとも余を滿足せしむる程度にベセメル式が法外の資本も危險もなく大成功を齎すことが出來るとの實證を見屆けたのである。新方式には常に敏感なウヰリアム・コールマン氏も余と同一の結論に達した。そこで余等は相提携してピッツバーグに鋼製軌條工業を興す約定をした。社員に加はつた者はコールマン氏と、余の父が死なれた時親切にも母に援助を申出てた余の親友デヴヰッド・マクカンドレスとであつた。余は決して彼を忘れはしなかつた。其後加はつた同志はジョン・スコット氏、デヴヰッド・エー・ステユアート氏其他であつたが、

鋼製軌條

らば恐らく破滅の悲運を免れなかつたてあらう。ペンシルヴァニヤ鐵道會社社長トムソンの如き宏量且つ有力の人物てなければ會社の線路に鋼製軌條の確實な供給を受ける爲に新工業會社に六十萬弗の巨額を前渡するといふ樣な英斷を重役に献策することは出來なかつたてあらう。其結果は彼の卓見を立證して餘りありといふべきてあつた。

ペンシルヴァニヤ鐵道其他の主要線路に鐵製軌條の代用品を使用する問題は既に痛切に考慮されて居た。ペンシルヴァニヤ線とフォート・ウエーンとの接續線に關するピッツバーグの曲線て余は鐵製軌條が六週間乃至二ケ月毎に取り替へられるのを目撃した。余はベセメル式の未だ普く知られないうちに英國のドッヅ氏が鐵軌條の頭部を炭化して好結果を得た事實を指摘してトムソン社長の注意を喚起したことがある。余は渡英してドッヅの特許權を手に入れ、トムソン社長に勸めて之をピッツバーグて實驗する爲め二萬弗を投ずる計畫を立てた。彼は此献策を容れて、余等の高地工場構內に一個の熔鑛爐を建設し、ペンシルヴァニヤ鐵道會社の爲に數百噸の軌條を處理したが、鐵軌條に較べると著しい好結果てあつた。

余はベセメル式の發達に注意を怠らなかつた。之が成功した曉には鐵が鋼に壓倒され鐵の時代が去つて鋼の時代が來るだらうと豫測して居た。余の友人、ペンシルヴアニヤ州リウイストンのフリードム鐵工場長ジョン・エー・ライトは此新式調査の目的で英國へ行つたことがある。彼は當時米國の最も經驗ある名工業家の一人であつたが、彼は嚴然として新式の採用すべきものであることを主張し遂に其所屬會社を勸誘してベセメル式工場を建設させた。彼は全く卓見を有つて居たが、惜しい哉少しく時勢に先んじ過ぎた槪がある。之に要した資本は豫算を超過した。のみならず先進國たる英國に於てすら幾分試驗時代であつた方式を新興國に移植して最初から成功を豫期することは無理であつた。實驗には相當の日子と費用とを要することと勿論であつたが、彼の友人は之を十分勘定に入れて居なかつた。

其後此方式が英國に於て確立されてから、資本家等はハリスバーグの現ペンシルヴアニヤ製鋼工場の建設に着手した。之も試驗的時期を經過する必要に迫られた、而して危機に際してペンシルヴアニヤ鐵道會社の應急的援助がなかつたな

鄉人であるクリーヴランドのチショム氏である。余等二人はよく互に巫山戯て居た。或日余がクリーヴランドの工場に彼を訪問した時、人夫等が構內から貴重なロール屑を車に積んで曳出す所を見付けて、あれを何處へ持つて行くのかと彼に尋ねた。彼は答へた『川へ棄てるのさ。僕等の工場支配人等は鎔鑛爐であれを製鍊しようとしたが「何」時もうまく行かないとコボシて居たよ。』

余は何とも言はずに別れて仕舞つたが、ピッバーグへ歸つてから此會見を利用して一つ狂言を演じて遣らうと思つた。其頃余等の工場にデュ・パイと云ふ青年が勤めて居たが、其父は製鐵の直接方法發明者として世に知られ、其方法を此青年は當時ピッバーグで實驗して居たのである。それて余は部下の者に此青年をクリーヴランドへ遣はして友人の工場から出るロール屑全部引取の契約をさせる計略を授けた。青年は一噸五十仙て直接送つて貰ふ契約をした。之が暫く續いて居た。余は此狂言が今にも發見されるかと頻りに其便りを待つて居たがチショム氏が思掛なく死んだので余から此計略を知らせてやる機會を失つてしまつた。然るに彼の後繼者等は間もなく余等の例に倣つてロール屑を利用し始めた。

石は燐素が低く硅素が非常に高いことが分つた。之を適當に鎔かしさへすれば之に優るものはない、又之よりも鐵分の豐富なものも殆どないことが明かになつた。故に余等は旺んに之を買入れた爲に其山の價値が高くなつたと言つて所有者から感謝の辭を受けた。

同業者等の鑄鐵爐から出る灰は錬鐵爐から出る灰よりも鐵分の含有量が多くて燐分が少いが、數年間余等の錬鐵爐から出る燐分の非常に多い灰を鑄鐵爐の灰よりも高價に賣ることが出來たのは今から考へて殆ど信じられない話である。鎔鑛爐で煙突灰の製錬を企てたこともあつたが、此灰が一層雜物の少い爲に雜物の多い材料を目的とした鎔鑛爐てはうまく行かなかつた。それが爲に同業者等は無價値のものとして多年の間ピッツバーグの川へ投棄して居た。或場合には余等は劣等品を上等品と交換して割戻を取ることとすらあつた。

それよりも信じられない話は前の話と同樣全く根據のない僻見から起つたものであつて、純然たる鐵の酸化物たる工場ロール屑を鎔鑛爐に入れることに反對する俗説であつた。それに就いて思出すのは余の親友であり、ダムファアリンの同

銑鐵の化學應用

して應用した後數年を經過してからでも、他鎔鑛爐所有者等の内には化學者を雇用する樣な贅澤が出來る者かと言ふ者があつた。彼等にして事の實際を知つたならば化學者がなくては到底遣り切れない事を看破したてあらう。回顧すれば競爭者等が贅澤呼ばはりをして居た化學者を鎔鑛爐業に應用した急先鋒は余等てあつたから此事實を製鐵業史に特筆大書しても敢て罪とは云はれまいと思ふ。ルーシー鎔鑛爐は科學的經營を殆ど全部に應用したから余等の事業中で最も有利な部門となつた。此秘訣を發見したので其後久しからず(一八七二年)一個の鎔鑛爐を增設する計畫を立てた。之は最初の試驗的鎔鑛爐に比すれば大いに經濟的の經營であつた。余等は他の同業者等が使用に堪へないと言つて省みない樣な名もない山から鑛物を買入れて居た。それから又余等は品質優等の好評を博して非常の高價て賣つて居た山を却て全然無視して居た。有名なミゾリのパイロット・ノッブ鐵鑛は其一例として珍奇なものてあつた。此鑛山より產出する鑛石は俗に云ふ怪しいものであつた。世評ては此鑛石が鎔鑛爐に障礙を與へないて使用に堪るる部分は極めて少量とのことてあつたが、化學上から研究すると此鑛

る秘訣を余等に闡明してくれた。山から送り出された最も評判の善い鐵鑛石も博士の檢査を受けて始めて今まで信じられたよりは十、十五、乃至二十パーセント位少なく鐵を含んで居ることが明かになり、從來名もない山が却つて優等な鑛石を産出することが知れた。善いと思つたものが惡かつたり、惡いと思つた者が善かつたり、萬事顚倒の有樣であつた。銑鐵製造に關する總ての不確實な事項の十中八九までは化學的智識なる白熱光に掛かつて明瞭となつた。

會社の信用を高める爲に鎔鑛爐が最良の生産力を發揮すべき最も危急の時期に於て非常に豐富で純良な鑛石が劣等鑛石の代りに供給された爲め、却て生産が中絶するといふ奇現象を呈した。此劣等鑛石は優等鑛石が一の割合で鐵を産出する所に唯三分の二位しか産出しなかつた。此破格の純良鑛石を鎔かす爲に餘り多量の石灰を使用したのが失敗の原因となつた。品質の優良な原料が却て容易ならぬ損失を招いた譯である。

余等は何たる愚物であつたらう。しかし余等が余等と競爭の同業者程に大馬鹿でなかつたことはセメテもの慰めであつた。余等が化學を事業經營の指針と

は遂に直覺一點張な親方風の支配人を解雇して若い人に鎔鑛爐の經營を托することゝした。若い運輸掛で顯著な働きをしたヘンリー・エム・カーリーを拔擢して支配人とすることに決した。

フイップス氏は特にルーシー鎔鑛爐を監督してくれた。彼が毎日出張して此任に當られたことは失敗を免れしめた倔强の原因であつた。余等の經營して居る鎔鑛爐は金を儲ける點に於て西部の他の鎔鑛爐に劣ると云ふのではないが、其規模が他の鎔鑛爐に較べて遙に大きい爲に自然複雜な結果を生ずるといふ狀態であつた。フイップ氏は事業に熱心の餘り日曜日の午前中其父や妹などが眞面目に禮拜に出席するのを構はずルーシー鎔鑛爐の視察に來たことは宗敎の方から言へば何となく不穩當の嫌があつたかも知らんが彼が、家族と一緒に禮拜に行つた所でルーシー鎔鑛爐の狀態が始終氣に懸つて居たから神に祈禱を捧げる時などは此問題が重きを置かれたに違ひないと思ふ。

次ぎに取るべき手段はカーリー氏の助手兼嚮導として一人の化學者を得ることとてあつた、余等は學力優秀の獨逸人フリック博士を捜し當てたが、同博士は大いな

化學者の貢獻

製鐵は化學の價値を驗す

第十三章　鋼鐵時代

今日から顧れば僅か四十年前(一八七〇)まで合衆國に於ける銑鐵の製造に關する化學が殆ど未知の要素であつたことは信じがたく思はれる。化學は總て其他の要素以上に鐵及鋼の製造に最も必要なものである。其頃の鎔鑛爐の支配人は大抵粗暴な壯漢で、多くは外國人であつたが、其得意とする藝當は部下の無法者に對する教訓として時折人を毆ぐり倒すなどであつた。彼は本能で鎔鑛爐の加減を診斷する藪醫者の類であつて、賣卜者の神通力でも有つて居るかの如く氣取り棒の棒を用ひて石油や水などの出る所を判斷することが出來ると評判された田舍山師と似た所があつた。彼は患者の病氣に對して何でも構はず思出した療治を試みる金箔付きの藪醫であつた。

ルーシー鎔鑛爐は一難去つて一難又來るの苦境に陷つたが、其理由は其頃使用した鑛石、石灰石、骸炭等が多種多樣で其合成分について殆ど何等の注意もせずに供給されたことである。之は余等の營業上到底堪へがたい事態であつた。余等

親切偉大宏量無備の良友

ト型、他の一個はホイトウエル氏の忠告した型のを作つて見るが善からうと主張した。それを實行することになつて余が其次に工場を視察した時、各自別々に試驗して見たら其結果はホイトウエル氏の豫言した通りであつた。ルーシー型は大鐵片を爐の側面に分散して中央に厚い塊りを遺留するから其中を風が容易に通らない。ホイトウエル型は斷片を中央に吹き付けて周圍に厚く遺す。之は製作上雲泥の差を生ずる原因であつた。ルーシーの困難は之で一掃された。

ホイトウエル氏の如きは實に親切、偉大、宏量の人と云ふべく何等狹量な嫉妬心もなく自己の智識を隱すことをしない立派な人物であつた。余等は工場の或部門で新らしい事を學んで其代りに此人の會社に利益を與へることが出來た。結局其後は余等の所有したものを一切ホイトウエル兄弟に開放して何をも秘密にしないことになつた。（余が今之を書いて居る時二人の中一人はまだ余等と一緒に居る、而して余等の友情が今以て溫いことを余は喜ぶ。彼は英國鋼鐵協會の會長として余の先任者であつた。）

時に逆境あり

尋ねて來た。

然し余等の製鐵業は必ずしも順風に快走するばかりではなかつた。經濟界の恐慌は折々襲來した。戰後物價が暴落して鐵一噸九仙から三仙に低落した時なども幸ひにして安全に此難關を切拔けた。破綻は各所に起り余等の會計主任は應急資金の調達に忙殺された。破産失敗踵を接する中に余等の會社は嚴然として信用を失墜しなかつた。けれども余等の業務のうち此頃までは銑鐵の製造が他の何れの部門よりも不安の種子であつた。此方面の製造業で余等に最も有力な援助を與へた者は有名な英國ホイトウエル兄弟會社々員ホイトウエル氏であつたが、此會社の鎔鑛爐は當時一般に廣く行はれて居た。評判の高いルーシー鎔鑛爐を見んとて來訪した人々のうち、此ホイトウエル氏は最も世間に知られた者の一人であつたが、余は其頃實驗した困難を此人に打開けて相談した。彼は直ちに答へて『それは鐘形部の角度が違つて居るからだ』と言つた。

而して彼はそれを改造する方法を說明した。社員クローマン氏は容易にそれを信じなかつたが、余は小形の硝子製模型鎔鑛爐と鐘形部二個卽ち一個はルーシ

橋梁其他の製作に應ずる爲に余等は餘儀なく錬鐵の製造を經營して居たが、今や銑鐵も自分等の手で製造するの得策なることを認める時期に達した。之が爲め一八七〇年ルーシー鎔鑛爐の建設を見ることゝなつたが、其規模の大なることを劈頭に掲げたならば或は此計畫を延期したかも知れぬと思はるゝ程大膽な企業であつた。工業界の先輩等は後進の余等が大膽に着手した此事業が餘りに迅速の發展をする危險を事々しく豫言したが、余等は毫も挫折しなかつた。余等は一個の鎔鑛爐を建設する位の資金と信用とが十分にあると自ら信じて居た。

然るに實際仕上げて見ると建設費は豫算の倍以上に達した。之は試驗的のものであつた。クローマン氏は鎔鑛爐作業に就て何等の智識も有つて居なかつた。けれども正確な智識がないからとて甚しい失態は演じなかつた。ルーシー鎔鑛爐(弟の良妻に因んで命名した)の產額は余等の最も無鐵砲な豫想に超越して當時未曾有の生產能率を示した。即ち一個の鎔鑛爐から一週間一日百噸の割合の產出を繼續した、之は實に世界の工業史に未だ曾て見なかつた記錄である。余等は此記錄を保つて進んだから幾多の來訪者は此驚くべきものを見たい計りに陸續

自己の從事して居る一つの事業に全身全力を捧げて其注意を之に集中するのみならず、其資本を悉く之に投ずることである。萬一擴張する餘地のない事業であつたら、眞の方針は餘資を第一流の株式に投じて、他に發展の見込ある事業が見付からない間は斯る株式から生ずる少額ながら確實な收入に甘んずることである。余自身の方針は早くから確定して居た。余は鋼鐵工場に全力を集中して之が泰斗たらんと決心したのである。

余の英國訪問は鋼鐵界の巨人等と或は舊交を溫め或は新たに交際を結ぶ好機會を余に與へた――卽ち第一人者たるベセマーを筆頭とし、サー・ロシアン・ベル、サー・ベルナード・サミユエルソン、サー・ウインゾル・リチアーヅ、エドワード・マーティン、ビングレー、エヴアンス及斯業の大家全部である。余が英國鋼鐵協會評議員に選ばれて遂に其會長になつたのは其後間もないことであつたが、英國臣民で無いものが會長になつたのは余を以て初めとする。余は最初米國在住の爲め其任務を盡すべき時が不十分だとの理由で辭退したが、結局此光榮に感激して就任することゝなつた。

滅多に――工業に於ては確かに絶無――見ない。成功した人々は何れも一方面を選んで飽くまで其れを終始した人々である。巨額の配當を得ようとするならば自己の事業に投資するに限るといふことを認める人の鮮いには驚くの外ない工業家にして自己の工場に於ける古き機械が改良された機械によつて取替へらるべき必要に迫られて居ることを感じないものは稀である、又必要の機械を据ゑ附けたり、新方法を採用したりすることを怠つて居る爲に自己の事業以外に投資して其れより得る所の利益よりも却つて損失を招かない者は殆んど皆無である。然るに余の知つてる事業家、實業家は大抵眞の金鑛が現に自己の工場内にあることを知らずに銀行株や縁遠い種々の事業などに投資して居る。

余は常に此肝要な規則を固守しようと心掛けた。余が自分の資本を運用する點に於ては何人にも讓らぬ注意を拂つた如何なる會社の重役よりも巧妙に遣る技量があると云ふことは深く自ら信ずる所であつた。實業界に於て周章狼狽する樣な困難は自己の事業から來る場合が稀で、多くは投資者が自己の精通して居ない事業に手を出す所から起るものである。青年諸子に對する余の忠告は啻に

工業に全力を注ぐ

作つてそれを賣りたいと思つた、而して利益は何時もピッツバーグの工場擴張に投じて居た。

最初キーストーン橋梁會社用に建てた小工場は他の目的に賃貸して、別に十英町の敷地をローレンスヴィルにし、其處に大工場を新築した。ユニオン鐵工場は數回建增をして、遂に組立鐵材各種製作工場として合衆國一流のものに成つた。本業は前途益々有望になつて之が擴張に要する資金として余が他の方面で稼いだ剩餘金全部を之に投じなければならなかつた。余はペンシルヴァニャ鐵道時代の友人等と西部諸州の鐵道建設に投資して居たが、それ等の事業から漸次に手を引いて、一個の籠に自分の卵を全部入れるなと云ふ格言に正反對の方針を立てようと決心した。余は正當な方針は『總ての善い卵を一個の籠に入れて置いて其籠を大切に監視する』ことであると斷定した。

成功に至る道

何事業に拘はらず大成功を遂ぐる眞の道は其事業に精通するにありと余は信ずる。余は自己の資力を多方面に散布する方針を決して善とは信じない、而して余の實驗上富を作ることに偉功を奏した人として多方面に資金を散布した例を

余は此規則を守つた爲に余自身のみならず余の同志社員をして困難を免れしめた。余等は實に社中の申合せを極端に嚴しくして自社の爲でなければ極めて細微の金額以外決して裏書をしたり保證をしたりしないことを盟つた。此事も余が裏書の出來ない一理として述べた箇條であつた。

前記諸事件の發生した時代に余は種々の證券賣出交渉の爲め數回渡歐したが、余の賣つた證券は全部で約三千萬弗の價額に達した。之はまだ太西洋海底電線が布設されて無い頃であつて、財政上紐育が倫敦の一部となつて居ない時代であつたので、倫敦の銀行家等は利率に輕微の差があれば遙か高率の米國へは持つて行かずに寧ろ巴里や維納や伯林で手許剩餘を貸出したものである。歐洲の紳士諸氏は新共和國を大陸よりも不安と考へたものである。弟とフィップス氏とは製鐵の經營を能く遣つて呉れたので余は折々數週間不在であつても心配はしなかつた。余は工業界から動もすれば財界金融界の方に泳ぎ出さうといふ誘惑に襲はれた。余の海外に於ける累次の成功は屢〻余を其危險に誘ふ機會となつたが、工業を自分の本領とする余の決心は終始一貫して居た。余は何か具體的のものを

は其人に債務の懸つて居る限り余は債權者の爲に之を神聖なものとして保管すべきものである。

モルガン會社申出の裏書を拒絕したにも拘はらず余は翌朝相談の目的で紐育行きの特別列車乘込の一行に同伴すべき招待を受けた。余は勿論喜んで之を承諾した。アントニー・ドレキセルも一行に加へられた。途中マクカーロー氏は車中を見廻はしながら、一行中思慮ある人間は獨しか居ない。他は悉く『愚物』だと言つた。而して其意味は自分の持分をサッサと拂つて一弗の金も殘さないばかりでなく、其上此事件に何等の責任もない者は『アンデー』ばかりであるが實を言へば一行全部は斯る立場にあるべき筈であるといふのであつた。

ドレキセル氏は余が何うして此災難を免れ得たか說明してくれと言つた。余は之に答へて、返濟期限が來る時に余の拂ふ力がないと知つたものには決して保證人の名義を出さないと言ふ主義を嚴守して居るし、又某西部友人の常套語である徒涉の出來ない深みには決して這入らないといふことを重んじて居るのだが、此は全く余には深すぎたと言つた。

失敗が夭折の原因

仰いだ人々の失敗を見て驚愕した。余はスコット氏(一八八一年五月二十一日死去)の夭折が幾分此屈辱に歸因したかと思ふ。彼は豪膽と云ふよりは寧ろ感傷的の質であつた爲に外見上切迫したかの樣に思はれる、失敗に堪へ兼ねて終に斃れたのである。此事業の同志關係者たるマクマナス・べーアドの兩氏も久しからずして世を去つた。此兩人は余と同じく工業が本職で、鐵道の建設などは余等に取つて柄にない事業であつた。

實業家たる者が此世の荒波を漕拔けるに際して遭遇する最も危險な暗礁は實に商業書類の裏書である、之を避くる捷徑は左の二問に自ら答へることである、第一自分は此裏書によつて自分の責任となるべき最大限度を差支なく支出するだけの餘力があるか。第二自分は裏書を賴んだ友人の爲に其金額を損失する覺悟があるか。此二問に然りと答へ得るならば其友人の爲に一臂の力を貸しても善からうが、さうでない限り之を斷然拒絕すべきが賢い遣方である。又第一問に然りと答へ得る人は其現場で自らが賴まれた丈けの金額を拂ひ渡すことが得策ではなからうかと考慮すべきであらう。余はそれが得策と信ずる。元來人の資力

は感じた。

余はスコット氏に對して當初から大鐵道布設に必要な資金を手に入れない間は工事に着手してはいけないといふことを極力諫言した。數千哩の鐵道を臨時の借入金で建設しようとすることは失敗の因であることを力說したのみならず余は曾て此計畫を賛成したことはなかつたが、余が歐羅巴から歸つた時スコット氏は余の爲に二十五萬弗丈けの利權を保留してあると言はれたから余は現金で其金額を投じた。けれども其鐵道建設會社又は余等の會社以外何等の會社に對しても余が其債務證書に裏書する樣なことは斷じてなかつたのである。

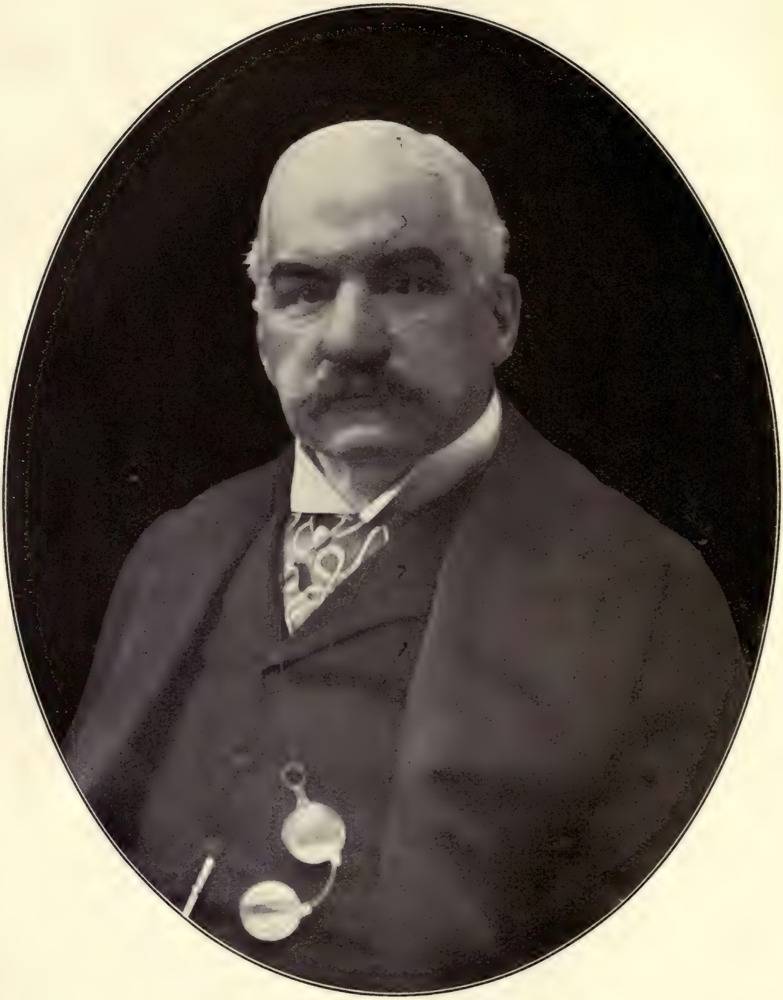
余はモルガン債務又は其內の自分の債務だけでも六十日間に完濟することの不可能なるを知つて居た。此外に問題となつたものは其債務のみではない、引續いて五六件の債務を處理する必要が迫つて居た。之はスコット氏と余との間に旣に始つて居た事業上の離反を惡化すべき第二步であつて此苦痛は余が之まで嘗めた一切の財政的苦痛よりも一層甚しいものであつた。

此會合の後久しからずして財界の六不況が襲來し、全國民は財界無上の强者と

社長になつた)はユニオン・パシフイク社長を失脚した後久しからずしてテキサス・パシフイク鐵道の建設を思立つた。或日紐育に余宛の電報で必ず貴府へ來て會合せよとあつた。余は同地へ行つて彼に會つたが席上に他の朋友數人就中ピッツバーグ在勤のペンシルヴアニヤ鐵道會社副社長ジエー・エム・マクカロー氏も見えた。テキサス・パシフイクの巨額債務が倫敦で返濟期限に達し、モルガン會社が余の債務者側に參加することを條件として其更新を承諾するといふのであつたが、余は之を斷つた。そこで余はそれを拒むことによりて友人等を見限つて破滅に陷れる精神かと詰問された。これは余の全生涯中最も苦しい立場の一つであつたが余は寸時も自ら其渦中に投ずる考を起こさうとはしなかつた。余のなすべき義務は何かとの問題が常に余に取つて第一である爲に余は此際にも堅く主義に立つて動かなかつたのである。余の資本は全部工業に投じてあつて一弗たりとも無用のものはない。余は自分等の會社の資本家(其時はまだ實に微々たる者)てあつた。總ては余に賴つて居た。弟は妻や家族と共に、フイップス氏は家族と共に、クローマン氏と其家族何れも一齊に余の前に立つて保護を要求するが如く余

凡そ大事業を經營するには最も嚴正なる廉潔方針を基礎としなければ滅多に成功するものでない。辣腕とか銳敏とか云ふ評判は大事業の經營に禁物である。法律の文字ではない其精神を取るといふのが規則であらねばならぬ。現代の商業道德の標準は極めて高い。何人かゞ所屬商店會社の爲にした失策は直ちに他方面に影響して同樣の失策が他會社にもあるかの如く疑はれる。會社の永久的成功に缺くべからざる秘訣は其會社が單に法律的原則に支配されるに非ずして寧ろ公正主義を遵守する會社であるとの評判を取ることである。余等が採用し又嚴守した規則は人の想像するよりも大きな利益を生み出した、卽ち何時も相手方に滿足を與へよと云ふのである。勿論之は投機社會に適用しない。かの社會には全然別種の空氣が貫いて居る。かの人々は單に博徒である。株式賭博と名譽あるビジネスとは兩立しない。近年になつて舊式『銀行家』卽ち倫敦のジュニアス・エス・モルガンの如き人物が稀になつたことは明白である。

スコット氏(トマス・エー・スコット大佐は一八七二年にユニオン・パシフイクを去り、同年テキサス・パシフイクの社長に就任し、一八七四年ペンシルヴアニヤ會社の



ジョン・ピァポント・モルガン

そこで余は近頃余に示された明細書によれば余の所得權は五萬弗と記入されて居るといふことだから六萬弗なら善いと思ふと言つた。翌朝訪問するとモルガン氏は余に七萬弗の小切手を渡した。而して彼は言つた『カーネギー君、貴君の言はれたことは間違ひです。貴君の貸方として示された明細書より一萬弗だけ少なく貴君は賣却された。今は五萬弗でなく六萬弗貴君の貸方になつて居る、それに一萬弗加へて七萬弗になります。』

小切手は二枚になつて居て一枚が六萬弗他の一枚が一萬弗であつた。余は一萬弗の方を返して言つた『サア、それは貴君として相當な事ですが、此一萬弗はどうか私の志として御受け下さいませんか。』彼は答へた『忝けないがそれはいけません。そんなことは私に出來ません。』

單に法律上の權利觀念とは趣を異にして肝膽相照すといふ高尚な友誼を示すものとしての斯る行爲は、門外漢には一寸氣が附かぬかも知れぬが、實業界に其例の無いことではない。而して爾來余はモルガン家に對して其父たると子たると將又其會社たるとを問はず斷じて損失を蒙らす樣なことをしまいと決心した。

た。

其頃恰もトムソン氏が巴里に來て居たから余は同地に急行して同氏に會談した。ペンシルヴァニャ鐵道が資金の必要あることを知つて居たから余はモルガン氏に債劵を推薦したことを話し、又トムソン氏の方から賣値を申出るなら賣れるかどうか斡旋して見ようと言つた。彼が付けた賣値は當時頗る高いと思つたが、其後の相場はそれよりも高くなつた。モルガン氏は一部を後に買入れる權利を保留して一部を買つた。そんな風にアレゲニー債劵は全部九百萬弗乃至一千萬弗まで市場に放出され、ペンシルヴァニャ鐵道會社は資金を獲得した。

債劵の賣行半ばに達しないうちに一八七三年の恐慌が襲來した。其頃余の金融を助けた有力者の一人はピアポント・モルガン氏であつた。或日彼は余に言つた。『私の父から電報が來て貴君が父に説明された意味で貴君の所有株劵を賣る思召があるかと尋ねて來ました』と。余は答へて『左樣、賣りたいのです。今日の場合金にさへなれば私は何でも賣ります』と言つた。彼は言つた『サア、それなら幾何て賣るといふのてす。』

取引談判に於て相手方が神經過敏になつたら自分は冷靜忍耐すべきである。
余の財務交涉中、或日モルガン氏にこんなことを言つたことを記憶して居る『モルガン君、私が一つ貴君に獻策をして其遂行をも援助しますが其れが當つた場合には儲けた金額の四分の一を私に下さいますか。』彼は笑ひながら答へた『それは公平の考らしいね、其實行權は私の權能に屬するのであるから若し私が其れを實施することによつて利益が上がるとすれば其四分の一を貴君に提供すべきは當然と思ひます。』
余は余が曩にフイラデルフイヤ・エリー債券と交換したアレグニー鐵道債券はペンシルヴアニヤ鐵道會社の保證が付いて居ること、又其大會社が必要な擴張工事の爲め何時も資金の缺乏を感じて居る事實を指摘した。更に一步を進めて余は彼の注意を促がして斯う言つた、卽ち會社をして其債券を賣らしめる程の代償を提供することも出來やうし、目下米國證券類の需要斯くも旺んな折柄屹度賣行がよからうから余は賣行を促すやうな趣意書を書く積りである云々と。彼は例の注意深い態度で事件を審査した後、余の注意を容れて之を實行することゝなつ

余はベアリング家へ再交渉をしまいと決心した。而してジエー・エス。モルガン會社は以前から米國證券を澤山賣出したことはあつたが今日に至るまで取引をしなかつた。然し余は其後ベアリング家と協定した價格に較べて幾分の廉價で債券を同會社に賣込んだ。最初モルガン會社へ行かない方が得策と思つた理由は豫てフィリップス大佐から米國で彼が同會社に提供した債券が不成功に終つたと聞いて居たことゝ倫敦のモルガン社員が或は紐育の同社員と其交渉に聯絡がありはしないかと推測したからである。けれども結局余は其後の交渉に於て必ず第一着にジユニアス・エス・モルガンに提供することを規則とした。彼は余の提供したものならば滅多にそれを取らずに余を空しく引下がらせる樣の取扱をしない人であつた。彼は自分の手でそれを引受けられない場合は自分が關係者になつて他の取引先へ周旋してくれる。余の企てた證券の賣出で終始相場の良好でないものは一つもなかつたことは思出しても非常の滿足を感ずる。唯爰に遺憾と思ふことは本件に關して今一度ベアリング家へ立戻つて再考の餘地を與へ恐慌の鎮定(直ぐに鎮定した)するまで回答を待つ手段に出なかつたことである。

ビスマルクの邪魔

が適當と思ふから、書類の調印は翌朝まで延ばしたいと言つた。余が二時に訪問すれば交渉が終了するといふのであつた。

其處から歩き出してトムソン社長に打電すべく電信局に向つた時の壓迫された樣な感じは決して忘れられまいと思ふ。所が何だか打電をしてはいけないと云ふ聲が余の心に聞えた。明日契約書を懷中するまで待たうと余は考へた。余はそれから四哩の長い路を歩いて銀行からランガム・ホテルに歸つた。着いて見るとベアリング家から使者が來て居て息もつかずに一封の手紙を余に渡した。ビスマルクが一億弗をマグデボルグに封鎖した爲に財界が恐慌に襲はれてベアリング家は現下本件の進行を主人ベアリングに提案する譯には行かないとあつた。ベアリング家ともあらう者が一旦約定した事を妄りに破談するなどは意外の事で、余に取つては歸途に電光に打たれて斃れると同じ樣なことで、事實は其通りであつた。今更短氣を起しても腹を立てゝも追付かない、惡運とあきらめてトムソン氏に電報を出さなかつたのがせめてもの仕合せと自ら慰めるの外はなかつた。

ら會社は二つ返事で承諾した。余は直ちにペンシルヴアニヤ鐵道會社の保證付フイラデルフイヤ・エリー鐵道一番抵當設定五百萬弗の債券賣出交渉の爲め倫敦へ向けて出發した。立派な證劵だから高く賣りたいと余は思つた。然るに此交渉は余の財界生活中最大なる齟齬失策の一つであつた。

余はクキーンスタウンから倫敦のベアリング家に手紙を出して同家ですら何等の躊躇なく引受けさうな證劵の賣物があると豫告した。倫敦に着いて見ると同家から余に來訪を求めた手紙が旅館に屆いて居た。翌朝同家の銀行部で交渉すると立所ろに相談が調つて、同家から債劵を賣出すことになつたが、同家の口錢として二步五厘差引くが故に額面以下二分五厘の債劵を賣出すまでの間四百萬弗を五步利てペンシルヴアニヤ鐵道會社に前渡ししようといふのであつた。此賣出て余の利益は正に五十萬弗以上になる筈であつた。

書類が出來る運になつて、余が辭し去らうとする時ラッセル・スタージス氏が余を引止めて、今丁度同家の主人ベアリング氏が午前中に來ると云ふ知らせがあつたから、評議會を開くことになつて居る、而して禮儀として本件を一應主人に話す方

フィリップス大佐は何とかして此難關を切拔ける工夫があるまいかと余に相談する爲め來たのである。彼は二十五萬弗の必要に迫られて居たが、ペンシルヴァニヤ鐵道側のトムソン氏は之を調達して遣ることが出來なかつた。アレゲニー債券は七步利付てあつたが其支拂は金貨でなくて米國通貨でする條件てあつた。故に外國市場には全然不向きてあつた。しかし余はペンシルヴァニヤ鐵道會社がフィラデルフィヤ・エリー鐵道六分利付金貨支拂債券を澤山金庫に保有して居ることを知つて居た。それて余は同會社の保證を付けたアレゲニー七分付債券に對し此六分債券を引替に提供したら會社側から見ても至極好ましい交換だと考へた。

余はトムソン氏に打電してペンシルヴァニヤ鐵道會社が有利な條件て二十五萬弗を引受けて、それをアレゲニー鐵道會社に貸してくれるかと尋ねた。トムソン氏から承諾の通信が來た。フィリップス大佐は喜んだ。彼は余の勞を多として六十日間に其五百萬弗債券を希望の弗當り九十仙で引受ける選擇權を余に與へた。余はトムソン氏に事情を話して交換を勸めたが、之は一步の得になる譯だか

アレゲニー鐵道債劵の賣出

しまつて骨折損の草臥れ儲けをしたことになつた。こんな風に一杯喰はされて面目を踏潰されたことは之が初めてであつた。余はまだ若い、學ぶべきことが澤山あると悟つた。信頼すべき人は多いが其中には警戒を要する者もあることを忘れてはならない。

第十二章　商事交渉

此時代に余がピッツバーグのアレゲニー鐵道會社々長ウキリアム・フイリップス大佐の爲に遂行した交渉は完全な成功であつた。或日大佐は余の紐育事務所へ尋ねて來て金策に困つて居るがペンシルヴアニャ鐵道會社の保證があつても自分の會社の債劵五百萬弗を買入れようと云うてくれる資本家が米國には見當らないと余に話した。老紳士は銀行家等が自家の條件でなければ其債劵を買はないと申合せて居たので八方塞りの窮境にあると信じて居た。彼は一弗に對して九十仙の條件を出したが銀行の方ではそれを法外に高いと考へた、當時は西部鐵道債劵の普通銀行買入相場が弗當り八十仙の時代であつた。

重役の地位から追出された。之は若い人の躡下するには誠に苦い一服てあつた。此一條は余が余の少年時代の親切な情愛深い主人として其時まで余の上に最大の感化力を持つて居たトマス・エー・スコットに對して重大な意見の相異を劃する第一歩となつた。トムソン氏は此事を遺憾に思つたが彼が言つた通り別に深い注意もしないで一切スコット氏と余とに任じてあつた事だから、賣却するのが得策と余が思つたものと推測して居た。一時はユニオン・パシフイクに關係して居たモルガン・ブリックス會社のレヴアイ・ピー・モルトンと云ふ良友を離反させたかと心配したが、彼は結局余がそれに關係のなかつたことを發見した。

オマハ橋建設資金二百五十萬弗の交渉は成功したが、其債劵は余がユニオン・パシフイクに何等關係のなかつた時に同會社に關係ある人々が買入れたから、其交渉は其人々の爲にした譯てユニオン・パシフイクの爲てはなかつた。此事は余が倫敦へ出發前余と話しをした取締役が余に説明しなかつた。不幸にして余が紐育に歸つて見ると其債劵の賣上全部が余の利益までも含んで其債務支拂の責任ある人々に流用されて居たことが解つた。而して余は巨額の利益を棒に振つて

ット氏を金庫に案内しても差支ないと余の祕書役に指圖しておいたけれども株劵を賣却するとか或はユニオン・パシフイクとの關係に於て余等の獲得した立派な地位を失ふことに立至らうとは夢にも思つて居なかつた。

歸米して見ると豈圖らんやユニオン・パシフイク取締役の一人として信任されて居た余の地位はガラリと變つて余は投機の目的に其地位を利用した者と認められた。余等四人は一大事業に干與して獻身的の働きを爲すべき絶好無比の機會を捕へたものとのみ信じて居た所が、斯る好機會を斯くも無鐵砲に放棄したことは前代未聞の大失態であつた。ブルマン氏は其事を知らずに居て後に余と同樣に憤慨したが、多分直ちに自分の金を投じて別にユニオン・パシフイクの株を買つたらしい。余も亦ブルマン氏と同樣の方法を取つて失態を否認する實證を立てたいと思つたが、何分にも親友の第一人者たるスコット氏に對してそれほどの反對運動をすることは余として無禮でもあり又恐らく忘恩でもあると思つて見合せた。

間もなく余等は不面目にも然しながら當然のことゝしてユニオン・パシフイク

だ、獲られるだけの擔保證券を手に入れてペンシルヴァニャ鐵道に一弗たりとも損失をさせない樣に賴むよ』。

余は其責任を引受けた。而して其結果は一大成功であつた。ユニオン・パシフイク會社はトムソン氏を是非社長にしたいと焦慮したがそれは問題にならないと彼は斷言した。彼はペンシルヴァニャ鐵道の副社長トマス・エー・スコット氏を社長に指名した。それてスコット氏とプルマン氏と余と三人が一八七一年ユニオン・パシフイク鐵道會社の取締役に選擧されることになつた。

募債に對する證券はユニオン・パシフイクの株式三百萬弗であつたが相當價格を以て賣却し得る選擇權を付して之を余の金庫に保管した。豫期した通りペンシルヴァニャ鐵道側との連絡はユニオン・パシフイクの株式を非常に貴重ならしめて、相場は甚しく昂騰した。其頃余はオマハに於けるミスシッピー河に架橋の資金借入交渉の爲め倫敦に出張したが、余の不在中スコット氏は余等の所有したユニオン・パシフイク株を賣却することに決心した。余は余の不在中誰かしら此の證券に用のある場合がないとも限らないと思つて本件の同志提携者たるスコ

助すべき正當の理由が生ずると云ふのであつた。余は費府に行つて社長トムソン氏に本問題の經緯を開陳した。余は若しペンシルヴァニャ鐵道會社がユニオン・パシフィクの紐育募債に提供すべき擔保證劵を余に托するならば余等がユニオン・パシフィクの實權を掌握してペンシルヴァニャ會社の利益を計ることが出來ると暗示した。トムソン氏は此提案に贊同せられた。之まで同氏が余に示された信頼の徴證は多々あつたが之が最大のものであつた。彼は會社の金錢を取扱ふときには自己の金錢を取扱ふよりも小心翼々として居たが、今回提供された獲物は實に大きいものであつて彼は之を空しく逸するに忍びなかつた。萬一其六十萬弗が損失に成つてもトムソン氏の會社に迷惑を懸ける樣な性質のものではなかつた。ユニオン・パシフィクに引渡す貸金に對して余等は擔保證劵を彼に渡す筈であつたから損失に歸する危險は殆んど無かつた。

余とトムソン氏とは費府の彼の家で會見したが、余が暇乞して立つと彼は余の肩に手を置いて言つた。

『確かり覺えて居てくれアンデー我輩は君に一任する、我輩の信任するのは君

ユニオンパシフイク鐵道

ある。

此等種々の交渉に於ける成功により余は紐育に於ける實業家の間に一段の地位を占むることゝなつた。其次に余の關係した大口の取引は一八七一年ユニオン・パシフイク鐵道の募債であつた。同社重役の一人が余を訪問して本會社は今何とかして六十萬弗(今日の數百萬弗に相當する)の資金を調達しなければ難關を切拔けることが出來ない。然るに該鐵道業務執行委員たる余の朋友等が多分余の力で其資金が獲られやう又同時に之によつてペンシルヴアニヤ鐵道會社が其重要な西部線の實權を掌握することも出來やうと注意してくれたと語つた。プルマン氏は其重役と一緒に來たと思ふが、或はプルマン氏自身最初に來て本件について余の意見を叩いたかとも記憶する。

余は其相談に應じたが、余の心に浮んだ提案は若しユニオン・パシフイク鐵道の重役がペンシルヴアニヤ鐵道側の指名する人々を少數なりとも其重役中に加ふるに意向があれば、それによつてペンシルヴアニヤ鐵道に輸送貨客を幾分か讓ることが出來るから、此處にペンシルヴアニヤ鐵道會社がユニオン・パシフイクを援

して、しかも各鐵道會社の尊重しなければならぬ若干の權利を保留し得た人のあることを知らない。鐵道會社としては無論自社の寢臺車を操縱しなければならぬといふ所から種々の困難が起つたものである。或時プルマン氏と余と覺書を比較したりして居ると彼は次の話に何時も慰められて居ると言つた。西部の某田舍爺が人生行路難の有りつたけを嘗め盡くし、しかも普通に遭遇するものよりは遙かに多く經驗した隣人等の見舞に答へて、

『如何にも諸君の言はれる通りそれは本當です。私は困難に充ち滿ちた長い生活をして來た者である。然し其處に不思議なことが一つある——卽ち困難の十中の九までは實際に起らないものであるといふことである』と云つた。

之は全く眞理である、人生に伴ふ困難の多くは想像的のもので何等確證のないものとして一笑に付すべきである。橋まで來ないうちに之を渡る危險を心配したり、又惡魔に會はないうちに會つたら何う挨拶しやうかを氣支つたりすることは愚の骨頂である。事が目前に迫るまでは天下泰平、迫つて來ても十中の八九は案ずるよりも產むが安いと言つた樣なものである。賢人は金剛不動の樂天家で

侵害の賠償を取ることが出來たかも知れぬが、それが出來るまでの間にプルマン氏は優に米國一流の大會社に成るだらう。故に余は熱心にプルマン氏と余とがユニオン・パシフィクの場合に處した樣な方法で提携することを勸告した。然るにプルマン氏と東部會社員某々との私交上面白からぬ關係があつて、双方に親交ある余が交渉の任に當ることは最良の策と認められた。余等は直ちに協議を遂げてプルマン會社に余等の會社卽ち中央運輸會社を併合することを決定したが、之によつてプルマン氏は西部に蹰踏せずしてペンシルヴアニヤの大幹線經營の權利を掌握し太西洋まで手を延ばし得ることゝなつた。かうなればプルマン會社は無競爭の獨天下で、彼の如きは實に余の知る限り最も有力な事業家の一人と云ふべきである。余は彼に負ふ所多々あるうちに次の如き敎訓を含んだ話を彼から聞いたことがある。

プルマン氏とても人には必ず免れない困難と失望とに遭遇した。每時畫策適中と云ふ譯には行かなかつた。誰しも之は同じことである。實に余はプルマン氏以外誰も寢臺車の供給を滿足に遂行する爲に嘗めた一切の困難を巧妙に處理

此プルマン氏と其經歷とは飽までも米國式で、それを一言こゝに說明することは無益であるまいと思ふ。プルマン氏は初め日雇の大工であつたが、市俄古の地上げが必要になつた時彼は金額を定めて家屋の移轉又は扛上を自己一身の責任て契約した。勿論彼は成功した。爾來彼は此小規模から漸次大きく成つて斯道にかけては米國一流の大家たる評判を取つた。一大旅館を十呎上げるについて數百の旅客に何等の累を及ぼさず又營業にも何等差支なくそれを實行しようとすれば此事業をプルマン氏に賴むより外はない。彼は實に時勢の推移を達觀して其要求の最も緊急な點を看破するに妙を極めた稀有の人物であつた。彼は余と同じく寢臺車が米大陸の缺くべからざる必要品たることを早くも看取した。彼は市俄古で數臺の寢臺車を製作し、同市に集中する諸線の會社と契約することから發展し始めた。

東部會社はプルマン氏の如き非凡の人物と對抗し得る狀態に成つて居なかつた。余は直ちに此形勢を看取したが、元來寢臺車の特許權は東部會社のもので特許權者ウッドラフ氏は其大株主であつたから、法廷で爭へば幾年かの後には特許權

『それは何ういふ意味ですね』と問ひ返へした。

余は其事態を說明して余等は雨方から競爭の提案をして現に各自が獲たいと思つて居る利益を水泡に歸せしめんとして居たのだと言つた。彼は、

『成程、それなら貴君は何うすれば善いと云ふのですか』と問うた。

『合同するのです。貴君の方を余の方と聯合して一の提案をユニオン・パシフィックに出し、それから一會社を組織するのです』と余は言つた。

『社名は』と彼は問うた。

『プルマン・パレース・カア會社』と余は答へた。

之が丁度圖星に當つてプルマンの意に叶ひ、亦余の意にも叶つた。

『尙ほ熟談したいから我輩の室へ來給へ』と寢臺車王は言つた。

終に話が纒つて余等は合同して契約を結んだ。其後此會社は大規模のプルマン會社に合同されて余等はパシフィック側の利益を代表して其會社の株劵を所有した。一八七三年の財界恐慌に際し余等の鐵鋼業利權擁護の爲め余の株劵を賣却するまでは確か余はプルマン會社大株主の首席であつた。

を敎へる好適例である。

ユニオン・パシフイク鐵道の社長が市俄古に立寄つた時ブルマン氏が彼を訪問して其室に案内された。不圖机の上を見るとスコット氏宛の電報が置いてある。『寢臺車の件承知した』とある。ブルマン氏は見ちや惡いと思ふ間もなく讀んでしまつた。彼は何處のことか突止めたくて耐らなくなつた。社長ダーラントが室に這入ると彼は其心中を打開けて明らさまに言つた『どうか私が一の提案をするまで本件の決定を待つていたゞきたい』

ダーラント氏は待つと約束した。其後間もなくユニオン・パシフイク會社の重役會議が紐育に開かれて、ブルマン氏も余も之に出席した。二人とも貴重な獲物を我こそ手に入れんと一生懸命であつた。或晩余等は同時にセント・ニコラス・ホテルの廣い階子段を昇り始めた。ブルマン氏とは前に會つたことはあるが懇意とまでは行かない。けれども段を歩きながら余は言葉をかけた。

『今晩はブルマン君!。此處に御一緒になりましたが、余と貴君とは馬鹿者の好一對ぢやないでせうか』。彼は此出しぬけの言葉を聞いて一寸呆氣に取られた。

躊躇逡巡すべきてはないから、余は友人スコット氏に一書を寄せて此加州線路に寢臺車配給の契約をするの得策であることを提言したが、其返事にはこんな一句があつた。

『貴君は流石に機を見るに敏なる青年である』

判然同意したとは書いてなかつたが、余は歸米後も其意見を遂行しようと思つた。余の關係した寢臺車事業は迅速に發展して到底需要に應じ得られない盛況を呈した、而して之が現今のプルマン會社を組織せしむる原因になつた。中央運輸會社は其勢力範圍内の需要にすら敏速に應じかねる實況で、プルマン氏は自然世界最大の鐵道中心地即ち市俄古を始めとして親會社の好敵手と成つた。慧眼な彼は早くも太平洋鐵道が世界屈指の大寢臺車線たるべきを看破して余が手を出さんとした時彼は既に計畫を進めて居た。彼の如きは所謂路頭の猛獅であつて之を向ふへ廻して競爭することは實に容易でない。且又余がプルマン氏から親しく聞いた左の逸事は些事が往々にして重要問題を決定する因となること

る。
人には必ず偶像があるものだ——富の蓄積は最悪な種類の偶像だ。金錢の崇拜ほど人の品性を下劣ならしむる偶像はない。余は何でも事業を遣出すと無法に猪突せずには居られない、だから最も高尙になる樣な性質の生活を營む必要がある。事業の心配に精神を壓迫されて最短期間にモット金を多く作る工夫に浮身をやつす樣では回復の望がないほど余を墮落させるに極まつて居る。余は三十五になれば實業界を引退する。しかし次の二年間は敎育を受けることゝ組織的讀書とに每日の午後を費したいと思つて居る。

一八六七年歐洲大陸巡遊の際目擊した事物には深い興味を起したが、さりとて余の精神が米本國の事情に疎くなつた譯ては決してない。頻々と來る手紙は本國實業界の形勢を間斷なく余に知らしめ、太平洋沿岸との鐵道連絡が南北戰爭の爲に當面の問題となり、國會が線路建設の奬勵法案を可決したとあつた。工事は已にオマハに於て着手せられ結局は桑港まで延長する計畫であつた。余が羅馬に滯在中不圖此が豫想したより遙かに早く成功するだらうとの感が余の心に浮んだ。國民が一旦國土統一の必要を認めて決心した以上は其實を遂げしむるに

富の分配の序幕

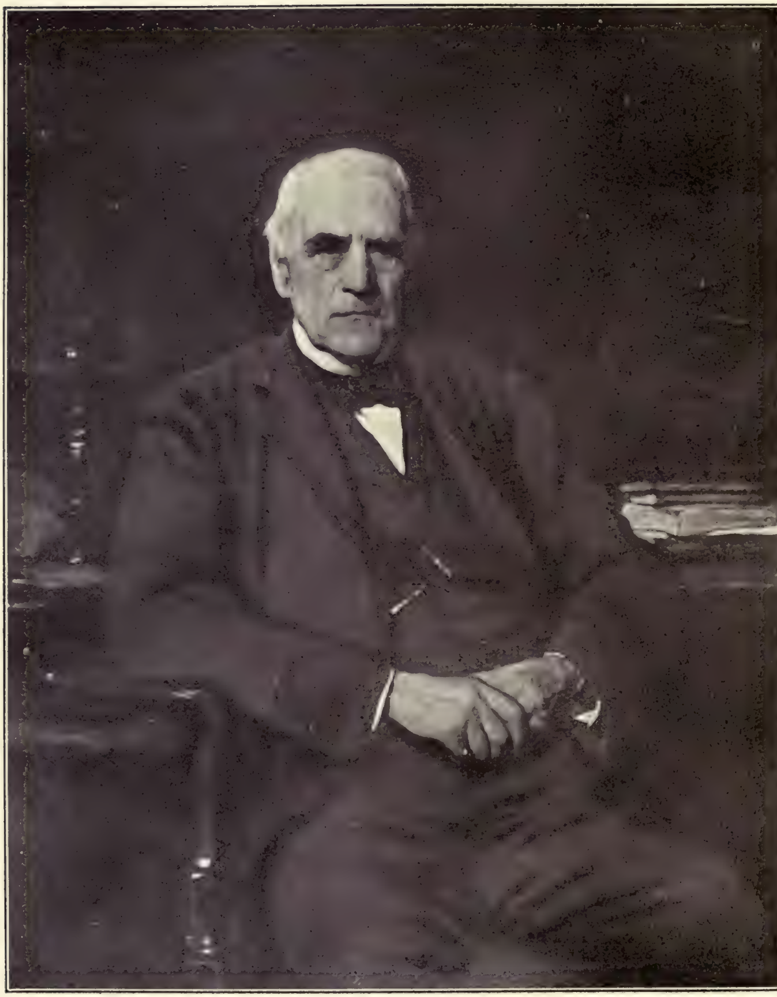
上一家の費用を負擔した際てあつたと思へば此寄附金は侮るべき額てはなかつた。母は決して惜まれないて却つて其子の名が寄附人名簿に載せられたことを誇りとせられたが、子は又此時初めて眞に男らしい者になつた樣な感を懷いた。多年を經て母と余とがスターリングを訪問した時母が特に記念碑委員に寄附されたワーレス塔に於けるサー・ウォルター・スコットの半身像除幕式が行はれた。余等は往年寄附した時代から見れば少くとも財政上長足の進歩をして居た。け(一)れども富の分配はまだ始めなかつた。此時代はまだ蓄積一方であつた。

(一) 當時(一八六八年)のカーネギー氏の志望は左記感想錄に揭げてある。之は最近發見されたものである。一八六八年十二月紐育セント・ニコラス・ホテルに於て
三十三歲年收三萬弗かなあ。今ならば二年間に余の事業を整理すれば少くとも年收五萬弗の見込が立つ、此れ以上は稼がないし資產を增加する努力はしない每年の餘裕は慈善の目的に費やす。それからは他人のための外永久に事業界を退隱する。オクスフォードに卜居して徹底的に勉强する。文士に交際する――之が三年間の活動で――特に演說に注意する。それから倫敦に卜居し、新聞か活趣味のある評論に投資して其實權を握り、其一般經營に留意して公共事業特に教育及貧民階級の改良に關するものに參加す

に思つたらしい。かうなれば順風に帆を揚げる樣なもので記者が事務所を辭するとモルガン氏は余の肩をポンと叩いて言つた。『有難う。君は今朝あの債劵の相場を五パーセント釣上げたぜ』。『恐入りますモルガンさん、今度は貴君の爲にモー五パーセント釣上げるには如何すれば善いか敎へてください』と余は答へた。

賣出しは大成功で聖路易橋の資金は立所ろに出來た。余は其交渉で巨額の儲けをしたが之は歐洲の銀行家等と財政上の交渉をした余の第一步であつた。其數日後にプルマン氏は余にモルガン氏が晩餐會の席上でかの電報一條を話題に出して『あの若い男は其言論に人の耳を傾けさせる樣になる』と豫言したと話した。

モルガン氏との交渉を終つた後余は故鄕ダムフアリンを訪問して公設浴場を寄附したが、余の公共寄附として稍巨額の金を出したのは之が初めてゞあつた。それより久しい前にローダ叔父の注意に基いてバンノクバーンを見下ろす高丘スターリングに設立のワーレス記念碑資金に寄附をしたが、此寄附金は少額のものであつた。然し電信局勤務の頃で僅か三十弗の月收であつたばかりでなく其



ジュニアス・スペンサー・モルガン

新聞の利用

翌朝モルガンの事務所へ行くと余の專用に當てゝあつた机の上に返信入の色封筒がのせてある。返信は『昨夜重役會で訂正全部承認した』とある。余は言つた『サア、モルガンさん、證券は貴君の法律顧問が希望する通りになつたと斷定して話が進められます』。書類の手續は直ぐに終つた。

余が事務所に居るうちタイムスの財政記者サムプソン氏が遣つて來た。余は此人の書振が取引所に於ける債劵相場の釣上げに大關係あることを克く知つて居たから彼と會見した。米國の證券種類は其時より暫く前にフイスクとグールドとのエリー鐵道會社に關する行動と彼等が紐育の法官等を籠絡して之を頤使した等の理由で激烈な攻撃を受けて居た。余は必ずタイムス記者がそれを突付けて反對論を稱ふるだらうと思つたから直ぐに防禦の備をした。余は先づ聖路易橋梁會社の設立認可が中央政府から出て居る事實を指摘して記者の注意を喚起した。必要な場合には英國大審院（ハイ・トリビユーナル）に匹敵する合衆國高等法院に直接訴願の道があると言つた。記者は喜んで此顯著な點を高調すると言つた。余は又其橋が大陸國道の徵税門とも云ふべきものであると說明した所が彼は其點を特に愉快

朝同氏を訪問して交渉を開始した。例の目論見書を彼に差出して又翌日訪問して見ると、愉快にもモルガンが本件を好意的に觀察して居たことを發見した。余は債券の一部を彼に賣渡し殘部に關しては買取の選擇權を彼に與へた。然るに法律顧問を呼んで意見を徴した結果債券の條項に約二十ヶ所の訂正を必要とすることゝなつた。モルガン氏は余が蘇國へ歸省するなら寧ろ今行つた方が得策だらう。其間に聖路易の當事者等に手紙を出して訂正に同意するや否や確めることも出來よう。三週間後に倫敦へ歸つてから最後の手續をしても十分に間に合ふと余に注意してくれた。

然し余は釣れかゝつた魚をそんなに遊ばしておく考がないから訂正條項に同意の電報を午前中にお目にかけるとモルガン氏に通告した。太西洋電信が開始されてから暫くになつて居たが、今回余が送つた樣な長文の私信を取扱つた經驗があつたかは疑はしい。證券面の行數を數へて其文意を熟考した上、各行に訂正、削除、追加等を記入することが容易く出來た。余は發送前にそれをモルガン氏に示したら彼は言つた『成程、君これが成功したら朱點がつくぜ』。

最初の巨大な財務

レード將軍が某夜の接見會に余等を招いて集めた賓客の顏振は英國の如何なる都市に比しても遜色のないものであつた。賓客中には南北戰爭に拔群の功を立て後に國會に嶄然頭角を現はした人々も少數ではなかつた。

ケオカクの橋梁工事に余が贏ち得たる名聲の爲に余は前に述べたことのある聖路易のミスシッピー河架橋計畫に關係した當事者から余の意見を求められることゝなつた。此事實は余をして余の最初の巨大な財務に關係を生ぜしむることとなつた。一八六九年某日、本件主任のマクファーソン(蘇國肌の蘇國紳士)が余の紐育事務所に來訪して橋梁建設資金を募集する見込だと話した。彼は余が該計畫に關して東部鐵道の二三人を加入させることが出來やうかと尋ねた。余は該計畫目論見を愼重に審査した上キーストーン橋梁工場を代表して其橋の建設を契約した。余は又各橋梁會社の一番抵當債券四百萬弗引受の選擇權を獲て其賣出を交渉すべく一八六九年三月倫敦へ向けて出發した。

航海中一通の目論見書を認め倫敦着の際直ちに之を印刷に附した。前回渡歐の時旣に大銀行家ジュニアス・エス・モルガンとは懇親の間柄になつて居たから、或

て生きて居る寄生木である。

紐育に定住後最初に起つた重要な企業はケオカクのミスシッピー河架橋工事（徑間三百八十呎長さ二千三百呎の鐵橋）であつた。ペンシルヴアニヤ鐵道會社の社長トムソン氏と余とが全工事の契約をして、基礎、石工、上層工事等全部を引受け、其請負代金の支拂は證券で取ることにした。此工事は財政上成功とは云へないが其の他の總ての點に於て上々の首尾であつた。其頃恐慌の爲め關係鐵道會社は破産して、約定の金額を拂ひ得なくなつた。競爭會社が別にバーリントンでミスシッピー河に架橋し、全河の西側に一線を敷設してケオカクに達する計畫を遂行した。余等が夢想した巨利は到頭實現しなかつた。然しトムソン氏と余とは聊かも儲けを見なかつたが損失丈けは之を免れた。

此橋の上層部はピッツバーグのキーストーン工場で製作された。此工事の爲に余は折々ケオカクに出張して聰明快活な人々と交際を結んだが其中にレード將軍夫妻などもあつた。後年英國の友人數氏とケオカクを訪うた際、彼等が文明の場末と思つて居た世界の極西社會から受けた印象は驚嘆すべきものであつた。

た。余は自分の會社以外の會社に屬する一切の利權を賣却してピッツバーグの工場に注意を集中しようと決心したから、更に一歩を進めて株式取引所で賣買した株劵は之を一枚なりとも所有しまいと決心した。種々な方面から自然に余の所有に歸した些々たるものゝ外余は此規則を嚴正に遵奉して來た。

斯る方針は苟も工業家たる者又總ての業務に從事する人々の服膺すべきものである。特に工業家には此規則が極めて肝要であらう。間斷なく眼前に現れて來る各種の問題を賢く裁決しようとするならば其精神が常に冷靜で不覊獨立てなければならぬ。結局長い間には良判斷力ほど效果のあるものはない。而して健全な判斷力は株式取引の躁急な變化に其精神を攪亂された人に宿ることは出來ない。恰も宿醒醉めやらぬ人の如く、其眼には無いものが見え、有るかと思ふものは無い。彼は事物の比較的價値を判斷し又は其眞相を透視する力を有たない。

宿醉醒めやらぬ人

鼹鼠丘は山に見え、山は鼹鼠丘に見えるから、冷靜に考量して順々に達すべき結論にも一足飛びに達しようとする。彼の精神は常に株式相場に在つて沈着な思想を要する諸點を逸してしまふ。投機は何物をも生產しない空價から養分を取つ

投機の目的では一株も買はぬ

線をピッツバーグに延長することであつた。此契約は余等の製鋼會社の貨物輸送の三分の一をワーバシュ會社に委托するといふ條件の下に首尾よく運んだ。余等はピッツバーグ線を東部に延長して太西洋岸まで持つて行く計畫を立てようとして居たが、其時卽ち一九〇一年三月モルガン氏がシュワップ氏を介して余に果して實業界を退隱する希望があるかと余の內意を尋ねて來た。余は然うだと答へたので余の鐵道計畫はそれつきりになつた。

余は余の生涯を通じて投機の目的で株式の賣買をしたことは一度もないが、唯一の例外は壯年時代に投資の目的でペンシルヴァニャ鐵道會社の株を少しばかり買つたこととてある。然し之とても銀行が低利でそれを預つてくれるといふのてあつたから別に余が自分の金を出した譯ではない。余は物品を買つて支拂をしなかつたり、自分の所有に屬して居ないものを賣つたりしないと云ふ規則を嚴重に守つて今日に及んだ。然るに初期の頃は事業の進行上自然と手に入つた株式の利權が色々とあつた。それは紐育株式取引所で相場付になる株式其他の有價證券てあつたが、朝刊新聞を開けると自然に株式相場欄を第一着に見たくなつ

グールドが余に近付きを求め、余に對して君のことを豫ねて聞いて居たが、自分はペンシルヴアニヤ鐵道の株式を買收して其實權を握る積りだから若し君が一身を捧げて其の經營に當るなら總ての利益の一半を君に與へようと言つた。余は其好意を謝し、スコット氏と余とは事業上こそ分離したけれども同氏に向つて反對の運動をすることは余の欲する所でないと斷乎たる態度を示した。其後スコット氏は紐育方面の株主が余を氏の後任に擬して居るさうだと話した。余は何も人に言はないのに彼が何うしてそんなことを聞いたか解らなかつた。余は社長の地位を望むなら自分が株劵を所有して居る鐵道會社の社長位は勸めるかも知らんが、スコット氏の疑はれる樣な野心は決して有つて居らぬと明言した。

時勢の變遷とグールド父子

時勢の變遷ほど不思議なものはない、余は此時より約三十年後卽ち一九〇〇年の或朝グールド氏の令息に會つてこんな話をした。『御尊父さんは私に偉大なペンシルヴアニヤ鐵道經營をさせたいと仰しやつたが、私は此度其代りに大洋から大洋までの國際的線路經營を貴君にお任せをしたいと言ふのです』

グールド氏の令息と余とは第一歩の協定を遂げた、卽ち彼が所有のワーバシュ

ある、其信用を痛く傷けたことを知らなかつた。然し商店の數は當時五本の指で數へるほどしかなかつた。ピッツバーグの石油株式取引所はまだ組織されなかつたし、株式仲買店に電線を引込んで東部の株式取引所と連絡をつける必要もなかつた。ピッツバーグは歴然たる工業地であつた。

然るに紐育の事情が之とは非常に異つて居るのを見て余は驚いた。多少に係はらずウォール・ストリートて株式に手を出して居ない者は商人にすら稀であつた。余は余の關係して居た各鐵道事業について八方から質問攻めに遭つた。資金の豐富な人々は余を株式界の通と早合點して何でも余を介して投資さへすれば屹度成功するだらうとの想像から余に一任して投資を試みようと申出た者もあつた。又某々會社の株式を人知れず買收して其實權を握る目論見を立てて一派に加入したらどうだと誘はれたこともあつた。こんな具合で實際投機市場の全景が其最も誘惑的假裝を凝らして余の眼前に展開したのである。

余は斷乎として此一切の誘惑を却けた。此種の申込で余の最も著いものは余が紐育へ移轉後間もなきウインゾル・ホテル假寓中に起つた。當時全盛のジェー・

十九世紀倶樂部は實に智的競技場であつた。有功な男女が主要な時事問題について組織的に討論し交々〳〵演説するのであつた。集會は忽ち大きくなつて個人の一室では間にあはなくなつた。從つて其後は月々の例會を米國美術館に開くことにした。余が初めて演説の辯士として參加した晩の問題は『余の貴族』であつたと記憶する。トマス・ウエントウオース・ヒッギンソン大佐は第一席の辯士であつた。余が紐育の聽衆に對する余の初見參は此時であつた。其後は折々演説をしたが一囘毎に豫め必要のものを讀んで研究しなければならないから之は余に取つて屈强の訓練となつた。

余は投機的精神と工業的精神とを區別する丈けの素養を積むに至るまで永くピッツバーグに住んで居た。電信技手としての地位から得た事物の智識は余をして當時紐育株式取引所に關係して居たピッツバーグの少數實業家又は商店を知らしむることゝなつた爲に、余は深い興味を以て彼等の行動に注目した。余には彼等の所業が單に賭博の一種と見えた。余は其頃此等の實業家や商店などが投機に耽つて居ることが世間に知られて居た爲に一それを隱すことは殆ど不可能で

ニコラス・ホテルの持主が山の手にウインゾル・ホテルを開業することになつたから余等も其處に移つたが、一八八七年まてそれが余等の家庭てあつた。持主のホーク氏は余等の益友の一人になつたが、其甥て同姓の人は今に至るまて益友てある。

余が紐育に於て得た偉大な敎育的感化のうちコートラント・パーマー夫妻の組織に係る十九世紀倶樂部が最も高尙なものてあつた。倶樂部員は毎月一回其夫妻の家に集つて種々の問題を談論したが、忽ち多數の有力な男女を吸收するに至つた。余はボッタ夫人の推薦によつて會員に選ばれたが此人はボッタ敎授の夫人として異彩を放たれた人物てあつた。其客室は市內何れの客室よりもサロンめいて居た。尤も其頃サロンめいた個人の客室が此處ばかりだと云ふ譯てはない。余は或日ボッタ家の晩餐會に招かれて初めて數人の錚々たる名士に面會したが其中の一人は當時のコーネル大學總長アンドルー・ディイ・ホワイトて此人は後に余の終生の友又顧問となつた。彼は後年露獨駐劄の大使に歷任し又へーグの平和會議には米國側首席代表者てあつた。

にあると思はれて來た。

弟は幸ひにして余等の最も重要な同志社員亦親友の一人たるコールマン氏の娘ルーシーと結婚して居た。ホームウッドの邸宅は弟に讓渡して余は又もや舊友團に訣別して一八六七年にピッツバーグを去り紐育に居をトすることになつた。此變化は余に取つて辛いことは勿論、母には更に一層辛いものであつた。けれども母はまだ年齡高からず、余と二人一緒てさへあれば何處に居ても愉快と思つて居られた。でも住み馴れた家庭を去ることは母として隨分苦しい感があつた。紐育では全く知人もなく初めは其頃全盛であつたセント・ニコラス・ホテルに陣取ることにした。而してブロード・ストリートに事務所を構へた。

斯くて當分は紐育へ訪ねて來るピッツバーグの舊友が余等の心を慰める最大の源泉であつて、ピッツバーグの新聞は余等の生存に缺くべからざるものゝ樣に見えた。余は折々彼地を訪問したが母も折々同行されたから、第二の故鄕との連絡は依然として維持された。然るに暫くすると親しい交友が新たに出來たり、新しい興味が生じたりして、紐育も一種の鄕土と謂ふことが出來る樣になつた。セント・

七年)では一切無税にしても差支ないと思ふ。歐洲は生産過剰と云ふほどではないから米國の市場が暴騰したからとて歐洲市場から流込む高は知れたもので、それが又直ぐに歐洲の市價を昂騰せしむるから米國の工業家に及ぼす損害は決して重大ではなからう。自由貿易は需要の過大なるに際して一時米國市價の暴騰を妨げる傾向がある位のものであらう。米國の鋼鐵業者は更に自由貿易の影響を恐るゝ必要を見ない(余は最近―一九一〇年―華盛頓の關税委員會に出席して此事を立證した。)

第十一章　本據としての紐育

余の事業は着々發展して余の東部特に紐育卽ち英國なら倫敦とも云ふべき米國事業界の最大策源地に頻々の往來を必要とすることになつた。苟も大會社大商店とも言はれる樣なものは該地に代表者を置かなくては事業の成績を擧げることは出來ない。そこで弟とフイップスとはピッツバーグに事業の經營を擔當して居たが、余の活動範圍は寧ろ會社の一般方針を總攬して重要契約を交渉する方面

つた。余は彼が次の如く語つたことを記憶して居る『余は余に勝算があるから大統領と爭うても能いが、さもなければ始めから爭はないよ。』

上院議員フラワーも余等の提案に賛成して居た。それで余の提出した大輕減に我黨一派の同意を得ることは聊も困難でなかつた。終にウヰルソン・ゴルマン關税案が採用された。後に上院のゴルマンに會つた時彼は說明した、南部側の上院議員を味方にする爲め彼は綿製ネクタイ問題で讓步しなければならなかつた。綿製ネクタイを關税免除にしなければ南方側の援助が得られない。關税制度の呼吸はそんなものだ。

余は戰後直ちに關税率設定運動に參加するほど十分に我工業界に頭角を現はして居なかつたから、税率輕減に賛成することが關の山であつた。余は兩極端卽ち税率は高ければ高いほど善いと主張して、一切の輕減に反對する無理解の保護論者と一切の關税を排斥して無制限の自由貿易を實行すべしと主張する極端論者とに反對して中庸說を提唱した。

余は鋼鐵類の關税は初期に於てこそ缺くべからざるものであつたが、今(一九〇

場合となれば保護貿易擁護の爲に彼等は旺んに寄附金を出したものである。鋼税は余の熱心な主張で漸次に輕減され、遂に軌條税率二十八弗が其四分の一即ち一噸僅かに七弗になつた。〔今日（一九一一年）では税率が又其約半分であるが、それすら改訂すべきものと思ふ。〕クリーヴランド大統領が其一層辛辣な新關税率法案を成立せしめんとして苦心されたことは中々面白かつた。此法案は多方面に深刻な影響を及ぼすべきもので之が萬一通過するならば創痍を蒙る工業家は一二に止らなかつたであらう。余は華盛頓に呼出されて、ウキルソン案を緩和すべく否寧ろ之を改良すべく試みた。上院の民主黨首領ゴルマン、紐育州知事フラワー及其他最も有力な多數民主黨員は余と同樣穩健な保護論者であつた。此中の數人はウキルソン案を無暗に峻嚴なものであつて、必然內國產業の若干を阻礙するものとして反對する方に傾いて居た。上院議員ゴルマンは內國生產者に損害を及ぼしたくない點に於て余と同感だと言つた。而して尙ほ又ゴルマン議員は共和黨選出議員が一致團結して税率の大輕減に賛成するならば同氏の同僚も本案に同意して鋼鐵税率については余を信賴し、余の意見に從ふであらうと言

關稅率

保護政策は米國工業の發達に貢獻する所大なるものであつた。南北戰爭前は政黨問題て、南部は自由貿易を標榜し關稅を以て單に北部を利する者と主張して居た。南部に對する英國政府の同情は遂に米國の貿易を侵害するアラバマ丸及其他の私掠船を逃亡せしむるに至つて其高潮に達した爲に、英國政府は米國人の反感を挑發した。然し英國民の一般は合衆國に好意を持つて居た。關稅政策は政黨問題から一轉して兩大政黨の是認する國家政策となつた。國民は愛國的義務として國家の富源を開拓すべきものであるとの考を深くした。國會の北部民主黨員は議長を數へて九十人まで此點に一致した。

國家が人民の後援者として斷乎たる處置を取つた爲に資本は滔々として工業界に流込んだ。戰後數年を經てから關稅輕減の要求が起つて余は自然に其爭論の渦中に身を投じなければならない羽目に陷つた。其頃工業家が國會議員に贈賄するとの嫌疑が普く行はれたが、余の知る限りそれは無根の風說であつた。工業家は確かに一年僅かに數千弗の金額しか募集しなかつたので其れは鋼鐵業協會維持費に充てる爲てあつた。然し保護貿易對自由貿易の爭論が輸贏を決する

であるが然し彼は思慮ある一富豪てある。余等は皆このトム・モリソンを誇りとして居る(昨日受取つた彼の手紙を見ると余等夫妻に對してカーネギー館記念式擧行に參列する爲め當地へ參られるてあらうから、其節は幾日間でも自分の家に滯在せられたしとの招待てあつた。)

其頃余は鐵及鋼の製造業が未だ幼稚てあることを看取したから、余等の工場を擴張して新發展をする必要があると頻りに主張して居た。然るに外國輸入品に關する米國の關稅政策は將來發展の希望を悉く水泡に歸せしめた。余から見れば米國は南北戰爭の結果自國の安寧幸福を保つ爲に必要な一切の物資に關して全然歐洲の助を藉らないで獨立自給の國家を建設し得るまでに漕ぎ附けたと思ふ。米國は從來主もに英國を介して諸種の鋼と一切の必要な鐵を歐洲から輸入して居た。然るに南北戰爭後國民は鋼鐵の自給を要望し國會は鋼製軌條に市價二割八分の輸入稅を可決して內國工業家を援助したが、之は丁度一噸約二十八弗に該當する稅率であつた。軌條は市價一噸約百弗を上下し他の物品も之に比例した價格を示した。

骸炭を生產する大功を樹てた人々は自分の功績を誇り自ら之を祝賀すべき大いなる理由を有つて居るといふことである。

余の再從弟卽ちダムファリンの從弟モリソンの子が余等の社中に加はつて爰に又余等は有力な援助を得ることゝなつた。或日工場を巡視中工場監督が余に君の親戚中に非凡の職工があるのを知つて居るかと尋ねた。余は知らないと答へて更らに巡視中に其男と話が出來ようかと問返した。余等は其男に會つて名を聞いた。『ロバート』卽ち余の從弟ボッブの子『モリソンだ』と答へた。『さうか、どうして此處へ來たのか。』『私共は工面が善くなるかと思つて來ました』と彼は言つた。『誰と一所なのか。』『家内とです』と答へた。『そんなら何故初めに親戚の所へ來なかつたのか、來れば此處へ紹介したかも知れないぢやないか。』『でも私は機會さへあれば人の助は必要がないと思つたんです。』

自己を恃んでルシファーの如く獨立すべく敎育された眞のモリソンの聲は之てあつた。其後久しからずして彼がデュクエスンで余等が新たに買收した工場の監督となり、その地位から着々昇進したことを余は聞いた。今は彼の得意時代

るが、一八七一年十二月コールマン氏の述べたことを一々立證したから、余はペンシルヴァニャ鐵道沿線に工場建設の資金を貸與した。石炭滓の引渡と輸送とに關し、各炭山及鐵道會社と十年間の契約を結び、ローダー氏はピッツバーグに來て幾年か全事業の監督をすることになつて、爰に米國最初の石炭洗滌機械据付工事が開始された。彼は一段の成功をした——元來彼は鑛業や機械業では失敗したことのない人物であつた——彼は間もなく工場建築費を辨償した。果して余等の同志社員は後に石炭工場を余等の會社に併合して、工場のみならずローダーまで買收したいと言ひ出した。之も實はドッドの技術が評判になつて居たからである。

洗滌爐は段々増設されて遂に五百に達し、毎日石炭の洗滌高約一千五百噸を算することゝなつた。余はラリマーの工場區域にある此等の石炭洗滌爐を見る毎に次の樣な感想を抱いて默して居ることが出來なかつた、卽ち若し草が一本しか生えて居なかつた所に二本生やした人が公共の恩人であつて、世間から感謝を受くべきものならば、從來幾年間無價値として全く捨てゝ居られた此原料から上等



ジォージ・ローダー

此歐洲視察は又商業的意義に於ても大いに有益なものであつた。北米大共和國の渦卷がどれほど迅速に回轉して居るかを正確に測量するには一旦之を遠ざからなければならぬ。余は余等の工業會社位では到底米國民の要求を滿足させるほど十分に發達し得まいと感じて居たが、海外へ出て見ると萬事はそんなに進行して居ない。歐洲にある僅少の首都を除くと、大陸では萬事殆ど立往生の姿であつたが、之に反して米共和國は全體を通じて昔話に示されたバベルの塔の光景を呈し、幾百千の人が肩摩轂擊押合ひ犇合ひ、寄つてたかつて大建築を作り上げつつある實況である。

余等の工場經營の新發展については從弟『ドッド』(ヂョーヂ・ローダー氏)に負ふ所がある、卽ち此種の新機軸は米國では之が嚆矢であつた。コールマン氏を英國のウィガンに連れて行つて炭山から出る炭滓を洗滌して骸炭に作る方法を說明したのは彼である。コールマンは前に始終米國の石炭山で常に捨てゝ居た、而も費用までかけて捨てゝ居た滓を利用したらエライ事が出來ようと言つて居た。從弟ドッドは機械學の專門家で、グラスゴー大學のケルヴィン卿に師事した者であ

り、山の頂で眠り、手荷物は信玄袋に入れて背負うて歩いた。旅行はヴエスヴイアス山て打切つたが、他日世界周遊の決心をしたのは此時てあつた。

此歐洲旅行は事實上最も教訓的てあつた。余は其時までは繪畫や彫刻などの何たるを全く知らなかつたが、久しからずして余は大家の畫を鑑識して之を類別し得る樣になつた。旅行中は名畫を鑑賞しても之に伴ふ其眞價がよく判らないが、一旦歸米して見ると無意識的に以前眞に美しいと思つた作品を排斥して一見新標準て鑑別し得る樣になつた。眞の大作を見た實驗が深く心に印して居るから僞筆や見掛倒しに興味を寄せない樣になる。

余の歐洲旅行は余に偉大な音樂の眞趣味を初めて解する機會を與へた。當時恰も倫敦のクリスタル・パレースてハンデル記念式が擧行されたが、余は前にも後にも音樂の威力を斯くまで高度に感じたことはない。余が其クリスタル・パレースで聞いた音樂、又其後大陸の各大寺院や歌劇場などで聞いた音樂は確かに余の音樂趣味を深く且つ大ならしめた。羅馬に於ても法王の唱歌隊が歌つた聲樂やクリスマス及復活祭などの祝賀式に奏された音樂は音樂中の粹なものであつた。

知らない重役や株主に掣肘される。けれども余は今日余の最も親しい友人として數へべき人々の中にペンシルヴァニヤ鐵道會社に同僚として働いた人々があることを愉快に思ふ。

フィップス氏・ジェー・ダブルユー・ヴァンデヴォート氏及余の三人は一八六七年に再び歐洲に渡り英蘇の兩地を始め大陸を廣く旅行した。『ヴァンディー』は既に余の最も親しい伴侶に成つて居た。二人はベーヤード・テーロルの『ヴユース・アフート』を讀んで熱狂して居た。之は石油熱の時代で株は狼煙の如くに昇騰しつゝあつた。或日草の上に横臥しながら余は『ヴァンディー』に言つた。

『君三千弗出來たらそれで僕と一所に歐洲旅行をするか』

『鴨が泳ぎ愛蘭人が馬鈴薯を食べる限り聞くだけが野暮だらうよ』と彼は答へた。

其後間もなく數百弗を石油に投資して三千弗出來たが、『ヴァンディー』はそれを貯蓄した。之が今回の旅行の發端であつた。其頃既に一廉の資本家で余の同志社員であつたハーリー・フィップス君にも一行に加つたらと勸めた。三人は歐洲の各首府を大抵訪問したが、青春の血が湧いて居た余等は高塔と見れば一々昇

如く將來も幾久しくペンシルヴアニヤ鐵道會社の成功に貢獻して其繁榮に浴し當然割前を得らるべき諸君の福祉を祈り且つ常に諸君の起居に關して甚深の興味を有すべきは小生の誓つて忘れざる所に御座候諸君の小生に示されたる終始一貫の溫情に對し又小生の經營に注がれたる熱心なる努力に對して厚く感謝すると共に小生の後任者に對しても同一の忠實を致されんことを願うて告別の辭に代へ申候　敬具

千八百六十五年　ピッツバーグ市ペンシルヴアニヤ鐵道會社ピッツバーグ局管理局長室に於て

アンドルー・カーネギー

ピッツバーグ鐵道局員諸君

御中

爾來余は決して俸給の爲に働かなかつた。他人の頤使に甘んずる者は必然的に其地位が局限されて居る。大會社の社長ですら株式の大部分を握つて居ない限り自主と云ふ譯には行かない。最も有力な社長ですら殆ど其事業の何たるを

のてあつた。余は夜、仰臥して靜かに考へて見たが、余に取つて確かに最高法官たる本心から此決心を是認する宣告を受けるに相違ないと思つた。

余はトムソン社長に訣別の手紙を書いて此一事を述べたが、社長は其返書に於て熱心に祝意を表された。余は一八六五年三月廿八日に退職して鐵道從業員一同から記念の金時計を贈られた。之とトムソン氏の書簡とは余の最も珍重する記念品中に數へられて居る。辭職に際し余が同僚に送つた手紙は左の通りであつた。

拜啓愈々御清適之段奉賀候然ば小生今般退社致候に付ては惜別の情痛切にして諸君に對し是非一言申上度存候回顧すれば過去十二年間に渉る愉快なる交際は會社在勤中小生と共に斯くまで忠實に働かれたる諸君に對する欽仰の感を鼓吹せしものに有之候今や退社に臨みて深く遺憾に感じ候事は此變化の爲め從來事業關係上親交を辱うせし諸君及他各部の諸君に相別れ向後過去に於けるが如き親密なる交際をなし得ざる點に御座候從來の業務上の關係は之にて一段落を告げ候へ共諸君は過去に於てピッツバーグ局と利害を一にせられし

として居たらしいが、生憎く其先生も余等と同様に遲刻したらしい。ところが余は其先生と取違ひられて、先生御疲れでは御座いませうが直ぐに同行して會場に臨んで下さらないでせうかと尋ねられた。惡戯は余等の手のものであつたから余は余の一行を率ゐて此奇劇を演じようとしたが何分にも疲勞して仕舞つて其勇氣が出なかつた。余は余の生涯中此時程說敎者の任務を果すべき際どい機會に遭遇したことはない。

余の投資關係は自分自ら之に當る必要が段々多くなつたので斷然鐵道の勤務を止めて一身を自己の事業に捧げる決心をした。此決心をする少し前に余は社長トムソンから費府へ招かるゝの光榮を得たが其用命は余に副管理總長の地位を與へてリウイス氏の下にアルテユーナを本據として活動せしめようといふのであつた。余は之を辭した。而して其理由は斯うであつた。即ち余は之より資產を作ることに決心して鐵道業務を放棄した。余の希望する目的を達しようとするには今日余が貰つて居る俸給に甘んじて居ることは出來ない、さればといつて自分の地位を利用して策を弄しながら金儲を遣ることを潔しとしないといふ

余等の間に冒險奇談の始まつたのは歸途に於てゞあつた。往路には天氣は善く道路も通行に適して居たが、滯在中に雨が降り續いた。荷馬車で出掛けた余等は忽ち困難に陷つた。道路は一面に粘土の泥で荷馬車の骨折りは一通りでなかつた。雨は瀑の樣に降る、どうしても其儘馬車の上で一夜を明かすより外に道はない。コールマンは大の字に荷馬車の片側を占領する、リッチーは他の片側を占領し、余は其頃非常に瘦せて居て體量百封度とはない小男であつたから此兩巨漢の中へ割込んでサンドウッチ宜敷といふ有樣であつた。進行中折々馬車が亂暴に上下して數尺づゝしか進まなかつたが遂に堅く箝まり込んで動かなくなつた。そんな風に其夜を過したが、馬車の前方に腰掛ける處があつたから余等三人は其下に頭を突込んで居た。斯る有樣にも係らず一同極上機嫌で夜を明かした。

余等は困憊を極めた狀態で翌晩漸く或る田舍町に辿り着いた。町には小さい木造の敎會があつて之に燈火がついて鐘が鳴つて居た。宿に落ち着いたばかりの處へ敎會の委員が遣つて來て會衆は既に揃つて余等を待つて居ることを話した。察する所其夜の集會には會衆が有名な敎師を招待して一場の說敎を聞かう

弗の利を得ることが出來ると豫言した。淺はかにも余等は當時地下埋藏の造化の寶が無盡藏て今猶ほ毎日幾千バーレル(樽)を産出しつゝあることには全く想到しなかつたのである。

此四萬弗の投資は從來の投資中て最も有利なものであつて其收入は最も好機會に來た。(一)ピッツバーグに於ける新工場建設は集め得らるべき資金の全部を要したが、顧みて考へれば若輩たる余等の信用程度は著しく良好であつた。

(一) ストレー油田油井の收益は現金と配當とで一ヶ年一百萬弗に達し、其油田價格は株式市場の時價五百萬弗に昇騰した。

余は石油事業に興味を持つ様になつてから幾度も出油地に出張したが、一八六四年には又オハヨの新油田に出張して能く潤滑用に適した特種の石油を産出する一大井を掘當てた。余はコールマン氏やデヴィッド・リッチー氏と共に同地に旅行したが此旅行は從來の經驗上余等に取つて最も奇異なものゝ一てあつた。余等はピッツバーグから數百哩の所て鐵道を離れ人烟稀れな地方を經て巨井を見るべくダック・クリークの水邊に到着し、同地を去るに先立つて此油田を買收した。

輸送する間に失はれた油の分量は優に全量の三分一と算せられたが、積み出される前に起る漏洩損失が既に其全量の三分一程てあつたことは確實てある。最初土人が酌取つた石油はピッツバーグで罎詰の藥品として小瓶一本一弗といふ高價で賣れたが、其效能は僂麻質斯性の疾患に能く利くといふのであつた。然し生産が多量になり價格が下落すると其效能も失せてしまつた。何たる滑稽てある！

最も有名な油坑はストレー油田にあつた。余等は此油田を四萬弗で買收する假契約を結んで、結局買入れることになつた。當意卽妙のコールマンは早速十萬バーレル(樽)を容れるに足る石油貯藏池を堀ることを提議し、毎日少量の油を之に流し込むことによつて其損失を防止した。それて一杯溜つたなら其儘之を保存して他日石油の供給が止むのを待つと云ふのてあつた。當時余等は石油噴出の止むべき日が、遠からず來ると豫想した爲に斯る計畫を立てゝ早速實行したのであるが、石油供給の止む日(其日は今以て來ない)を待つて居る間に空しく幾千バーレル(樽)の損失をした後貯油計畫を放棄した。コールマンは石油供給の止つた曉には此貯藏池に收容した石油が一バーレル(樽)十弗になる、さすれば余等は一百萬

利器一切を自ら設備し、更に進んて其土地を開發しようとする方針を取るのてある。米國人の遵奉する規則は唯一てあつて器械を用ひ得る者にはそれを與へよといふのてある。

今日てはオイル・クリーク(油田地)は小川の下流に沿うて居るタイタスヴイル同樣數千の人口を有つて居る市街てある。此地方は最初セネカ土人等が小川の水に浮いた石油を毛布て取つて一季節間僅に數石しか得ることが出來なかつた所てあつた。然るに今や此地方には幾多の町村や製油所などが現れて幾百萬弗の資本が投じられて居る。其頃の施設は極めて不完全なものてあつた。例へば酌取つた石油はヒドク漏洩する平底の舟に流し込まれて、水も舟に流れ込むといふ有樣てあつたから、石油は川に流れ出ると云ふ始末てあつた。小川には數ケ所に堰を作つて一定の時季に之を外す裝置を設け、水準が高まるのを待つて石油船を水の上に浮べて之をアレゲニー河に流し遣り、アレゲニー河からピッツバーグへ送つたものてある。

之が爲に其小川もアレゲニー河も一面に石油が浮いて居た。ピッツバーグまて

余の耳目を聳動したものは到る處に溢れて居た快活の氣分であつた。大規模の遊山で愉快な逸事が各方面にあつた。誰も彼も樂天氣分の頂點にあつた。福運は手の裡にあるが如く想像され、一切萬事浮立つて居た。鑿井櫓の上には奇異な格言を書いた旗が風に飜つて居た。余は記憶して居る河の方を瞰めて居ると二人の男が流れに沿うて踏み子で穴を掘つて油を搜して居たが、其旗印は『地獄か支那か』とあつた。彼等はどんなに深い所でも之に掘り當てようといふ意氣であつた。

此地方ほど米國人の適應性を發揮した實例は決して外になかつた。混沌のうちから忽ち秩序が開展した。其後暫らく經つて余等が其處を訪問すると小川に沿うて住んで居る人民の一團が樂隊を組織して夜間樂を奏しながら余等を歡迎してくれた。例へば爰に一千の米國人があるとすると彼等は必ず同數の英國人が相集つて其うちの誰が祖先傳來の地位に於て最高であるか、誰が祖父の功によつて指導者たるべき最善の權利を得ることが出來るかなどゝいふ樣な事に愚圖々々して居る中に、早くも自分等を一團に組織し學校、敎會、新聞、樂隊等卽ち文明の

た。其採用した形式は無類といふべき程獨創的であつた。言ふまでもなくウキリアムは其後間もなく工場監督に昇進し、追つては出資社員となり、昔の一貧獨逸人は終に一大富豪として世を去つたが、彼は優に富豪たるべき價値ある人物であつた。

ペンシルヴァニャの大油坑が世人の注意を惹いたのは一八六二年であつた。余の友人ウキリアム・コールマンは後に其娘を余の弟に嫁せしめた人であるが此際油坑の發見に深い興味を起して余と共に現場を踏査しなければどうしても氣が息まらないと言ひ出した爲に、余も彼の熱心に動かされ、彼と同道して非常に興味ある旅行をした。油田地の觀察が大流行になつて我も〳〵と其地方に押寄せて來たから全體の探檢者に對する宿泊の設備などは不可能になつた。然るに熱中して出掛けて來る連中はそんなことに僻易はしない。數時間のうちに忽ち假小屋を建てたが、短日月の間に彼等が幾種ともなく人生慰樂の材料を其身邊に集めた敏捷さ加減は眞に驚くべきであつた。彼等は普通以上の人間で、既に巨額の富を蓄積し更に新方面に其運命を開拓しようとする敢爲の人才であつた。

れて居たが、高價すぎるとの世評がある。余はよく記憶して居るが、ピッバーグの舊式工業家等は余等が此等の新式熔鐵爐に馬鹿々々しい程莫大な費用をかけて居ると批評したものである。然るに大量の原料を熱する場合になると新式熔爐を使用すれば從來よりも浪費を半減することが決して珍しくなかつたから費用は假令倍加しても結局有利な譯であつた。それであつたのに世間が余等の新方針に倣ふ樣になつたのは多年の後であつた。其頃は儲が非常に少くて儲といへば其大部分は改良熔爐の使用から擧つた利益よりなつて居たものである。

嚴密な計算組織を勵行した爲め大量の鐵を熱するに際して有り勝ちな大浪費を豫知することが出來た。此改良組織の運用が偶々有益な人物を發見する機會となつた。而して其人はクローマンの遠い親戚で會社の書記を勤めて居るウヰリアム・ボーントレーゲルといふ獨逸人であつた。彼は或日一期間に仕上げた結果を示す精細な調査を余等に提示して余等を驚かした。余等は茫然として初めは之を信ずることが出來ない程であつた。余等は彼に此調書を作ることを求めた譯てはない、彼は余等に知らせずに其全部を夜間の勞働で作り上げたのであつ

て斷然一大改革を施し、各工場の製作工程に一々重量を測定し、工費を計算し、特に從業者各自の工率を點檢して材料を節約した者は誰、浪費したものは誰、最良の結果を示した者は誰などと一々明瞭に檢定する規則を設けることを極力主張した。

此改革を實行するには其處に想像以上の大困難があつた。工場の各支配人は自然に新組織に反對した。正確な組織が成立するまでは數年を要したが、結局多數書記等の援助と工場の各所に衡器を備付けることとによつて漸く各部の工率のみならず熔鑛爐に働いて居る多數職工一人々々の能率を精密に知ることが出來て比較研究の資料を得ることゝなつた。工業成功の最大原因の一は完全な計算組織を立てゝ之を嚴密に實行し、金錢や材料などの責任を各人に充分感ぜしむるにある。事務所では五弗の用途についてすら之を帳簿に記入せずして妄りに書記に委せない工場主等が、工場では毎日幾噸の原料を職工に供給して其仕上げたものを一々計量もせず、其工程を精密に聞取りもせずに濟まして居たものである。

シーメンス式瓦斯熔鐵爐は鋼と鐵とを熱する用具として幾分か英國に使用さ

として發達する我國の形勢に照らして需要の增進疑なしとの信念に出てたのである。他の爲し得ない又爲すことを欲しないものを余等は試みた。而してそれが余等の固く守つた事業經營の方針てあつた。又質の優良てない品は決して作らないと云ふ方針を取つた。余等は常に得意先の便宜を計つた、自分の損失になる場合ですら忍んでそれを實行した、而して何か爭論が起れば疑はしい點は先方の主張に讓つて決定した。それが余等の規則であつた爲か、訴訟沙汰になつた例しは一度もない。

計算法

余が製鐵業に携はる樣になつて大いに驚いたことは各方面に涉る事業に關する費用が全く分らないことてあつた。ピッツバーグの主要な製鐵者に就いて調べて見て始めて此事實を發見した。余等の事業は一塊まりの工事で、年末になつて在荷調を爲し、帳簿の總計を見るまでは吾々工業家は全く其結果を知ることが出來なかつた。年末には損失かなと思つて居ると案外利益があつたり、又其反對の經驗をした人の話を時々聞いた。余は何だか暗い所に穴を掘つて歩いて居るモグラの眞似をして居る樣な氣がして耐らなくなつた。そこで余は愈々忍びかね

てしまつた。ミラーは愛蘭人であるが、一體愛蘭人の氣象は激感的で一旦血が沸いたら容易に納まらない。然し後になつて彼は私かに其心中を余に洩らして、あの時余の熱心な勸告を却けたのは遺憾であつたと言つた。若し彼が余の勸告を聞いたならば余等の仲間では先登第一の功勞者として自分は勿論のこと其配下の者までも必ず正當の報酬を受けて、百萬長者の列に加はることが出來たのであつた。

其頃余等の製鐵業はまだ幼稚であつたが、當時の人々の考ではサイクロプス工場としては分に過ぎた莫大の地面が手に入つた、面積大枚七英町で數年の間其一部を人に貸してもよいと言つて居た。然るに事業は着々發達して製鐵業をそんな小地面で遂行することが果して出來るかとの問題が起つた程に進歩した。クローマンは鐵の角材製作に成功したが、多年の間余等の工場は此點に於て他の何れの工場よりも遙かに優つて居た。余等は新工場の方で世間に需要のある總ての形狀の鐵材を作ることを始めた、特に他の工場や會社などが企て得ない樣な品を奮つて製作して、最初は殆んど必要のないものまで進んで試みたが、それは屢々

トマス・エス・ミラー

務がある)に於ける民衆の眞の要求に應ずることを主眼とすることに着眼しないならば、時勢を看破して之に應じようとする時代の寵兒等が擧つて敎會を脱退する時期の來るのが餘り遠く無いかも知れない。

不幸にしてクローマンとフイップスとは事業上ミラーと意見を異にして彼を排斥した。余はミラーが不當な取扱を受けたと信じたから彼と結んで新工場を起こした。一八六四年に創立したサイクロプス工場が卽ち其れである。之を經營して見ると新舊工場を合同することが可能であり又得策であることが明かになつたので、一八六七年に合同してユニオン鐵工場を設立した。余はミラーが其舊社員フイップスやクローマンなどと再び提携することの出來ない程彼等に對する嫌忌の情が烈しいとは思はなかつた。何故ならばミラーが此兩人と提携した所で彼等はユニオン工場の實權を握る譯けには行かなかつたからである。卽ちミラーと余等兄弟と三人で此工場の管理權を握るだけの出資をして居た。然るにミラーは飽くまで頑張つて、余が極力過去は過去として忘れたらどうだと勸めたにも拘はらず、一向聞き容れないで無理やりに其持分を余に買はせて退社し

るに寄附の此條項は大いに物議を釀した。牧師等は敎壇から堂々と彼を攻擊し、敎會會議は彼の行爲を以て日曜日の神聖を瀆すものとなし、之が排斥の決議をした。ところが民衆は一齊に立つて此狹量な駁論に反對し、市會は滿場一致を以て寄附を受納した。余の親友は牧師等の詰問に對する其の答辯に於て遺憾なく彼の健全な常識を發揮して居る。其答辯は斯うである。

『諸君の樣に一週間に一日だけ働いて他の六日間に自然界の美觀を悠々と眺めることの出來る者にはそれも甚だ結構ですが、諸君のよく知らるゝ通り多數勞働者は一週間唯一日しか自由にならないのに彼等に娛樂を具へ敎訓を與ふる爲に其一日を使用することを禁止しやうとするは實に恥づべき所業だと私は思ふのです。』

此等一味の牧師達は最近ピッツバーグの牧師大會に於て樂器を敎會に使用するの可否を問題にして互に爭つて居た。然るに彼等が敎會に於てオルガンを彈くの是非を討論して居る一方に、世間の聰明な人々は安息日に博物館や音樂堂や圖書館などを公開して居る。牧師が現今より一層適切に現世(其處にのみ人間の義

斯くの如くして此少年は實業界に第一歩を運んだのである。斯る少年の進路を遮ることは不可能である。彼は忽ち雇主に缺くべからざる者となつて、同商會系統の一支店に少額の投資をすることになつた。それから機を見るに敏なる彼は幾年も經たないうちにミラー氏の注意を惹いて、同氏は彼の爲にアンドルー・クローマンと彼との共同事業に少しばかりの投資をしてくれた。之が聽て二十九丁目に製鐵工場を建設せしむる端緒にもなつた。彼は少年時代に余の弟トムの學友で又竹馬の友であつた。二人は共に遊び又一八八六年に弟の死ぬるまで一生の間相提携して親友中の最親友とも云ふべき關係を作つて居た。二人は各種の事業に必ず等分の投資をして、一方のすることは他の一方も必ずすると云ふ風であつた。

當時の使丁少年は今や米國一流富豪の列に加はつて、儲けた金は斯樣に使用すべきものであるといふことを世間に知らせ得る樣になつた。數年前に彼はアレゲニーとピッツバーグとの公園に美麗な音樂堂を寄附した。而して彼が之を『日曜日に公開すべし』と特に指定したことは彼の現代人たることを示して居る。然

どを語つた。終に彼は首尾よくそれを作つた。其頃まで出來た半圓形材として之は最大の作品であつた。余等がどれ程クローマンの技能に重きを置いて居たかといふことは、彼が一旦出來ると言ひさへすれば余等は躊躇せずに工事請負の契約をしたことに照らして見ても察せられると思ふ。

余は余等の一家とフィップス一家との親交關係を前に述べたが、初期に於て余の最も親密に交際した者は其長兄ジョンであつた。ヘンリーは余より數年若かつたが、俊秀敏捷の少年として必然余の注意を惹いた。或日彼は兄のジョンに二十五仙銀貨を貸してくれと頼んだ。ジョンは何か重要の用途があるものと察して何も言はずにピカ〳〵した二十五仙銀貨を弟に渡した。翌朝の『ピッツバーグ・デスパッチ』紙に一の廣告が出て其れに『志ある少年職を求む』とあつた。

之はかの不撓有爲の少年ハーリー(ヘンリーのこと)が二十五仙銀貨を用ひた仕方であつて、恐らく生れてから一時に費した最初の四分の一弗であつたらう。答は有名なデルウォース・ピッドウエル商會から來た。『志ある少年』に來訪を求めた。ハーリーは早速訪問して使丁の職に就いた。其頃の風習として彼は毎朝事務所

シルヴアニヤ鐵道管理局長として彼が最良の車軸を製作して居ることを發見した。彼は偉大な職工であつて、當時ピッツバーグに於て何人も知らなかつた一の祕訣を握つて居た。即ち凡そ機械を使つて遣る仕事は遣り甲斐のある仕事であると云ふ點に眼を付けた。彼の獨逸魂は彼をして徹底的ならしめた。彼が製作したものは巨費を要したが、其製作品は十分目的を達して一年三百六十五日の使用に堪へた。當時は製鐵業の初期であつたから車軸が概して一定期間保つか或は其の期間中に破損するかといふのが問題になつて居た。材料の分析や科學的取扱などは未だ行はれて居なかつた。

此獨逸人が創作したものは枚擧に遑がない。冷鐵を正確の長さに切斷するには冷鋸を用ひる原理を發見したのは彼である。彼は橋梁の連環を作る爲に逆轉機械を發明し、又米國の第一『普通(ユニヴアーサル)』工場を建設した。余等は總て此等を余等の工場に据ゑ附けた。イーヅ大尉が聖路易橋弓狀門の聯結材を手に入れ得ないで(請負人が之を製作し得なかつた爲め)行詰つて居た時、クローマンは之を聞いて余等に向つて自分はそれを作ることが出來ること及び他の技師の作り得ない理由な

なつた。初めはミラーとクローマンとが事業に着手したが、一八六一年十一月ミラーはフイップスに八百弗を貸して六分の一の出資をさせ、仲間に引入れた。

余等の製鐵計畫にはミラー氏が急先鋒であつたことを特筆しなければならぬ。余等は皆此トムに負ふ所がある。彼は今も存命(一九一一年七月二十日)で、最も愛好すべき人物として其美質と光彩とを余等に傾注する。彼の如きは實に年を經るに從つて益々貴くなる良友である。彼は老境に入つてから温和になり、神學は眞の宗教に反するものであるといふ敵愾心も年と共に和いで來た。余等は皆年と共に漸次哲學的に傾いたが、之は多分善い事であらう(一九一二年オールトナガルの高原に世塵を避けて居る折柄之を再讀して、昨冬ピッツバーグで死んだ愛する親友トム・ミラーの爲に余は涙を溢した。余等夫婦は其葬式に列つた。爾來人生が物足りなくなつた、大いに物足りない、壯年時代の最初の事業提携者、老年に於ける最要の友が亡くなつたからである。何處なりとも彼が居る所へ余も亦行きたい。)

アンドルー・クローマンはアレゲニー市に一小鋼鐵槌を持つて居た。余はペン

社に較ぶれば實際極めて小さなものです。』

余が鐵道業務て仕上げた技倆はそこに有利な働をした。其後余等はボルティモア・オハヨー鐵道が余等と競爭を企てた話を聞かなかつた。ガーレット氏と余とは終まで渝らない良友てあつた。彼は自ら育てた蘇克蘭種のコーレ犬をすら余に贈つた。余がペンシルヴァニヤ鐵道側の人てある爲に自然彼とは商賣敵てあるべき筈だが、斯かることは相互の脈管を流るゝ蘇克蘭育の血液中に埋沒して何等の痕跡も止めなくなつた。

第十章　製鐵業

キーストン工場は余の經營した諸工場の元祖として常に余が寵愛した所てある。此工場が成立してから久しからずして鑄鐵より錬鐵の有利なることが明瞭になつた。故に品質の統一を謀り且つ其頃他に得られない一定の形状を作り出す爲に余等は製鐵業を開始すべく決心した。弟と余とはトマス・エヌ・ミラー、ヘンリー・フイップス及アンドルー・クローマンを糾合して一小製鐵工場を起すことに

的でガーレット氏を訪問した。彼は當時ボルティモアの外國貿易の盛大と同港に輻輳する汽船の頻繁とを大いに得意がり、配下の數人を從へ、余を馬車に乘せて、今後擴張せんとする波止場に赴いたが、外國貨物の船側から貨車に積替へられる所を見ながら余の方を向いて言つた。

『カーネギー君、之を御覽になつたら僕等の事業の大規模なことが判るでせう、又一切の物資卽ち鋼鐵軌條に至るまで會社自ら製作する必要もお判りのことゝ思ふ。余等は會社の消費する主要物資を私設會社に供給を仰ぐことは出來ません。余等は獨立獨行の一世界を成さなければなりません。』そこで余は一矢を酬いた。

『如何にもガーレット君、何れも堂々たるお話ですが、實は貴君の所謂る「大規模」は僕を辟易させやしませんよ。僕は昨年度の貴會社の營業報告で昨年中貴會社が他會社又は個人の貨物を輸送した賃金は一千四百萬弗に上つたとあるのを讀みました。然るに僕の主宰して居る會社が山から採掘して其材料を自ら製造販賣した金高は遙か其上になつて居ます。貴會社などはカーネギー兄弟會

されたが、下層工事の方はまだ進行中てあつた。

ガーレット氏は其蘇克蘭人たることを大いに自ら誇り、余と同氏との間にバーンスが話頭に上るや忽ち刎頸の友となつた。其後彼は余を其田舍の宏壯な邸に伴うて歡待した。彼は其頃堂々たる生活を營んだ少數の米國田舍紳士の一人てあつたが。邸内の土地は數百英町を算して美觀を極め、公園と見擬ふばかりの馬車道あり、肥馬を養ひ、牛羊雞犬備はらざるなく、眞に英國貴族の田舍生活も斯くやと思はしめるものがあつた。

彼は後日自己主宰の鐵道會社が鋼製軌條の製作に自ら當らざるべからずと深く決してベセメル特許權の使用を出願した。之は余等の事業に至大の利害關係があつた。ボルティモア・オハヨー鐵道會社は余等の最大得意先の一てあつた、而して余等は自然に同社がカムバーランドに軌條製作工場を設立することをどうにかして妨げたいと思つた。一會社の需要に應ずるだけの少量軌道を自ら製作するよりは市場て買入れた方が遙かに廉價てあることを余は知つて居たから、斯る計畫はボルティモア會社の損失に歸すべきものと信じた。余は其事を話す目

を立てゝ居ます。私は其危險を一身に背負つて立ちませう。貴君が石材の方を間に合せてくださる條件で、全部の契約を私達に委せて下さるなら指定の期日までに交通を開始しませう。その保證として幾何の證書を入れたらよいでせうか』と切込んだ。『さうですね、十萬弗ほしいと思ふんだが、どうです君』『よろしい、證書を用意してください。其工事を委せて貰ひませう。私達の會社は私に十萬弗の損をかけやしません。此邊の消息は貴君にも御解りのことゝ存じます』と余は言つた。

『エー解つて居ます。會社が君を通じて十萬弗の責任を帶びるからには晝夜兼行で工事を遣るだらう、それで結局橋は私のものになる譯さ』と彼は言つた。

之が其頃ボルテイモア・オハヨー鐵道の大契約として世人の耳目を聳動した交渉の顚末である。言ふまでもなく余は余自身で其證書の條件を履行する必要がなかつた。工事の實情はガーレット氏よりも余の同業者がよく知つて居た。オハヨー河は馬鹿には出來ない、石材工事がそんなに容易く出來る筈はなかつた。余等の上層工事は全部出來上つて堤防まで運搬され、證書面の義務は立派に解除

用したものであると。(ガーレット氏專屬の技師等は同氏に對して余等の設計が最良てあること及スコットとトムソンとがガーレット氏の主義卽ち自己の會社の利害得失を第一にするといふことを知つて居るに違ひ無いといふことを報告した)。氏は余がペンシルヴァニヤ鐵道會社側の人間であることを十分に知つて居たが、此仕事を余等に請負はせることを自分の義務と感じた。

談判の成行はまだ余に不滿足てあつた。工事中の最も困難なる部分卽ち大徑間て其頃は頗る危險と認められた部分を一切余等が引受けて、ガーレット氏は小さくて有利な徑間を全部余等の特許權を使用して自分の工場て製作しようと云ふのてあつた。そこて余は思切つて質問した。工事をそんな風に手分けする理由は石材工事が出來上り次第、橋の交通を開始する能力が私達にないと貴君が正直に信じて居るからでせうと肉薄した。彼は其通りだと自白した。その點ならば心配の必要はないと余は斷言した。余は一步を進めて、『ガーレットさん、私一己の責任を以て證書を入れた丈けて宜敷う御座いますか』と言つた。『結構です』と彼は答へた。『宜しい、それなら私がお引受けします。私は之に就いては相當の鑑定

つた。就中余の驚いたのはガーレット氏がペンシルヴアニヤ鐵道會社の社長たるトムソンや副社長たるスコットなどが余の特別な親友であることを知りながら彼と此等の人々との間に介在して居る抗爭に論及したことてある。余も自然と釣込まれて余が途中で態々費府へ立寄つたスコット氏と會見したこと、又同氏が余に何處へ行くと尋ねたことなどを打開けて次の様な事を言つた。

『私はオハヨ河に架設する貴社の大橋梁工事の契約を手に入れる爲めガーレット氏の所へ行くのだと答へました。スコット氏は私に對して君は滅多に無駄足をしない方だが、今度丈けは確かに馬鹿を見るだらう、又ガーレット氏が君に契約をさせる考を毛頭持つて居る筈はない、それは君とペンシルヴアニヤ鐵道會社との間に存する古い關係上必ず之に親善な感情を持つて居ることを何人も知つて居るからてあると言つた。それて私はスコット氏に答へて、よしそれなら私達の方から進んでガーレットさんの橋を作りませうと言つた。』

ガーレット氏は卽座に答へた、自分の會社の利害關係が專ら請負業者の手腕如何に左右せらるゝといふ様な場合には必ず最も評判の善い請負業者の入札を採

ボルテイモア・オハヨー鐵道橋契約

パーカースバーグとホイーリングにオハヨー河横斷の橋を架設する必要を認めた。此頃から渡船時代は既に衰へつゝあつた。此等の橋を建造すべき契約に關して余は其頃の要地を占めて居た偉人ボルテイモア・オハヨー會社の社長ガーレット氏に親炙する好機會を得た。

余等は橋梁も橋詰工事も契約したいと熱望したが、ガーレット氏は余等が指定期間内に此等の大工事を成就し得ないと斷定した。そこで彼は橋詰工事と短徑工事だけを自分の工場で引受けたいと云ふので、余等の特許權を使用させてはくれまいかと余に尋ねた。余はボルテイモア・オハヨー會社が余等の特許を利用して下さるといふことは余等に取つて非常の光榮であると答へた。ボルテイモア・オハヨー會社が余等の特許を採用したと云ふ證明は特許權使用料に十倍の價値があると認めるから、余は社長に對して余等の所有する一切の特許を自由自在に使用なさいと答へたのである。

此挨拶振は疑もなく此鐵道王ガーレット氏に好印象を與へた。彼は大いに喜んで更に余を彼れの事務室に案内して腹藏なく快談されたことは實に意外であ

鐵燈柱は最大利益の伴うた契約の一を余等に與へたのみならず、更に大いなる利益即ち余が競爭者全部に打ち勝つてデエビユーク橋の契約を手に入れたとの好評を博させてくれた。之は又余が米國に於ける最善にして最も尊重すべき公人の一人なる元老院議員アリソンと終生渝らない友誼を結ぶ端緒ともなつたのである。

此話の敎訓は一目瞭然てある。契約をしたいなら其れが提供される時に現場に望んて居ること。粉砕した燈柱なり何なり之に似た樣なことで全く豫想して居ないことが入札者さへ現場に居れば彼に最後の勝利を得させるものとなるかも知れぬなどゝいふことてある。出來るなら契約書を懐中して大丈夫となるまて其處に踏止まるがよい。實は余等が歸つても差支ない、契約書は署名の爲め後から送るからと言はれたけれども最後まて留まつたのてある。デエビユークの名所が見たいからと言つて悠然と滯在して居た。

余等がスチユベンヴイル橋を建造した後、ボルテイモア・オハヨー鐵道會社は其强敵ペンシルヴアニヤ鐵道會社に大なる利益を壟斷されることを防禦する爲に

街燈柱破壞の機會

出る位てあらうが、鑄鐵ならば必ずブツリ切れて同時に橋が落ちると言つた。重役の一人で有名なペリー・スミスは幸ひに余の議論に荷擔して、重役會に鑄鐵なら疑もなく余の言つた樣な結果に終るだらうと注意した。實は其前に或夜彼れの乘つた馬車が暗い所て鑄鐵製の街燈柱に衝突して其柱が粉碎した經驗があつたのだ。されぱペリー・スミスを介して天祐ともいふ樣なものが余を導いて呉れたと推測しても强ち余の速斷ではあるまいと信ずる。

『諸君、此處が要點です。少し多く金を掛けさへすれば金城鐵壁の錬鐵製橋梁が出來て如何なる汽船と衝突しても大丈夫でせう。私共は廉價の橋を作つたことがありません、又將來も決して作りません。私共のは落ちません。』と余は得意になつた。

一座水を打つた樣に靜まつたが、暫くすると橋梁會社長アリソン氏卽ち偉大な元老院議員は數分間席を外してくれと余に賴んだ。余は退席した。間もなく彼等は余を呼戻して安價の方でよければ契約しようと申出たがそれは二三千弗の差てしかなかつたから余は讓歩した。運よくも丁度其頭粉碎してくれたかの鑄

余は多年の間親しく自らキーストーン橋梁會社の社務に鞅掌した。重要な契約關係がある場合には屢々自ら出馬して相手方と交渉の任に當つた。一八六八年に斯る必要が起つて余は會社の技師ウォルター・カッテを伴ひアイオアのデェビュークに行つた、それは同地に於て大河ミスシッピー横斷の鐵道橋を建造する契約の爲であつたが、此の如き大工事は當時至難のものと認められて居たが、實に未曾有の鐵道橋であつた。其上之には競爭者があつた。川は堅氷に鎖されて居て余等は四頭の馬に牽かせた橇に乘つて渡つた。

此行に於て余は成功が些事に因りて左右せられるといふ機微を學んだ。入札の結果余等の見積が最低でないことが分つた。競爭の相手は市俄古の橋梁製作會社が筆頭で重役會は之に契約をさせると決議をした。余は未練が殘つて取締役の誰彼を捕へて話をした。彼等はお目出度いほど鑄鐵と錬鐵との比較眞價を知らなかつた。余等は必ず橋梁の上弦材を錬鐵で作ることにして居たが競爭諸會社は鑄鐵を使用して居た。余は此點に立論の鍵鑰を握つた。余は汽船が前者と後者とに衝突する場合に起る結果を說いて聞かせた。錬鐵材ならば多分少し

様に工場や器具などを清潔に保つこと、工場の構内及周圍などの秩序を維持することなどは普通に考へられるよりも成功に大關係ある要件てある。

ピッツバーグに銀行業者大會の開かられた際エドガー・トムソン工場を視察した錚々たる銀行家の一人が評した言葉は大いに余の意を強うした。彼は數百の代表者の一行に加はつて工場を一通り巡視した後余等の支配人に言つた『此工場は流石に適材を得て居ると見える。』

評者は果して成功の秘訣に其指を觸れたのてある。確かに其工場に適材を得て居た。卽ち人格が其處に顯はれて居た。某大工業會社の社長が嘗て余にかういふ話をした、卽ち工場内に檢査員が這入らうとした時に社員が彼を追ひ拂うた爲に其後は二度とそんな者が邪魔をしなかつたと自慢した。而して彼は此逸話を以て一種の慶事の様に思つて居たらしいが、余は獨りて考へた『此會社は必ず競爭に堪へなからう。不景氣が襲來すれば倒れるに違ひない。』結果は果して余の意見の正確を立證した。工業の最も確實な基礎は品質てあるといふ事を忘れてはならぬ。價格の問題の如きは末の末てある。

分手を盡すことが出來なかつたり其設計が非科學的であると知れば斷乎として之に應じなかつた。苟もキーストン橋梁會社製作の刻印ある製作品ならば(聯邦中之なき州は稀である)余等は保險を付ける覺悟であつた。余等は會社建設の橋梁に對して恰もカーライルが其父のアンナン河に建設した橋に對した樣な自負心があつた。偉大なる息子は父の製品を評して『正直な橋』と言つたが眞に適評であつた。

此商略は眞に成功の秘訣てある。事業の信用が確立するまでは坂に車を押す苦みを數年間嘗めやうが、其後は順風に帆を揚げて快走することが出來る。されば工業家は檢査員を拒絶する愚を學ばないで寧ろ之を歡迎すべきてある。斯くて優秀な標準が容易く維持され工場員が熟練の域に達する樣敎育されて行くのである。余は善良にして正直な事業を遂行せずに立派な功績を擧げた會社のあつた例を知らない。競爭の激甚な今日萬事は價格によつて決する樣に見えても事業大成功の根本義は大部分品質の良否にある。從業者各自卽ち社長より最下級勞働者に至るまて品質に留意する必要は極力之を高調すべきである。之と同

ばドーも安心が出來ないなどゝ言ひ出されるかも知らんと氣支つた。そんな譯で兎に角余等は首尾よく橋を護つた。『パイプ』は羅馬の古英雄ホレーシアスもどきに立派に橋を守護した。彼は君子で、事業上余の伴侶として天から授けられた最も貴重な同業者の一人であつた。彼の如きは眞に其努力に對して大なる報酬を受くべき人であつた。

キーストン橋梁會社の事業は常に余を滿足させた。其頃までに鐵橋建設を目論んだ米國の諸會社は殆ど悉く失敗した。其建設橋梁は多く倒壞し、米國に於ける鐵道事故の最も悲慘なるものは之に起因した場合すらあつた。建設中風壓の爲め倒壞した橋もあつたが、キーストン會社の建造した橋に限つて一もそんな事故は起らない、風の暴威を振つた場所ですら嚴然として今日まで殘つて居るものもある。之は決して僥倖ではない。余等は最良の材料のみ用ひ且つ之を十分に用ひたのみか、其鐵材は總て自作のもので後には鋼材も自作することになつた。余等は自己の作業に對して最も嚴密な檢査を行ひ安全な製品を出すか然らざれば一も出さない方針を立てた。橋の註文を受けても其註文に無理がある爲め十

くなつた。どうしても夜行列車で歸ると言出したので余はどうしたら引止めることが出來るかと途方に暮れて居たが遂に大佐の弱點が一つあることを思付いた。晝のうちに余は妹の爲に馬を二頭買入れたいと話した。余はそれを妹に贈りたいが、聖路易は有名な馬の產地だと聞いて居たので、何か逸物を御覽になつたことがあるかと引掛けた。

果して引掛かつた。大佐は乘氣になつて色々の馬を見た又厩も見たなどゝ頻に講釋を遣り出した。余はそれでは一日逗留して其馬を選定してはくれまいかと賴んだ。さうすれば必ず彼は馬を見ようとする、又幾度もそれを乘廻はしたりして暫くはそれに掛かつて居るだらうと余は考へた。諸事悉く余が丁度豫期した通りに行はれた。彼は立派な馬を二頭買つた。然るにそれをピッバーグへ輪送するについて又一難が起つた。彼は鐵道輪送を不安心に感じたらしいが船輪送とするには此處數日の内に出帆する樣な適當の船がない。余にはそれが明かに天祐であつた。馬がちやんと發送されることを見屆けるまでは何事があつても彼は此土地を去る氣になれない、或は自分が馬と共に汽船に乘つて行かなければ

初めは『大尉』で不足と思つたか、『イーヅ大佐殿、是は是はお初にお目にかゝりまして』などと遣つて居たが、何時しか話が少し込み入つて來ると、挨拶が少し粗末になつたのを余等は氣がついた。それでも『お早ようイーヅ大尉』位であつた。所が余等は『イーヅさん』に相場を下げた『パイプ』の挨拶振りに喫驚した。談判行惱み中に『大佐』から『ジム・イーヅ』まで落したが、實を言ふと工事が工場渡しになるズット前にジムに時折大きなD(ダム即ち悄い奴の頭字)を冠して居た。人は偉大な技倆を有ち、愉快な面白い性質を有つて居ても、例へばイーヅ大尉の如きは確かにさうであつたが、他人の科學的智識と實際的經驗とを自ら利用する心掛がないならばミスシッピー河横斷五百呎の最初の橋を製作することが出來ない。此橋は長さは五百十五呎て其頃世界第一の弓狀鐵橋と認められた。

工事は竣工したが、余等が未だ代金を全部受取らない内に橋を横取りしようと威嚇した者があつたので、余とパイパー大佐は數日間聖路易に踏止まつて橋を守護することになつた。大佐が兩端の橋板を取外して護衞の人々を交替させる計畫を立てた時、大佐自ら頻りに望鄕病を起してピッツバーグに歸りたくて耐まらな

物を思ひ浮べる。それはイーヅ大尉と云つて聖路易の人であつた。其後ミスシッピー河に懸けた橋梁を以て有名になつたジエームス・ビー・イーヅ大尉である。彼は獨創的天才であるが科學的智識に乏しく、機械的事物に關して自己の不規則な觀念を統一する力がなかつた。彼は何でも自己獨創の計畫で實行して見たい性格の人物らしかつた。一度或仕事で試みられた事ならば『それ丈の理由で彼は之を排斥する。聖路易橋に關する彼の設計書が余等に示された時に余は本問題の智識に於て米國の第一人者即ち社員のリンヴィル氏にそれを渡した。氏は大いに憂慮して余の所へ來た。而して『此設計で橋を造れば橋は立ちません、自己重量で倒れます』と言つた。『さうですか、夫れではイーヅ大尉が貴君に會ひに來る樣に私が計らひますから、參られたら穩かに說明して、筋道を立てゝ合點の行く樣に說得して下さい、他人には決して話をしないでくださいと余は答へた。

此交涉は首尾よく出來たが、愈々橋を造る場合になつて製作主任のパイパーは大尉の突飛な要求に到底應じきれなくなつた。最初のうちは未曾有の大契約を引受けたと云ふので有頂天になつてイーヅ大尉に愛嬌の有りたけを振蒔いた。

パイパー大佐

宜しいトマス』と大佐は大滿足てあつた。物は言ひ様て大變な違ひてある『一仙も減じない』と言つたら爭ひになつたかも判らぬ。

ブラドストリート與信所の信用錄について彼が烈火の如き怒を起したことがある。彼はそんな書物を從來一度も見たことがなかつたので自然自分の會社をどんな風に評してあるか見たいと思つた。キーストーン橋梁會社BCと書いてあつた即ちB惡C信用の略てある。編輯人を起訴するから法律顧問の所へ出掛けると激昂したが漸くのことてそれを押へた。トムは其場合も巧く遣つた。惡信用と云ふのはキーストーン會社が借金をしないから貸す方から云へば惡い相手なんてすとの說明に大佐は忽ち和らいだ。借金しないと云ふことは大佐の最も得意とする所。或時財界の不況て附近の會社商店の大困難に陷り破產頻々として起つた場合に、余が歐洲に出掛けやうとするとき大佐は余に言つた『君の留守中に我々が證文に記名さへしなければ執達吏は來ないだらうね。』『エー來やしませんとも』と余は答へた。『宜しい、それなら君の歸るときも僕等は此處に居るよ。』

大佐の話をしたのでモウ一人此橋梁製作時代に余等が懇親になつた異常の人

來た。其說明によれば彼はケンタッキーの逸物を乘廻はさうとしたら手綱が一本切れて『舵』を取り損つたのだ。

彼は偉丈夫てあつた。余等は『パイプ』と呼んて居たが氣に入つたとなれば(余も其一人だが)何處までも其人の味方になると云ふ氣象てあつた。後年に余が紐育へ移つてからは彼の愛情が余の弟に移つたが彼は弟をトムといはないてトマスとハッキリ呼ぶ癖があつた。余も彼に深く敬愛されたと思ふが弟の方が一目上てあつた。彼は弟を神の如く崇拜して居てトムの言ふことは何ても法律てあり福音てあつた。彼は余等の經營する事業てさへあれば自分が何等直接關係しなくとも非常に熱心な同情を寄せて居た。キーストーン會社に鐵材を供給する工場などは其一例てある。品質や價格其他に關して工場幹部と大佐との間に幾多の紛爭が起つた。或時彼は弟の所へ遣つて來て一ヶ年間鑛材供給の契約書を寫し違へたと小言を言つた。價格を『正味』としてあつたが契約を結んだ時には其『正味』の說明を何にもしておかなかつた。彼は其『正味』とはどう云ふ意味かと詰問した。弟は答へた『それは大佐殿一仙も加へないと云ふ意味てすよ。』『あアさうか、



トマス・モーリソン・カーネギー

リンヴイルとパイパーとシッフラーとは斯道に於ける其時代の偉才であつた、即ちリンヴイルは技師、パイパーは敏活な機械師、シッフラーは極めて質實な人物であつた。パイパー大佐は非凡な人であつた。ペンシルヴァニャ會社の社長トムソンが若し橋の燒失する場合があつたとすれば工務部從業員全體を繰出すよりも其現場にパイパー一人臨んで貰つた方が寧ろ安心であると言はれたのを余は聞いて居る。大佐には馬の話を出すと必ず夢中になる一の弱點(余等には好都合)があつた。事業上の問題が餘り熱心に論議されて大佐が持前の癇癪を出す時は馬の話さへ出せば屹度治まつてしまふ。何もかも忽ち忘れてしまふ。彼は馬の毛色のことを話されては全く恍惚として我を忘れる。彼が過勞の爲め休養の必要があれば余等は彼をケンタッキーに遣つて余等のうちで誰か知ら買ひたいと思ふ馬を一頭か二頭見て來て貰ふ、それが彼には何よりの樂みて其馬の選擇については余等は大佐以外の人を決して賴まなかつた。然るに馬を熱愛することは折々大佐に容易ならぬ困難を來たす原因となつた。或日彼は顔を半分眞黑に泥まぶれにし、衣服は目茶〳〵に破れ帽子は無くしてしまひ、片手に鞭を持つて遣つて

居る。パンハンドル鐵道會社の社長ジユーエットが工場に來て重さうな鑄鐵材料の積重ねてあるのに眼を注いて余に對して言つた『私はこんな重い鑄物が橋梁になつて夫れ自身の重量を支へることさへ六ケ敷いと思ふ、況んやオハヨ河の上に架設して列車を運ぶなどゝは思ひも寄らん談である』と。

所が此ジユーエット判事は彼が生きて居る中に其所信を變へなければならぬことゝなつた。此橋は其後多少の加工をしたけれども最近まで立派に保たれた。此第一回の重要な注文で余等はウンと儲ける積りであつたが、通貨膨脹の爲め工事竣成前に物價騰貴して利益は殆ど皆無になつた。此事實を聞知したペンシルヴアニヤ會社社長エドガー・トムソンは此損失塡補のため餘分の金額を余等に補給してくれたことは同氏の公平を證する一例である。氏は言はれた、契約當時に於ける當事者は双方共將來を逆睹し得なかつたと。エドガー・トムソンの如きは實に偉人であり又君子であつたがペンシルヴアニヤ鐵道の爲には嚴密な契約作成者であつた。而して其偉大な點は常に法律の精神は文字よりも貴いといふ事實に注意して居られたといふ一事である。

めて、それが翌一八六三年にキーストーン橋梁會社に併合された、此社名は余が附けたのでキーストーン州(要石の産地)として知られたるペンシルヴァニャ州の橋梁製作會社として最も適切なものと自ら誇つて居た。之を發端として米國否實に余の知る限りに於ては世界一般に鐵橋を使用することになつた。ピッツバーグの製鐵業者等には余の書狀だけで新會社の株を買つて貰ふことが出來た。そこで木造の小工場を數個建設して鐵橋の製作に着手した。主要材料には鑄鐵を使用したが、橋梁は非常によく出來て當時の製作で其後運搬力增加の爲め加工した橋が今日まで各線に依然と殘つて居るものすら幾つもある。

スチユーベンヴィルに於てオハヨー河に架橋する問題が起つて、三百呎の鐵道橋を製作することが出來るかとの照會を受けた。それ位の工事に對する會社の能力に就ては少からぬ懸念があつたとは今日から見れば滑稽極まる話であるが、其頃はまだ鋼鐵時代の前で米國に於ては錬鐵の使用さへ稀であつた事實に想到すれば此疑のあつたのは當然である。上弦材も支柱も總て鑄鐵であつた。余は兎に角引受けることを社員に力說して遂に契約を結んだが、今でもよく記憶して

（一）カーネギー氏は是より先き卽ち一八六一年に於て早くもミラー氏と共同でサン・シティー・フォーヂ・カンパニーを設立し一小製鐵事業を經營して居た。

余はアルテューナに在勤中ペンシルヴァニャ鐵道會社の工場て初めて小鐵橋の製作されたのを見たが、それは立派に成功した。余は爾來永久的施設として鐵道に木橋は到底不適當てあると認めた。是より先ペンシルヴァニャ鐵道の重要なる橋が一ヶ所燒失して交通が八日間止まつたことがある。必要なものは鐵てあつた。余は前記鐵道の設計者エッチ・ジェー・リンヴィルとペンシルヴァニャ鐵道の橋梁掛シッフラー及其提携者ジョン・パイパーをピッツバーグに迎へて鐵橋製造會社創立の相談をした。之は此種の會社の嚆矢てあつた。余は余の友人ペンシルヴァニャ鐵道會社のスコット氏に入社を勸めて承諾を得た。五人は各資本金の五分の一卽ち千二百五十弗づゝを拂込んだが、余の分は銀行から借りて出した。今から顧みれば極めて小額てはあるが『亭々たる巨檞も小さなドングリ』『から』生長する。

一八六二年にパイパー、シッフラー合資會社が出來たのは所謂ドングリの生え初

第九章　橋梁建設

南北戰爭中鐵價昂騰して一噸約百三十弗に上つた。其高値てすら買手はあつたが賣手の有無が問題てあつた。米國の鐵道は新軌條缺乏の爲め刻々危險狀態に陷りつゝあつたので、此形勢を看破した余は一八六四年に軌條製造會社をピッツバーグに創設することを思立つた。事業提携者と資金とを獲るには何等の困難もなく、優等軌條工場と熔鑛爐とが建設された。

同樣に機關車の需要も頗る盛てあつたので余は(一)トマス・エス・ミラー氏と共同して一八六六年にピッツバーグ機關車工場を起したが、之は好成績を擧げて世間の信用も厚く該工場製造の機關車は全米國に羨まるゝほどの好評を博した。此會社の株券が一九〇六年に三千弗、卽ち額面百弗の三十倍に賣れたと云へばお伽話にても有りさうに思はれやうが事實てあつた。年々巨額の配當をして會社は非常に成功した、之こそ『最良品の外何をも作る勿れ』との商略を雄辯に證明するもので余等は事實最良品の外何をも作らなかつたのてある。

時は頗る重態であつた。蘇國の藥品は其頃蘇國の神學同樣嚴しかつた(今では双方共大いに緩和したが)余は出血した。余の薄い米國仕込の血液はしたゝか薄くなつて恢復期に向つたと聞いた時はまだ中々容易に立てさうもなかつた。此病氣の爲め故鄉滯在の期間は急に終りを告げたが、米國へ歸航した頃は海上の空氣に十分の元氣を囘復して仕事に取掛ることが出來る樣になつた。

任地に歸つた時の歡迎振りには余も深く感激した。東部終點の人々は大砲を一臺備へて共に集まり列車通過の際に祝砲を以て余を迎へた。之は恐らく余の部下が余に公式的敬意を表した初めての場合であつたと思ふが、彼等の歡迎は余に永久の印象を與へた。余は自分が如何ばかり彼等に誠を盡したかを自ら知つて居た、而して彼等が余の情誼に報いたことを知つて余は喜ばしかつた。勞働者は何時も溫情に報ゆる心掛がある。余等は苟も眞實に他の人々に誠を盡すならば彼等が余等に對する感情如何は顧慮するに及ばない。德孤ならず必ず隣ありとは此事である。

ずる。

余の家庭には勿論余の先生、指導者、皷吹者たる叔父ローダーがあつて、八歳の時早くも余を英雄的愛國的詩人的たらしむるほど丹精を盡された。今や余は二十七歳になつても叔父ローダーは何處までも叔父ローダーであつた。叔父は余の眼には相變らず偉人であつて余の心中に誰も叔父と等しい地位を占める人はない。叔父と余とは引切りなしに散步をしたり話をしたりした、叔父には相も變らず余は『ネーギ』であつた。叔父は余を他の名で呼んだことが決してなかつたが、又他の名を付けようともしない、噫余の可愛い可愛い叔父！叔父は余に取つては單に世間でいふ叔父ではなく、遙かに其れ以上の人であつた。(一)

(一)『自由とは勇敢なる祖先の遺したる主義なるが故に、之を愛して止まなかつた。此叔父は南北戰爭の暗雲米國の天を蔽うた時に、蘇國の鄕里にあつて唯一人リンカンが稱へた主義を標榜して屹然として立つて居た』(センチュリ・マガジーン、六四卷九五八頁ハミルトン・メービー寄草記事)

余は猶も夢心地で神經が激昂して眠れなくなつたのみか、夫れやこれやで到頭風を引いた。自然の結果て熱が出て來た。余は叔父の家に六週間病臥したが一

子供だと評したが、幼時の食慾は事業慾となつて余の新事業と生産増加とに對する慾望は此の如く旺盛てある。余の近親圏内ては余が一番早く生れた子供てあつたから、今は尊い老人になつて居る。其頃の親戚でどうか子守をさせてくれと賴んだ者が澤山あつて、叔母などは其仲間の一人だつた。彼等は老境に入つてから余の幼時の惡たれや幼な言葉を克く話して聞かせた。其一つを叔母達が記憶して話された時は何だか自分ながら大人振つた少年の樣に感じた。

余は格言づくめて養育されたが其敎訓中の一つは早速應用された。三哩程隔つた海岸から歸るのて幼い余を歩かせることも出來ず、父は止むなく中途からおんぶして歩くことにした。夕暮に峻坂を上る苦しさに父は重いなァと言はれた。父がさう言つたら余は歩くと言ふかと思つて居られたらしいが、答は奇想天外といふべきてあつて『お父さん、構はない、忍耐と辛棒とが立派な人を造るといふんぢやないか。』

父は重荷を負つて其儘進行したが、身體を搖すぶつて笑つて居られた。自己の武器て自ら敗れたのだが、それにも係はらず荷は輕くなつた。父の愛だと余は信

せしむることゝなつた。

余の親戚は非常に親切であつた、而して最年長者たる余の最愛の叔母シャーロッテは歡喜の餘り自分を忘れて叫んだ『あのね、お前も何時か此處へ戻つて來てハイストリートに店を出すだらうね。』

叔母の考ではハイストリートに店を出すことが卽ち大成功であつた。叔母の娘と其婿の二人は互に親戚の關係はなかつたが、余には二人とも本統の從兄弟姉妹の間柄であり、且つ彼等はハイストリートへ店を出すといふ名譽を擔つて居たから、叔母は前途有爲の甥の爲にこれほどの大成功を豫言しても決して惡くはないと思つたのであらう。店商賣にも貴族主義があつて、ハイストリートの青物商の家族はムーデー街の同業者と平等の交際を爲すを潔しとしなかつた。

屢々余の子守役をしてくれた叔母は好んで昔話をした、余が匙一本では言ふことを聞かない兒で、一本を口から離すとヤーンと怒鳴るので二本で食べさせなければならない厄介な赤ん坊だつたと言はれた。後に余等の鋼鐵工場監督になつたジョーン大尉は余のことを『齒が二列に生えて他に一列分の穴があいて』生れた

た。小學校は余の小學時代の想出の中心て、余に取つては唯一の母校と云ふべく、其運動場ては戰爭ごつこをしたり競走をしたりしたが、此等は總ておかしいほど小さく見えた。立派だと思つた邸宅ブルームホールやフォーデル、就中ドンブリッスル溫室などはどれもこれも倭小無趣味のものになつた。余が晩年に玩具の樣な小家屋の國卽ち日本を見物した時の感想は故鄕て此折に得た印象を繰返した觀があつた。

何を見ても小形の物ばかり。余が少年時代苦行の初舞臺てあつたムーデー街頭の古井すらも余が心に描いた光景とは變つて居た。けれども余が夢にも忘れなかつた、變らない物は唯一つあつた。かの光彩陸離たる古寺院と其溪谷とは何等の失望をも感じさせない。其偉其大總て十分てあつた、而して塔上の歷史的文字『ロバート・ブルース王』は昔ながらの異彩を放つて余の眼と心とに大きく輝いて居た。故鄕に歸つて初めて聞いた寺の鐘も決して失望の感を起させなかつた。之が爲に余は感謝の念に堪へなかつた。之は余に元氣囘復の機會を與へた。古寺院の周圍、卽ち王宮の古跡と溪谷とは之を見るに從つて次第に昔の光景を玩味

天に冲し、忠勇にして且つ眞實である。嗚呼蘇國よ汝は余か心を得たる者。余は汝の子たることを誇る」（一八八二年紐育刊行アンドルー・カーネギー著「我等の馬車旅行」五二頁）

こんな氣分で余等はダムフアリンに着いた。途すがら目に入るものは皆昔を偲ぶ種子であつたが、何を見ても余が想像して居たよりも小さく見えたので余は全く間誤つて居た。遂に叔父ローダーの處へ着いて昔叔父がドッドや余に種々の事を敎へてくれた懷かしい室に這入ると余は聲を揚げた『あなた方は皆此處ですね、何もかも私が昔見た通りで變りはありませんが、あなた方は今一緒になつて玩具で遊んで居らつしやるのだね』。

余が粗末とは思はなかつた大道であるハイストリートや、余が紐育の大商店にすら比較した叔父の店や、日曜に昇つて遊んだ町の近邊の小さな塚や、あちらこちらを距つる距離や、家の高さや、此等は總て小さく縮んで見えた。これこそ小人國の一都會であつた。余の生れた家などは手を延ばせば檐に屆くかと思はれ、土曜日に行けば大遠足と思はれた海は唯三哩しかない。余が貴螺(ばい)を取つて遊んだ海岸の岩などは何時の間にか消え失せたらしく、鈍狀な平面の淺洲だけが殘つて居

ける必要を力説した。)

ペンシルヴァニヤ鐵道會社は余に休暇を與へたので蘇國を訪問すべき宿望を達する機會が來た。母と親友トム・ミラーと余とは余が二十七歳の一八六二年六月二十八日に汽船エトナ號に便乘して出帆した。リヴアプールに上陸するや直ちにダムフアリンへ向つた。此度の歸省ほど余の感を動かした變化はない。余は夢を見て居る樣な心地がした。蘇國に近くなるに從つて一哩毎に此感が深くなつた。母も同感であつた。今は記憶して居る母の眼に初めて懷かしい黃色の灌木が映つた時母は忽ち聲を揚げて『アラ、蜀黍が、蜀黍が』と言はれた。

母は胸一杯になつて淚が止め度なく流れた。余が和だめたり慰めたりすればするほど母は感激して居たが、余自身も此の神聖な地上に體を投げ出して土に接吻したいほどてあつた。(一)

註(一)『余は蘇國男子と生れたことを神の惠みと信ずる。
他の如何なる幸運も如何で余を滿足させやうか、余等を生んだ此の國土は可愛い一徹者で萬事を自己流に設計もし又巧みに遂行もする、眼を常に大局に注ぎ、情にかけては脆く、戀歌や情話などを飽まで好んで忽ちそれに心を奪はれる。美談には感奮して意氣

重患に陷る

贈與されて之を受くる者も一般民衆も之を賄賂とは考へない點である。

余が一八六一年に華府に召された時は戰爭が直ぐにも終局になるだらうと觀測されたが、其後間もなく幾年もかゝると云ふことが明かになつた。そこで常設の主任吏員を任命する必要が起つた。ペンシルヴァニャ鐵道會社はスコット氏を何時までも手離して置けなくなつたし、氏の方でも政府側から同鐵道に對する要求の多大なる爲め、余の任務を痛切に必要とするので余をピッツバーグに歸らせることにした。故に余等は華府方面の任務を他の人々に讓つて夫れ〳〵の舊地位に復歸した。

余が華府から戻ると余の健康に反動が起つて生來初めての重患に罹つた。職務を執るべく苦闘して見たが元氣全く沮喪して遂に休養するの外はないことになつた。ヴァジニャの鐵道旅行中日射病の樣なものに襲はれて頗る難澁したが其後平癒はしたものゝ暑氣に堪へられなくなつて日光に當らない樣に注意する必要があつた、暑い日には全く凋れてしまつた(多年の間涼しい蘇國高地の空氣が余の爲に萬能藥となつたのは之が爲てある。余の主治醫は余が米國の暑い夏を

めたが、彼は自己の軍服に無頓着であつた如く金錢にも至つて淡白であつた。第一期の終には彼の嚢中無一物であつたことを余は知つて居る。それでも余は在歐中最高官邊にグラント將軍が任官手段で金錢を手に入れたとの世評に幾分か根據あるものゝ如く傳へられて居ることを發見した。余等は米國に於て斯る攻擊に左程の信を措く者が極めて少いことを知つて居るが他國では如何にも信實であるかの如く言ひ傳へたから、斯る人身攻擊をする人々は自國民の名譽を重んじて輕擧妄動に陷らない樣十分に考慮を用うべきである。

米國の政治が腐敗して居ると一般に信ぜられて居る所から共和制度が必然的に腐敗を生ぜしむる政體であるとの說は今日英國に行はるゝ主張であつて、之が他の何物よりも烈しく民主主義に打擊を與へて居る。それでも英米兩國の政治について多少の智識ある余は新共和國の公人に腐敗分子があるとすれば老王國にもそれだけの腐敗があり、唯異る所は腐敗の形式のみであると斷言するを憚らない。王國の賄賂は稱號であつて弗ではない。任官は兩國に通有な又適當な報酬である。然るに王國には共和國と異なる一つの長所がある、卽ち稱號は公然と

とをグラントは十分に認めた。『本氣で言つて居るのか。我輩は全く氣が付かなんだ。驚いたな』と將軍は言つた。『勿論私は本氣で申上げるんです』『部下將校のうちてさへそろ〳〵批評が始まつて居ます』『なぜモット早くさう言つてくれないのか。我輩はこれから斷じて一滴も飲まないことにする』

彼は言行一致の人てある。後年余は屢々紐育てグラント一家と晩餐を共にしたが、唯の一度もグラント將軍が杯を手にしたのを見ない。不撓の意思は彼をして一旦決心したことを飽まて實行せしめたので余の經驗した限り稀有の例てある。一時の禁酒をする者はある。余の事業仲間て三年間禁酒した者が有名の話題になつたが、悲しい哉酒てふ舊敵は再び彼を襲うて彼は遂に打死をした。

グラントは大統領在職中任官或は行政行爲によつて金錢上の利益を占めたとの世評があつた、彼れの友人等は彼の家計困難の爲め常例の公式晩餐會を見合せる意嚮を發表する窮狀にあつたことを知つて居た。此晩餐會は一回八百弗を要したので俸給から支出するには餘りに巨額てあつた。大統領の俸給が二萬五千弗から五萬弗に增額されたことは彼をして第二期在職中幾分の貯蓄をなさし

軍は語つた。

將軍は全くその通り實行した。而して將軍の戰略を語る獨特の妙味はそこにある。晩年に將軍と親交を結んだことは余の特權である。氣取る態度の全くない人があるとすればグラントこそ其人であらう。リンカンすらも此點に於ては將軍に優りはしなかつた。グラントは悠楊沈着の人であつたがリンカンは常に潑剌として活動して居た。余はグラントが大言壯語をしたり又は威儀を繕ふのを見たことはなかつたが、彼が何時も寡默であるとの一般觀測は誤つて居る。彼は時として驚くほど快談する、又機を見ては話すことを好んだ。彼の語法は何時も簡單て要領を得て居る又事物の觀察は著しく銳敏てある。何も話すことがなければ何も話さない。彼は戰時に於ける部下の功績を推賞するに曾て倦怠の色がなかつたことを余は注目した。彼は慈父が愛兒等のことを語るが如く彼等のことを語つた。

傳ふる所によれば西部に於ては苦戰に陷つた頃グラント將軍は過度に飲酒し始めた。參謀長ローリンスは敢然として彼を諫めた。之が良友の行爲てあるこ

將軍は余が陸軍省に勤めたことと、陸軍卿スタントンに知遇を得たこと、又時局に關して多少の智識を有つて居たことなどを知つて居られたが、次の樣なことを余に言はれた時の余の驚きは想像に餘りある。『それて我輩は大統領とスタントンから東部へ行つて總司令官になつてくれと頼まれたが、我輩はそれを承諾したんだ。今から西部へ出掛けて必要な準備をしよよと思つて居るよ』『私もそんなことだらうとお察しいて居たのです』と余は言つた。『シャーマンを司令官に任じてやらうと思つてる』と將軍は言つた。(一)

(一)「カーネギー氏はケンヨンのスタントン大學に八萬弗を寄附し、一九〇六年四月二十六日此偉大なる陸軍卿に關し同大學に於て一場の演說を試みた。此演說は一九〇六年刊行スタントン記念日アンドルー・カーネギー演說として公表された。

『それは國民を驚かすてせう。トマス將軍が後任になるだらうとは一般の觀測だと私は思ひます』と余は言つた。『さう、我輩もそれは知つとるが、然し部下の人々中でもトマスが第一着にシャーマンこそ適任だと言ふだらうと我輩は信じとる。それには何の面倒もあるまいよ。實は軍の西端が可なり遠くまで敵を包圍しかけて居るから、我々の今なすべきことは少しく東端を進めることなんだ』と將

グラント將軍は余が華府を去るまで西部に居られたから余は華府滯在中に將軍と面會するの機會を得なかつたが、將軍は東部に移る必要な準備をする爲め華府へ往復の途次ピッツバーグに立寄られたので、余は往復共線路で將軍に會ひピッツバーグに案内して食を共にした。其頃はまだ食堂車はなかつた。將軍は高地位にある人としては最も平凡な容貌の人であつたと余は思ふ。一見して非凡の人と認めることはどうしても出來ない面相であつた。余は記憶して居る、陸軍卿スタントンが西部の諸軍隊を檢閲した時グラント將軍が部下と共に卿の乘つて居る汽車に這入つて來たので、卿は一々其人々の顏を見たが、將軍を見て卿は獨言した『サア、我等はどれがグラント將軍だか知らないが、アノ人こそはドウシテも將軍と思はれないといふ一人の人が居る』。トコロがそれが將軍であつた(これを書いて數年の後に讀んで見ると余はおかしくて耐らない。一度ならず余が將軍と見まちがひられたから將軍には災難な譯だ)

戰時のことて『戰略』だとか各將軍の作戰計畫だとか頻りに話頭に上つた。グラント將軍が斯る問題を無雜作に余の樣な者に話されたので余は面喰つた。尤も

大統領『よし、君に一任する』

カメロン『それてフォスター君(カメロン氏の同行者て余等の客てあつた人)を呼寄せてジャクソン決議案を捜し出させ、文句を目下の形勢に適する樣に修正して通過させて。ジャクソンの時と同樣の結果になつた。程經て僕が華府に行つて大統領の公接見に訪問すると、さしも廣い東室も人て溢れて居たが、僕はリンカンの樣に圖抜けて長身だから、大勢の上から僕を見付けて、半の兩脚宜敷といふ樣な白手套の兩手を擧げて、カメロン君、今日も二つ來たよ、二つさと言はれた。それはジャクソン・リンカン決議案を通過させた州が二つあつたと云ふのだ』

此逸事は政治生活の何たるを說明する好資料てあることは勿論てあるが、其外合衆國の大統領が二人共二十八年を隔てゝ同一の人を賴んて全く類似の場合に注意を求めて、而かも同一の方便を用ひて二人共候補を企て二人共第二期大統領に首尾よく當選したことは隨分珍らしい話てある。要するに成功の秘訣は『作戰計畫』の如何にあるとは政界の機微を說明したものてある。

大統領『カメロン君、第二期大統領候補として立つのが我輩の愛國的義務だとか、我國を救ひ得る人物は我等の外にないとか世間で言つて居るが、我輩も少し自惚氣味になつて居てよ。君の意見はドンなものか聞かせて貰ひたい』

カメロン『成程、それで一つ思出したが、二十八年前ジヤクソン大統領が私を呼寄せて丁度閣下の今のお話と同じお話をされました。私はニユーオルレアンスに居て其手紙を受取り十日間旅行して華府に着しました。そこで私の献策は某州議會に海上不穩の際水先案内は船を去るべからず云々の議案を出して通過させたら、甲から乙て各州之に倣ふだらうと云ふのでありました。ジヤクソン大統領が賛成されたから私はハリスバーグへ行つて決議案を作成し之を通過させました。案の如く之に倣うて、御承知の通りジヤクソン氏は第二期候補戰に勝利を獲られました』

大統領『成程、デハ君一つそれを遣つてくれまいか』

カメロン『いやそれはいけません。私は餘り閣下に昵近過ぎると思ひます。お望みとあれば友人にそれを遣らせませう』

等に比して一頭地を拔いて居た。民衆の喧囂は遂にリンカンをしてカメロンを更迭せしめたが、事の眞相を洞見し得た人々は各省が若しカメロン配下の陸軍省ほどに統率宜しきを得たならば全局から打算して慘事の大部分を避け得たであらうことを明かに知つて居た。

カメロンはロチエルと呼ばれることを得意として居たが、彼は情の人であつた。彼は九十歳の時余等を蘇國に訪ひ、余等の四頭馬車の前席に座して溪谷を通過するに際し、其壯觀に氣を奪はれて恭しく脫帽し露頭のまゝて通過した。車中の會話は、官職を求むる者は自ら努力して就任後其職責を辱かしめない樣に努力すべきもので極めて稀れなる場合を除く外官職があれば適才は自然に得られるといふが如き謬見に陷つてはならない事などに及び、順次リンカンの第二期候補戰談を持出した。ロチエル崇拜者の談は次の如くてある。

或日ペンシルヴアニヤ州ハリスバーグに近いカメロン家の鄉里に居るとリンカン大統領から急に會見を求める電報が來た。それて直ちに華府に行つて大統領に謁見した。兩者の會話は次の如くてある。

海軍の方も同じ原因は同じ結果を生じて居た。余は聞いたが、自らは事實の眞相を知る機會を得なかつた。戰爭の初期に於て海軍は左程重要でなかつた。重きをなしたものは陸軍であつた。各部の首腦者を新陳代謝させない限り敗戰は必然の數とのみ考へられた。而して此新陳代謝は一朝一夕に出來ることではない。重大任務を引受けた政府が必勝の廟議を定むるに躊躇逡巡の色あるを見て國民が我慢し切れなくなつたのは人情と云はざるを得ない。然るに余の不思議に感じたことは政府の各部に瀰漫した混沌の形勢から忽ち秩序が開展したことである。

余等の事務取扱に關しては一大便法が與へられた。陸軍卿カメロンは當時既に就任したスコツト氏に特權を與へて卿の部下大官等の遲々たる行動を省みず自己の必要と信ずることを決行することを許してくれた。此特權が容赦なく利用されて、戰爭の勃發當時から政府の鐵道電信部が常に重要任務を遂行したことは實に陸軍卿カメロンの寛仁なる後援に待つ所が多かつたのである。彼は當時精神旺盛を極め、問題の要領を迅速に捕捉する才能に於ては省內の各將軍や部長

彼に本問題の正解を獲させてから會議に臨ませる樣に取り計らつた。其手順を踏んだので翌日は萬事好都合に運んだ。

華盛頓府の混雜

其時華府一帶に涉れる混雜の光景は實際目擊しない者には到底想像が出來なかつた。余が初めて得た其光景の印象は筆紙の及ぶ所でない。時の總司令官スコット將軍を余が初めて見た時は將軍が事務所から馬車に乘るのに二人の助けを受けて漸く步道を横斷したほどの頽齡で身體のみか精神まで痲痺して居た。大共和國軍隊の組織如何は全く斯る時代遲れの老人に據るの外なかつたのである。監軍テーロル大將も稍スコット將軍と好一對であつた。余等は交通を開いたり、軍隊や軍需品などを輸送する時に此等の老衰漢や其他之に似たり寄つたりの不適任者と相談を遂げねばならなかつた。此等の人々は一人殘らず役に立つ年齡を通り越した杓子定規者流であつた。疾風迅雷の急を要する問題に此等の輩の裁決を待つて居ては到底時機を失ふの外はない。少くとも余の思出し得る限り何れの部門にも其首腦者として少壯有爲の人物は一人も居なかつた。打續いた太平に官界が化石したのである。

一八六一年メーソンとスライデルが英船トレントから拉取された時に之は英國の船舶避難權を侵害するものでは無からうかと此道に通曉せる人々は非常に憂慮した。余も之を憂へた一人であつた。捕虜を直ちに放還しなければ英米の開戰は必然なりと思はれた。本件討議の爲め內閣會議が開かれた時、陸軍卿カメロンは不在であつたので、スコット次官の出席を求められた。余は本件の決定如何によつて英國が開戰を決行することは疑ふ餘地のない所以を極力彼に了解せしめて、特に船舶が搜索免除たる主義を標榜する米國の立場から捕虜引渡說に左袒せられんことを力說した。然るにスコット氏は外國事情に暗い所から捕虜保留說に傾いて居たが內閣會議から歸つて余に話された所によれば、スウアードが余の言つた通りそんな事をすれば必ず戰爭になると內閣に警告したさうだ。リンカンも最初は捕虜保留說に傾いて居たが結局心機一轉してスウアードの方針に贊成することになつた。けれども內閣は翌朝カメロン其他の不在大官が出席するまで實行を延期することに決議した。スウアードはスコット氏に依賴して不引渡氣分になつて居たと豫期されたカメロンの歸着を待受けて彼を說得し

何等の感を動かさずに居た時の相貌は確かに最も平凡な人物としか見えないが、其情が動き叉談話を試むる場合には忽ち智力が其眼に閃き顏に輝く其程度は余が他の何人にも殆ど見ない異常のものであつた。彼の動作は天眞爛熳なるが故に完全であり、何人にも事務所の最年少給仕にすらも親切な言葉をかけられた。一切平等で一介の使者に對する人に對する注意は決して上下貴賤の別がない。彼の愛嬌は寧ろ容態振らない所にある。彼が人の心を得る秘訣は彼が用ひる言語の如何と云ふことより應接は國務卿スゥアードに對すると同樣に恭やしい。も寧ろ之を話すやり口であつた。余は彼が用ひた異樣な語法を當時注意して書取つておかなかつたことを時々思出して遺憾に堪へないが、普通の事を言ふにも彼は自己獨創の方法で話された。余はリンカン氏の如く總ての人に對し徹底的にアレほど自他の差別を撤去して平等を貴んだ偉人を見たことがない。宜なる哉國務卿ヘイ氏が『リンカン氏に取つては從僕なる者が無かつた。彼れは從僕を彼の伴侶として取り扱はれた』と評した言は彼は其一言一行に於て人間の平等を啓示した最も完全なる平民主義者であつたのである。

（ベーツ著、一九〇七年紐育版「電信事務に於けるリンカン」三十二頁）

余等の鐵道隊には生死不明の者もあつたが、翌朝の食事點呼には案外落伍者の少いことが明かになつたので他の支隊に比して慶賀すべき理由があつた。少數の車掌機關手等は舟を手に入れてポトマック河を渡つたが、隊の大部分は追來る敵の砲聲殷々として終夜天地を震撼したにも係はらず同地に踏み止まつた。翌朝余等の電信隊を點呼して見ると一人も缺けては居なかつた。

其後間もなく余は華府へ歸つてスコット大佐と共に陸軍省内に本據を据ゑた。余は鐵道並に電信部の主宰をして居たから、自然リンカン大統領やスウアード氏や陸軍卿カメロンなどに對面する機會を與へられた。折々此等の名士に親炙することがあつて、其れが爲に非常の興味を惹起した。リンカン氏は折々余等の事務所へ遣つて來て机の處に悠然として座を占め電報の返信を待つて居たり又或は單に何かの情報を獲たいと思つて居るらしいこともあつた。

此非凡なる人物の肖像はドレを見ても能く似て居る。彼の相貌は全く特異のものであつて何人が之を描寫しても肖た者を作らざるを得ない程てある。彼が

の不幸なブルラン戰があるまで滯在して居た。敗報が初めて來たときは信じられなかつたが、敗軍の證左歷々として疑ふべくもあらず、あらゆる機關車と車體全部とを繰出して戰線から敗兵を收容する必要が迫つて來た。當時の最も接近した停車場はバーグであつたから、余は其處へ出張して憐むべき負傷せる志願兵等を列車に詰めては出し詰めては出しゝて居ると、敵軍背後に迫るとの急報があつた。余等は遂にバーグ・ステーションの閉鎖を餘儀なくされ、電信技手と余とは終列車でアレキサンドリヤへ出發したが、同地へ着いて見ると各方面は人心恟々として居た。

註（一）『カーネギーが華盛頓に到着した時彼が第一の作業はアレキサレドリヤに渡船を設け又バルティモア及オハヨー鐵道線路を華盛頓の舊停車場から延長し、メリーランド・アヴエニユーに沿うてポトマック河に到り更に河を横斷させることであつたが、之は機關車其他の車輛を河向ふへ輸送してヴアジニヤに於て使用する目的であつた。ポトマック河横斷の長橋を作る必要があつたが（カーネギー及アール・エフ・モーレー指揮の下に華盛頓アレキサンドリヤ間の鐵道が僅々七日間に竣功した事を余は記憶する）カーネギー以下從業者は悉く晝夜兼行で此敏速の働きをしたのである』

重量列車の通過に差支なからしむることであつたが、之は數日を要する仕事であつた。バットラー將軍と數個聯隊とは余等より數日後に到着したので余等は將軍部下の全軍を華府に輸送することが出來た。

余は華府行列車の機關車に乘込んで用意周到に進行した。華府から程近い處に余は電線が杭の樣なもので地に縫付けてあるのを發見した。余は機關車を停めて、それを引放さうとして走り出たが、余は杭打ちにする前に電線が一方に引寄せてあつたことを注意しなかつた。放されると線がピンと撥上がつて余の顔をシタタカ打つた。余は倒れた、頬に負傷した。而して流血淋漓の狀態で其儘第一の軍隊と共に華府に乘込んだ、されば數日前ボルティモア市を通過の際負傷した一二の兵士を除いては余は國家防衛の爲に『我血を流した』第一人者たる名譽を擔ひ得る者である。余は余の爲に多大の利益を與へた國土の爲に幾分の功を立て得たことを光榮として南部への交通を開く爲に晝夜兼行の働きをした。是れ余の僞らざる告白である。

余は間もなく余の本據をヴアジニヤ州の（一）アレキサンドリヤに移して其處にか

道會社員でキッドの手套をはめた紳士を初めて見たが、男らしい男たらんと力んで居た余等の仲間から彼は嘲笑の的であつた。余はホームウッドへ移つて以來アディソン一家の感化を受けて總べて此等の點に於て大いに改善する所があつた。

第八章　南北戰爭時代

一八六一年に南北戰爭が勃發した爲め、當時運輸の主宰として陸軍次官に就任したスコット氏から召喚を受けて余は直ちに華盛頓に赴くことになつた。余の職務は政府の軍用鐵道電信を主宰し鐵道隊を組織する爲めスコット氏を補佐することであつた。之は戰爭の初期に於て最も重要なる職務の一であつた。

聯邦側のボルティモア通過聯隊は敵の攻擊に遭ひ、ボルティモア線とアンナポリス支線との間の鐵道線路は切斷されて華盛頓との交通が破壞されて居た。故に止むを得ず余は部下の一隊と共に費府でアンナポリス行の列車に便乘したが其處から華府行幹線に接續する支線があつた。余等の第一の務は此支線を修理して

る。アディソンはエディンバラ出身であつたから、一時カーライルが夫人の家庭教師であつた。夫人の令孃等は外國で教育を受け、佛、西、伊の三國語を英語同樣に流暢に話した。此家族との交際によつて余は初めて高尚な教育を受けた人々と余の樣な者との間に天地雲泥の相違あることを悟つた。けれども兩家の間に一滴蘇克蘭人種の血液が通つて居ることは何時もながら有力の關係であつた。

アディソン孃は假りに余が金剛石であつたとすれば其野性の金剛石を琢磨すべく努められた理想的友人であつた。孃は余の最も嚴しい批評家であるが故に最良の友人であつた。余は之が爲に余の言語に嚴格な注意を拂ひ又其頃非常の熱心を以て貪讀した古典文學にも注意する樣になつた。余は音調や動作などを溫和にすること、總べての人に丁寧にして禮儀を厚くすること、手短かに言へば擧措を改善することが實に大切の事柄であるといふことに氣が附いた。其時まで余は多分服裝に無頓着で、寧ろ無頓着を氣取つて居たのであらう。大きな重い靴、緩いカラー、全體に粗野の風采をするのが其頃西部の特色で余等の社會には男性的と考へられた。何てもかでもおメカシと名のつくものは輕蔑された。余は鐵

シーンとして一語も發する者がなかつた。暫くするとウヰルキンス夫人は肅然として『カーネギーさん、それは別の事ですよ』と言つた。

其時まで余の受けた最も貴重な贈物は次の樣な風に備へられた。其頃からウヰルキンス夫人は毛糸の襟卷を編み始めたが、編物の進行中一體あれを誰に遣るのかとの質問が度々余等の間に起つた。夫人に尋ねても女王然たる淑女は決して話さない、幾月も嚴として其秘密を保つて居たがクリスマス近くになつて仕事が終ると鄭重に包んで名刺に愛の滴る數語を書いてそれに入れ、娘に命じて其包物の表に余の宛名を書かせた。余はそれを紐育で受取つた。斯る淑女より贈られた此贈物――此貴い襟卷は折々親友等に見せることこそあれ、餘り使用はしない――を余は余の貴重品中の神聖なるものとして大切に保存して居る。

レイラアデイソン

余はピッバーグに住んで居る間に幸にアデイソン博士の令孃レイラ・アデイソンに邂逅したが、博士は其少し前に世を去られた。孃は有名な才媛であつた、余は直ぐに同家の人々と懇親を結んだが、之が爲に無量の利益を得た事を感謝して記錄する。之は高尙な敎育の利益を悉く備へた人々と交際を結んだ他の一例であ

して取つた態度は英國人が共和政體論者に對して取つた態度と同樣なりと認められて居た時代に於て、余は熱烈な自由解放主義者てあつた。ウヰルキンス一族は首要なる南部の諸家に緊密な關係があつて南部に傾いた强烈な民主黨員てあつた。ホームウッドで或機會にウヰルキンス家の客室に通ると家族等が最近に起つた恐ろしい出來事について激昂しつゝ話合つて居るのを發見した。ウヰルキンス夫人は余に、

『あなた如何お考てすか。ダラス(夫人の孫)の手紙によると私の孫がウエスト・ポイントの司令官の命令て無理に黑奴の次席に就かせられたと云ふことてすが、あなたはそんな樣な事をお聞きになつたことがあつて？不面目ぢやありませんか。黑奴などをウエスト・ポイントへ入れるとは不都合てすね』と

憤慨して居た。余は冷靜に答へた．

『アー奧さん。それより惡いことがありますよ。黑奴のうちには天國へすら入れられた者があるといひますよ』

一所にホームウッドの宏壯なる邸宅に住み、其邸宅は周圍の地方から見れば英國ならば男爵邸とも云ふを得べく、修養、文化、向上等あらゆる勢力の中心であつた。

余が此の如き社交上の地位を占めて居る家庭に親しく出入することが出來たのは眞に愉快なことであつた。ウヰルキンス孃が主要な役を演じた音樂會や謎の會や素人劇などは余に自己改善の好資料を提供した。判事自身は余が從來知り得た歷史的人物の第一人者であつた。談話の例證として『ジャクソン大統領が我輩にこんなことを言つた』とか『我輩がウエリントン侯爵にかう言つた』などの言葉が余に與へた印象を余は決して忘るゝことが出來ない。判事は壯年時代に(一八三四年)ジャクソン大統領の下に露國駐劄公使であつたから露帝に謁見の話などを面白く語られた。それを聽くと余は歷史其物に手を觸れて實驗した樣な氣分になつた。其家は余の爲に新らしい世界であつた、而して其家族との交際は余に余自身の精神と動作との改善を促がさせた强大の刺戟であつた。

ウヰルキンス一家と余との間に言葉にこそ露はさなかつたが斷乎たる反對意見の存して居つた唯一の問題は政治であつた。當時米國人が奴隷廢止論者に對

く毎に必ず直ちに何かしら研究する規則を自ら設けた。余は毎日何かしら新らしい事を學んで居ると感じて喜んで居た。

ヴァンデヴォルト家の兄弟ベンジャミンとジョンとに初めて會つたのは此處てあつた。後者は余の晩年に各方面の旅行伴侶であつた。『愛するヴァンデー』は『世界周遊』の親友たる觀がある。隣家のステュアート夫妻は日毎に親密になつて知己は遂に永久の親友に化した。余の快意とする一事はステュアート氏が其後『ヴァンデー』同樣余等と一所に實業界に乘出して共同提携者となつたことてある。

それはさうと余等の新家庭の利益のうち最も偉大なるものは西部ペンシルヴァニャの名族ウヰルキンス判事の一家と懇親を結んだことてある。判事は當時既に八十に近い高齡で、長身瘦軀容貌秀麗にして精神旺盛、風采優雅にして余が相識の特許を得た人々のうち最も驚くべき知識と閱歷との豐富なる偉丈夫てあつた。夫人は合衆國副大統領ヂョーヂ・ダブルユー・ダラスの娘で當代貴婦人の好典型として余の最も欽仰する所、余が知り又見たる限り最も美くしい最も愛嬌ある老淑女てあつた。其娘ミス、ウヰルキンスは其妹即ちソーンダース夫人及び子供等と

社の用を辨ずることが出來た。

こゝに新生活が始まつた。田舍の小徑や庭園が澤山あつた。其邊の住宅は何れも家の周圍に五乃至二十英町の地面がついて居た。ホームウッド住宅地は數百英町より成り、美しい森林や溪谷や流水があつた。余等の家にも庭があり、家の周圍に大分廣い地面があつた。斯くて母の生涯中最も愉快な年月が花や家禽や田舍生活の環境のうちに送られた。花に對する母の愛は一種の熱情であつた。母は花といへば惜しくて容易に摘取ることが出來ない。甚だしい例を擧ぐれば余が雜草を一本引拔いたら『靑いものぢやないか』と言つて余を咎められた。余は此性癖を母から遺傳して折々ボタンの穴に挿す花を探しに門まで步いても、惜しくなつて取らずに其まゝ外出することがあつた。

此田舍住ひの變化と共に新らしい知已が雲の如くに出來た。此地方の富家は多く此愉快な郊外に住宅を構へて居た。言はゞ貴族的地區であつた。此等大家の娛樂會に靑年管理局長たる余は招待された。靑年等は音樂を好んで夜の音樂會が盛んに催された。余は從來知らなかつた問題の討論を聽いたが、それ等を聽

夜勤隊を組織することになつた。けれども發車掛に夜間線路の使用を一任することに關して上役の承認を得ることは困難であつた。實際判然たる承認は得られなかつたが、余は自分の責任で夜間發車掛を任命した。之は多分米國に初めての實例であつたかと思ふが、尠くともペンシルヴァニヤ系鐵道では之が嚆矢であつた。

一八六〇年ピッツバーグに歸ると今の八丁目に當るハンコック街に居をトして一年餘も其處に住んで居た。其頃のピッツバーグの實況を描寫しても人々は之を馬鹿〳〵しい誇張の言として一笑に附せられやうが、全く煤烟が總てのものに浸込んで居た。梯子の手摺に手をかければ直ぐに黒くなる、顔でも手でも洗つて一時間とたゝないうちに元の通り汚くなる。煤は毛髪に附着し、皮膚を刺戟し、一時はアルテューナの山の空氣を回想して生活が多少情なく感ぜられた。余等は早速田舎住居の工夫をし始めたが、幸ひ當時會社の貨物掛をして居たディ・エー・ステユアート氏がホームウッドの自宅の隣に家が一軒あることを知らせてくれた。そこで直ぐ其家に引移つて電線を引くことにしたので、必要な場合には自宅から會

管理局長

中電信技術を學んで余と一所にピッツバーグへ歸つて來て余の書記になつた。

就任に續いた冬は未曾有の嚴寒であつた。線路の敷設が貧弱であり設備が不十分であつたので、輻輳する貨物の捌きには全然不適當であつた。軌條は巨石の上に敷設され、軌條を支へる爲には鑄造座鐵を使用したが、それなどは一夜のうちに四十七個も破損したことを余は覺えて居る。こんな有樣であるから鐵道事故が頻々と起つたことは怪しむに足らぬ。其頃の管理局長は夜中電報で列車を運轉したり、出張して破損したものを取除けたり、何もかも遣るべき者と思はれた。或時などは破損や故障が引切りなしに續發して八日間晝夜線路に働き通したことすらあつた。大事業の支配人として凡そ余位無分別の者はなかつたらう、多少責任觀念に氣が張つて居た爲でもあらうが、自身が疲勞を覺えないから部下の人々に過度の勞働をさせて其人々の忍耐力の制限を省みる心が十分に起らなかつたのである、余は何時でも眠ることが出來た。夜間半時間づゝ貨物列車内で暇々に眠れば十分であつた。

南北戰爭はペンシルヴァニヤ鐵道に非常な需要を喚起したので余は止むなく

千八百弗に增額するといふ諒解を以て就任される方が善いと思ふが、どうだね、それて滿足だらうか。』

『アーどうぞ金錢の事を言はないてください。』

と余は遮ぎつた。單に任命や俸給などの問題てはなかつた。其時其處て余の昇進が確定したのてある。余は一局支配の地位に就いてピッツバーグとアルテューナ間の諸命令に從來のT、A、S、(トマス・エー・スコットの略字)の代はりにA、C、(アンドルー・カーネギーの略字)を記名することになつたが、それだけても余には十分の面目てあつた。

ピッツバーグ管理局長の辭令は一八五九年十二月一日に發表されて、全家の移轉は直ちに準備された。此變化は歡喜を以て迎へられた、何故なれば假令アルテューナの住宅に幾多の長所があり、特に市外の愉快の所て幾分か地所のついた大きな家てあつたから田舍生活の樂が數々あつたにせよ、之を黄塵萬丈、煤烟天日を覆ふともいふべきピッツバーグの舊友團や交際場裡などに立戻る幸福に比較すれば百貫の衡に鳥の羽を一本のせるほどにも當らない。弟トムはアルテューナ在住

だ二十四歳になつたばかりだが、此場合に余の胸に浮んだ事は明日にも海峽艦隊の司令官になり得るとの自信を有つて居たと謂はれたジョン・ラッセル卿の平素の覺悟てあつた。ワレースでもブルースでも同然であらうなど丶考へつ丶余はスコット氏に出來ると思ふと確答した。氏は言はれた。

『よし、ポッツ君(當時のピッツバーグ局長)は費府運輸局長に轉ずる筈になつて居るから、僕は其後任に君を社長に推薦したのだ。俸給は幾ら位が君に相當と思ふか』

余はムッとして答へた。

『俸給、俸給なんか何とも思つて居やしません。私は俸給を望みません。私の望んで居るのは其地位てす。あなたの前任地ピッツバーグ局へ引返すだけが十分の光榮てす。俸給などはどうぞ御自由に極めてください、今貰つて居るより多くなさるには及びません。』

それは一ケ月六十五弗てあつた。スコット氏は更に話を進めた。

『君の知つて居る通り僕は彼處に居る時分年俸千五百弗てあつたが、ポッツ君は今千八百弗だ。僕の考ては君が先づ千五百弗から始めて追々功果の擧つた所て

するのか、それとも新總長の下にアルテユーナに踏止まるのか、それを考へると心配て堪まらなかつた。スコット氏と別れるすら無上の苦痛てあるのに、氏に代る新總長に事へるなどは到底堪へられないと思つた。余から見れば太陽は氏の頭上に昇つて又沒したかの觀があつた。氏によるの外余自身の昇進があるべしとは決して余の心に浮かばない考てあつた。

スコット氏はフイラデルフイヤで社長に會見して歸つてから事務所に接續して居る自宅の居室に余を呼んで、自分が費府に引移ることに決定したと話された。それで後繼者はエノク、リウイス局長であるなどと話が段々余を如何するかと云ふ肝心の點に進みかけたから、余は非常の興味を以て聽いて居た。すると最後に『そこで君のことだが、ピッツバーグ管理の任に當ることは君出來ると思ふかね』と言はれた。

余はどんな任にも當り得る年齢に達したと信じて居た。何でも遣つて出來ないことはあるまいと自分では心得て居たが、他人が(況んやスコット氏が)余を今提議された樣な地位に適任と思つてくれるとは夢にも想像して居なかつた。余はま

昇進

あつた。孃と余とは好伴侶で午後になると折々一緒に馬車に乘つて森の中を運動した。此親交は多年に亘つたが、一九〇六年中孃から寄せられた手紙を再讀して益々余の孃に負ふ所が多いことを感じた。孃は余よりも大した年長者ではなかつたが、何時もズッと年長者に見えた。確かに孃は余より成熟して居て姉さんの役を勤めるには十分であつた。其頃余は孃を完全な貴婦人として崇拜して居た。（然るに悲しい哉晩年になつて孃と余とは全く緣の遠い道を取ることになつた。其後孃は他に嫁して母となり、其娘はサッセキス侯に嫁したので娘と共に其晩年の大部分を海外に送られた（一九〇九年七月十九日余等夫婦は余の舊時の姉と見た此親友が四月の末に良人を失つて今は妹と娘と三人で巴里に住んで居らるゝことを發見した。三人共に皆健康で幸福であつた。實に愉快であつた。青年時代の眞の友に代はるべき者は世の中にない。）

スコット氏は約三年間アルテユーナに在職すると其人物に相當した昇進の沙汰があつた。一八五九年氏は會社の副社長に就任してフィラデルフィヤに赴任することになつた。そこで余がどうなるかは容易ならぬ問題であつた。氏に隨行

母の肩に手をかけたまゝて懇願した『お母さん、あなたは私とトムとの爲に何もかもしてくだされ、私達に取つて一切合切の役を勤めてくだされたが、今度こそは私に何かさせてくださ い。互に協力しようぢやありませんか、互に一番善いと思ふことを何時も工夫しようぢやありませんか。あなたも貴婦人として御立ちになる時節が來ました、そして其うちには御自分の馬車にお乘りになりますよ。今の處あの女中に少し手傳はせてくださ い。トムも私もさうしたいのです。』

余の至誠は遂に母を動かした、母はソロ／＼余等と一所に外出して近隣を訪問することになつた。母には、威容や作法などを學ぶ必要は無かつた。母にはそれが天性てあつた。教育、智識、良能、温柔などに於て母に匹儔する者は稀有てあつた。余は『稀有』よりも寧ろ『絶無』といふべきてあると思つて『絶無』と書いて見たが後に『稀有』と書き直した。それても余の個人的意見としては『絶無』の方を取る。

余のアルテユーナ生活はスコット氏の姪て氏の家事取締をして居たりベカ・スチユアート孃によりて一層愉快にせられた。孃は余に取つて申分の無い姉さんてあつたが、スコット氏がフイラデルフイヤ又は其他へ出張した時などは特にさうて

し、父と母とは彼等に取つて一切合切て、第三者の其間に入り來るを許さない。父が教師たり伴侶たり相談役たり、又母が子守やお針や家庭教師や先生や伴侶や女傑や聖徒などを一身に兼備する家庭に人と成る子供は、富家の子供が到底與り知ることの出來ない家督を相續するものである、

　愛に眼の暗んだ母には見えまいが時節が到來すれば成人した息子が聖徒と崇める母を擁して柔和な接吻を捧げ、何等かの方法で母の助けになることをさせてくだされば幸ひと思ふと事情を打明けて頼むことになる。世間に出て人に接し事に當れば今までの事を少し變へて見たくなることもある。若い息子等には愉快て堪らない生活の形式も幾分變更の必要が起り、家も友人等の來訪に適する設備を必要とするなどの説明を試みる。特に奴隷同樣に働いてくれた母もこれからは樂な生活に這入つて今までよりも多く讀み多く訪問し親友を接待し――一口に言へば貴婦人として適當な地位に上つてもらはねばならぬなどと感ずる。

　勿論この變更は母に取つて中々辛い事てはあつたが、結局其必要を認められたのは多少此時初めて長男が出世しかけて居る者と感得された爲てあらう。余は

からでもあらうが母の最も嫌忌する所であつた。母は子供の爲に食事を調へ用を辨じ衣服の洗濯や繕ひから寢臺の始末や、家の掃除まで、一切一人で遣つて居られた。誰か敢て此等の特權寧ろ母の領分を奪はんとするか。それにしても女中を使はねばならぬ羽目になつた。一人來て又何度も變つたが之が爲に水入らずの家庭に溢れた純眞な幸福は大部分破壞された。母の愛の勞働に較べると他人の奉仕を受けることは眞に詰らない。滅多に顏も見ない親みのない料理人が調理した大袈裟な料理を金で買つた手で給事させて食べるのは如何にも殺風景で之を獻身的精神の表示また證據たる母の手料理に較べると遙に趣味を缺いて居る。

余の受けた幾多の惠福のうち特に感謝しなければならぬことは幼少時代に子守や家庭敎師などが余の伴侶でなかつたといふことである。貧者の子供が特に家庭關係に最も溫い情味を持ち、之に最も密接な粘着を表する特色を發揮して、世間が過つて幸運と稱する人々よりも遙に强い孝心を持つ樣になるのは決して驚くに足らない。彼等貧兒は其感じ易い幼年時代を兩親の間斷なき愛の裡に經過

れまいかと言つた。今も覺えて居るが六呎三四吋もある大の男が其大きな腕で余を抱き締めて、

『エー、勿論貸して上げる。大丈夫だよアンデー』と言つた。

爰に余は第一回の證文を書いて相違なく之を銀行家に渡した。一青年の進路としては將に得意の瞬間であつた。寢臺車は一大成功であつた、其每月の收益は月賦拂込と匹敵した。余が最初の金儲として相應の額を收めたのは此財源からであつた（一九〇九年七月十九日の今日此一項を再讀すると他に嫁したロイド氏の令孃が余に對する其父の深い愛情を最近の手紙に書いてよこされたので余は實に愉快でたまらない）。

母と弟とが到着後、余のアルテューナ生活に一の重要な變化を來たしたことは水入らずの家庭に一人の奉公人を入れる必要を認めたことである。家庭に他人を入れることは母の非常に不本意とする所であつたが結局同意を與へられた。從來母は子供の爲に總ての役を務め、總ての事をして居られたので、それが母の生命であつたから、他人を家庭に引入れて自由にされるなぞは女性に特有な嫉妬心

之が現今文明の要具として知られて居る寢臺車の發明者たる有名なテイ・ウッドラッフであつた。余は此問題を重要のものと考へたからウッドラッフに對して場合によれば君にアルテユーナへ來て貰ふことになるかも知れぬ、兎に角余が歸つたら直ちにスコット氏に其事を提議すると約束した。余は其寢臺車の件がどうも氣になつて耐らない、何とかしてスコット氏に余の意見を採用させたいと思つて頻りにアルテユーナへ歸りたくなつた。歸つて其事を話したら氏は余が機を捕へるに神速であると言はれた。氏は之には至極贊成で其特許權者に電報を打ちなさいと余に命じた。ウッドラッフ氏は直ちに來て建造出來次第第二車を線路に置く契約をした。契約が濟むと彼は余に新事業の共同經營を求めて八分の一の權利を余に提供したことは余に取つて晴天の霹靂であつた。

余は資金の拂込は何とか都合が出來るだらうと信じて早速此相談に應じた。二車の代金は引渡後月賦て仕拂ふとの約束であつた。第一回の拂込期日が來ると余の割前二百十七弗半であつた。余は大膽にも同地方銀行家ロイド氏に金の調達を相談することに決心した。そこで事件の內容を説明して金を貸してはく

小さい名もない記憶せられない親切と仁愛との行爲である』

余が後から考へてアルテューナでスコット氏と共に過ごした二年間に起つた最大事件とも思ふことは我が鐵道會社を相手に提起した訴訟に於て余が主要證人として出廷したことてあつた。當時の掛判事は余が初めて客になつた主人公で俊才の聞えある大佐ストークスて、審問はグリーンスバーグで行はれた。

原告が余の召喚を請求する虞があつたから、大佐は事件の延期を希望してスコット氏に出來るだけ速に余を州外に去らせる樣に勸告した。さうして之が余にオハヨーのクレストリンで鐵道に勤めて居た余の親友ミラーとウキルソンとに久振て面會する好機會を與へた愉快な旅行となつた。途中後方の車の端の席に腰をかけて線路を眺めて居ると農夫らしい男が余に近寄つて來た。男は手に小さな青い手提を携へて居た。制動手から余がペンシルヴァニャ鐵道會社の社員だと聞いたと言つて、自己紹介をしながら、夜行用として自分が發明した車體の模型を余に見せたいとて寢臺車の斷面を示す小さな模型を手提から出した。

恐怖が來た、罷業は危機一髪の所で喰留めることが出來た。

余は是迄此鍛冶工の樣な例に屢々遭遇したが、下級の人に與へた些細の好意や親切の一言などが思ひも寄らぬ偉大な報いを齎らすことは往々あるものである。親切な行爲は決して無駄にならない。今日ですら余は折々自分こそ全く忘れて居るが何か些細な世話をしてやつた人々に邂逅することがある、殊に南北戰爭時代華盛頓で政府の鐵道電信を管理して居た際などは戰線で負傷した兵士の父を戰地へ通してやつたり、遺骸を引取らせたり、其他それに似寄つた世話をしたことなどがあつた爲に其を覺えて居る人々から思ひ掛ない禮を言はれたりする。余はこんな些細のことの爲に余の生涯中で最も愉快な出來事を經驗する場合を回想して感謝に滿たされて居る。斯る行爲の特質はそれが全く私心のないことで、其報は世話になる人の身分の低きに比例して氣持の善いものである。貧しい勞働者にしてやる親切は報い得る資力を備へて居る百萬長者にしてやるよりも幾倍の價値がある。ウォーヅウォースの詩は人生の眞相を穿つて居る。

『善人の生涯の最良部分は

『私は貴君と一所に居る所を見咎められてはならないが、一度貴君からお世話になつた身の上であるから何か御恩返しが出來たら屹度しようと決心したのです。私は曾てピッツバーグの事務所へお尋ねして鍛冶職の仕事をさせてくださいとお頼みしたものです。其時貴君はピッツバーグには今の處仕事はないがアルテユーナなら多分あるだらうから一寸待つなら電報で問合はせてやると仰しやつた。貴君はそれだけの手数を厭はないで私の履歴を調べたりパスをくれたりして此處へ送つてくださいました。私は大した仕事にありつきました。妻も子供も此處にをります、今までこんな工面の能い暮しをした事は一度もありません。それで今度は貴君のお爲になるお話を一つしたいんです』

余が耳を傾けて居ると彼は工場員が次の月曜日を期して罷業を實行せんとの目的を以て連判帳にセッセと記名して居ると語つた。時は失ふべからず、余は翌朝スコット氏に話すと氏は直ちに印刷した掲示を工場に貼出して、罷業連判帳に署名した者を全部罷免すること、賃銀は事務所へ出頭すれば渡すことなどを公告した。其うちに記名者の名簿が余等の手に這入つたので此事實をも公表した。

の求めらるゝまゝに大きな寢室に氏と一緒に寢起きすることゝなつた。氏は始終余を手近におきたいと思つて居たらしい。

罷業は日に增し險惡になつた。余は記憶する、一夜呼び起こされて貨物列車從業員がミッフリンで列車から退散したとの報告を受けた。それが爲に線路は閉塞して一切の交通が中止になつたとあつたが、スコット氏は熟睡して居た。過度の勞働と心配とで疲れ切つて居た所を起すのは氣の毒と思つたが、氏は眼を醒したから余は自分が行つて處置しませうかと問うた。氏は半眠半醒で宜い加減に承知した樣なことを言はれた。それで余は事務所へ行つて氏の代理として代表者等と問題を論議し翌日アルテューナで事情を調査することを約束したが、終に首尾よく復業させることが出來た。

列車從業員が反抗的氣分を示したのみならず、工場從業員までが着々罷業黨に加盟しつゝあつたのである。此情報は余が不思議な因緣で聞込むことが出來たのである、或夜余が暗い道を步いて歸宅の途に就て居ると、一人の男が余の跡をつけて來た、軈かて其男は近付いて余に囁やいた。

第七章　ペンシルヴアニヤ鐵道の管理

スコット氏は一八五六年ロムバート氏の後任としてペンシルヴアニヤ鐵道管理總長に昇任した。氏は當時二十三歲の余をピッツバーグよりアルテユーナに連れて行つた。斯くて余がピッツバーグの交際場裡から撤退することゝなつたのは自分に取つて忍びがたい痛恨事であつたが、余の業務は何事があつても瞬時も其進行を停むべきでなかつたので。母も堪へがたい思ひをして居られたが此點には滿足を表された。のみならず、スコット氏の如き眞の良友であり且つ指導者である所の人の處置に從ふと云ふことは當然余の採るべき道であつた。

スコット氏の管理總長昇任は其周圍に幾分の嫉妬を惹起した。且つ其就任早々罷業が突發して聊か狼狽の體であつた。少し前にピッツバーグで愛妻に死なれて寂しい日を送つて居た同氏は新本據のアルテユーナでは知人はなし余を除いては他に話相手とするものもなかつたらしい。余は幾週間も氏と鐵道旅館に同宿して居たが、氏は其うちに家を持つて子供をピッツバーグから呼寄せた。余は氏

が次の室に居た夫人を呼んだ聲とを聽いて居る樣な心地がする。彼は夫人に向つて言つた。ォィ！ナンシーナンシー、此青二才の蘇國人の言草を聞け、彼奴等は六週間以内に余の如き人々を絞殺すると言つてるぞ。』

其頃は妙な事があつたもので、其後幾年も經ない内に此ストークス氏が華盛頓て余に依頼して同氏を志願兵隊の少佐に任命される樣に盡力して呉れと言つて來た。其頃余は陸軍省に居て政府の爲に軍用鐵道や電信などの管理を手傳つて居た。彼は其任官に成功して其れ以來ストークス少佐で通ることになつたが、聯邦の爲に戰爭する北部の權利に疑念を抱いた人が自ら正義の爲に劍を拔く事になつた譯である。米國人等は最初のうちは其憲法上の權利を論議して居たが、國旗に對して火蓋を切ると形勢が忽ち一變した。電光石火の勢で一切の事物が火炎となつた――所謂紙の憲法も火中に蹂躪された。聯邦と國旗、之が全國民の顧慮する所でそれさへあれば十分と考へられた。憲法は由來一個の國旗を擁護することを目的としたものでインガーソル大佐の聲明した樣に『米大陸には二個の國旗を吹き流すに足る程の氣流がなかつた。』

理石にはこんな銘が彫刻してあつた。

『談論し得ざる者は愚者なり
之を努めざる者は自大狂なり
之を敢てせざる者は奴隷なり』

此崇高な文字は余の血を湧かしめ、余をして覺えず『他日、他日、僕も圖書室を作るぞ(之は前途の希望であつた)。而して此文字をこの通りに煖爐飾に刻りつけてやるぞ』と獨語せしめた。果然今日はスキボで之が實現した。

數年後に余は再び日曜日を此のストークス邸に送つたが之また記念すべき日であつた。其頃余はペンシルヴアニヤ鐵道ピッツバーグ管理局長の職に就いて居た。南部の諸州は既に北部より離反して居た。余は國旗擁護に滿腔の熱情を捧げて居た。然るにストークス氏は民主黨の名士として北部が聯邦維持の爲に暴力に訴へる權利のないことを論爭した、彼は感情に奔つた主張をしたから余は遂に堪へきれなくなつて絶叫した『ストークス君、僕等は六週間以内に君の樣な人々を絞殺することになると思ふ』と。余は今此事を書きながら彼れの笑ひ聲と彼れ

である。電信技手としての余は當時ストークス氏なる人からスコット氏宛に一通の電報が到達したのを知つて居た、其電文の意味はストークス氏がスコット氏に對して右「ジアーナル」誌上の投書の作者が何人であるかをリッドル氏に尋ねて貰い度いといふ依頼であつた。余はリッドル氏が其作者を知らないから之には返事が出來まいと信じてゐたが、同時に若しスコット氏がリッドル氏の所へ態々行つて原稿を見られたら一目で看破されやしないかとも心配した。其れ故に余は赤裸々にスコット氏に向つて其筆者は自分であると打開けた。氏は疑はしげに、其朝誌上てアノ論文を讀んで、之は一體誰が書いたのかと思つたと言はれた。氏の疑ひ深い眼は余を看過しなかつた、其頃からそろ〳〵ペンは余の一武器となり始めた。さうして右ストークス氏からの日曜招待は其後間もなく來たので、余の此訪問は自己の生涯の上に燦爛たる光彩を添うべき出來事中の一となつた。それ以來同氏と余とは親友となつた。輪奐の美を極めたストークス氏の邸宅には余の感を動かすものがあつたが、就中獨特の異彩を放つて見えたものは圖書室に於ける大理石の煖爐飾てあつた。弓形の中央に書物が一冊開けてあつて其大

余が生れてから初めて他人の家に泊つたのはペンシルヴァニャ鐵道會社の顧問たるグリーンスバーグのストークス氏が日曜一日遊ぶやうにと其田舍の壯麗な邸宅へ招いて呉れた時てあつた。余は氏のやうな立派な學者の話相手になれる譯てはないから、氏が余の如き者を呼んて呉れたのは變だと思つた。所が斯る光榮を受けた理由は余が『ピッツバーグ・ジャーナル』誌に投書した爲てあつた。余は二十歳未滿の頃てすら新聞雜誌に駄作を投じて居たが、蓋し新聞記者になることが其志望の一てあつた。ホレース・グリーレーと『トリビューン』とが人生成功の極として余の理想てあつた。余が『トリビューン』を買收しようと思へば容易く出來る時節が後年到來したが其時は既に眞珠が其光を失つて居た。我々の空中樓閣は仕々晩年になつてから手が屆くやうになるが其頃になると大概は舊時の魅力を失つて居る。

匿名の投書編輯者の注意を惹く

余の投書はペンシルヴァニャ鐵道會社に對する市の態度を論じたものてあつた。『匿名て投書をしたのだが、其頃社主兼編輯主任てあつたバート・エム・リッドル氏が『ジァーナル』誌上の目立つた欄内に之を掲げられたのを發見して余は驚いたの

金をして投資の機を窺ひ、協同投資を企て様とした。而して數年の後に零砕の資本を出し合つて之を共同事業に宛て一致協力の下に經營した。

其頃迄余は交際範圍もまだ廣がらず、貨物掛フランシスカス夫人位が大層親切にして呉れて、時々ピッツバーグの自宅に遊びに來いと言つて呉れたのが關の山であつた。夫人は余がスコット氏宛の電報を配達する爲め三丁目の家で初めて玄關の案内鈴を鳴らした時の話を折々持出した。夫人は這入りなさいよと言はれたが、余は恥かしげに斷つたので余の羞かみに打勝つ爲に夫人は色々と機嫌を取られた。夫人は余を御馳走に招かうとして幾年となく努められたが余はどうしても應じなかつた。余は晩年になるまで他人の家を訪問することを氣恥かしく感じた、スコット氏は折々氏の旅宿に來て一所に食事をする樣に勸められた。勿論斯かる機會は余に取つては大事であつた。余の思ひ出す限りアルテユーナのロムバート氏邸を除いてはフランシスカス氏の家が余の訪問した最初の大家であつた。余の眼には重もなる市街の家は玄關さへあれば皆當世風の立派な邸宅に見えた。

金の卵を産む鵞鳥

の上に置いてあつて『アンドルー・カーネギー・エスクイヤ』とジョン・ハンコック流に上書きをしてある。『エスクイヤ』てふ紳士然たる宛名の書束を受取つたのは始めてなので此手紙は少年等と余とを無暗と笑はせた。さうして封筒の片隅にはアダムス・エキスプレス會社の圓形の印が押捺してあつた。余は開封した。中には紐育ゴールド・エキスチエンジ銀行の拾弗小切手が一枚封入してあつた丈けで外に何も無い。余の一生忘れ難いと思ふのはあの小切手とジョン・ハンコック流筆蹟の記名『會計ジエー・シー・バブコック』の文字であつた。資本が産み出す收入卽ち額の汗に關係のない收入として余の獲たものは之が抑もの初めてあつた。余は思はず聲を揚げて『なんて嬉れしいだらう、金の卵を産む鵞鳥がこゝに居るよ』と叫んだ。

日曜日の午後は森の中で遊ぶのが余等仲間の習慣であつた。余は初めての小切手を仕舞つておいて、ウッズランに近い所で見付けた氣に入りの森の樹の下に座つて居た時それを出して見せた。一同は膽を潰すほど驚いた。誰しも余がそんな投資が出來ようとは夢にも思つて居なかつた。其後余等は互に一生懸命貯

氏はそれならアダムス・エキスプレス株を十株買へると言はれたが其株はウヰルキンスバーグの驛長レーノルド氏の所有で賣物に出て居たのである。勿論其晩余は家長たる母に話したが、母は長い思案もせずにそれなら一つ工夫があると言はれた。母の工夫が失敗に終つた例はない。余等は丁度家屋の代金五百弗を拂ひ終つた所なので母は此家屋を擔保に金を借りる方法があると考へられた。

母は翌朝汽船でイースト・リヴアプールへ出掛け夜中上陸して自身の弟に頼まれたら直ぐに金が出來た。彼は其頃まで小さな町であつたイースト・リヴアプールに於ける知名な在住者で治安判事の職にあり、農家から投資用金を澤山預つて居た。そこで母は家屋を擔保にして五百弗を借りて來たから余はそれをスコット氏に渡し、氏は速かに余の待ちに待つた十株を手に入れて呉れた。所が思掛なく又其上に割增金百弗拂ふ必要が起つたが、スコット氏は親切に何時でも都合の好い時に拂つても能いと言つて呉れたから勿論何でも無いことであつた。

此は余の最初の投資であつた。其頃は世が善かつたので月拂の配當金は當今よりは多額で、アダムス・エキスプレスは毎月配當をした。或朝白い封筒が余の机

聖犯すべからざる印象を殘した。余は必要な助力を受ける價値ある人が人生行路の危機に臨んだ場合には必ず他より助力を受くることとなるものであると云ふ敎理を堅く信じて居る。世には立派な天性を備へた人が澤山ある——卽ち助ける價値があると認められた人々に助力の手を延ばして之を助けることに甘んずるのみならず、どうか人を助けたいと願つて居る男女が澤山ある。原則として人に賴らず自ら助くるの志を示す者は他人の助力を受けることについて恐れる必要はない。

第一回の投資

父に別れて以來、家事經營上余の責任が愈〻重くなつて來た。母は引續いて靴の裁縫を、トムはセツセと學校へ余はスコツト氏と共に鐵道會社に勤めて居た。恰も此時福の神が余等の玄關に立つた。スコツト氏は余に對して若し五百弗持つて居るなら投資の途を採つて遣つてもよいが、どうだと尋ねられた。所が余の資本は漸く五百仙に手が屆いたか屆かない位で五十弗の投資も出來ない實況であつた。然し余は余の指導者たる偉人と財政關係を結ぶの好機會を逸したくはなかつた。それて大膽にそれだけなら何とか工面が出來ると答へた。スコツト

た。

爰に余等の米國生活初期の一美談がある。余等の小さなスウイデンボルグ協會の主腦會員はデヴイツド・マクカンドレス氏であつた。彼は余の父や母などに多少注意して交際したが、日曜に教會で月並の挨拶をする位で別に親密にならなかつたと記憶する。けれども叔母エートケンとは懇意の間柄で、叔母の所へ使者をよこして此不幸の場合に母が金錢上の助力を要するならば喜んで必要丈け用立てると言つた。彼は兼て女傑として余の母のことを人から聞いて居たので、それが此申出をする十分の動機となつた。

人は助力を受ける必要が無い場合、又は好意に報いることとの出來さうな境遇に居る時に、却つて幾多助力の提供を受けるが、純粋無私の仁心から出た一行爲を爰に記録することは誠に喜ばしい。長男は僅かに世に出たばかり、次男は十歳を越えたばかりで、良人に別れた憐むべき蘇國婦人の不幸がマクカンドレス氏の心を動かして、用意周到な方法で其不幸を和げんことを申出られたのである。母は折角の好意ではあつたが之を斷つた。然し言ふまでもなく此人は余等の胸中に神

(一)『余は能く覺えて居るが月給表を書いてスコット氏の百二十五弗まで來ると之丈けの金をどうするであらうと思つた。余は其頃三十五弗取つて居た』(一九〇七年三月二十八日米國陸軍電信隊の親睦會に於けるアンドルー・カーネギーの演說)

私達が織物工場の二階に住むことの出來たのは畢竟親切な叔母エートケンの助力に依つたので、今度こそ元叔母のものであつた家にお歸りくださいと言ふことの出來る場合になつた。それと同樣に四室ある家は叔父ホーガンが死なれたので余等が住んだ後アルテューナへ移ることになつた時、叔母ホーガンに元通り返すことが出來た。買入金のうち百弗を現金で拂つたが、全額は七百弗と覺えて居る。それからの苦鬪は半季每に利息を拂つて元金を出來る丈け多額に濟崩す算段であつた。余等は久しからずして負債を消却し、愈〻不動產の所有者となつたが、其事が完成せぬ內に家庭に於ける最初の一大悲劇が起つた、卽ち一八五五年十月二日に起つた父の逝去である。幸ひに殘つた三人は人生の義務に追はれて居た。憂愁と義務とは互に鬪つたが余等は働かなければならなかつた。父の病氣に關する費用は稼ぎ出さなければならないので余等には大した餘裕はなかつ

最初の一大悲劇

以て自ら慰め、同時に現世の義務が何人にもあることと、天國其物は乃ち我等のうちにあることとを決して忘れてはならぬ。それから又余等の間に一つの格言となつて居たことは、未來は希望に屬するものであるから其存在を望むとか、望むべき筈のものであるとかいふ考は惡くはないが、未來が無いと明言する人は其れが有ると明言する人と同樣に愚人であるといふことであつた。兎に角『天國は我が家』と言はず、『我家は天國』であるとは余等の標語であつた。

余が以上縷述して來た時代は家運が稍や發展しようとして居た頃であつて、余の月給三十五弗は(一)スコット氏の好意で余から願ひもしないうちに四十弗に增額されて居た。每月從業員の給料を支拂ふのが余の職務の一部であつた。月給は銀行小切手で拂ふことになつて居たが、余は自分の月給を必ず二十弗の金貨二枚で受取つて居た。此金貨は余に取つて世界の最高美術品の樣に見えた。家庭會議の決定に基いて余等は敷地と其家屋二個とを買入れることにしたが、其一軒の方には余等一家が住み、今一軒の方は四室あつて其時まで叔父ホーガン夫婦が住んで居たが間もなく他へ移轉した。

實てあつた。我々青年は宗教其物に對しては眞實に敬虔てあつたが神學や教理に關しては兎角腕白小僧たるの傾きがあつた。

ジョン・フィップスが落馬して死んだことは余等親友團の最初の一大損失てあつた。余等一同は無量の感慨に滿たされたが、余自身は當時次の如き考を抱いて私かに心を慰めて居たやうに記憶する、『ジョンは言はば生れ故鄕の英國へ歸へつた樣なものだ。我々は誰でも直ぐに彼の跡を追ふのだ、そして一所に何時までも生きるのだ』と。斯かる信念に關しては其頃一點の疑も抱かなかつた。而して之は何も强ひて心に押付けた望みてはなく、極めて確實に抱いて居た希望てあつた煩悶のうちにも斯かる逃れ場を有ち得る人は實に幸福てある。我々は皆プラトンの忠告を容れて永生の望を放棄してはならぬ『此望は高尙にして其報は大なれば常に魔力の如くに我等を誘導す。』大いに然りてある。最愛の友人と現世に終生相樂むことの出來る一大奇跡に比ぶれば來世に於て彼等と共に限りなく生きることは別に大した不思議てはなからう。双方とも同樣に限りある人智には不可解の秘義てある。故に我等はプラトンの勸告に從つて『魔力の如く』永遠の望を

即ち此種の問題についてカーライルが嘗て煩悶したことが余等を動して今や彼の決心に倣ふべき時季が到來したといふことてある。彼は『信じ難いものなら斷然排斥するが宜敷い』と言つた。我等に自由を與へるものは唯眞理のみてある、眞理即ち全き眞理こそ我等の求むべきものてある。

勿論一旦問題となつたからには其研究は止められない、舊式の敎理は片端から討論して未開時代の謬想として一つ〳〵評決した。誰が首唱てあつたか余は忘れたが第二の格言が論題になつた。之は余等が幾度も高調したもので『容赦する神は人間の最も高尙なる製作品だらう』といふのてあつた。余等は證明し盡された眞理として人は文明の進步につれて其時代相應な神を創造するといふこと、又人類が向上改善すれば不可知者に關する其觀念も亦從つて改善することを承認した。其後余等は孰れも神學に餘り熱中しなくなつたことは確かてある。幸に余等はマクミラン夫人の交際場裡から除外されなかつた。さりながら余等が斷乎としてミラーの說に左袒し、よしやそれが爲に夫人と絕交になるか或はモット惡い結果になるとも主張を變へないと決心したことは特筆大書に値ひすべき事

ミラーが聽聞した最も强硬な豫定説の説敎は余等に神學上の問題を討論させる動機となつて中々下火になりさうもなかつた。ミラーの配下は何れも頑强なメソディストでミラーは敎理などを碌々學んで居なかつた。豫定の敎理には嬰兒神罰説を含んで居たが、結局或者は生れながら榮光を獲ることに豫定され他の者は其反對の運命に陷ると云ふので、之は奇怪千萬の説だとミラーは思つた。余の聞いて驚いたことは説敎の後で其話しをするとてミラーがマクミラン氏の許に赴いて左の如き言を浮かと口走つたことであつた。

『マクミラン先生、先生のお考が正しいとすれば先生の神は全く惡魔ですね。』

此捨臺詞を後に出て來たが牧師先生は眼を丸くして驚いて居るうちに相手はモウ居なかつた。之が原因となつて其後暫くは毎日曜日の午後懇談會を開くことになつた。それは眞理かどうか、ミラーの聲明の結末は一體どうなるものか余等はマクミラン夫人の客として歡迎されないことにならうか。牧師だけなら多分なくても我慢が出來たかもしれぬが夫人の愉快な交際場裡から追出されることは余等として一人も好んでは居なかつた。此處に唯一つ明かな點があつた。

最良手段となるものである。

余等の親友團たる半ダスの青年は智識と修養を積むに從つて自然に現世來世の生死に關する奥義問題に接觸して眞劍に研究を試みる氣分になつたのは止むを得ない趨勢であつた。余等は皆善良にして正直、自尊心ある兩親に育てられて、何れかの宗派に屬した信者であつた。ピッツバーグの錚々たる長老教會牧師の一人たるマクミラン氏の夫人の感化で余等は其教會の社交場裡に惹付けられた。

一九一二年七月十六日蘇國の別莊で余が此稿を讀んで居ると、八十歳の高齢に達したマクミラン夫人が倫敦から送られた手紙が眼の前にある。讀んで見ると二人の令孃は前週倫敦で大學教授と結婚し、甲は英國に留まり乙は招聘に應じてボストンへ赴いたが双方とも名士だと書いてある。斯くして國語を同うする人種は互に相接近するのである。マクミラン氏は舊學派に屬する善良な嚴正カルヴイン教徒で、愛嬌豐かな夫人は天成の青年指導者であつた。余等は何處よりも夫人の家庭に於ける團欒を樂み其家庭の集會を愉快に感じた。之が爲め自然余等の仲間の或者は夫人の教會に出席する樣になつた。

再審問の拒絕

た。スコット氏は歸任の後勿論事件の報告を聽取して取調べた上に相當の處理をすると言出した。余は遣り過ぎたなと心付いたが、一旦遣つて仕舞つたものであるから余は一切終結したと言ひ切つた。余自身て事件を調査し責任者を處分したと言つた。中にはスコット氏に上告して再審問を要求した者もあつたが、何と迫られても余は再審問に到底同意することが出來ないと頑張つた。察する所此機微の消息についてはスコット氏も言語よりは寧ろ表情によつて余の感想を諒解し、事は其儘に終つた。

氏は余の處置が酷に過ぎたと心配して居られた樣てあつたが恐らくさうてあつたかも知れない。數年の後余自身管理局長の職に就いてから、一時の休職を命じた當時の人達に對して常に胸中一點の憐憫を感じた。余の此の處女的審判に於ける行動に就て余は自己の本心の叱責を禁じ得なかつた。新參の裁判官は動もすれば少し反身になつて直立し過ぎる傾きがある。溫和の威力といふ事を學ぶには經驗に限る。必要の場合に限り輕微にしてしかも確乎たる處分が最も有効てある。嚴罰は必要てない、尠くとも初犯者に對しては酌量容赦が往々にして

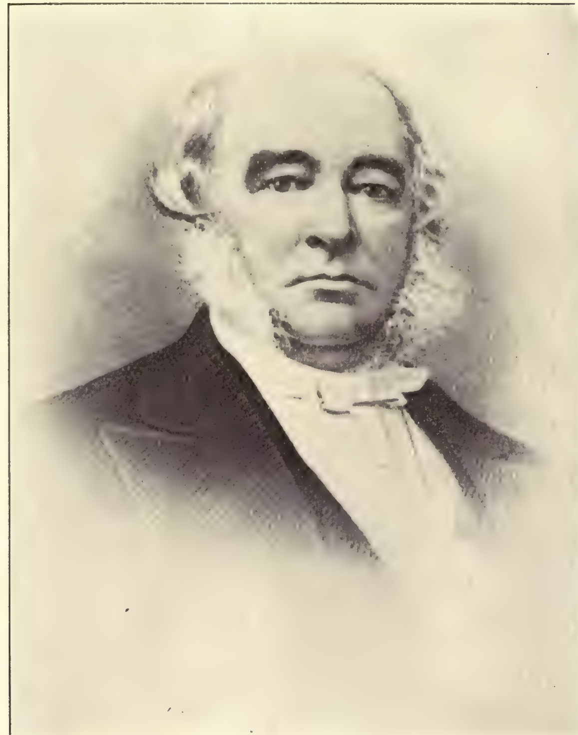
「スコットのアンデー」

氣質の結果に外ならぬと聞いた。彼れがスコット氏の事務所に立寄つて電信機械の所に來られた時『スコットのアンデー』として余に挨拶されたには一驚を喫した。けれども後で聞けば總裁は余の列車進行に關する手柄話を聞いて居られたさうである。人生の戰は青年が高級役員と親しく接觸する時に旣に半ば勝利を獲るのである、各少年の大目的は自己本務の範圍外に何事かを成遂げるにある、卽ち上の人の注意を惹くに足るだけのことを何か一つ試みることである。

此後暫くしてスコット氏は一二週間旅行したいからといつて部内鐵道の管理を余に任せる許可をロムバート氏に求められた。二十歲になるやならずの青年に此大任を負はせるとは隨分大膽の男であつたが、許可は與へられた。顧つても滅多に來ない人生の好機會は今現に來たのである。スコット氏の不在中はバラス列車乘員の赦しがたい怠慢から原因した一事故の外、萬事平穩であつた。だがこんな事故の起る筈がないのに起つたことは余に取つて苦悶であり又癪であつた。そこで余は職責上爲すべきことを十分に遂行しようと決心して審判を開き關係者を審問して重罪犯人を斷然解任し、其他災害に關係ある二人に休職を命じ



トマス・エー・スコット



ジョン・エドガー・トムソン

『否』

『彼奴が若し僕の許可を待たずに臨機應變の處置を取つて僕の名義で管內の各列車を動さなかつたら僕が責任を問はれる所であつた』

『彼はうまく遣りましたか』とフランシスカスは問うた。

『エー、勿論うまくさ』

之を聞いて余は滿足した。又之に由つて秘訣を覺えたから自らの處作に確信が附いて來た。スコット氏も其後は此仕事を余に任せて氏自身では列車命令を發することが殆ど無くなつた。

其頃余の見渡す限り最大人物として眼に映じた人はペンシルヴァニヤ鐵道總裁ジョン・エドガー・トムソン氏であつたが、後に余等の設立した鋼鐵軌條工場は此人の名に因んで命名された。余の知る限りグラント將軍を除いては此トムソン氏が最も深沈寡默の人であつた。但しグラント將軍は親い友人と打ち解けた時には中々多辯であつたが、總裁は定期にピッツバーグを巡視された時なども眼中人を見ないかの如く無言で步き廻はられた。後に余は之が全くトムソン氏の羞かむ

ない。氏は一秒時余の顔を見詰めたが、余には氏の顔を見る勇氣がなかつた。どうなることか分からなかつた。氏は一言も言はずに今までの成行を一々注意して、再調査が濟んでもまだ何にも言はなかつた。暫くして余の机から自分の机の方へ歩いて行つたきりで事はそれで終つた。氏は余のしたことを是認することを恐れては居たが敢て咎めもしなかつた。うまく行つたのならそれで宜しい、うまく行かなかつたら責任は余に歸する筈。それが當然と認められたが、其後數日間は毎朝時間正しく出勤されることになつた。

勿論誰にも話をしないし、列車從業員中にはスコット氏が自身命令を出したのではないことを知つた者は一人もなかつた。余は今後類似の事件が起つても許可のない限り決してあの朝の様な仕打を繰返へすまいとまで思ひ詰めたほどであつて、自分のしたことについて何となく煩悶して居ると、其頃ピッツバーグの貨物課主任を勤めて居たフランシスカス氏からこんな話を聞いた。あの記念すべき朝の翌晩になつてスコット氏が彼に言ふには

『君あの僕の所の小さな銀髮の蘇國少年がしたことを知つて居るか』

スコット氏の疑惧

てある。余は斯ういふ場合に處すべき道を知つて居たからそれを遣り初めた。スコット氏の名義で命令を出した。各列車を動かした、電信機械の音に一々注意して腰掛けて居た、列車を驛から驛へと運んだ、餘分の警戒までした、結局スコット氏が出勤された時には一切のことは圓滑に運んだ。氏は列車延着の事情を聞いて居たので先づ開口一番

「サア、どうなつて居るか」

と言ひながらツカツカと余の傍へ來て、鉛筆を握つて命令を書き出した。次は余の番だ、何とか言はなければならぬ、恐る〳〵

「スコットさん、貴殿を探しましたが見付かりませんから、今朝早く此通りの命令を貴殿の名義で出しました」

と言つた。すると氏の問は斯うてあつた

「皆うまく行つて居るか。東部急行は何處にある」

余は電文を示して線路上の各列車の位置即ち貨物、バラス列車其他を説明して各列車からの返信又各列車の最後通過報告までも見せた。一つもまちがつて居

營の全部はまだ極めて幼稚であつた、從業員の訓練が十分でなかつたから、電報命令の便法は危險であつた。線路の破損や崩壞が陸續起つて除害作業監督の爲めスコット氏は毎晩の樣に出張する必要があつた。それでも止むなく朝には時々缺勤することがあつた。

臨機應變の處置

或朝余が出勤すると東部方面に重大事故が起つて西部行の急行旅客列車が遲延し、東部行の旅客列車が曲り目毎に旗手を出して進行して居ることを發見した。兩方面の貨物列車は全部側線に立往生して居た。スコット氏はどうしたか見付からない。遂に余は一つ飛込んで責任を負ひ『列車命令』を出して事態を緩和する冒險手段を試みたくなつた。『自滅か、ウエストミンスター寺院に埋葬される名譽か』とは電光石火の如く浮んだ思想であつた。失策したらばそれこそ解雇か、恥晒しか、まかりちがへば刑事犯に問はれることを余は承知して居た。然し又他の一面には終夜の外勤で疲れ切つて居る貨物列車從業者等を内に入れてやることが出來ると思つた。余は萬事をうまく進行させることが確かに出來ると信じた。なぜならば余にはスコット氏に代つて時々列車命令を電送した經驗があるから

學校になつた。余の實驗によれば青年女子は技術者として青年男子よりも信賴が出來る。女子が男子の職業に侵入して來た各方面に於て電信技術ほど女子に適した者は、余の知る限りに無いと思ふ。

スコット氏は上役として誰にでも最も愉快なる人物の一人てあつたから余は氏に懷しく親んだ。余に取つては彼れは偉人てあつた、さうして余は余の少壯時代の英雄崇拜的精神を遺憾なく氏に傾倒した。余はペンシルヴァニャ大鐵道會社の社長たる者は必ず此人だらうと想像し始めたが、果して彼は後に其地位を占めた。彼れの配下に在つて余は漸次余の擔任事務の範圍外の仕事にまで手を出す樣になつたが、余が鐵道業務に嶄然頭角を現はすに至つた原因は思はざる一の出來事が突發した爲てあつた。其事は今尙ほ歷然として余の記憶に殘つてゐる。

線路は單線で、電報で列車を運轉する正規の習慣はなかつたが、電報命令は往々必要てあつた。ペンシルヴァニャ系、否實に當時の鐵道は何系でも管理局長以外は何人にも列車命令を與へる權能を許して居なかつたと余は思ふ。其頃鐵道經

技術者として青年女子の採用

法律家の審判、半ばは政治家の事業であつて眞に正鵠を得たものである。各方面の劃一を謀ることが必要である。結婚、離婚、破產、鐵道管理、會社制裁其他の各方面は或程度まで一主腦部の下に統一さるべきである(數年前に書いた此稿を一九〇七年七月の今日再讀して見ると豫言の樣だ。)此事は現下の白熱的問題である。

此後間もなく鐵道會社は自社の電信線を建設したので之に技術者を配給する必要が出來た。その多くはピッツバーグの局で敎育された者を採用した。電信業務は驚くべき速度で着々增進した。何ほど努力しても十分速かに需要に應ずることは六ケしかつた。電信局の新設が迫つて來た、余は余の配達仲間であつた『デーヴィ』マクヮゴーなどを一八五九年三月十一日に電信課長に任じてやつたが、聞く所によれば青年子女を米國で鐵道の電信技手其他に初めて採用した者は此『デーヴィ』と余とであるとの世評があるさうだ。何れにしても余等は盛んに青年女子を各事務所に採用して之を敎育し必要に應じて本務に就かさせたものである。第一回の登用者の一人は余の從妹ミス・マリヤ・ホーガンであつた。彼女はピッツバーグ貨物課の電信技手であつて其配下に着々試補を登用して孃の事務所は一の

歡迎した。余は市中を歩いて居る名士に注目して元老院議員ウキルソンやヘールや其他の人物などを欽慕の餘り茫然として見詰めて居た。それより少し前に余は『紐育週刊トリビユーン』の爲め鐵道業者の百人倶樂部なるものを組織して、折々大膽にも短い論文を書いて、記者ホーレス・グリーレー氏に送つたが、同氏は其頃此重要問題に對する民衆の運動を催すべく盛んに努力せられた人である。

最初の論文投書

當時自由主義の爲に萬丈の氣焔を吐きつゝあつた機關紙に初めて余の論文が現はれた時は確かに余の生涯の一回轉期を劃したる如き感がした。余は其號の『トリビユーン』紙を多年の間保存した。今日から回顧すると米大陸から此咀ふべき奴隷制度を除去する爲に拂つに代價卽ち南北戰爭の如きは實に非常に高價なものであつたことを思うて遺憾に堪へないが、然し撤廢を要するものは奴隷制度ばかりてはなかつた。州權に重きを置き過ぎた散漫な聯邦組織の如きも必然一箇の堅實にして且つ强力なるべき中央政府の成立を妨げるか、或は少くとも其成立を長引かせるものであらう。南方思想の傾向は遠心的であつたが、今日は求心的て法權は大審院の下に悉く中央に引付けられつゝある。該法院の裁判は半ばは

したらうか、若し此失策が都合能く挽回されなかつたならば今まで人々より受けたる余の信用は忽ち地に墮ちて余は一朝にして成功の秘訣を失つたてあらう。それ以來余は青年が一二の恐ろしい失策をしたからといつて餘り酷な叱責を加へることは宜しくないと思つた。余は人の失策を見る毎にホリデースバーグから數哩の河岸に一旦失はれた包みを發見した時の事を回想して、あれが萬一無くなつたら余の進路に何んな異變が起つたらうかと常に反復熟慮した。余は今日でもあの落した場所を能く覺えて居る。而して其後あの線路を通る毎にアリアリと薄茶色の包みが河岸に横つて居るのを眼に浮べないことはなかつたが、然かも誰れやらが

『君大丈夫だ、神樣が君を守つて居たのだ、けれどもモウアンな粗忽をしてはいけないよ』

と云つて余を警戒するやうな感じがした。

少壯時代に余は頑强な非奴隸論者になつて、一八五六年二月二十二日ピッツバーグ共和黨の第一回國民大會には丁年未滿て選擧權はなかつたが熱狂を以て之を

こんな大失態を演じて身の破滅を招いた事實を糊塗することは無用の業てあつた。月給簿と小切手とを取りに遣られて『私の名譽に掛けても握つて』居るべき其包を落してしまふとは何たる不面目てあらう。余は機關手を呼んで右の事情を述べ其處から數哩の近くに振り落されたものに違ひないと話した。彼が果して機關車を逆行させてそれを探す勞を取つて呉れるかどうかと思つて居ると、有難いことには、彼はさうしてくれた。余は線路を氣を付けて居ると、大きな流れの水面から數尺しかない所の河岸に現に其包が横はつて居るてはないか、余は殆ど自分の眼を信じない程てあつたが、飛下りてそれを握つた。其れから後ちは言ふまでもなくピッツバーグに着いてヤレ安心といふまてシッカリ其包みを握つて離さなかつた。余の不覺を知つて居るのは此機關手と火夫ばかりてあるが、余は此秘密を洩らさない樣にと呉れ〳〵も頼んだのてある。

余が思ひ切つて此秘密を打開けて話したのは餘ほど後になつてからてある。假りにあの包みがホンの數尺先きの方に落ちて水に押流されてもしたらばどうてあらう、この一寸した不注意の結果を拭ひ去る爲に果して其後幾年の忠勤を要

があつた。其故に氏が二言三言余に何か言はれた後『君今夜宅へ來てお茶を一緒に飲みなさい』と言へ添へられた時のロバートと余との驚きは想像に餘る程であつた。余は口籠りながらどうやら承知した旨を述べて、心中大恐縮で約束の時を待つて居た。余は今に至るまで此招待を曾つて受けた招待中の最も光榮あるものと考へて居る。ロムバート夫人は非常に親切であつたが、良人の紹介辭は『之がスコットさんのアンデーである』と云ふ言ひ方で余はスコット氏に屬する者として認められたことを大いに光榮と思つた。

此旅行中アハヤ余の進路に一大頓挫を來さんとする事件が偶發した。翌朝余は月給簿と小切手とを携帶してピッツバーグへの歸途に就いたが、其包みが衣嚢へ入れるには大き過ぎたので胴衣の下へ大丈夫に差入れて出發した。當時余は鐵道業に非常の熱狂者てあつたから、機關車に乘る方が善いと頑張つて州鐵道の山上接合點ホリデースバークまで乘つて來た。非常に荒つぽい線路で或る地點まで來た時不安の思ひをして月給簿の包を探つて見ると、コハソモ如何に列車の動搖て振落されて居た。余はそれを無くしたのてある。

ロムバート氏とスコット氏

て居る。彼等は一人殘ならず余に最も親切であつたといふことを余は爰に一言しておかねばならぬ。多くは今も存命で折々便りを聞いたりして余は親愛の情を以て彼等を見る。スコット氏が自己專用の事務所を設けて氏と余とがそれを使用することになるや否や右の事情は一變した。

すると間もなくスコット氏は余をアルテューナへ遣つて月給簿と小切手を取寄せることになつた。其時はアレゲニー山越の鐵道がまだ完成して居ないので余は其傾斜面を越えて行く必要があつたが、それが爲め此旅行は余に取つて忘れ難たいものになつた。當時アルテューナは會社で建てた少數の家ばかりで、商店などは建築中であつたから現今の堂々たる大都會の面影は全く見られなかつた。余が米國鐵道界の大人物即ち管理總長ロムバート氏に初對面の場所は其處であつた。其時分の同氏の書記は余の友人ロバート・ピトケーンであつたが、彼は余の斡旋によつて鐵道業務に就職したのであつた。そこで『デイヴイ』と『ボッブ』(ロバート)と『アンデー』の三人は共にペンシルヴァニヤ鐵道會社に就職して居たのである。

ロムバート氏はスコット氏とは頗る異つた人物で、打解け難い寧ろ剛毅不屈の趣

余の環境は依然として爽快純潔で、其處には何等粗暴奸惡の侵入を許さゞるのみならず、余の舊友團は自己の改善と尊敬すべき市民たることの爲に懸命の努力を惜まざる立派な青年ばかりてあつたから余は此等の人々と共に別世界に住んで居たのてある。余は余の天性と幼時の敎育とに緣のない一切のものを嫌忌しつゝ生涯の此方面を切拔けた。粗暴な人々に接觸した經驗は蘇國の方言なる『唾棄』即ち煙草を嚙んだり吸つたり又瀆神的言辭を弄したり、無法な言葉を用ひたりすることを唾棄する氣分になるといふ利益を多分余に與へたと思ふが、幸ひにも此氣分は終生余に伴うて居た。

余はスコット氏の事務所へ出入した人々が必ずしも墮落した惡性の人物てあつたと推定したくはない。瀆神的言辭を濫りに用ひる習慣や下劣の言語や煙草を嚙んだり吸つたり又嗅いだりする癖などは今日よりも一層流行して餘り咎められないものてあつた。鐵道は其頃未だ物珍らしいもので多くは粗暴な人物が川船業から轉入して來た。けれども其うちには立派な青年が多くあつて彼等は今日に至るまで非常に尊敬すべき市民たるの實を示し且つ責任ある地位を占め

第六章　鐵道業務

今や余は電信局の技術室から廣い世界へ歩み出したのであるが、最初は其變化が如何にも不愉快であつた。十八回の誕辰を迎へたばかりの余は純潔善良以外の何事をも殆ど知らなかつたが、その位の年齢の少年にして斯くまで純良の空氣のうちに育てられた者はあるまいと思ふ。余は生れてから其頃まで惡い言葉を使つた覺えもなく又聞くことも滅多になく、下劣のことは全く知らずに育つた。幸ひにして余は始終善き人々に接觸して育てられたのであつた。

然るに今や忽ち粗野粗暴の仲間に打込まれた。といふ譯けは余が仕事をする事務所といふても其一部は臨時に貨物車掌や轉轍手や火夫などの詰所に充てられたからである。これ等の雜輩は管理局長スコット氏や余など、同様に事務室に自由に出入して勝手にそれを利用して居た。之は實に余が從來居なれた世界とは全く類の異なつた世界であつた。余は決して愉快を感じなかつた。余は必然的に初めて善惡を識る樹の果を食べることになつた。けれども家庭に於ける

ット氏が余を書記兼電信技手として同氏の許に働かせることは出來ないかと彼れに尋ねられたといふ話をして余を驚かした。然し其青年はスコット氏の問に答へて、

『それは出來ません。あの男は今技術員です』と言つたと余に告げた。余はそれを聞いてすぐに言つた

『早まつて返事しちやいけない。行けないことはない。余は唯の事務所生活を止めて廣い世界へ出て見たい。どうぞスコットさんにさう言つて下さい』

其結果余はスコット氏の書記兼技手として月給三十五弗で一八五三年二月一日から就職した。

月給二十五弗から三十五弗に一躍昇進するなどは余に取つて振古未聞の例であつた。ペンシルヴァニヤ鐵道會社は公衆電線を一時スコット氏の事務所に引入れて當時建設中の會社電信線竣成まで一般公衆事務に差支なき限り該線の隨時使用を許された。

には涙が浮んでそれを拭つて居られた。此數語は其後幾年間となく余の耳に響いて余の心を溫めた。余等父子は互に胸のうちを洞見して居た。蘇國男子の無口さよ。感最も大なれば語最も少なし。其處に神聖なる深さがある、之を攪亂することは冒瀆てある。沈默は多言よりも雄辯てある。父は人から最も愛せられた人物の一人て、交友には極めて愛敬せられて居た、宗敎心は極めて深く、宗派的ても神學的てもなかつたが、俗界を超越して全然天上界の人たる觀があつた。父は無口てこそあれ、溫情の權化てあつた。悲い哉恰も余等が悠々自適の生活を父にさせることが出來初めた頃に空しく逝去された。

余はピッツバーグに歸ると間もなくトマス・エー・スコットといふ非凡の人物に懇親を結んだが、この人などは確かに鐵道事業に於ける『天才』と稱して差支なからうと思ふ。彼はペンシルヴァニヤ鐵道のピッツバーグ方面管理局長としてピ市に來たのてある。彼とアルテューナ管理總長ロンバート氏との間には頻々電報往復の必要があつた。之が爲にスコット氏は夜中電信局へ來て折々余に其電信を取扱はせたこともあつた。或日余の知れるスコット氏配下の一人が余に對し、スコ

ングとシンシンナティに行かれることを聞いたので余は舟を待つて居て、夕方遲く舟が來たから父に會ひに行つた。船賃が高いからとて父が一等を斷念して甲板客て川を下る決心をされたことを發見した時の余の感慨は實に無量であつた。あれだけの立派な人物があんな風に旅行しなければならないのかと余は憤慨した。しかし余が父に向つて次の如く云うた時は自ら慰む所があつた。

『でもお父さん、お母さんとあなたとを近いうちに御自分の馬車に乘せてあげますよ』

父は平素はにかんて、無口て、敏感て、息子等が餘り付け上がるのを恐れてか滅多に賞めない方てあつた(蘇國氣質)が、感極はまれば自制力を失つた。ちやうど此場合はそんな風て其時余の手を握りながら父の示した表情は今ても眼について之を忘れることが出來ない。而して父は徐かに囁かられた。

『アンドラや、わしはお前を名譽に思うて居るぞ』

父の聲は震へた、父はこれだけ言つたのを自ら恥づるやうに見えた。夜の別れの挨拶をして早く局へ歸れと言はれた時の父を余が懷かしげに見て居ると其眼

との出來たのは確かに『ウエブスター協會』の經驗に基いて居る。其頃から今日に至るまで演說の規則として余の守つた二ヶ條は演壇に立つたら極めて寛ろいだ氣分になつて聽衆と座談する態度を取り決して相手を氣にしないこと、又他人の眞似をせずに天眞爛漫を主として語り、成るべくは辯舌を揮ふといふ考を避けることとてある。

余は遂に印字の方法を全然離れて音響一方の技術員になつた。此技術に熟達することが當時珍しかつたので態々其妙技を見物の爲局へ來訪する人があつた。之がため余は大變な人氣役者になつて、大洪水の爲スチユベンヴイルとホヰーリング間二十五哩の電信交通が悉く破壞された際、余はスチユベンヴイルへ派遣されて當時東部と西部との往復電報を全部受取つて一二時間毎に川舟に積んでホヰーリングまで輸送する任務を托せられた。歸舟にも每回電報を乘せて來たが余はそれを東部に電送するのであつた、斯くて一週間餘りそんな風にしてピッツバーグ經由西部東部間の電信交通は立派に繼續して居た。

一スチユベンヴイルに滯在中父が自分て織つた食卓布を販賣の目的てホヰーリ

なか〳〵價値があつたものである。斯くして一家の基礎は漸次に堅固になり將來千萬長者になるべき曙光は既に輝き始めたかの觀があつた。

其外余に著しき感化を與へたのは仲間の數人と共に『ウエブスター』文學協會に入會したことで、五人の理事は早くも指名されて居た。余等は特選團を以て自任し堅固に團結して居た。之は余等總てに取つて甚だ有益なものであつた。尤も其以前に余等は小さな討論倶樂部を組織してフィップ氏の父の室に集會して居たが、晝の間は其室に少數の日雇靴工が仕事をして居た。トム・ミラーは近頃覺束ない記憶を辿つて、余が『法官は民間より選擧すべきや』といふ問題で約一時間半論じたと言つたが多分ミラーの記憶違ひらしい。『ウエブスター』は當時市内一流の倶樂部であつて其會員たることは余等の誇であつた。余等は靴工の室で單に其準備をして居たのであつた。

此の如き倶樂部に入會するほど青年の利益になることは他にあるまいと信ずる。余の讀書の大部分は次回の討論に關係ある材料を選ぶ爲であつたが、それが爲に余の思想は益々明瞭確實になり。後年余が演壇に立つて沈着の氣分を持つ

其頃の電線は働きが貧弱で暴風の時などは大部分想像て電文を作る必要があつた。余の想像力は非凡だといはれて居たが、一語や二語拔けて居たからとて發信人に問返したり時間を空費する手數を省いて、想像で空所を埋めることは余の得意な藝當てあつた。之は外國新聞材料の取扱なら別に危險な遣方ではなかつた、といふのはよしや大膽な技術員が自由裁量を用ひ過ぎたとしても本人を大した窮地に陷いれる性質のものではないからである。外國特に英國の事情に關する余の智識が可なり廣くなつたので初めの一字か二字さへ誤らなければ其他は想像て大丈夫綴ることが出來た。

ピッツバーグの各新聞社は最初一人づゝ記者を電信局に出して新聞電報を寫取らせる慣例てあつたが、後には諸新聞合同して一人だけを其任に當らせることになつた。其人の提案で新聞電報の來る毎に幾通か複寫することが出來る筈てあるから余が彼れの爲に各五通づゝ複寫して呉れゝば一週間一弗の割合て報酬を出すといふことになつた。之が余の新聞業に携はる第一步で無論報酬は極めて輕少てあつたが、それがために余の月收は三十弗になつた、而して當時の一弗は

易に看取された。一ヶ月も余と一所に居ないうちに彼は電信はどうして打つのか敎へてくれと余に尋ねた。敎へて見ると敏捷な門人であることが判つた』（一八七九年一八七九年紐育刊行ジェームス・スディーリード著　米國の電信業）（リードはダムフアリンの近所に生れたが、四十年後カーネギーの推薦てダムフアリン駐在の米國領事に就任した）。

余は當時十七歲て既に小僧奉公を終つた譯てある。余は最早や一人前の腕を具へた技術員て一日の勞働が正に一弗の稼をする身の上となつた。

電信局の技術室は青年の修養に屈強な學校てある。此處て彼は筆と紙とを與へられて作文と發明との稽古をさせられる。余の英國や歐洲大陸などの事情に關する詳細な智識は忽ち余に好資料を提供した。智識は必ず何かの役に立つものてある。之は何時ても效力が表はれる。外國の新聞材料は其頃レース岬から電送されて居たが、間斷なく來る『舶載新聞』を電信で受けるのが局員の最も注目すべき業務の一てあつた。余は電信事務の此方面を何よりも好んて居たので何時しか默許の姿て之を余に一任されることになつた。



ヘンリー・フィツプス

暴風の夜遅くまで居殘つて連結の切れないやうに注意して居た。余は大膽にも電鍵に餘り近い所に腰掛けて居たので、思はず腰を外して倒れた。紫電一閃アハヤ其處で萬事窮する處であつた。其後雷雨の場合には殊更注意する事が余の習慣となつた。余はグリーンスバーグで上役の滿足する樣に此一小業務を首尾よく勤め上げてピッツバーグに歸つて來たが、他の少年等の眼には余が後光を以て輝いて居る樣に見えたに違ひない。昇進の機會は忽ち來た、新たに技術員が入用になつたのでブルックス氏は其頃ペンシルヴアニヤ鐵道の總管理人であつて後に余の親友になつたジエームス・デイー・リードに發信して余を其次席技術員に推薦した。此リードも蘇國人の好典型であつた。ルイヴイルからの返電にリード氏はブルック氏さへ余を適任と認めれば『アンデー』の昇任を喜んで承認するとあつた。其結果余の月給大枚二十五弗の電信技術員たるべく初めての任命辭令を受けた、之は余に取つては大した財産と思はれた。余が配達の地位に昇進したのは全くブルックス氏とリード氏とのお蔭である。

『余は此少年の表情が氣に入つた、小さいながら精神の横溢して居ることが容

ジョセフ・テーラーが二週間休暇を取りたいから誰か代りの者を送つてくれとブルックス氏に依賴して來た。氏は余を呼んで其代理が出來ると思ふかと尋ねられたから、余は卽座に出來ると答へた。

『では、試みに君を遣ることにする』と氏は言はれた。

余は郵便馬車に便乘して出掛けたが如何にも愉快な旅行であつた。乘合客は有名な狀師デヴィッド・ブルースと其妹とであつたが其先祖は蘇國人である。余には之が初旅で田舍の景色を見るのもそれが初めてゞあつた。グリーンスバーグのホテルは余の旅客として飮食した最初の場所であつたが其料理は素敵に美味であつた樣に覺えて居る。それは一八五二年のことで、丁度ペンシルヴァニア鐵道の建設工事進行中であつたから、グリーンスバーグ附近に深い掘下げや築堤が出來て居て、折々自分も朝早く散步がてらに工事の見物をしたが、其後間もなく該鐵道會社に就職することゝなるのが自分の運命であらうとは夢にも思はなかつた。目下の技師代理の仕事は余が電信業務に就いて以來初めての責任ある地位であつたから、必要の場合に間を缺かすことがあつてはならぬと心配の餘り或

學んだ。

何が幸ひになるか分らぬもので、其頃局に勤めて居た技術員は寧ろ怠惰の方で、余に其仕事をさせることを結局喜んで居た。其頃の電信は紙箋に受けてそれを技術員が寫字生に讀み聞かせて書取らせる方法であつたが、音響を讀んで電報を耳で受ける新式を發明した人が西部にあるとの風評が傳はつて來た。それで余も此新式を試みることになつた。マクレアンと云ふ局の技術員が其式に熟達したので其人の成功が余を勵ました。余が容易く新式を學び得たことは自分ながら驚くほどてあつた。或日技術員の不在中電報を受けて見たかつたが、寫字生をして居た老人は余の僭越が癪にさはつたと見えて、配達小僧の爲に『寫す』のはイヤだと言出した。そこで余は紙箋を外して、鉛筆と紙とを取つて耳で電報を受け始めた。其時の老人の驚いた樣子は今も決して忘れない。老人は余に鉛筆と帳面とを返してくれと言つたが、其後余と此のコートネー・ヒューズ老人とは何事の葛藤も起さず、彼は余の爲の親友となり又忠實なる寫字生となつた。

此事の後間もなくピッツバーグから三十哩離れたグリーンスバーグの技術員

小僧等は毎朝技術室を掃除することになつて居たので、技手の出勤前に電信器械の取扱を練習する機會があつた。之は余の爲めの一轉機であつた。余はぢきに電鍵を弄して余と同じやうな志を持つて居る他局の少年等と話をすることを覺えた。誰でも何か一つ學ぶならば其智識を利用する機會は長く待たないうちに必ず到來するものである。

或朝ピッツバーグの電鈴が強く鳴るのを聞いた。誰か頻りに通信したい者があるのだと鑑定したから、思ひ切つて返事すべく其通信を受けた。それはフィラデルヒヤからピッツバーグへ『死亡電報』を即時に送りたいといふのであつた。余にそれを受けるかと云ふことであつたから、徐かに送つて呉れるなら受けて見やうと答へた。余は首尾よく其電報を受けて驅けだした。余はブルックス氏の來るのを心配しつゝ待つて居て僭越の事をした詫言を述べた。幸ひに氏は余の向見ずを叱責しないで感心したり賞揚したりしてくれたが、終りに十分注意して誤謬を避けるやうにと警告された。後には技術員の外出する時などは當番中器械に注意して呉れと頼まれることが折々あつたので不知不識の間に余は電信術を

成功はそれが絶頂であるやうに思はれたのである。娘が倫敦の商人と結婚した老蘇國婦人が倫敦に來て若夫婦の近所に住んだら『自分の馬車に乘せて』あげるがどうですと娘の良人に勸められた時に答へて『ストラスボギーの人に見せられないなら馬車に乘つても詰らんぢやないか』と言つたが、全くその通りで余等も立派になつたら兩親を單にピッツバーグばかりでなく故郷のダムファアリンで錦を飾らせて上げなければならぬ。

次の日曜の朝一家が朝飯を喫べて居るとき余は昨日餘計に貰つた二弗二十五仙を出した。一同の驚きは非常なもので一時は事の眞相を看取しかねる位であつたが間もなく明かになつた。すると愛の誇りに輝いた父と情に燃え立つた母の眼とは忽ち涙に潤んで其胸中の感を表はした。之は愛兒の第一の成功で向上進歩の價値ある歴然たる證明として兩親の眼に映じたのである。其後の如何なる成功も如何なる種類の賞讃も此時ほど余を感動させたものは一もない。又さういふことがあり得やうと想像することすら出來ない。わが身に溢れた歡喜の情は全世界を動かして之を涙の泉と化せしめた觀があつた。

分ながらよく分からなかつた。大佐は金を勘定して渡たされたが、余は禮を云つたかどうか覺えて居ない、どうも言はなかつたやうだ。受取ると一目散に飛び出して家まで駈け通した。アレゲニー河の橋を渡る時などは今も明かに記憶して居るが人道が狹いから車道を端から端まで走つたといふよりは寧ろ躍り越えてしまつた。それは土曜日の晩であつたが一家の會計方をして居た母に先刻受取つた十三弗五十仙の內から十一弗二十五仙だけを手渡しして、後年余が儲けた幾百千萬弗よりも當時は一層貴く思はれた殘餘の二弗二十五仙をソーと衣嚢に忍ばせて一言もいはずに居た。

九歲の弟トムと余とは小さな部屋に一所に寐て居たが、床に落着いてから余は右の秘密を弟に囁いた。弟は幼年ながら能く其趣意を呑込んで互に將來を語り合つた。余は其時初めて余等兄弟が提携して事業をやるべき計畫を話してきかせた。『カーネギー兄弟商會』を作り之をエライものにしてやうんとか、お父さんやお母さんを御自分の馬車に乘せてあげなくちやならぬなどと言つた。其頃は自家所有の馬車に乘ることは富と名との一切を含んだもので、骨折がひのある人生の

和のあらんことを。
余の電報配達時代に忽然として余を九天の上に昇らせた様な出來事が起つた。而して之は或る土曜日の晩グラス大佐が小僧等に月俸を拂つて居た時であつた。余等は帳場の前に一列に立つて居て大佐が一人〳〵順番に金を渡した。余は一番初めに居たので大佐が差出した十一弗二十五仙をイの一番に受取るべく手を出すと、驚くまいことか大佐は余の前を素通りにして次に居る小僧に渡した。余は何時も一番先に貰つて居たから何かの間違ひだらうと思つて居ると順々に他の小僧に拂ひ渡されて其儘御仕舞となつた。余はガッカリして何ぞ自分に不都合な事でもあつたのか知らんと疑つた。一體余は何をしたのか又しなかつたのか。お前はもう用がないと言はれるのか。それでは一家の不名譽になる譯だ。それが何よりも激しく余の心を痛めた想像であつた。皆の拂ひが濟んで小僧等が退散した後にグラス氏は余を帳場の後ろにつれて行つて余が他の小僧等よりも役に立つから一ヶ月十三弗五十仙づゝ支給することにしたと告げられた。
此時余は頭がグラ〳〵して大佐の云はれたことを正確に聽取れたかどうか自

収入が毎週幾らかといふことを知つて居た。余は生活費のことも悉く知つて居た。乏しい家具や衣服を幾分でも買足すことが出來るかどうかと一家相談を凝らした上で一品たりとも新調することが出來れば實に全家の喜びであつた。蓋し之ほど一致和合した家庭は他に見られなかつたらうと思ふ。

母は毎日半弗銀貨を費やさずに濟ますことが出來れば必らずそれを靴足袋に入れて二百枚になるまでセッセと積み立てた、さうしてそれが二百枚になるや否や余は直ちに母の友人ヘンダーソン夫人に宛て、余等一家が渡米の際親切に貸してくれた二十磅を爲替で返濟した。此日は余等の一大祝日であつた。カーネギー家は之で借金の束縛を解かれて自由になつた。噫其日の愉快さよ。債務は確かに辨濟されたが、永久に拂ふことの出來ない感謝の債務は殘つて居る。老ヘンダーソン夫人は今日も存命である。余はダムファリンに夫人を訪問した時は神の宮にても參詣する樣な心地がした。余は何事があつても夫人を忘れることは決して出來ない(數年前に書いた此文字を讀みながら余は今悲痛の聲を揚げる『行かれた、人の皆行く道を行かれた』願はくは母の親愛なる善き貴き友人の幽魂に平

第五章　電信局

余が約一年間電信配達を勤めてからのことであるが、其頃から公事に接觸し始めた階下事務室の支配人ジョン・ビー・グラス大佐は折々自分の留守中數分間事務室の見張に余を賴んだ。グラス氏はなか〳〵の人望家で政治に熱中して居たから留守の時間が思ひの外長くなつたり又其度數も多くなつて、余は間もなく自然に事務方面の仕事に熟達した。余は公衆から電報を受け取つて其れ〳〵適當に小僧等に配分して迅速に配達させた。

之は少年にしては困難な地位であつた、而して余が自分の本務を一部免除された姿になつたことを憤慨せる他の少年等間に余は其頃稍や不人望となつた。余は又平素吝嗇——少年等の所謂卑劣——だといふ非難を受けて居た。余は特別收入の十仙を費消しなかつたが、彼等は其理由を知らなかつた。余は一ペニーたりとも貯蓄すれば必らず家計の助けになることを知つて居た。兩親は余に何事も隱しだてをしなかつた。余は平素勞働して居る三人卽ち父と母と余との

敎會へ行く時間前に一つ滑ることを許可して貰へるであらうかとの疑問を起した。普通の蘇國氣質の兩親に取つては安息日に滑氷戯を遣るといふほど重大な問題は無いのであるが、母は本問題の解決に何等の困難をも感ぜずに此場合余の欲する儘に氷滑りを遣るが宜敷いと言はれた。「行つても宜いと思ふが敎會へ出る頃には歸つて一緖に敎會へ行く樣にしたら何うか」と言ふのが父の意見であつた。惟ふに今日の米國家庭ならば千戸のうち九百九十九戸迄は此裁決を至當と認め英國家庭の多數も多分之と同樣であらうが、蘇國に於いてはそうは行かなかつた。安息日は其最も徹底した意義に於て人の爲に設けられたものであるから、公衆の爲に美術館や博物館などを開放すべきである。或る程度までは之を民衆娯樂の日と爲すべきであつて無唔に懺悔の日として之を守る樣に强へべきては無いといふ、現代の安息日觀も、四十年前に於ける余の兩親の其れに較べて見ると左程進歩したものではない。蘇國人は安息日に散歩をしたり宗敎以外の讀書をしたりすることを殆ど禁制と考へて居たが、此時代に於て余の兩親の如きは斯る窮屈な正統派神學の見解を超越して居たものである。

されど余は其音樂趣味が父の歌はれた故郷の秀逸な里謠に不拔の基礎を据えて居ることを忘却してはならぬ。蘇國の古歌には殆ど一つ殘らず言葉から節まで熟達した居た。俗謠こそは實にベードウエンやワグネルなどの高所に進む所以の最良基礎であらねばならぬ。父は余の聞いた限り最も美しい叉最も感傷的な歌手の一人であつた。余には父ほどの美聲が與へられて居なかつた。音樂と唱歌との嗜好は多分其儘父から遺傳したのであらう。折々余の耳に響くのは孔夫子の言として傳へらるゝ『上帝の聲なる音樂よ我は汝の呼ぶが儘に此處へ來れり』といふのであつた。

話は叉別方面に涉るが同時代に起つた一の出來事で兩親の寛大を遺憾なく示したものがある。余は配達小僧として夏中二週間しか休暇を與へられなかつたが、此の休暇中はオハヨーのイースト、リヴアープールに居る叔父の所で從弟達と川で舟遊をして過ごした。元來余は氷滑りが大好きであつたが、今余が話さうとして居る出來事の起つた冬は余の家に面した川の緩い流が見事に凍つた時であつた。氷が素晴しく張り詰めたので、土曜日の晩遲く歸つて來て、明朝早く起きて

音樂興味の勃興

矢繼早に答が來た。

『アンデーかい、アレは裸ですが、お前さんは襤褸を着て居る』

リアンダーは叔母エイトケンに對する從來の立場を取返すことを斷念する外はなかつた。余の方は無所屬だから改善の望があるかも知らんがリアンダーは一宗派を選擇して、しかもそれが新エルサレムの宗派でなかつたので叔母を失望させてしまつた。

余が初めて音樂の興味を起したのはスウイデンボルグ協會との關係からであつた。協會の聖歌集に聖樂の短い拔萃があつた。余は自然に此等に愛着して、聲が惡いといふ非難はあつたが、『表情』に於ては好評を博して、終始唱歌隊の練習に參加して居た。樂長ケーセン氏は余の斯道に熱心なのに免じて時々の調子外れを大目に見てくれたかと思ふ。音樂界の寶玉として持囃されたハンデルの作曲が偶然にも無學の少年たる余の愛吟したるものであつたことを後に發見して余は一種の快感を覺えた。されば余の音樂練習はピッツバーグのスウイデンボルグ協會の渺たる唱歌隊に始まつたのである。

望は衰へて來たが、蘇國で膝に載せて可愛がつた第一の甥に對する興味と溫情とは決して衰へなかつた。叔母は余の從弟リアンダー・モリスをスウィデンボルグの默示で救ふことが出來るとして幾分の望をおいて居たが、彼れが浸禮派に走つて浸禮を受けてしまつたので痛ましきほど失望した。流石傳道者的の叔母も之には閉口したに違ひない、しかし叔母の父が同じ樣な經驗をしてエディンバラで浸禮敎徒に說敎をしたことを思出したら別に不思議がることはない筈である。

リアンダーが叔母の期待に背いた後初めて余が叔母と共に訪問した時、叔母の機嫌は勿論善くなかつた。叔母の眼から見ればスウィデンボルグが折角啓示した新エルサレムの玄關まてつれて來て、高弟の一人(叔母)が之を推薦してやつたのに今更墮落するとは能く〳〵家名を汚した者てあつたに違ひない、其處てリアンダーは憂愁の思ひに沈んで言つた。

『叔母さんはどうしてそんなに私につれなくなさるんてすか。アンデーを御覽なさい、あれはどこの敎會の會員てもないのに叔母さんは叱りもなさらぬ。浸禮敎會へ出入することは、どの敎會へも行かぬよりは善いてはありませんか』

親愛の老婦人エイトケン

其のうちて傑出した人物は余等の親族てあつた。父は長老教會を離れた後右の協會に出席して居られたので余も勿論一緒に連れて行かれた。けれども母はスウィデンボルグ教に何等の興味も持つて居なかつた。何等の形式を問はず宗教には何時も敬意を表して神學上の爭議などには觸れぬやう余等を戒めて居たが、自身は驚くばかり沈默を守つて居た。母の態度は孔子の所謂『務民之義敬鬼神而遠之可謂知矣』て最もよく說明ができると思ふ。

母は余等の教會や日曜學校に出ることを奬勵されたが、スウィデンボルグの著作や舊新約聖書の大部分などが神自らの作てあつたとか行爲の標準だとか云ふことを信じて居られないことは明かてあつた。余はスウィデンボルグの神秘的教義に深く感動して所謂『心靈的意義』を解釋する技倆があると云ふので信心深いエイトケン叔母から祝詞を受けた。親愛なる老婦人は余が新エルサレムの明星と成る時節の到來を樂んで居たのみならず、時々は『神の傳道者』に出世する場合があるかも知れぬと想像して居たらしい。

然るに余が人爲的神學から益々遠ざかつて行くと共に右に云ふが如き叔母の

スウイデンボルグ協會の設立

翁でなければ夜も日も明けない氣分になつた。余は苦もなく沙翁物を記憶することが出來たと思ふ。人の言語に之れほどの魔力があらうとは其時まで悟らなかつた。韻律や曲調が悉く余の心にシツクリ落着いて融合結晶し何時でも呼びさへすれば出て來る樣になつて居た。之は一種の新國語であつて、其の價値を認めたのは確に之を演じた劇に顯れたからて、マクベスを見るまでは沙翁に對する余の興味は起らなかつたのてある。余は戲曲を其時まで未だ讀んだこともなかつたのてある

其後大分年月を經てからワグネルの何たるかをローヘングリンで知ることが出來た。ローヘングリンの前奏が新興味を唆つた頃までは紐育の音樂學校でワグネル物を殆ど聞いて居なかつたが、サテ之を聞いては前に聞いた者とは全く異つた天才たることが明かに分つて、余に一段高き所へ登る梯子となつた、斯くて余には沙翁のやうな友人がマウ一人出來た譯てある。

此時代のことて話は別になるが、アレグニーで少數――多分總數百人とはなかつたと思ふ――の人々がスウイデンボルグ協會といふものを組織した、さうして

ー氏宛の電報を午後遲くまで留め置き、晩になつてから劇場の入口でそれを渡しながら恐る〳〵二階の後棧敷へ入れてくださいと頼むこともあつたが、其願ひは屹度聽き入れられた。小僧等は互に任務を交換して順番に入場の出來るのを樂んで居た。

そんな風に余は青幕の後ろに隱れた世界に親しむやうになつた。演劇は大抵奇拔通俗なもので大した文學的價値あるものはなかつたが、十五歳の少年の眼を眩惑するには十分面白く仕組まれて居た。余はあれほどの壯觀を見たこともなく、又あんな種類のものを見たこともなかつた。劇場といふものを見たのはそれが初めてゞ、演奏會にすら行つたこともなく、民衆娛樂のやうなものは一も實見しなかつたのである。『デーヴイ』『マクカーゴー』でも『ハーリー』オリヴアでも『ボッブ』ビケーンでも同じやうな者であつた。余達は皆舞臺の魔力に魅せられて劇場入りの機會を夢中になつて捕へやうとして居た。

其頃の悲劇役者として最も好評を博した一人『ガスト』アダムがピッツバーグの劇場で沙翁物を一通り演じて見せた時から余の趣味は一變した。其時以來余は沙

組の一人てあつたことを多年の後發見して非常に滿足した。

此圖書館には面白い歷史がある。それは段々と發展擴張して七回も諸所に移轉した。第一回の引越しは創立者自身て前垂や炭取りに書物を入れて手織工場から第二の安置所に持運んだのてある。余の父が故鄕に於ける最初の圖書館創立者の一人て余が僥倖にも其最終の設立者てあつたと云ふことは眞に余の生涯の最も興味ある奇遇的事實の一てある。余は無意識に父の跡を追うて圖書館の設立をしたのてあるが寧ろ天意に導かれたといつた方が適當てあらう。兎に角此事實は余に熱烈なる歡喜を與へた。

余の父の如きは確かに人の模範たるべき人物てある、父は余の知れる限り最も溫良、高潔にして且つ最も親切なる性質を備へたる一人てあつた。

前にも述べたやうに余の沙翁嗜好を刺戟したものは演劇てあつた。余の電報配達時代に舊ピッツバーグ劇場はフォスター氏經營の下に盛大を誇つて居た。氏の電報は無料て取扱ひ、其代りに電信技術員は無料入場を許されて居た。此特權は或程度まで配達人にも及んて居たが、それかあらぬか配達人は態ざ〳〵フォスタ

恵に對する謝念の深さを表はすにはホンの微々たるものである。余自身の少年時代に於ける實驗に徴して余は若し都市が市有として喜んで維持し得るならば其都市に對して公立圖書館を建設して寄附するほど能力と志望とを有する善良な少年少女の利益になる金錢利用法は他にあるまじきことを看破した。余は確信する、余が設立の特權を得た各圖書館の將來は必ず此見解の正確なることを立證するてあらうと。そは蓋し各圖書館區域にせめて一人なりとも其圖書館を利用して、余がアンダーソン大佐所藏の摩損した四百卷を利用して受けた利益の半分だけて『も受けるならば、其』事業は決して無益に終らなかつたと云へるからてある。

『苗木が曲れば木が傾く』。書籍の蓄藏する世界の珍寶は丁度好い時に余の爲に開かれた。圖書館より得べき根本的の便利は之を利用するもの丶巧拙如何に由ると云ふことが出來る。靑年は自ら努力しなければ智識を獲るものてないといふことは侵す可からざる原則てある。余は父がダムファリンに居られた頃、機屋仲間て各自所藏の僅な書物を持寄つて町内に初めて廻覽圖書館を設立した五人



ジェームス・アンダーソン大佐

提供されても余は其取引を御免蒙りたい程である。人生は文學なくんば堪へがたいものであらう。仁人大佐の恩澤ほど余の仲間と余自身とを汚行惡癖より遠ざからしむるに與つて力あつたものは一つもない。後年福の神の笑顔を見る時節の到るや否や第一に余の爲すべき義務の一は恩人の記念碑を建てる事であつた。之は余がアレグニー市に寄附したダイアモンド・スクエアに於ける會館と圖書館との前に建てられたもので左の如き銘を擔つてる。

アンダーソン大佐記念碑

大佐はペンシルヴアニヤ無料圖書館の創立者なり。大佐は其藏書を勞働少年等に公開して毎土曜日の午後自ら圖書館員となり啻に其藏書のみならず一身を此高尚なる事業に捧げられたり。此記念碑は當時の『勞働少年』の一人たりしアンドルー・カーネギーが謝恩の爲に建てたるものなり。抑も大佐は斯くして此等少年の爲に彼等が由りて以て向上すべき智識と想像との寶庫を開放せられたるなり。

之は鴻恩の萬一に報いたるに過ぎない。大佐が余と余の仲間とに施された仁

余の親友、しかも最親圏内の一人トム・ミラーはアンダーソン大佐邸の近くに住んで居て余を同大佐に紹介してくれた、そんな風に余の精神の暗い所に窓が開けて其處から智識の光が流れ込んで來た。余は書物を座右に置いて勤めの間さへあれば頻りに讀書したが余の勞苦と夜の長い時間の勤勞とを輕くしたのは實に此讀書の習慣であつた。土曜日が來れば別の書物が獲られると思ふ時に未來の希望が輝いた。そんな風で余はマコーレーの文集や歷史に通曉し、特にバンクロフトの合衆國史を最も注意して精讀した。ラムの論文は愉快であつたが、大文豪沙翁に至りては當時學校の敎科書に拔萃した者の外何等知る所がなかつた余の沙翁趣味は其少し後ピッツバーグの舊劇場で養はれたのである。

余等の親友團たるジョン・フィップス、ジェームス・アール・ウキルソン、トマス・エヌ・ミラー、ウキリアム・カウレーなどは余と同じ様にアンダーソン大佐の藏書を利用する特權を與へられて居た。余の力では到底他に獲られない書物を大佐の賢い仁惠によつて容易く手にすることが出來たので、之によつて余が養ひ得た文學趣味は全く大佐の賜物で、之と交換すべく人間の從來蓄積した幾百萬の富の全部を

ジエームス
アンダーソンの圖書館

記者として
の初舞臺

が四百卷の藏書を少年等に公開するといふことで、青年ならば誰でも每土曜日の午後一冊宛借出して次の土曜日に他の一冊と交換することを許されると云ふことを聞いた。然るに余の友人トマス・エヌ・ミラーが耳新しく余に注意した所によれば、アンダーソン大佐の藏書は元來『勞働少年』に公開されたので、配達小僧や書記の樣な者は筋肉勞働者でないから書物を借りる權利があるかどうかと云ふことであつた。余が初めて新聞雜誌に投書したのは『ピッツバーグ・デスパッチ』に出した公開狀で、余等を除外する道理はない、今こそ筋肉勞働をして居ないが、一度はした者であるから余等も(一)眞實の勞働少年であると論じた。是に於て仁者アンダーソン大佐は忽ち借覽人の資格を寬大にされた。されば記者として余の初舞臺は成功であつた。

(一)　此公開狀は『勞働少年』と署名してあつた。圖書館長はデスパッチ誌上に規則を盾に『勞働少年は定職あるを要す』と反駁した。カーネギーの答辯書には『定職はなくとも勞働少年』と署名したが、一兩日するとデスパッチの編輯欄に『商賣なき勞働少年』の來社を求むと出した(一九〇八年七月のセンチユリー、マガジーン所載デヴィッド・ホーマー・ベーツ記事)

子屋から帳面で取つて居た。時々非常の借越しが出來るので會計掛たる余は菓子屋に注意する必要を認めた。卽ち餓鬼の様に過食する小僧連が背負ひ込んだ借金に對して會計掛は何等責任を持たないといふ意味の警告を菓子屋に與へたのである。ロバート・ピトケーンは一番の甘黨らしく從つて菓子屋の借が山の如くあつた。或日余が小言を言つたら打明話をして僕の胃に虫が居て胃中の物を皆食つてしまつて其れても足らずに甘いものをも食べるのさと說明して居た。

第四章　アンダーソン大佐と藏書

樂みは澤山あつたが配達小僧等の業務は中々苦しいものである。隔晩に局の締まるまで居殘りさせられたが、さういふ時は十一時前に歸れたことは滅多にない。他の晩には六時に交替した。之ては碌々勉强の時間もないし、家事經濟は切詰めになつて居て書物などを買ふ餘裕は到底出來なかつた。然るに天から降つた寶の様に讀書の樂みをする方法が突然備へられることになつた。

ジエームス・アンダーソン大佐――私は此稿を書きながら其名を祝福する――

がけに配達して置いてくれなどゝ頼まれることもあらう。眞實に怜悧な少年が出世するには人の注意を惹きさへすればいゝのであるが、配達ぐらゐ注意を惹くに適した業務は他にあるまいと余は思ふ。賢い人は何時も怜悧な少年を探して居る。

此生活をして居る頃大騒ぎを遣つたのは一定限度以外に電報を配達した場合には十仙づゝ増賃金を取ることを許されたことである。此『十仙』電報は案の如く熱心に狙はれて其配達權に關して仲間の爭が起つた。或場合には小僧等が再三順番に構はず十仙電報を持出したといふ嫌疑が懸かつた。之は仲間の紛議を釀す唯一の原因であつた。其解決法として余は此電報配達料金を積立てゝ毎週の終に等分したらよからうと云ふことを提議した。さうして余は其會計掛に就任したが、此解決法の行はれて以來吾々の間には何時も平和と好感とが充ちて居た。實に此增賃金積立は眞實に協力的性質のもので、之は財政組織に關する余の處女作とも評せらるべきものである。

小僧等は此分配金を消費する完全な權利あるものと考へて居て、多くは隣の菓

ャ鐵道會社の總支配人となつた男てある。彼れも余と同様に蘇國人たるばかりてなく生れも蘇國てあつたので『デーヴィ』と『ボッブ』と『アンディ』は勿驚一週二弗半の大給料てピッツバーグの東部線電報を一手に引受けて配達した三蘇國少年てあつた。毎朝事務所の掃除をすることが少年配達の勤めてあつたが、私達は交替てそれをして居た。故に此三人は孰れもドン底から其閲歴を始めたことになる。オリヴァー兄弟大工業會社長エッチ・ダブルユー・オリヴァー閣下(一九〇四年死去)市の顧問狀師ダブルユー・シー・モーランド(一八〇九年死去)なども同じ様に此組に加はつて出世の門出をした者てある。出世の爲に奮闘する青年が人生の競爭を爲すに際し恐るべく又警戒すべきは富者の子てもない、其甥ても從兄弟てもない。事務所の掃除をすることから閲歴を始むる畯騖未知の『黒馬』少年てある。

其時代の配達小僧には種々の樂みがあつた。果實問屋などがあつて、電報を迅速に配達した禮として林檎をポケットに一杯呉れたり、パン屋や菓子屋がおいしいのをくれることもあつた。また親切な人に出會つて之に敬意を表すれば、いつも迅速に配達して呉れて滿足だと云ふ様な氣持のよい言葉て賞めたりして歸り

てあつたが、其平素の言行から推せば勿論好模範てあつた(悲むべし一九〇六年に此一節を訂正する時は皆故人になつた、嗚呼無常迅速)

何れの點から見ても愉快な仕事

電報配達の仕事は何れの點から見ても余には愉快なもので、余に最も親密な朋友の出來たのは此仕事を遣つて居た時代てあつた。　先輩配達夫が他の方面に拔擢されたので、其後任として來た少年が後にはアレゲニー、ヴアレー鐵道會社長として盛名を博したるデヴイッド・マクカーゴーとなつた、彼は余の同僚となり二人て東部線から來る一切の電報を配達して居たのであるが、外にも二人の配達小僧が居て西部からの電報を配達して居た。　東部電信會社と西部電信會社とは其頃同建物にあつたけれども全く別のものであつた。『デーヴイ』と余とは直ぐに友達になつて、彼も蘇國人てあつた爲に兩者の間に親交が堅く結ばれた。『デーヴイ』は米國てこそ生れたものゝ、其言葉などは余の父と同じ程度の純蘇國辯てあつた。

ドン底から始めた三人

『デーヴイ』の就任後間もなく第三の小僧が入用となつたが、誰か適當な者はないかと余に尋ねられたから、苦もなく一人を推薦した。　それは外てもない余の親友ロバート・ピケーンで他日余の後任者としてピッツバーグ市に在るペンシルヴアニ

當時『馬車』に乘る紳士とも云はるゝ人は市に五六人しかなかつた、馭者にすら法被を着せる習慣の始まつたのは多年の後てあつた。降つて一八六一年の頃となつてからも、ピッツバーグの社會史に特筆大書すべき財界の最大事件は恐らく自己の屬する組合から十七萬四千弗と云ふ巨額の持分を受けてファネストック氏が實業界を引退した事てあつた。今日てこそ十七萬弗位はホンの目腐れ金とも云ふべけれ、當時にあつては驚くべき巨額と思はれたのてある。

配達小僧たる余の地位は直ちに市内屈指の少數指導者等に知らるゝ因となつた。ピッツバーグの法曹界は著名な者てあつて、其首領と仰がれたるウヰルキンス判事、其他マクカンドレス判事、マクククリュア判事、チャーレス・シエーラー、又其組合狀師エドキン・エム・スタントン卽ち後に『リンカン大統領の片腕』として知られた大陸軍卿、などは悉く余を知られたが、就中スタントン氏は少年としての余に特に目をかけてくれた。實業界ては今日生存して居る巨頭株はトマス・エム・ハウ、ジエームス・パーク、シー・ジー・ハッセー、ベンジャミン・エフ・ジョーンス、ウヰリアム・レー、ジョン・チャルファント、ヘロン大佐などて、配達小僧等が孰れも模範として仰いだ人物

一つもなかつた。旅客は運河でアレゲニー山麓まで行き、山越鐵道三十哩でホリデースバーグに達し、それから又運河でコロンビヤへ行き、それから八十一哩の鐵道で費府に入る、(一)此旅程に三日を要した。

(一)「費府の向ふにはカムデン、アムボイ鐵道があり、ピッツバーグの向ふにはフォト、ウエーン、シカゴ鐵道があつたが我々に關係のない別會社であつた」一九〇八年紐育刊行アンドルー・カーネギー著「今日の諸問題」百八十七頁)

其頃始めてシンシンナテイとの間に日々の交通が開けて小蒸氣船が同市とピッツバーグとの間に發着することが一大事件と認められた。市の商業としては多く東西に貨物を運送する位のものであつたが、其れは川から運河への一大積替所てあつたからてある。展鐵工場が一個開業して居たが、銑鐵は一噸も出來ず、鋼鐵の一噸すらも出來ないて多年を經過した。市から僅々數哩の所に世界第一の價格ある骸化性石炭大炭層があつて、鐵鑛石の鎔解に適する骸炭の埋藏が無盡藏てあつたのを幾年も全く知らずに經過した爲め、銑鐵製造業は適當なる燃料の缺乏てふ理由に依り全然失敗に歸したのてある。

一八〇五年のピッツバーグ

つて少年に留目し何か賞める様な言葉をかけないことは殆ど稀れだからである。

一八五〇年のピッツバーグは其後の變遷に比べて隔世の感がする。一八四五年四月十日の大火で市の商業區が全滅して以來、其回復は遲々として進まず、家屋は多く木造で煉瓦のものは少數に止まり耐火の設備あるものは一つもなかつた。人口もピッツバーグ市内及近郊を合して僅に四萬に達しなかつた、市の商業區は未だ第五街まで延びて居ず、廣小路は其頃劇場があるといふばかりで非常に寂寞な町であつた。アレゲニーのフェデラル・ストリートは所々にボツリ〱商店があるのみで其間には大きな空地があり、今の第五區の中心に池があつたので氷滑りを遊んだことを記憶して居る。余等のユニオン・アイロン・ミル大鐵工場の敷地の如きは其頃も又其後幾年も玉菜の園畝であつた。

余が電報を澤山配達したロビンソン大將はオハヨー河以西第一番の米國生れの白人であつた。私は東部から市内へ初めて延長された電信線を見たが、其後又運河によりて費府から運搬し箱船てアレゲニー市に初めて荷卸ろしされたオハヨー・ペンシルヴアニヤ鐵道用の汽關車をも見た。當時東部への直接鐵道連絡は

成功の梯子に足がかゝる

とはない、又學ぶべきことが甚だ多いけれども、之に反して余の知識が如何に少いかを發見しない譯けには行かなかつた。余は余の足が梯子にかゝつた樣な氣がして之から上へ昇るのだなと感じた。

唯一つ恐れたのは電報を配達する商店の宛名を早く覺えられないか知らんと思つた事である。其處て町の片側の看板を片端から覺えて夫から他の側の分を覺える事を遣り始めた。夜になると商店の名を口早に暗誦して記憶の練習をした。すると何時しか眼をつぶつて商業街の片側の端から商店の名をスラ〳〵と順序正しく終りまで言ふことが出來る樣になり、それから向側へ移つて下町から上町まで間違なくちやんと暗誦することが出來た。

次は人を覺えることとてあつた。之は配達人に取つて大いなる利益てあり、商店員又は雇人を覺えて居れば遠くまで行かずに濟むこともある。その人の商店へ行く途中で出會ふかも知らぬ。往來で顏見識りの人に電報を手渡しすることは少年仲間に大成功と認められたのみならず、それを遣つた少年自身にも滿足を與へた。と云ふのはエライ人(大抵の人は配達人の眼にエラク見える)が道に立止ま

見たいだけの願てあると言つた。それなら何時から來てくれるかと問はれたので、余は必要なら今からでも勤めると答へた。其時の事情を回顧すれば此答には今の青年諸君が能く考へて見る意義があると思ふ、機會を捕へないといふことは一大過失てある。此位置が今私に提供された、何事が不意に起つたかも知れぬ他の少年を呼びに遣つたかも知れぬ。然しながら自分が一旦其位置を得た時は、出來るなら直ぐに勤めを始めませうと言出した。ブルックス氏は大さう親切にも一人の小僧を呼んで――配達は一人て間に合はなかつたのだ――余を案內して其處らを見せ、仕事をも覺えさせる樣にと言付けた。余は直ぐに機會を見付けて町の角へ馳けて行つて父に甘く行つたから歸りになつて母に勤めることに成つたと話してくださいと賴んだ。

以上は一八五〇年に余が人生の眞の出發點に有りついた時の顚末てある。一週間二弗で暗い地下室の發動機掛りを勤め、石炭の埃て眞黑氣になり、人生向上の見込などは毫末もない所から、忽ち新聞だのペンだの鉛筆だの日光だの結構づくめの樂園否天國かと思れる處へ引上げられた。一分時間も何かしら學べないこ

のは僕の誇る所だ』と答へて遣つた。しかし話をすると何時しか廣音の蘇國なまりが幾分か取れて居たから、老父の蘇國眼て微笑でもしながら余の素振を見て居られるよりは、一人て會つた方がブルックス氏とキビ〳〵した折衝が出來るだらうと思つたからてある。

其日の余の服裝は日曜日以外には着たことのない取つて置の白麻布シャッと青い胴衣とそれに日曜日の晴着全部であつた。其頃は麻布の夏服を唯一着持つて居て、電信局に出勤後も數週間はそれを着て居たが、土曜日の夜當直て夜半近くに歸宅する樣な場合ても、母は必ず之を洗濯してアイロンをかけて置いてくれたから、日曜日の朝には新らしいものにして着ることが出來た。余等が西半球の新世界で活動の餘地を作らんと奮闘するに當りては此女丈夫たる母に爲し得ずといふ事は一もなかつた、父の長い工場時間は其氣力を疲らせたが、彼もまた毅然として善戰奮闘し、余を勵ますことに於て違算はなかつた。

會見は成功した。余は念の爲め自分がピッツバーグを能く知らないことを告白し、又或はお役に立たないかも知れず、力が足りないかも知れぬが、唯一つ遣つて

其反對論を撤回したが、之は確かへイ氏の所へ相談に行かれた結果であるとおもふ。へイ氏は新らしい仕事に移る方が余の利益だらうと云ふ意見て、行かれて仕舞つては自分に不便てあるがマア遣らせて見るがよからう、若し失敗した場合には何時ても復職の出來る樣に余の位置を空けておいてやるとさへ親切に言はれたさうだ。

さう決定したので、余は川を越えてピッツバーグのブルックス氏を訪問したらよからうといはれ、父も同行したいとのことで、四丁目とウッドストリートの角の電信局まで一所に行くことに相談した。キラ〳〵と晴れた朝で幸先よしと勇み立つて父と余とはアレゲニーからピッツバーグまで約二哩の道を歩いた。電信局の入口まで來ると余は父に外てお待ちくださいと賴んだ。余は飽くまで一人て二階か技術室へ行つて其エライ人に面會した上自分の運だめしをしたいと頑張つたのてある。こんな事をする氣になつたのも多分其頃そろ〳〵自分が米國氣質にかぶれ出した爲てあつたらう。初め男の子等はよく余のことを『スコッチーやい』『スコッチーやい』と言つたが、余は何時も『然うよ、僕は蘇國男子だ、然う言はれる

をやる相手で、此問題は將棋をさして居る時に起つたのである。こんな些細の事が最も重大な結果を生ずる因緣になる者だ。一言、一顧、一音調すら個人は勿論國民の運命をも左右する場合がある。何事にもせよ之を一些事と言ふ人は無分別である。些事を輕んぜよと云ふ人は些事の何たるを解しない者である、青年諸子は神の最善な恩賜を受くると否とは一に些事に注意すると否とに因ることを記憶しなければならぬ。

親族會議の難關

叔父は余の名を擧げて、余が應ずるかどうかを一つ調べて見やうと答へられた。余は能く覺えて居るが其時親族會議が開かれた。勿論余は狂喜した。籠の鳥が自由にされた時の喜びでも余の其時の喜びには比べられまい。母は賛成であつたが、父は余の希望を許さない方に傾いて居た。父の意見ではどうも仕事が勝ち過ぎる、余が若か過ぎる、小いさ過ぎるといふのであつた。一週間二弗半の給料ではモット大きい小僧を豫期して居たことは明かである。夜遲くなつて田舍へ電報を配達するやうなことがあれば、危險に遭ふかも知れぬ。マー今の處に留まるが得策だらうと父は主張したけれども其後父は試みの爲に許さうと云ふ考へて

つた、余は油の臭氣にムカつく病には勝つた例しがない。ワレースてもブルースても之には閉口するに違ひない。けれども朝飯か晝飯を食べずに居れば夕飯に對する食慾がそれだけ進むので、あてがはれた仕事を首尾よく勤めることが出來た。ワレースやブルースの眞の弟子は志を屈する位なら先づ生命を捨てる覺悟てあるべきだ。

ヘイ氏方の勤務は棉花工場に比べると余に取つては一段の出世てあつた。のみならず余は親切な雇主と懇親を結ぶ樣になつた。ヘイ氏は單式簿記を採用して居たので、余は其式て帳附をして居たが、大店ては何れも複式にして居ると聞いて、余は仲間のジョン・フィップス、トマス・エヌ・ミラー、ウキリアム・カウレー等と相談の上、冬季間夜學に通つて複式簿記を學ぶことゝ定め、余等四人はピッツバーグのウキリアムスと云ふ人に就いて其れを稽古した。

一八五〇年の始め頃或晩のことてある、余が仕事から歸宅すると電信局の支配人デヴィッド・ブルックス氏が叔父ホーガンに電報配達をさせるに適當な小僧はないかと尋ねたといふ話を聞いた。このブルックスは叔父と夢中になつて將棋

あるかと自問自答する氣分を失はなかつた。而して精神一到何事か成らざらんとの決心を堅く持つて居た。

或日其機會が來た。ヘイ氏は請求書を作る必要が出來たが、番頭は無し自分は惡筆であつたので、余にどんな字が書けるかと言つて何か書くものをあてがはれた。其結果は滿足であつたのでヘイ氏は余に請求書を書かせることになつた。余は又計算が巧者といふのでヘイ氏は直ぐにそれを利用する氣になつた。のみならず彼は可愛らしい好々爺で、多少白髮少年に對する同情に動かされてか、此親切氣の多い蘇國氣質の老紳士は余に發動機の掛りを止めさせて何かモット樂な方へ移してやりたいとの一念から、余の勤務を變へてくれた。夫れは至極結構てあつたが一つイヤなことがあつた。

今度の仕事は油の大桶て新製の糸卷を洗ふことてあつた。幸にそれが爲には別に一室があつて余は一人て仕事することゝなつたけれども、困つたことには油の臭氣て氣分が惡るくなるのを耐らへることが出來なかつた、渾身の勇氣を振つて見ても、自身の薄志弱行を極力鞭韃して見ても余の胃はどうしても承知しなか

上下の別なく兩親たるものは其子女に敎育を施す義務あるものとして、敎區立學校の制度を作つたのは蘇國を以て嚆矢とする。この後間もなくアレガニー市の蘇國出身の木管製造家ジョン•ヘイ氏が小僧を一人雇ひたいといふので、余に來てはどうだと言はれた。余は同氏に雇れて一週間二弗づゝ貰つた。しかし初めは、其仕事が棉花工場の其れに較べて一層イヤなものであつた。蒸氣發動機を扱ふ仕事なので、木管工場の地下室で釜の火を焚かなければならなかつた爲に其苦しみは堪へられたものでない。每夜寢床の上に坐つて蒸氣のメートルを試驗しなければならぬ。蒸氣が弱すぎれば上の職工が動力の不足を訴へる恐れがあり、强すぎれば破れる恐れがある。

しかし此苦痛を一切兩親に秘しておくことは名譽である。親は親だけの苦勞がある。余は男らしく自分の苦みを忍ぶべきだと思つた。余の志は高かつた、そして何か變化が來ればよいと每日望んで居た。其變化とは何であらうか余には一向判らなかつたが、辛棒さへして居れば屹度來ると信じて居た。のみならず其頃でも尙ほ余は自分がワーレスならば何とするか。蘇國男子は何をなすべきて

晝休みの時間を除いては暗くなるまで働き續けたのであつた。仕事はいやに重苦しく何の面白味もなかつたのであるが、然し其仕事に從事して居ることが卽ち余の家庭の爲に何か盡くして居るのだといふ感じを余に與へたので、苦みの中にも言ふに言はれぬ愉快があつた。其後余の儲けた金は幾百千萬を以て算する程であるが、此棉花工場に於て最初の一週間に儲けた金ほど余に大なる快感を與へたものはないのである、余は一家の爲に助けをすることゝなつた、パン代を稼いで居る、最早親の脛噛りではない。それまでは時々父の美聲で聞かされる『舟漕ぎ』歌を聞く毎に其の歌の終りの數節を實踐躬行して見たいと思つて居た。

『アーレックとジョックとジエネッティが
大きくなつて、學校が濟んだら
舟を漕いで働いて
我等を樂にさせませう』

余は荒波の上に此小さな舟を渉らせやうとしたのだ。アーレックとジョックとジエネッティは先づ敎育されねばならぬと云ふことを一寸注意しておきたい。

鋭い觀念が一面に貫いて居た。ウォルター・スコットはバーンスを評して人間の眼としてあれほど異常なものを見たことがないと言つたが、余も余の母に就いて同様な批評が出來ると思ふ。バーンスの詩にある樣に、

『空地に向けた眼ですらも
名譽の光がキラ〳〵と』

低級、下賤、詐僞、輕薄、粗野、陰險、多辯の如きは母の偉靈とは全く沒交渉であつた。トムと余とは斯くの如き母と斯くの如き父――父も亦造物主の手に成つた尊貴なる人間の好典型として萬人に敬愛せられたる聖徒であるから――との感化を受けて育つたからには品格ある人物として成長せずには居られなかつたのである。

此事件後間もなく父は餘儀ない事情の爲に手織業を放棄してブラックストック氏の棉花工場に働くことになつた。此人は余等の住んで居たアレゲニー市の古い蘇國人であつた。父の口入で余も此工場の木管手に雇はれた。初めのうちは一週間一弗二十仙の仕事をあてがはれて隨分苦しい思をした。冬季には父と余とは夜の明けきらぬうちに起きて朝飯を濟ませ日の出前に工場へ駈付け、短い

の體て出て行つた。

母は少時悲憤に滿てる女王の如く立つて居たが、忽ち氣が崩折れて涙に暮れられたが、然しすゝり泣の聲の聞えたのはホンの二三瞬間で聽て二人の子供を兩手に抱き、お母さんが取亂した容子を見せたことを氣にしてはいけないよ、世の中には私達の爲すべき仕事が澤山ある、正しい事さへして居れば有用な人になつて世間から尊敬される筈であると云はれた。此時の母の態度は丁度ヘレン・マグレゴルがオスバルデストーンに對して其捕虜を『格子縞の目のやうに引裂くぞ』と威嚇したといふ樣な形であつたが、其激昂の理由は異つて居た。母の怒つたのは叔父の勸めた商買が懶怠に近き勞働だと思つたからではない、唯だ母の眼から見れば其商賣が破落戸じみて居て全く上品で無いといふ爲であつた。死は之に優る、然り、母は二人の子供を幼少時代に下品な仲間入させる位なら寧ろ片手に一人づゝ抱いて死んだ方がいゝと信じて居たのである。

世帶の持始めに遭遇した行路難を回顧すればこんな事がいへる。其地方には之ほど獨立自尊的家族は一もなかつたが、幸にして余の全家には名譽、獨立、自尊の

神を壓迫して居た。其時代に於ける余の思想はどうにかして一ヶ年三百弗を生み出すだけの金を作つて貯蓄しなければならぬといふ決心に集中して居た。卽ち月に割れば二十五弗で、それだけあれば人の厄介にならないでも濟むといふ計算であつた。其頃の諸色は何でも非常に安かつたものである。

叔父ホーガンは時々兩親に余をどうする積りだと尋ねて居たが、或日のこと余が曾て見た悲劇中の最大悲慘な一幕が演ぜられた。余は決してそれを忘れることは出來ない。叔父は精一杯の親切な考で母に向つて、余が金儲けの出來さうな小僧だから籠を一つ工夫して「ガラクタ」を其れに入れて波止場あたりに行商をさせたら屹度よい稼ぎをするであらうと言つた。余は、其時始めて女の怒つたのはどんなものかといふことが判つた。母は其時縫物をして居たが、兩手を擴げて突立ち上り、其手を叔父の鼻先で振りながら、

『何てすて！私の息子を行商にして波止場の破落戸仲間に入れようと言はれるのですか。それよりかアレゲニー河へでもスッポル方が益しだと思ひます。歸つて下さい』と極めつけて玄關を指した。之に驚いて叔父のホーガンはハウ〳〵

居られた。父は又余等に取つては模範者であり、指導者であり、顧問であり、親友であつた。而して之が弟と余とが育てられた家庭であるが、世の所謂千萬長者や貴族などの子は果して此の如き遺産に較べ得るものを有つて居るであらうか。

母は多忙ではあつたが、其多忙の爲に近隣の人々の依賴や願ひなどを拒んだことは一度も無かつた、其れが爲め彼等は間もなく余の母を賢明にして親切なる婦人として認識することゝなつた、母のお蔭で助けを得た實例を余に話して呉れた人々は澤山ある。後年何處に住むことになつても母の心懸けは同樣であつた、貧富を問はず困難に苦しめる人々は之を母に告げて有益な助言を受けた。何處に往つても余の母は實に雞群の一鶴たる觀を呈して居た。

第三章　ピッツバーグと勞働

サテ此際の大問題は余に何をさせたらよいかと云ふことであつた。余は當時滿十三歳に達して居たので、新鄕土に於ける其生涯の手始めに何か家產の助けになる働がして見たくて堪まらなかつた、窮乏の懸念は恐ろしい夢魘の如く余の精

アレゲニー卜居

淸貧の便益

た。

例に依つて助けは母から來た。思立つたら飽くまで遣り徹ほすのが母の性分であつたが、母は若い時小遣取に自分の父の商賣であつた靴を縫ふことを習つたことがあるので、藝は身を否な家を助ける仕合せとなつた譯である。余の友人にして兼ねて同社員たるヘンリー・フイツプスの父フイプスは余の祖父同樣巧みな靴師であつた。彼はアレゲニー市で余等の近所に住んで居たので、母は仕事を其處から貰つて、女中を雇ふ力などは勿論無いから家事萬端を一人で切廻はした上に靴の裁縫で一週間四弗づゝ稼ぎ、時々は夜半までも働いて居た。晝間でも夕方でも合間〳〵に家事の都合の許す限り余の幼い弟を膝下に坐らせて針に糸を通させたり、糸に蠟を引かせたりしながら、母は彼れに對して曾て余にして吳れたと同樣に、豫ねて殘らず暗記して居たらしい蘇國の歌の特選ともいふべきものを諳誦して聞かせ、又必ず敎訓となる樣なお伽話をして聞かせられた。

淸貧兒童が富家の兒童に優つた貴い便益を得ると云ふことは斯かる所に存するのである。余等の母は其の一身に子守、料理人、家庭敎師、先生、聖徒を悉く集めて



弟トマスと十六歳になるアンドルー・カーネギー

つてピッツバーグ行の汽船を待つ間ビーヴアーの阜頭船に一夜强制的に泊らせられた時のことてある。余等は此時初めて恐るべき蚊群の襲撃を受けたが、母は終夜苦められて翌朝殆ど眼が見えなくなつて居た。余等は皆恐ろしい相貌に變つて居たが、余一人は其夜の激しい蚊攻にあつても安眠を妨げられなかつたと記憶して居る。余は如何なる場合ても何時も安眠することが出來たから『地獄の子』と稱へらるゝ不眠症の辛さは一向に知らない。

ピッツバーグの友人等は余等の消息を氣遣はしげに待つて居たので、余等は其溫い眞情流露の歡迎に總ての困苦を忘れて仕舞つた。斯くて余等はアレゲニー市に其友人等と一先づ同居したが、叔父ホーガンの弟が豫ねてレベカ街の屋敷地の後方に小さな織物工場を建てゝ其の二階に室が二つあつたから其れを借りて兩親は世帶を持つことにした(之は叔母エイトケンの所有だから無家賃てあつた)。然るに叔父は其後間もなく機屋を止めて父が之に代り、食卓布の製造を開業した、織るばかりてなく、土地に大口の取引をする商人がない爲め後ちには自身て行商をすることゝなつたが、戸別に賣つて歩く遣り方なので利益は極めて僅少てあつ

婦の外、余等の知己は一人もなかつた。スローン夫人(ユーフェミア・ダグラス)はダムファリンで母の幼少時代の遊仲間であつた。又スローン氏と余の父とは商賣仲間の機屋であつた。余等は此一家を訪問して溫い歡迎を受けた。令息ウキリーが一九〇〇年紐育に在る余の邸宅に面せる余の所有の地を余から買取つて之を既に結婚した二人の娘達に與へたので、余等の孫共はちようど嘗て蘇國に於ける兩家の母達が互に遊仲間であつた樣に遊仲間になつた事は眞の喜びであつた。

父は紐育移民業者の勸誘に從つてエリー運河を通り、バファローとエリー湖を經由してクリーヴランドに向ひ、其處から運河を下つてビーヴァーへ行くのであつたが、今では鐵道で十時間しかかゝらない旅行を其頃は三週間を要した。當時ピッツバーグへの鐵道連絡がないのみならず、西部都市への鐵道連絡は一もあることなく、エリー鐵道は丁度建設中で余等は旅行中に多數の人夫が工事に働いて居るのを目擊した。少年時代の見聞は何でも無益にならない。余は運河通ひの船の乘客として三週間の經驗を回想して純粹な快感を覺える。不快な經驗はとうに記憶から消え失せてしまつたが、然し唯だ一つ殘つて居るのはオハヨー川を溯

懐かしい水夫

いと思つた。
彼は余を一露店に伴うてサーサパリラを一杯注文してくれたが、余は仙酒でもあるかの如く舌打してそれを飲んだ。今日に至るまであの立派に装飾した眞鍮の器から泡を吹いて出て來る仙酒の華麗な光景は余の心にアリ〱と殘つて居て、余が之まで見た此種類の品を思浮べても之に及ぶものは一もない。其後其處を通る度毎に老媼のサーサパリラの露店はチヤンとあるがサテかの懐かしい水夫は如何したらう。定めし彼れは自己の老境を樂んで居るだらう、若余の力に及ぶことならば彼れの老後の樂みの爲には何事かを盡くしてやりたいと思つて行衞を尋ねたが一向に分らなかつた、彼は余の理想的トム・ボーリングてあつた。さうしてかの昔ながらの美しい歌が唄はれると余は何時も『人間美の好典型』として余の懐しい舊友バーリマンを眼前に彷彿せしむるのてある。嗚呼彼れは今何處にか在る。船の上か雲の上か。さるにても航海中の親切によりて彼は同舟の一少年を其献身的親友たらしめ、崇拜者たらしめたのてある。
紐育ては有名なジヨンとウキリーとヘンリーとの三人兄弟の兩親スローン夫

グラスゴーのブルーミーエローから八百噸の帆船ウイスカッセトで出帆した。七週間の航海中余は水夫等と懇意になり、帆綱の名稱を覺えたり、水夫長の求めに應じて船客を指圖することまて出來る樣になつた。蓋し船員の手が不足して船客の手を藉ることが極めて必要てあつたからてある。それがため余は日曜日には水夫の大好物てあるプラムダフの御馳走になつたりした。愈々船を去るときに臨んては誠に名殘り惜しい感があつた。

紐育に着いた時は茫然とした。女皇拜觀の爲めエデンバラにつれて行かれたこともあるが、渡米前の旅行としては其れが關の山てあつた。グラスゴーは出帆前に見物の暇がなかつたし、紐育は余の初めて見た蜂の巣のやうな大商工業殷賑地て、其住民のなかに混じた余は全く喧々囂々の音響に氣を呑まれてしまつた。

紐育滯在中最も深い印象を余に與へた出來事はキャッスル・ガーデンのボーリング・グリーンを散歩して居た時に起つた其れてある、靑ジャケッに白ヅボンといふ上陸水夫の正裝をしたウイスカッセト號水夫の一人ロバート・バーリマンに伴はれて余は彼れに抱き上げられた。余はあんな好男子は未だ曾つて見たことがな

向つて去る前はあの鐘の音の不可思議力を知り初めた頃てあつた。ルッソーは美はしい音樂を聞きながら死にたいと言つたさうてある。余も臨終の際若し聞くべき音樂を選むの自由があるならばあの寺院の鐘の音を聞きながら『汝が走るべき道は盡きはてたり、いざ來よ』と、かの小さい白髮の子を召した樣な最後の聲を耳にして、永久の眠りに入らんが爲め彼の世の方へスラ〳〵と行きたいものと思ふ。

此一節を讀んだ人から貰つた手紙は澤山ある、中には之を讀んて泣かされたとまて書いて來たのもあるが之は余の眞情の流露した文字てあるから自然に人の情緒を動かすの力があるのてあらう。

偖て余等を乘せた小舟は河口に横たはる汽船エデンバラ號船側まて漕ぎ付けた。小舟から汽船に移る途端に余は叔父ローダーの許に走り寄つて其頸にからみつき『別れるのはイヤ、別れるのはイヤ』と泣出した。親切な水夫が余を叔父から捥ぎ取つて汽船の甲板へ抱上げてくれた。ダムファリンに歸省した時この老叔父は余を訪問して、あの時位悲しい別れを見たことはないと話した。

る其身を余の上に屈めて、彼の晩鐘の音は何を語つて居るかを余に話された。彼の晩鐘は兩親の口を借りて幾多の敎訓を私に傳へたのである。あの聲は私が眠る前に其日の事を思ひ廻らして若し何等か過失ありし事を思ひ出さば其れに就いて明かに訓戒を與へて呉れたものである。而して又萬事を見給ふ神は余の過失を御覽になつても決して〳〵怒り給はないて非常に御心を痛められるといふことも告げて呉れたものである。あの鐘は今日も尙ほ余に對しては啞てなく、大いに傳ふべき音信を持つて居る、噫あの鐘は今天涯流離の母と子とが其貴い保護の下に歸つた爲に之を歡迎すべく鳴つて居るのてある。

實にや此の寺院の鐘が余等の名譽の爲に打鳴らされた時、余等の胸に湧き出てたる喜びは誠に至大なものてあつたが、然し浮世の人々には斯かる褒賞を余等に授くるの途を考案し得るの力があらうか、況んや之を余等に授ける力などはとてもあるものてはない。されど弟トムも此處に居るべき筈てあつたとは其時浮んだ思想てあつた。彼も余等が新郷土亞米利加に

米國式四頭馬車』には寺院内を通る記事の處に此晩鐘のことを書いてあるが、其一節をこゝに揭ぐるも一興と思ふ。

ウォールス町長と同乗して前の方の席に立ちながら馬車を横町に驅ると、母と余とに敬意を表すべく打鳴らされた寺院の鐘の第一聲が聞こえた。余の膝は自然に屈み、何時しか双眼に涙は溢れた。余は振向いて町長を見ながら感慨無量で立つて居るに堪へないと告げたが、余は一時人事不省になるのではないかと思つた、附近に群衆も居なかつたので此有樣を見られなかつたのは先づ僥倖と云ふべきであつたが、氣を取直す時間があつたから、實際血の出るまで唇を嚙んで自分の心に『構はない、冷靜になれ、遣れ〱』と囁いた。しかし其時の鐘の音ほど美はしく、優にやさしく、融かすやうな力で余に迫り余を征服した音を再び聞くことは出來まい、又それほど深く余の魂に喰ひ入る音は決してなからうと信ずる。

彼の晩鐘こそは余の少年時代に無邪氣な眠を取るべく余を小さな寐床に急がせたものである。兩親は——或時は父、或時は母——、夜毎に愛の滴た

通兒童の學んだ樣な正式の文法は殆んど出來なかつた。ワレース、ブルース、バーンス傳の外は餘り讀書をしなかつたが、世に有名な詩歌は多く諳記して居た。それに童話、特にアラビアン・ナイッを愛讀して心を新しい世界に遊ばせた。余はこんなお伽話に讀み耽つて、「そゞろ仙境にあるの思をした。

懷しいダムファアリンを出立した日の朝、乘合馬車に乘つて石炭運搬の爲に出來てゐた鐵道線路をチャーレストンまで進行した、余は今もよく記憶して居る、ダムファアリンの影が見えなくなるまで眼に淚を浮べて窓から眺めて居たが、最後に視界から消え失せた建物は彼の壯大て而も神聖な古寺院てあつた。其後十四年の間余は此寺院に對して出發の朝に抱いた感想卽ち『何時再び汝を見ることが出來やうか』との思ひを抱かない日とては一日も無かつた。之と同樣に余は自分の心の眼て此寺院の高塔にある呪符的文學『ロバート・ブルース王』の三字を見ない日とては殆ど一日もなかつたのてある。少年時代の想出や仙境の話などは凡て此の古寺院と其晩鐘の周圍に蝟集して居た。此の晩鐘は每夜八時に鳴るので、余は其鐘の音が止む時にそれを合圖に床に駈込む習慣てあつた。余の『英國に於ける

を記錄に留めておきたい。夫人は自分自身が義俠的な人物である爲め常に義俠的な友人を自己の周圍に惹付けて居た。此人は里方の名稱であるエラ・フアーガソンを以て余等の家庭に知られて居た。さうして此ヘンダーソン夫人は余等一家の渡米費の不足二十磅を用立てやうと申出られたので、ローダーとモリソンの兩叔父が返濟の保證に立つて吳れる事となつた。ローダー叔父は其上にも助力や忠告を與へて、余等の爲に何もかも世話をして吳れたので、一八四八年五月十七日に首尾よくダムフアアリンを出發することが出來た。當時父の年齡が四十三で、母は三十三、余は十三、弟のトムが五歲であつた。トムの眼はパッチリと黑く、髮は美くしく白いので到る處人の注意を惹いた。

余は此渡米の時を限りとして正式に學校へ通ふことを止めてしまつたが、渡米の後一冬丈け夜學に通ひ又其後少時夜間佛語の先生を招聘した。妙なことには雄辯學者を賴んで公演術の稽古をしたこともある。余は讀方、書方、算術は勿論、代數や、拉丁語も學んで居た。航海中余がローダー叔父に送つた手紙は後に返して貰つたが、それを見ると其頃の筆跡は今よりも善かつた。余は英文法には苦んだが、普

蒸氣機械の使用が始まり、漸次に改良せらるゝことゝなつてから、ダンフアリンの小製造家は益々悲境に陷り、遂にピッツバーグの母の兩姉妹に對して、我等は渡米問題を痛切に考慮しつゝあるといふことを通信した。余の記憶する所では兩親の心配は兩親自身の生活改善の爲めではなく、寧ろ二人の子供の爲めであつた。ピッツバーグよりは聽て滿足な返事が到達した爲め一家を疊む準備として織機や家具を競賣する手筈を定めたが、父は例の美はしき聲で母や弟や余等の爲に左の如き歌を時々唄ひ聞かされた。

『西へ、西へ、自由の鄕土へ
　ミゾリの大河が滔々と注ぐ處へ
　勞働しても人は人
　いと貧くも地の實のりの蒐め得らるゝ其土地へ』

競賣の賣上は失望極まるほど小額であつた。織機の如きは全く二束三文で、結局一家族の渡米旅費には賣上金の總額を充てゝも尚ほ二十磅の不足を生ずることゝなつた。余は玆に母の終生の良友であつたヘンダーソン夫人の友誼的行爲

てある、之は何も自分自身が物を知り又は事を爲し得た爲の成功ではない、余よりもより能く物を知つてる人々を識別して之を選拔する才能があつた爲めの成功てある。之は苟も成功を願ふ人の持つべき貴重な智識てある。余は蒸氣機械の智識はなかつたが、それよりも遙に複雜な機關卽ち人間を知らうと試みた、一八九八年の馬車旅行に高地の某旅館に泊つて居ると一紳士が進み出て、自己を紹介し始めた。此人は蘇國の家具製造大家マッキントン氏であつたが、後で立派な人物てあることが解つた。『少年時代には貴君の兎の飼糧を蒐めた一人て、失禮ながら自己紹介を致します、余は時々仲間の蒐めた草を横取りして來たことがあつたと思ふが、自分の名を付けて戴いた仔兎が一匹ありました』などゝ話された。兎小僧等の中て余が後年邂逅したのは全く此紳士一人てあつたから、其時の余の喜は想像に餘りあつた。どうか此紳士との交情を最後まで續けて折々會見したいと思ふ（一九一三年十二月一日此原稿を讀んて居ると少年時代の樂しい回想を書いた珍らしい手紙が此紳士から屆いた。其手紙が餘の心を熱せしめたと同樣に其紳士の心を熱せしむる余の返書が今頃は先方に屆いて居る筈てある）

意された。母は何時も言はれた、此方面の第一歩は家庭を樂しくする事であると。余等及び余等を中心に集つて來る近隣の兒童等を喜ばす爲とあれば母は勿論父も亦如何なる事でもして呉れたいと思つて居られた。

余の最初に試みた業務は一季節間余自身が雇主の格となり友達を使つて兎を飼育したことであつた、さうして其等の友達に支拂ふ報酬は仔兎が生れたらば一匹毎に彼等の名前を其兎に付けてやると云ふ約束に過ぎなかつた、斯くて土曜日の休みには余の配下卽ち右の友達が一日がゝりで兎の飼糧を蒐めに歩き廻つた。さふいふ殘酷な取引條件を遊び友達に强制した事を今更ら回顧して余は良心の苛責を感じないわけには行かぬ、彼等の多くは此無類な報酬を條件として長い季節の間余の爲に蒲公英やクローヴアーを蒐めた。彼等は如何にも貧弱なる此報酬に滿足してゐたが、悲しい哉當時彼等に與ふべきものは此外に何もなかつた、實に一枚のペネーすらも余は持つて居なかつたのである。

余は此事業經營の方法を思ひ起こす每に之を組織的能力の最初の徵證として珍重するが、余の人生に於ける物質的成功は畢竟この能力の發達に歸因したもの

カルヴィン教義

父は堪へられなくなつて言はれた『それが果して貴君の宗教であり貴君の神であるならば余はより善き宗教、より高尚な神を求めます』。此一言を捨臺詞にして父は長老教會に再び復歸しなかつたが他の『諸教會に引續いて出席して居た。父は毎朝必ず密室に這入つて祈をしたが此一事は余に深い印象を與へた。父は誠に聖徒であつた、さうして何時も敬虔であつた。宗派の如きは父から見れば善を行はしむる爲の機關に過ぎなかつた。神學は種々あつても宗教は一であるとの悟を開いて居た。神を天の父として說かず、舊約聖書の殘酷な復讎者―アンドルー・ディー・ホワイトが其自傳に示した樣に『永遠の苛責者』として說く樣な牧師に比すれば、父の方が遙かに善智識であることは余の快心とする所であつた。幸にも不可思議的存在者についての此觀念は今や大部分過去の歷史と化した。

動物飼育の樂

幼年時代の最も大なる樂の一は鳩と兎とを飼育することであつた。是等の愛らしい禽獸の爲に適當な小屋を父が何時も苦心して拵へて吳れた事を思ふ毎に余は父の好意を有り難く感ずる。余等の家庭は余の遊び友達の本部であつた。母は常に二人の子供を正しい道に步ますべき最善の方便として家庭の感化に留

題に就ては口を緘して多くを語られなかつた、母は余に宗教に關する話をされた事もなく、又其頃は世帯の持始めて婢僕もなかつたから、日曜日の夕飯まで家庭の仕事を一切一人て擔當して居られたので到底教會に出席する暇はなかつた。當時母が特に愛讀されたのはユニテリアン派の泰斗チャンニングの著書てある。母は誠に不思議な偉人てあつた。

余の幼年時代の周圍の空氣は政治上にも宗教上にも激烈な騷擾狀態にあつた。政界には最も急進的な思想が沸騰して、特權撲滅、四民平等、共和主義などが高潮せらるゝと同時に神學問題にも多くの爭論が起り、敏感の少年は年長者の思も寄らない程度まて其等の思想を吸收した。カルヴィンの峻烈な教義は恐ろしい夢魘のやうに余の精神を壓迫したが、其精神狀態は前記の感化の爲に間もなく一變したことを記憶して居る。余の大きくなるまて珍寶として心に安置した一の事實は長老教會の牧師が嬰兒神罰の教義を說敎した時父は立つて其教會を去つてしまはれたことてある。而して之は余が教會に出席し始めてから間もない時のことてあつた。



アンドルー・カーネギーの母

バーンスの詩を非常に賞揚して居たが、バーンスの詩集を捜しても生憎それが見附からなかつたと云つて居た。さうして余が其詩の一部分を諳誦して聞かせたら彼は直ちに第二のベネーを余に呉れた。噫モーレーもエライが余の先生マーティンには及ばない。先生は私の知る限りに於て第一のエライ人てあつた。先生は余に取つては眞にエライ人てあつたが、然し豪傑はといへば確かに正直なジョン、モーレー其人てある。

宗教の事に就ては余等は大した面倒な思をしなかつた。學校では余とドッド以外の他の生徒は男女共信仰問答(長老教會の)を强制的に學ばせられたが、然しどうした譯か詳しい理由は今でも分らないがドッドと余だけはそれを免ぜられた。親族中ではモリソン側でもローダー側でも政見と同様に神學に關しても進歩した意見を持つて居て教會の信仰問答などには多分反對てあつたらしい。一族の内に正統長老派に屬する者は一人もなかつた。父も叔母エイトケンも叔父ローダーも叔父カーネギーも悉くカルヴヰンの教義に遠ざかつてしまつた。後年彼等の多くは一時スウイーデンボルグの教義を遵奉したが、母だけは何時も宗教問

友人等を驚かす程迅速に何ても記憶する事が出來た。好んても好まんても記憶は出來たが、餘り深く感じないものは數時間のうちに忘却した。

ダムファリンの學校時代に余の小さい頭にこたへた苦しみの一は毎日聖書の詩篇の中から二つの對句を記憶してそれを諳誦させられることてあつた。余の工夫した方法は毎朝學校へ出掛ける前には詩篇を見ないて家を出てから途中をユックリ歩きながら五六分の間に其れを暗記することてあつた。さうして詩篇の暗誦が毎朝最初の日課てあつたから途中て諳記した句は忘れる暇もなく容易く暗誦に成功したが、若し之が登校後三十分も經つてから暗誦せよといはれたら見事に失敗したらうと思ふ。

余が親族以外の人から始めて金錢を儲けたり又は貰つたりしたことの第一回目はマーティン先生から貰つた「ベネー」てあつた、其れは『人は悲しむべく造られた』云々のバーンスの詩を學校て諳誦した褒美として貰つたものてある。今之を書くについて思ひ起す事は其後倫敦てジョン・モーレーと晩餐を共にして居た時、話題がウォーヅウォースの生涯に及んだことてある、其時モーレーは『老齢』と題する

問うた時、彼女が之に答へたといふ話の意味が始めてよく分つた。彼女は答へた。『エー、今朝はムシヤクシヤするんですの、罰あたりめと喉まで來てるんですが私にはそれが言へないんて御座いますよ』

サーそれからは此恐ろしい一語をいふの可否が一大問題になつた。然し牧師等が教壇から『天罰』をいうても罪にならないならば我々も諳誦の時に『地獄』と云ふ言葉を存分に使つても宜い譯てある。余に深い印象を與へた文句が今一つあつた。ノーヴアルとグレナルヴオンとの決鬪てノーヴアルが『我等が再び戰ふ時は我等の爭は決死てある』といふ其一句てある、余が一八九七年北米評論に一論文を寄せた時、此文句を使用した事に叔父が氣が附いてダムフアリンから余に手紙を書いて、あの文句をお前が何處から學び得たかを私は知つて居ると云はれたが、今生きて居る人のうちてこんな事を知つて居るのは叔父の外に一人もない。

余の記憶力は叔父の教育術に依つて大に强められたに相違ない。好める文句を記憶して、屢々之を諳誦することを少年に奬勵する以上に記憶力を强め得る他の有益な方法はあるまいと思ふ。余の好んて居たものならば最負に見て吳れる

余の恩人ローダー叔父が教育上諳誦に非常の重きをおいたことは當を得たもので、之が爲にドッドと余とは幾度も褒美のペンニーを貰つた。小さなフロックやシャツを着けて、袖を卷くり上げて紙の兜を被り、顏を黑く塗り、板切を刀に擬して從弟と余とは何時もノーヴアルとグレナルヴオン、ロデリク・デユとジエームス・フィッツジエームスなどを學友の前又折々大人連の前で公演した。

余は明確に記憶して居るが、かの有名なノーヴアルとグレナルヴオンとの對話の場となつて『して地獄の樣な詐り』の一句を繰返す時には何となく氣味が惡かつた。始めの內は其イヤな言葉を言はうとする時に微かな咳をしたが、其爲に見物は何時もドッと笑ひ興じた。叔父が余等に『地獄』と言つても別に罰は當らないと說いて安心させて吳れたことは特筆大書すべき事柄であつた。余は餘り遣り過ぎはしまいかと思ふ程に練習をした。余は何時もグレナルヴオンの役をして大口あけては地獄を言つた。之は余に取つて彼の禁果の美味もかくやと思はるゝ程不思議な魅力を持つて居る言葉であつた。そこでマージョリ・フレミングが或朝不機嫌な顏をして居るとウオルター・スコットが訪ねて來てどうかしたのかと

廣くした後に始めて我々は何れの國民も夫々英雄がありローマンスがあり傳説があり勳功がある事を知るのである。眞の蘇國人は何時になつても自國に關し又自國が世界の他の大國民間に占むる地位に關して自己の作つた評價を下げてはならぬと同時に、老成に達すれば必ず他國民にも誇るべきものがある故に他國民に關する自己の意見をも高むべき十分の理由があるといふことを忘れてはならない。而して此等の誇るべきものは其國民をして子孫を鼓舞激勵し、其生れた郷土を辱かしめざる言行をなさしむるに十分である事を發見するであらう。

蘇國兒童の愛國心

余が新郷土米國は畢竟余の假住所に外ならぬとの感じを打破するまでには幾多の年月を要した。余の心は蘇國にあつた。加奈陀て加奈陀が好きてすかとの問に對して、一寸遊びに來るには善い所てすが、ブルースやワーレスの遺跡に遠い所てはどうも永住は出來ませんと答へたといふピーターソン校長の小さい息子に余はよく似て居る。

第二章　ダムフアリンと米國

氣を鼓して暗の夜をノソリ〳〵歩く時は人間であらうが魔物であらうが、敵に出合つたらワーレスなら何うするかと考へて如何なる急變にても應じてやるぞと意氣込んで居た。

ロバート・ブルース王に對しては從弟も余も其少年時代には敬意を拂はなかつた、余等の心には彼が唯だ王であつたといふことだけで足れりとしたが、ワレースに至つては人民の味方であつた。其次はサー・ジョン・グラハムである。余が鼓吹されつゝ育つた蘇國少年の熱烈な愛國心は余の死ぬるまで一生涯に亘る眞實の力である。余の精神的資産の最貴重品たる勇氣の本源を探究して見れば其窮極する所は必ず蘇國の英雄ワレースに基く事を發見するであらう。少年が一人の英雄を持つ事は力の城である。

米國に到着した時に余が覺えた一種の悲痛は余の祖國以外にも世には誇るべきものを持つてるとの自信力を有する國が存在すると云ふ事であつた。ワーレスもブルースもバーンスもない國は如何なるものであらうかとは今日も尙ほ海外旅行をした事のない蘇國人が胸に抱いて居る感想である。年を重ねて見聞を

余は幾時間も幾晩も叔父やドッドとハイストリートで樂しい思をしたが、之ぞドッドと余との間に終生兄弟の交りを結ぶ端緒となつた。『ドッド』と『ネーギ』は何時も一家族であつた。余は幼い時にジョージと發音することが出來なかつたし、彼もカーネギーをネーギ以上にいひ得なかつた。余等二人の間は何時もドッドとネーギで押通した。他の名前では一向情が移らない。

ハイストリートの叔父の家からは町の下手に當るムーデー街の余の家に歸るには道が二筋あつた。一は物寂しい寺の墓場に沿うた道で燈火は一もない、もう一は五月門（メーゲート）の通りで街燈がついて居る。余が何うしても夜分に歸宅せねばならなかつた時など叔父は面白半分に意地悪くお前はどつちの道を歸るかと尋ねたものだ。そんな場合に余はワレースならばどうするであらうと考へて、余は必ずお寺の方ですと答へた。どんな場合でも假令一度なりとも他の道を通つて其通りと五月門通りとの兩道會合點から街燈の下を行かうかしらとの誘惑に負けたことはなかつたと思ふと如何にも滿足な感じがする。實は折々寺の境内を通つて暗い弓形門を拔けるときは魂が身に添はない思がした。口笛を吹きながら勇

人を殺す爲に雇はれたヘッセ人について讀みつゝ成長する、そこで彼等は自然に英國人とあれば一人殘らず之を憎む樣になつた。余は米國にある余の甥達が悉くコンナ氣風に傾いて居たことを知つた。甥達の考では蘇國は宜しい。而し嘗て蘇國を攻めた英克蘭は油斷の出來ない仲間であると言つた樣な譯で其僻見は彼等が大人になるまで拔けなかつた。今でも幾分か着き纒つて居る。

叔父ロードーはドッド(ジョージ・ロードー)と余とを泣かせたり笑はせたり小さな拳を握締めて喧嘩腰にさせたり――一口にいへば詩歌の力で余等をどんな氣分にでも成らせる妙術を持つて居るから、其れを見たけれや余の室に來て御覽なさいなどゝ人々に言つたものであるといふことを其後余に話された。ワレース裏切の話は何時も余等を慟哭させずにはおかないで余等は必ず正體なく泣崩れたものである。叔父の秘術は失敗したことは一度もなかつた。幾度遣つても是許りは變りがない。尤も話す度毎に新らしい彩色が其話に加はつたらしい。叔父の話は何れもスコットの話の樣に『帽子とステッキ』の缺乏を感じなかつた。英雄の兒童に及ぼす感化は實に驚くべきものである。

爲は凡てワレースが中心であつた。學校で大きな惡太郞が余に英克蘭は蘇克蘭より遙かに大きいよと告げた時の悲しさよ。然し叔父の所へ行くと彼は直ぐに余の悲を和らげて呉れたものである。

『そんなことがあるものか、ネーギ、蘇克蘭を英克蘭の樣に平らに擴げて御らん、蘇克蘭の方が大きいだらう、しかしお前はあの高い所を平べつたくしたくはないだらう』

手負になつた靑年愛國者は忽ちにして此鎭痛劑で和らげられた。其後英克蘭の人口が多いといふ難題を持ちかけられた時も余は又叔父の許に驅けつけた。

『さうよ、ネーギ、七對一さ、然しバンノクバーン(蘇克蘭の地名)には其れに負けない差があるよ』余の心には又もや喜があつた――名譽の大なるだけ彼地には戰に負けた英國人がそれだけ多かつたといふ喜である。

之は戰爭が戰爭を生み、一戰が將來幾多の戰爭を起す種子を蒔き、かくして國と國とは傳統的敵國となるといふ眞理に對する一種の註解である。米國兒童の經驗は蘇國兒童の其名と同一である。彼等はワシントンやヴアレー・フォージや米

ヴィクトリア女皇は宮殿中に皇女達を膝にのせて樂まれて居る。後年ウエストミンスター寺院の歴史館に行つて見ると歴代帝王の御名が所々落ちて居たが、それは勿論余等の稽古の目次には悉く補充してあつた。ウエストミンスターの一禮拜堂の石板掲示にオリヴアー・クロンウエルの遺骸は此處から他に移されたと書いてある。余が叔父の膝下に學んだ帝王名簿では共和大王クロンウエルが羅馬法王に送つた手紙にこんなことがある。『猊下もし新教徒の迫害を止めたまはずば大英國の巨砲はヴアテイカンの宮殿に轟くべし』言ふまでもなく余等のクロンウエルに對する人物評價は歴代帝王を一團にしたものよりも偉大であつた。

蘇國史の古い所で余の知つてるものは凡て叔父から敎はつた――ワレース、ブルース、バーンス、ブラインド、ハーリーの話、スコット、ラムシー、タンナヒル、ホグ、ファガソンなどである。それで余はバーンスの語を借りて眞實に次の如く言ふことが出來る、生命のあらん限り余の内に存在すべき蘇國癖(又は愛國心)の血脈は其時其所で創造されたものであると。勿論ワレースは余等の英雄である。英雄的行

叔父ローダー

余は此處て余に測るべからざる程偉大な感化を與へた人、即ち叔父ローダーの事を一言して置きたい。

ダムファリンにカーネギーの寄附金で建てられたローダー實業學校は此叔父ローダーの名に因んで命名したものである。

彼はジョージ・ローダーの父てある。余の父は織物工場に詰切つて居たので、晝のうちは余に接する餘暇も殆どない程であつたが、叔父はハイストリートに店を出して居たからそんな束縛を受けなかつた。元來此ハイストリートは貴族的な店を有つて居る所てある事を記憶して置く必要がある。而してダムファリン商店の中にも高下色々の貴族風があつた。余が學校へ通ひ始めの頃叔母シートンとの死別れに深く心を痛めた叔父は獨子のジョージと余とを相手にするのを最大の慰として居た。叔父は兒童の扱には非常の天才て余等に種々の事を教へて呉れた。余の記憶して居る一例を擧ぐれば英國史を教へるには室の壁に所を定めて一々歴代帝王が居ると假想し、叔父が得意の所作を夫々遣つて見せられた。即ち余から見ると今でもジョン王は暖爐飾の上に座して大憲章に署名して居り、

尊稱を貰つたが、余が論客若くは奮闘家たる性格を作出したのは多分此時代の事で、此性格は余に常に着き纏うて居た。

この任務を遂行する爲に余は時々學校を遲刻したが、先生は其原因を知つて居たから怠慢を咎めなかつた。又同じ樣に放課後も時々店の使歩きをしたが、回顧すれば十歳の時から兩親の役に立つ者になつたといふ事は余の滿足に感ずる所てある。其後間もなく店の取引先の勘定を記帳する事を余に依賴する人が多くなつたので、少年時代から小規模ながら商業智識を修得した。

所が學校時代の經驗て悲しいと思つた事が一つある。余が町を通ると子供等は余を『マーティンの寵兒』と渾名を呼んだ。それはどういふ意味か余にもよく分らなかつたが、何かしら非常の侮辱を意味したものと思つて居た。其れが爲に自然先生に對しても遠慮しなければならなくなつたので敎室に於て自由に先生と問答する事なども出來ない樣な有樣であつた。余は余の唯一の先生に對して報ゆべき恩義を負うて居たが、遺憾ながら謝辭を述べる以上何事をもなし得ない内に先生は死なれた。

された。余は成長してもそれを願ふ氣にならなかつたので、兩親が此約束の爲に一方ならず不安を感じて居た事は後に至つて漸く分つた。遂に校長ロバート・マーティンに頼んで余に目を留めて何とかして貰ひたいといふ事になつた。校長は或日學校に出て居る余の仲間と一緒に余を遊山に連れ出したが、其後日ならずして余は兩親にマーティン先生の學校(ローランド學校)へ遣つて頂きたいと願ひ出た。兩親は大に安心して言ふ迄もなく余の願を容れた。其時余は八歳であつたが、其後の實驗に依ればどんな兒童でも初めて就學する年齢はこの程度で十分と云ひ得る。

學校は實に愉快であつた。何か事故があつて出席が出來ない時は非常に不愉快であつた。ムーディー街の端から井戸水を酌んで來る朝の勤の爲に此不愉快は時々生じた。水量は少なく且つ水の出は不規則で朝遲くまで出して呉れない事もあつた。近所の女房達は前夜から罐を一つ〳〵並べて順番を取つて置いて朝になると二十人位井戸端に座り込んで居る。そんな譯で自然に手が頻發する。余はこんなエラさうなお婆さん達に中々負けては居なかつたので『恐ろしい小僧』の

は十分であつた。
余は貧乏の味を知り始めたのは其後間もない事と記憶する。父が最後の絲を大製造家に屆けに行つた時はいよ〳〵恐るべき日が來たのだ。母は次の絲が獲られるか、それとも失業の憂き目に遇ふかと氣遣はしげに父の歸宅を待つて居た。さうして歸つて來た時の父の顏色は余の心に燒付けられた如くに刻まれた。バーンスのいふ樣に『卑劣でも下品でも』ないが、しかも

『何か勞働をと
世の同胞に賴まン』

なければならぬ事になつた。
其時其處で余は大人になつたら此窮乏を癒してやるぞと決心した。だが多くの隣人等に比べれば余達の窮乏は何でもなかつた。母が二人の子供に大きな白いカラをかけさせてキチントシタ服裝をさせる爲めには、どれほどまで困苦を忍ぶ覺悟をして居たかを余は知らなかつた。
ふとした氣まぐれに兩親は余が願はないうちは決して學校へ遣らないと約束

區には方々に張札が出て『諸君はユニテリアンに投票せらるゝや？』とあつた。サーア大變ケーアニー・ヒル村のスミス後援委員長鍛冶屋某はそんな者は斷じて投票しないといふ報告があつた。叔父は早速馬車を飛ばして鍛冶屋の處へ乘付けた。二人は村の某旗亭に麥酒を傾けながら、

『君、ユニテリアンに投票は出來ないよ』と委員長は云つた。

『だがね、メートランド(反對黨候補)はトリニタリアンだよ』と叔父は拔からぬ面。

『それは猶惡い』とは委員長の答てあつた。

斯くて鍛冶屋は誤らず投票した。スミスは少しばかりの多數て當選した。手織から蒸氣織への變遷は余等一家の災害てあつた。父は産業革命の危機に心付かず舊式を固守して惡戰苦鬪した。父の器械は非常に相場が落ちた。そこて如何なる危急の場合にも効力を失はない力——即ち余の母——に賴る必要が迫つて來た。母は自ら進んで家運の挽回を試みた。ムーデー街に小店を出して其收益を家計に捧げたが小額ながら其頃の一家を愉快にして『體面』を保たせるに

の脚の間に割込んだが、喝采が一しきり最高調に達すると余の熱情は最早抑へきれなくなつた。余は余を割込ませて呉れた男の脚の間から仰向いて、演説をして居るのは余の父であることを其男に告げた。すると其男は余を肩車に乘せて終まで其處に置いて呉れた。

父はジョン・ブライトの演説を聞かうとして他の集會に余を連れて行つたことがあるがブライトはスターリング選擧區の自由黨候補ジエー・ビー・スミスの應援演説をするのであつた。家へ歸つてから余はブライトの發音はマーンをメンといふから誤つて居ると批評した。之は蘇國音と異つてaをアーと發音しないからである。かゝる環境に人となつた余が『特權撲滅』を格言とする過激な青年となつた事は敢て怪しむに足らない。當時余は特權とは何の事か能く知らなかつたが父は確かに知つて居た。

ローダー叔父の得意譚の一はジョン・ブライトの友人即ちスミスの話であつた。スミスはダムファリンで國會議員候補に立つた。叔父は選擧委員の一人で萬事好都合に運んで居ると、最後にスミスが『ユニテリアン』だとの宣言があつた。選擧

政治的興奮時代

てやらねばならぬ。彼等は一定時間に束縛されない身の上で其勞働は請負てあつた。大製造家から絲の供給を受けて各自の家で織るのであつた。

當時は熱烈な政治的興奮時代で時々晝飯後少時間全町內に前垂を懸けて國事を談ずる小群集が溢れて居るのを見た。ヒユーム、コブデン、ブライトなどの名が誰の口の端にも上ぼつて居た。少年ながら余は折々この連中に心を奪はれて其話を熱心に聞いて居たが、全然一方に偏した話のみであつた。輿論は變更を要するといふのであつた。町民間に種々の倶樂部が設けられて倫敦の新聞を講讀して居た。社說は每晚民衆に讀み聞かされた、不思議にも町內の教壇の一は此目的の爲に利用された、叔父ベーリー・モリソンは時々讀手になつたが叔父は讀むそばから自身之を評論し又他人にも評論させたりして會衆は甚だしく興奮した。

政治の興味

これらの政治的集會は頻々として催されたが、余は自然に一族中の誰にも劣らずそれに深い興味を寄せる樣になつて屢々其會合に出席した。出席する每に叔父達の一人か或は父かゞ大抵何かしら演說するのを聞いた。今思ひ出すと父は一晚ペンツの屋外集會に於て演說をしたことがある。余は群集を押分けて聽衆

心の囁きであつた。苟も聰明な人々に取つては、特權者流の有つて居る所謂特權なるものは自分達も等しく之を有つ事が出來るものであるといふ信念を持たない限り特權者と一所に生存する事が出來るか何うかを余は怪しんだ。余の欝憤を適當に晴らす古今の名句として唯一ッ余が何時も飽かず引合ひに出したのは之だ

『王とはなどか忍ばれん
永遠の惡魔を羅馬に推立てることそ
優さらめとブルタスは深くも王者を憎みぬ』

けれど其頃の王等は飽くまで王で、影法師ではなかつた。勿論すべては遺傳であつた。余は只家庭で聞いた事を反響したまでゝある。

ダムフアリンは英王國に於て恐らく最も急進的な町として有名であつた。最もペースレーも同樣の名譽を持つ筈であると自稱して居た事を余は知つて居る、當時ダムフアリンの人々が大部分各自一臺若くはそれ以上の織機を所有して居る小製造家であつた事を思ふと急進主義に貢獻した名譽の益々大なる事を認め

世間がこんな騷ぎを遣つてる間に、甲から乙と個人間に耳うちされる言論が如何に辛辣であつたかは想像に餘りある。君主政體や貴族政治、一切の特權を呪咀するの聲、共和政體の偉大や米國の優越を謳歌して、同民族の國家各市民の特權即各人の權利たる自由の鄉土などと高唱して縱論橫議する空氣のうちに私は育てられた。少年として余は王侯貴人を殺す事すら出來やうと考へ、彼等の殺戮は國家に對する奉仕であるから從つて義勇的行爲であると信じた。

幼少な時代に環境から受くる感化は實に容易ならざるもので、余が特權階級若くは個人を見る時に、彼等が何か善行を示して名聲を揚げ、其れに依つて公衆の尊敬を贏ち得た人物であらざる限り、尊敬の念を以て彼等を見ることは余に取つて殆ど不可能の事であつた、而して此反感に打勝つことが出來る樣になつたのは久しい後の事であつた。それまでは單に上流社界といふものをば何となく蔑視したのである。『彼れはなんでもない、何も爲さざる所の一僥倖者に過ぎない借衣して威張り散らす虛僞の骨頂だ。彼の價値は只偶然其家柄に生れたといふに止まる。彼の家族の最も實のり多い部分は馬鈴薯のやうに地下にあるのだ』とは余の

し、カーネギーは當時の少年的精神に與へられた激感を回想して左の如く述べられた
「私の幼少時代の想出が一は暗夜にモリソンが監獄に入られた急報を聞くべく叩き起された事である、今日から考へて見れば私が監獄入りの叔父を一人持つて居た事は私の最も誇りとする一事でありましたが、諸君、實を言へば叔父は公衆集會の權利を擁護すべく監獄に行つたのであります」（マキー著）

民衆が叔父を助け出さうと騷いだので事態容易ならずと懸念されたが、後で聞けば、叔父はハイストリートに向へる窓口へ出て民衆に退去を頼む樣にと町長から勸告されたとの事であつた。其時の一言はかうてあつた。『今晩こゝに此善良なる主義の良友があるなら、兩手を納めて貰ひたい』。彼等が兩手を納めると叔父は一息して又いうた(一)『サー穩かに引取つてくれ給へ』。余等の一家は何れもさうてあつたが叔父も道德力の盛んな人て、法律に從ふ意思は强いが、徹底的の急進主義者て、北米共和國の熱心な崇拜者てあつた。

(一)『官憲は氣を利かせて檢擧を緩めたが、モリソン氏は市民から市參事會員に選ばれ、又地方裁判所の法官に擧げられ、其後間もなく公金收入役に推薦されたので市民の好意を確證した。 刑事官憲が犯罪人として檢擧した愛國的改革家は市民の推擧によりて裁判官となり更に其信任と廉潔とに關する證明を與へられたのである。』

穀物法反對運動

父は機業に成功してムーデー街の詫住居からレーヅ・パークの遙かに手廣き家に移つた。父の四五臺の織機は階下にあり、家族は二階に住んて居たが、家は其頃普通に見る昔風の蘇國家屋で、外の石疊から外梯子で昇るのてあつた。余の最初の想出は此處から始まつて居る、不思議にも其記憶の第一の端緒は米國の一小地圖を見た日の事である。それは卷軸になつた二方呎位のものてあつた。之を見ながら父も母もウヰリアム叔父もエイトケン叔母もピッツバーグは何處にある、エリー湖や、ナイアガラは此處にあるなど丶言つて居たが、其後まもなく叔父と叔母とは新興國へ旅立した。

叔父ベーリー・モリソンが傍聽を禁止された集會に出て故意に之を聞いた廉て監獄に入れられた事を兩親に知らすべく夜中人が來て後ろの窓をコト／＼叩いて起された事を昨日のやうに記憶して居る。郡長は兵士の援助に依つて叔父を捕縛したが其場所は集會をして居た町から數哩の所てあつた、而して郡長は叔父を夜中町へ連れて來たので(一)無數の群衆が後からついて來た。

(一)一八四二年の騒擾後約半世紀を經て一八八〇年十月ローダー實業學校の開校に際

かゝる環境の内に發達すべき特權を有つて居る少年は彼が呼吸する空氣と共に詩歌小說をも吸收し左顧右盼する間に歷史傳說をも同化する。而して此等は少年時代に於ける彼の實世界となるので、彼に取つて理想は常住の現實と化するのである。而して之が實現は彼が他日實社會に乘出して日每の勞働に人世の辛酸を嘗むるの時に始めて見られるのである。少年時代に受けたる印象は其時に至るまで、否ゝ最後の日に到るまでも鮮かに胸中に活き殘つて居るのである。假令其印象の消失する事があるとしても、それは只逐出されたか又は押込められたまでの事で聽て再び其思想を高尙にし、生活を潤飾する爲に威力を以て前面に現れて來る。ダムフアリンの銳敏な少年は誰しも僧院と王宮と溪谷との感化を免るゝ事が出來ない。此等のものは常に彼に接觸し、彼の胸中に潛む火花を燃して其人物を新たにし此等の感化なくして生れたる少年には到底獲取し得られざるものを彼に與へるのである。余の兩親も斯く隆盛なる環境の裡に成長したものであるから二人ともにローマンティックな詩的情調に富むことゝなつたのも敢て怪むに足らないのである。

ダムファアリン僧院

國の守護聖人王妃マーガレットの築いた蘇國のウェストミンスターともいふべき崇高な僧院を見て同樣の感化を受ける。大僧院と歷代諸王の誕生したる王宮との遺跡は今も存在して居る、王妃マーガレットの靈廟とマルコム王塔の遺跡を包容するピッテンクリーフの溪谷も其處にある。サー・パトリック・スペンスが古歌は冒頭に此塔を置いて居る。

『血のごと赤き葡萄酒飲みて
王はダムファアリンの塔（ゼ・パーシー・レリクス及ゼ・オクスフォルド・ブック・オブ・バラッドに「塔」を「町」にしてあるがカーネギー翁は「塔」とするが正しいと主張する）に坐したまふ。』

ゼ・ブルースの墓は僧院の中央に聖人マーガレットの墓は其近くに王族の多くに相接して其處に永眠して居る。かゝるローマンティックな名地に初めの光を見た嬰兒は眞に幸運てある。此地は河口の北三哩の高地に位して海を俯瞰し、南はエディンバラを望み北はオチルスの高峯を一眸に收め、ダムファアリンが往昔國家的にも宗敎的にも蘇國の首府たりし時の偉大な面影を今猶到る處に彷彿せしめて居る。

傾いて來ると一家の悲慘は少年等に臨んで彼等は樣々の艱難を嘗めることゝなつた。

次女マーガレツトは余の母である。余は自分の母に關して餘り多くを語る事を遠慮するが母は修養ある貴婦人としての品格優美、風采等を余の祖母から繼承された。此の女丈夫に關しては他日或は世界に公表する事があるかも知れぬ、それは疑はしい。母は余自身には神聖な人であつて母を他人に知らすが如き事は寧ろ其神聖を汚す樣に感じて居る。母を眞實に知つた者は余を措いて他に誰もない。父が早世されて以來母は全然余のものになつた。余の處女作は其物語で『我が愛好する女傑我が母君』に捧げたものである。（一八八八年紐育刊行「英國に於ける米國式四頭馬車」）

かくの如き祖先を持つたことは余の幸運であるが、余は更に余の生地に於て至大の慶福を享けた。抑も人の生地は其環境や傳説などに依つて少年に種々の潜在的刺戟を與ふるものとして頗る重要視せらるべきものである。ラスキンがエディンバラの鋭敏な少年は悉く城廓の感化を受けると言うたのは眞理である。其ごとくダムファアリンの少年は十一世紀（一〇七〇年）にマルコム・カンムーア王と蘇



ダムファリン僧院

遺傳説の確證

余が自身で見たこともない祖父に驚くほど肖て居るといふことは疑ふ餘地がない。今もよく記憶して居るが二十七歳の時初めてダムファリンに歸省して叔父べーリー・モリソンと一所に長椅子にかけて居ると叔父の大きな黒い眼には涙が溢れて居た。叔父は堪まらなくなつて物をも言はず室をかけ出した。暫くしてから歸つて來て其譯けを説明した。余の様子を見ると時々彼の父の面影が髣髴する、消えるかと思ふと又來る。何か余の身振にそれが現はれたのだらうが叔父にははつきり分らなかつた。母は祖父の特質が幾分余に傳はつて居ると始終いうて居られた。性質遺傳の學説は毎日毎時證明されて居るが、體格ばかりでなく身振にまで及ぼす其法則の微妙は驚嘆すべきてある。

祖父モリソンはエディンバラのミス・ホッヂと結婚した。教育もあり、禮容も地位もあつた貴婦人てあつたが、子供のまだ幼いうちに死なれた。其頃祖父はダムファリンに鞣皮商を營んて資産も豊かてあつたが、ウォータールーの戰後幾千の商人が失敗すると共に祖父も渦中に投ぜられて一敗地に塗れた。長男べーリーはそれまで稍や贅澤な生活に育てられたので、小馬を買つて貰つたりして居たが、一朝

祖父モリソンは天成の雄辯家、鋭敏な政治家で地方急進黨左翼の首領であつたが、子息即ち余の叔父ベーリー・モリソンは其位置を繼承した。米國では『トマス・モリソンの孫』と握手したいというて余を訪問した著名な蘇國人は一二に止まらなかつた。クリーヴランド、ピッツバーグ鐵道會社の社長ファマー氏は余にこんなことを言はれた『余の學問と修養とは悉く貴君の祖父の感化の賜物である。』又名著『ダムファアリン史』の著者エベネザー・ヘンダーソンは其出世が大部分其少年時代に余の祖父の配下に勤勞したといふ幸なる事實に起因して居ると言はれた。

余は世に出てから幾何もなく人にお世辭をいはれたことが度々あるが、グラスゴーの某新聞記者から受けた讃辭ほど余の心を喜ばせたものは他に一もないと思ふ。其人は聖アンドルー館に於て米國の自治と題して余の試みた演說を聽いて新聞に其批評を出したのであるが、彼は余自身につき又余の家族殊に祖父トマス・モリソンについて其頃蘇國の世評如何といふ樣なことを盛んに書き、更に一歩を進めて『演壇に現はれた其令孫が風采、身振、容貌に於て昔のトマス・モリソンの活寫と見えた時の余の驚きを推察せられたい』と結んだ。

知つて居る老人達は彼を評して彼等の知る限りアレほど立派な雄辯家、アレほど有力な人物はないというて居る。祖父は『プレカーソル』と題した雜誌の發行者てあつたが、之はコベットの『レヂスター』を小さくした樣なもので、蘇國急進主義の機關紙としては先登第一との評があつた。余は祖父の書いたものを幾らか讀んだが、其うちて現今實業敎育に重きを置く趨勢から見て最も刮目すべきものは七十餘年前に刊行した『頭の敎育對手の敎育』と題する小冊子であると思ふ。其後者の重要を力說する論法は今日の最も有力なる實業敎育論者に對照して遜色のない觀がある。本論は左の如く結んである『余は青年時代に靴の製造と修繕とを學んだことを神に感謝する』。コベットは之を一八三三年の『レヂスター』に掲載して左の如く編輯長としての紹介を添へた『本問題に關して「レヂスター」誌上に從來公けにした最も貴重なる論文の一であるが、之は我等の尊敬する友人蘇國の通信記者トマス・モリソン氏から寄せられたものである』して見ると余の駄作癖も矢張り遺傳から來て居る――兩系の遺傳卽ちカーネーギー家も代々讀書家思想家を出して居る。

たものである。

『汝自らの非難をのみ畏れよ』

（一）『アンドルーは求婚には成功したものの、俗世界の成金ではなかつた。然るに他方面では其居村のみならず近所近郷の傑出した人物になつた。能く讀書し能く自己を省察する「頭腦」の人として彼はダムフアリンの急進的機業家等に交を結び、同志を糾合して集會所を設け之を大學（カレッヂ）と名付けたが、アンドルーは其「教授」であつた』（ジエー・ビー・マキー著アンドルー・カーネギーと其ダムフアリン關係及感化）

此格言を少壯時代に服膺したことは曾て聽聞した凡ての説教よりも有力な感化を余に與へた。説教は少なからず聽いたが、不惑以上になつてからは老友ベーリー・ウオーカーに似て居ることを余は自白する。彼が醫師に睡眠は何うですと尋ねられた時に、どうも十分といふ譯には行かない、眼さとくて困ると答へて、一寸眼を光らせ『けれど、教會では時々いゝ氣持になつて寐ますよ』と告白した。

祖父トマス・モリソン

母方の祖父はもつとエラかつた。即ち祖父トマス・モリソンはウヰリアム・コベットの友人で、其人の出して居た『レヂスター』誌の寄書家であり、斷えず互に手紙の遣取をして居た。余が此稿を書いて居る時ですらダムフアリンで祖父モリソンを

樂天的素質

或る大晦日の晩、奇人として村に知られた老女房が家に居ると突然變裝をした顏が窓から覗き込んだのに喫驚りして眼を釣り上げたが暫くしてから大聲に『ヤア、今の野郎はアンドラ・カーネギーてはないか』と言つた。違ひない、祖父は七十五歲といふ善い年をして醉狂な青年のやうに變裝などをして婆さん連をおどかしたのである。

惟ふに余の樂天的素質や、困難を蹴飛ばして一生涯を笑つて過ごす技倆や、友人等の評する樣に『鴉を鷺にする』余の藝當は余が誇りとして其名を貰つてゐる(一)この愉快な假面かぶりの老祖父から遺傳した者に違ひない。陽氣な性質は幸運に優る。青年は修養さへすれば此性質を獲られることを知らねばならぬ。精神は肉體の如く日蔭から日向に移して陽氣にすることが出來る。若し果してさうならば日向に移して見ようぢやないか。出來るなら困難を一氣に笑飛ばして見よ、哲學者的の氣風さへあれば、身から出た銹でない限り誰にでも出來ることだ。身から出た銹は何時までも落ちない。『天罰』を洗落すことは出來ない。本心の審判は絕對的て罰すことを許さない。詩人バーンスが與へた人生の大憲章は之を歌う

(一)十八世紀のカーネギー家はダムフアリンの南方二哩、風光畫の如きパテームーア村に住んで居たが、ダムフアリンの麻布業が着々盛大になつたので遂にカーネギー家は其處に移つたのである。

祖父カーネギーは頓智、滑稽、愉快の性質、潑溂の精神を以て廣く地方に知られ、其頃の快男子の親分格で、彼等の愉快な倶樂部『パテームーア・カレッヂ』の首領として遠近に雷名を轟かした。余は十四年間不在の後ダムフアリンに歸省した時、今思ひ出すと一老人が余に近付いて來た。此老人は祖父一味の仲間で祖父のことを『敎授』と稱して居たが、彼は余が其敎授の孫であることを聞き知つて居た。彼は見るからに中風老爺の好標本『天狗鼻と杓子顋が喧嘩して居る』齒拔老人で、室の向側からヒヨロ〳〵と余の方へ遣つて來て、ブル〳〵震へる手を余の頭に載せながら『ヤアお前はアンドラ・カーネギーの孫だなう。おれはお前の祖父さんと二人でどんな理窟屋でも怒鳴りつけて分らず屋にする位は朝飯前のことだつた』と言つた。

其ほかダムフアリンには余に祖父の話をして聞かせて呉れた老人が幾人もあつた。其一はこれだ。



アンドルー・カーネギーの誕生地

は確かに判事の著書が其友人等に無限の滿足を與へる源泉となり、同家の子孫にも永遠に感化を及ぼして生活改善の一助となるに相違ないからである。のみならず其親近者以外にも之を愛讀書の一として珍重する者がある。其書物は著者の人格を顯はす點に於て貴い特質を備へて居る。しかもそれは單に家族の爲に執筆したもので何等公衆の注意を惹かんが爲に書いた譯ではない。それと同樣に余も公衆の前に堂々と押出さんとするの態度で此書を書くのではない、一粒選の親近者たる一味の人や朋友等の中に交じつて、さうした人達なら詰らぬ出來事ても全く興味を缺くこともなからうといふ位な氣分で遠慮もなく思ふ存分に自身の一代記を書く積りてある。

誕生

て、先づ筆始めに余の生れた所を云へば、其れはダムフアリンのムーデー街プライオリ小路の片隅の小さな平家の一室であつた、時は一八三五年十一月二十五日、俗にいふ『貧しくとも正直な親、良族良家』に呱々の聲を揚げたのである。ダムフアリンは久しく蘇國緞子(一)業の中心地として著名であつた。父ウヰリアム・カーネーギーは緞子織業者てあつたが、余は祖父アンドルー・カーネギーを襲名した。

アンドルー・カーネーギー自叙傳

小畑久五郎譯

第一章　兩親と幼年時代

人一代の物語は之を率直に叙述すれば必ず興味深きものであると云ひたりし或聖人の言にして誤りなしとせば、余に自己の一代記を自から書くべく要請した親戚、親友等は此書を讀んで甚だしく失望を感ずることもあるまいと思ふ。こんな物語が尠くとも或範圍內の知人等には確かに興味を與へるであらうとの自覺は余自身の慰めともなり、且つ其自覺は余を勵まして執筆の勇氣を一段と進めさせるであらう。

ピッツバーグの友人メロン判事が數年前に於て著はした此種の書物は余に非常の快感を與へたので、余は益々前記聖人の格言に傾聽するの氣分となつた。それ

目次終

目次

て居るから、之を達意に譯するは頗る難事である。特に余が文の拙劣なるが爲に此翻譯が原書の美玉を瓦石とした憾がある。是亦已むを得ざる次第で、偏に讀者の諒恕を請ふのである。

一原書には長き註が加へてあるが、之を本文の次に譯出するのは體裁が惡いから末尾に掲げる事とした。

一本書に挿入した寫眞は未亡人より特に子爵に寄贈せられたものを複寫したのであるから、稍鮮明を缺く感のあるのは事情已むを得ないとしても遺憾のことである。

一本書の翻譯及び出版に就いて増田明六、田中太郎、細貝邦太郎三君の助力に待つものの多かつたことを記し、玆に深厚の謝意を表する。

大正十一年四月

翻譯者　小畑久五郎識

凡例

一本書は澁澤子爵の委囑に因り米國の鋼鐵業に盛名ありしアンドルー・カーネギー氏の自叙傳を口語體に飜譯したものである。蓋し子爵は先年氏の著書の飜譯なる「富の福音」に序文を書かれた際に、氏の致富の心事と方法とに共鳴せられたことがあつた。今又此自叙傳を得て益々氏の人格を推重し本書が我邦の實業界に裨補する處尠からざるべきを想ひ、終に氏の未亡人の許諾を得て之を飜譯刊行するに至つたのである。

一本書は氏が流暢の筆を以て其生涯を隨筆體に記載したのを、氏の親友にして文學に造詣深きヴァンダイク氏が心をこめて編纂したのである。而して其引用された聖書の格言又は詩句殊に論語の章句を引用した所に至つては實に巧妙を極め

一九二〇年八月於紐育

ジヨン・シー・ヴアンダイク

治家の友、賤民と貴人との件侶となつた。然も此等は彼の偉大なる感化、即ち富の分配、世界平和に對する熱望、人類に對する愛情等に比すれば彼の生涯に於ける單に興味ある逸事に外ならぬ。

我等は今此奇異にして多事なる歴史に餘り接近してゐるがため、恐らく其適當な釣合を看取することは出來まいが、後日に至らば必ず遠見が利いて興味が加はることであらう。今日の我等よりは後世の人々の方が一層十分に其偉觀を看取し得るかも知れぬ。幸に之は我等のために保留され、しかもカーネギー翁の自筆と其輕妙なる文體に於て保留された。之は眞に記念すべき貴重な實錄であつて、恐らく將來其類を見ることの出來ない稀有なものであらう。

今は『この奇異にして多事なる歴史』の者作たる人物の特色を語り、又は頌揚する場合でもないが、この歴史が眞に多事であり且つ奇異であつて、アラビアンナイトにも無い程の奇談に富んだものである事だけは爰に一言して置く價値がある。往年蘇克蘭の一貧兒が米國へ渡航して幾多の艱難や成功を經て遂に偉大なる鋼鐵界の王者となり、厖大なる産業を建設し、巨億の富を積み、然る後愼思熟慮の末、組織的に其富の全部を人類の啓發と改善とのために寄附したといふ事實は、小說よりも奇である。　のみならず彼は世人が忘却することの出來ない富の福音を確立して、其分配の標準を示し、後進富豪をして其例に倣はせた。　彼は世に處する徑路に於て漸次に國民的建設者、思想界の首領、著作家、演說家、勞働者や教育家や政

編者緒言

凡そ人の一代記、殊に其自叙傳に就ては、編者たる者妄りに私見を挿入して原作の意を害なふが如き事を爲さず、萬事原作者の自己流に叙述せしむべきものである。熱情は勿論、叙事の放縱に過ぐることすら説話の一部として受け入れねばならぬ。一見誇張の如き措辭のうちにも自然と事の眞相が發見されると同じ樣に、其人の眞面目は熱情横溢の裏面に存在するを認むることもある。故に本書の編輯に際し、編者は材料を編年的連續的に排列せし以外、殆ど手を入れないやうにして原作者の説話を一氣に終了させることにした。註解や實況を示して本文の興味を添へる挿繪の如きは、編者が加へたものであるが、本文は其儘にして置いた。

にも賢いことが立證される。之だ、世にも稀れなる又美くしき友誼の名の下に爲されたる一の選擇である。

千九百二十年四月十六日紐育にて

ルイス・ホイットフイールド・カーネギー

た。『此覺書から一小册子の材料が取れよう。世間の人はそれを讀む氣にもなるであらう。又親戚や友人の好む様な非賣品的大册子を作る事も出來よう。折に觸れて書いた所は大部分省略した方が得策と思ふ。この原稿を整理する人は公衆に餘り多くの煩累を與へぬ様に工夫せねばなるまい。智情兼備の人を撰んで其任に當らすべし』と。

此注文に從へば、我等の親友ジヨン・シー・ヴアンダイク教授の他に其資格を備へた適任者が何處にあらうか。原稿を教授のお目にかけた時、彼は良人の注意書を讀まずに『之を整理して刊行することは愛の勞働であらう』と申された。して見れば撰擇は相互的であつたと云へる。さうして教授が此『愛の勞働』を遂行された成績を見ると、其整理撰擇の方法の如何

到るの觀を生じたのである。
良人に數ケ月先立つて此世を去られた同年輩の某氏について『彼は到底老齡の重荷を負ひ得ざるべし』てふ世評があつたが、これに反して良人の生涯中最も能く人を鼓舞激勵した部分は、寧ろ其老境に處するの道を示された時代であると云ふのが彼に親炙した人々の感想であつた。何時も忍耐強く思慮深く快活で、如何に些細なる喜び事も勤勞も感謝の意を以て之を迎へ、決して自己本位の考を抱かず、常に幸福の曙光を望んで其精神は年と共にます〳〵輝き、遂に『彼は居らずなりぬ、そは神彼を呼びたまひたればなり』と云ふ日まで生きて居たのである。
原稿の紙片に良人は自筆で次の如き注意書を書いて置い

此山莊を引拂つて時局に接觸を保つべくスキボに歸つて來た。

良人の想出の記は其の處で終になつて居るが、彼は其後公務多端のため私事に興味を寄せるなどは思もよらず、幾度か稿を繼けんと試みられたに拘らず、遂に所詮叶はぬことゝ斷念した。其時まで良人は中年者の生活――それにしては寧ろ若い生活――即ちゴルフ、釣魚、水泳などを毎日交る〳〵樂み、時としては一日のうちに三つの遊戲を悉く試みられることさへあつた。彼は何時も樂天的で、前途暗澹たる場合ですら極めて快活なる氣分を保つて居たのであるが、しかも世界の慘劇が餘りに甚しくなつたので、終に深き憂の底に沈み、激しき流行性感冒と引續いて二回までも肺炎に冒されて老齡忽に

序

良人は實業界引退の後、英米に於ける友人等の懇請に應じて、昔日の想出を自叙傳的にポツ／＼と書き始められたが、其後間もなく從前よりも餘暇に乏しき多忙な生活を送ることとなつたので、想出の記を書くことは蘇克蘭に休養の時を待つことにした。我等夫婦は每年夏の數週間、簡易生活を樂むべくオールトナガルの原野に在る小別莊に隱退することゝなつて居たが、良人の執筆も大部分は其別莊で爲されたのである。良人は少壯時代に立返つた樣な愉快を感じて其頃の事を逐一繰返さうといふ氣分で着々稿を綴つて居たのであるが、折柄一九一四年七月歐洲中原の空に俄然戰雲棚引き、八月四日開戰の報が我等の耳に達したるがため、我等は取敢ず

きぶの別墅に在りて記述せる自叙傳を傳令之を邦譯して我邦の後進に紹介し以て其遺範を同志に傳へむとするは是れ余が社會奉仕の一端となるを得べき歟

大正十一年四月

青淵澁澤榮一識

經營茲に四十年餘歲晩年財界を退かれ
聊か社會公共の事に奉仕せむとは夙
にカーネギー氏の盛名を聞きて敬慕措
く能はず常に膝を把つて一夕相語らむ
ことを期せしか遂に其機會を得ざりき
客年第四回の米國行を為すに當り
氏は既に幽明界を異にせり豈千歳の恨
事と謂はざるを得んや然りと雖も余
の哀情已み難きものあるを以て紐育な
る氏の故宅を訪ひ未亡人に請ひて氏か不

せし功績を以て善く世界人類に及ぼし恒
久なる平和親愛を実現せしむるに在れ
ば其途を異にするも其揆は一なりと謂ふを
得べし古より興国安民の大業を為せる
政治家鉅億の富を積みたる実業家は
其人に乏しからざるも崇高の理想と
卓絶の才識とを以て能く之を実際に現は
したるは蓋し此二者あるのみ
余や不敏なりと雖も東洋固有の道
徳に據りて生産殖利の事に従ひ拮据

の大統領就職を辭し米國將來の大憲
を定めたるは其心事の高潔なる用意の
深厚なる千載の後人をして之が堅操
と温情とに感泣せしむるものありかし不
ず氏の事績が此絶倫なる政界の偉
勲に對して容易に評隲すべきにあらざれども
雖も用ゆ米國に於て政戰界に此尊重
すべき道義的模範を垂れたるは實
に奇遇といふ可くして而して二者の理想は
全然公共的なるものなりしは共に自己の開拓

迄一家の福利を犠牲として世界人類に
貢献せしは千古に渉りて史乗の載する
及口碑の傳ふるところ未だ曾て此の如き
壮挙あるを聞かざるなり
是を以て余は氏の此壮挙を彼の政治界
に偉大の名聲あるジョージワシントン氏の
偉業に酷似なるものあるを信ず蓋しワシン
トン氏の新大陸に於て自由國を創立せる
や毫も天下を家とするの私心なく懇切
なる告別の名文章を國民に残して三回

と抜群の膽略とを以て無比の大工業を畫
策し經營宜しきを得て一代にして富米國に冠たる
に至るや決然其財産を擧けて之を
人類永遠の幸福に捧け四海兄弟の平和
状態を永劫に維持せむ爲めカーネギー
平和財團を組織して「ヘーグ」に平和殿
を創建し又知識を進めて文化の向上を
圖り特に歐米諸國の各都市に多數
の圖書館を建設し其蓄積せる鉅億
の資財を以て子孫の爲めに美田を買

序

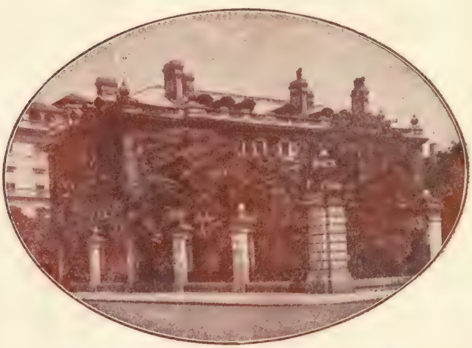
「アンドルーカーネギー」氏は米國財界の偉人
にして其意志の剛健なる事業の雄大
なる晩近の斯界に匹儔を観る能はざる
所なるを想ふに十九世紀以來世界産業の
顕著なる發展は素より慶すへしと雖
も其餘弊は多く人心自ら義を忘れて利
に趨き極端なる物質主義漸く坤輿に
充満せむとせし此時に當りて氏は少年
米國に移住し精勵刻苦明敏の資質



Andrew Carnegie

アンドルー、カーネギー
自叙傳

ドクトルオヴロース
小畑久五郎譯



紐育ニ於ケルカーネギー邸宅

東京
富山房發兌

アンドルー、カーネギー
自敘傳

ドクトルオヴロース 小畑久五郎譯